

第15回京都大学全学教育シンポジウム

京都大学における教育の現状と今後を考える

報告書

2011

目 次

1. 開催の趣旨	1
2. 日程	1
3. 開会	3
4. 開会挨拶	4
5. 基調講演「京都大学の『教育』：問題意識の温度差」	5
6. 報告1「大学教育をめぐる状況」	19
7. 報告2「キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後」	30
8. 報告3「初年次教育について」	40
9. パネルディスカッション1「大高接続と大学教育」	52
10. パネルディスカッション2「グローバル化社会と大学教育」	88
11. 閉会挨拶	126
12. アンケートの結果について	127
13. 参加者名簿	144

※ 部局名・職名は平成23年9月1日現在

1. 開催趣旨

平成8年に始まった京都大学全学教育シンポジウムは、今年で15回目となる。これまで様々な教育課題を取り上げてきたが、法人化後は教育の質保証、自己点検・評価や中期目標・計画に関連した課題が主要なテーマになってきた。

今年度は15回という節目でもあり、昨年までの全体会、分科会という構成ではなく、「京都大学における教育の現状と今後を考える」と題して、総長基調講演、3つの報告と2つのパネルディスカッションという全体会形式により、参加者全員が一同に会して、問題を共有できるように企画した。

報告では教育や入試に関連した学内委員会やワーキンググループでの議論、キャンパスミーティングで見えてきた学生の状況、さらには新たに取り組んできた初年次教育や研究科横断型教育プログラムから得たものなどの京都大学における教育の現状を、パネルディスカッションでは、直面する大高接続とグローバル化という2つの課題について、学外者を交えて白熱した議論を行いたいと考えている。

多くの教職員の参加で、京都大学の教育の現状を共有し、今後の京都大学教育の実効的推進について議論を深めて頂きたい。

【テーマ】

京都大学における教育の現状と今後を考える

2. 日程

【日 時】 平成23年9月2日（金）

【プログラム】

総長基調講演

- ・ 京都大学の『教育』：問題意識の温度差

報告

- ・ 大学教育をめぐる状況
- ・ キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後
- ・ 初年次教育について

パネルディスカッション

- ・ 大高接続と大学教育
- ・ グローバル化社会と大学教育

(参考) 全学教育シンポジウム開催一覧

	日程	場所	テ ー マ		参加者			
			主	副 (分科会テーマ)	計	教員	事務職員	
第1回	H 8. 8.28 ～8.29	比叡山国際観光ホテル	全学共通科目をめぐって	・一般教育科目の内容、学生集団の変化 ・学生の質の変化、教育上の難しい点 ・全学共通科目の具体的な問題点	・語学教育 ・教養教育とは何か	201名	185名	16名
第2回	H 9. 8.19 ～8.20	比叡山国際観光ホテル	教養教育について	・A群科目について ・C群科目について	・B・D群科目について ・人間形成と少人数セミナーについて	201名	186名	15名
第3回	H10. 8.20 ～8.21	ラフォーレ琵琶湖	学部教育から見た教養教育について	・少人数セミナーについて ・理科系の教養教育と基礎科目で何をどのように教育するのか ・外国語教育に何を求めるのか	・新しい教養教育創出にむけて	197名	182名	15名
第4回	H12. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価	特にテーマは設定せず、「京都大学における教育評価」をテーマに討論		125名	102名	23名
第5回	H13. 8.31 ～9. 1	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価 (授業評価・成績評価等)の在り方	テーマ:教育実態とその改善 ・文系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価 ・ファカルティ・ディベロップメントの在り方		178名	149名	29名
第6回	H14. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	新しい教養教育の在り方 —基本理念・実施機構・教育評価—	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価「京都大学卒業」とはなにか		240名	207名	33名
第7回	H15. 9. 5 ～ 9. 6	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“ミニマムリクワイアメント”をどう考えるか			240名	205名	35名
第8回	H16. 9. 9 ～9.10	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“質の保証”とは—教育の改善と評価の視点—	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とそのためのシステム—全学出動体制は可能か— ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成		242名	210名	32名
第9回	H17. 9. 1 ～9. 2	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価	・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりにどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか		229名	199名	30名
第10回	H18. 9.14 ～9.15	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	責任ある教育体制とは何か —京都大学における教育の将来像を問う—	・研究所・センターの教育参加に向けて—教育は権利か義務か?— ・理系教育における6年一貫教育の実現は?—理系における基礎教育科目と専門科目の融合— ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?		240名	193名	47名
第11回	H19. 9.6 ～9.7	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の将来像を問う —第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部、大学院教育の現状と課題を考察する—	・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る— ・京都大学における英語教育の現状と課題—グローバル化社会における英語教育のあり方を探る— ・学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題—世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る—		233名	200名	33名
第12回	H20. 9.12 ～9.13	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の現状と将来を考察する —第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて—	・全学共通教育の現状と課題について ・本学の教育の国際化に向けて ・教育における研究所・センターの役割について ・これからの職員の役割について		262名	211名	51名
第13回	H21. 9.24 ～9.25	時計台記念館	学士課程教育を再考する —第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—	・単位の実質化等について ・本学における全学共通教育の在り方について ・初年次教育について ・教育の国際化について ・情報教育の在り方について ・学生生活・学習支援の在り方について		235名	189名	46名
第14回	H22. 9.10	宇治おうぼくプラザ	京都大学の直面する教育課題について～第Ⅱ期中期目標・中期計画のスタートに当たって～	・全学共通教育の今後の展開について ・教育の国際化について ・初年次教育について ・少人数教育について ・学生の就学支援について		241名	192名	49名

3. 開会

司会（高等教育研究開発推進機構教授 加藤立久） おはようございます。

開催時間が近づいてまいりましたので、スケジュールをご案内申し上げます。皆様はお手元の開催要領をご参照ください。

まず、多賀高等教育研究開発推進機構副機構長からの開会の挨拶の後、松本総長から「京都大学の『教育』：問題意識の温度差」と題して基調講演をお願いします。続いて淡路教育担当理事・高等教育研究開発推進機構長より「大学教育をめぐる状況について」、続きまして鈴木高等教育研究開発推進機構副機構長より「キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後について」、その次に高見理事補より「初年次教育について」のご報告をいただきます。その後 12 時 10 分から休憩となります。昼食はお弁当を用意しております。1 階の国際連携ホールまたはこの会場にて昼食をおとりください。

午後はパネルディスカッションを行います。13 時 10 分より、コーディネーター森脇理事補並びに淡路教育担当理事とパネリストの皆様による「大高接続と大学教育」、15 時 10 分から 20 分間の休憩を挟みまして、15 時 30 分から、コーディネーター有賀高等教育研究開発推進機構副機構長とパネリストにより「グローバル化社会と大学教育」というパネルディスカッションを行います。予定といたしまして、情報交換会を 18 時からカフェ Arte で行います。

以上が本日のスケジュールとなっております。

皆様にお断りを申し上げます。本日のシンポジウムにおきましては、IC レコーダーによる録音並びに速記者による記録をとらせていただきます。また、全体を通じて記念写真を撮らせていただきますので、あらかじめご了承をお願いいたします。

最後に、本日の進行役を務めます高等教育研究開発推進機構教授、加藤立久と申します。シンポジウム終了までどうぞよろしく願いいたします。

(拍手)

司会 ただいまより、第 15 回全学教育シンポジウムを開催いたします。

最初に、多賀茂高等教育研究開発推進機構副機構長より、開会のご挨拶をお願いいたします。



4. 開会挨拶

高等教育研究開発推進機構副機構長・人間環境学研究科教授 多賀 茂

ただいま紹介をいただきました多賀です。台風の接近が懸念されますけれども、皆様ご参集ありがとうございました。

平成 8 年に始まったこの全学教育シンポジウムですが、今回でついに 15 回目を迎えることになりました。関係者一同、喜びと、そしてまた責任の重さを感じている次第であります。今回は、従来のような分科会形式ではなく、問題を重要点に絞り、シンポジウムの形式をとりました。それは情報の共有、そして共通認識の形成を目指したいからであります。そのために選びましたテーマといたしますのは、先ほどもお話にありましたように、京都大学の教育をめぐるさまざまな問題についての意識を深めるための作業、これが午前中のテーマであります。そして午後のパネルディスカッションでは、まず、大高接続という高校と大学をつなぐものについて、ついで、世界と大学をつなぐものというテーマについて考えたいと思います。今回は、学外からさまざまな専門の方々に参加していただいております。



先ほど台風の接近と申しましたけれども、まさに今、大学をめぐる状況は風雲嵐を告げると言ってもいいような状況であります。そのための備えをしっかりとしていくことが必要です。しかし、備えというのは言葉としては余りよくないかもしれません。むしろ私たちはこの状況を逆に利用しながら、京都大学を発展させていきたいと考えております。今日のシンポジウムがそのための大きな第一歩となることを期待しております。

(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

それでは、松本紘総長から「京都大学の『教育』：問題意識の温度差」と題して、基調講演をお願いいたします。

5. 基調講演：「京都大学の『教育』：問題意識の温度差」

総 長 松本 紘



皆さん、おはようございます。雨の中、多数お集まりいただき、ありがとうございます。

大学の教育をどう考えるか、これは大変重要な問題と認識していただいていると思います。本来ならば、全学の教員がこぞってこの問題を毎年議論できればいいと思っておりますが、場所の問題もありますので、これぐらいの人数の方々にお集まりいただき議論し、その議論を部局へ持ち帰っていただき、個人の方の先生方のご意見を承る。このように全学教育シンポジウムは、大学教育を改善していくための一つのマイルストーンとして毎年開催し、15回を重ねてきました。回数が多ければいいという問題でもないと思いますし、昨年私は、宇治で行われたこのシンポジウムで、議論はするけれど行動を起こさない、あるいは起こせないという事態は困るのではないかということをお願いしました。今年は関係者の方々に、教育に対してさまざまなアクションをとり始めようとしていただいております。これは教員を通じて学生に至るまで全員が真剣に考え、行動することが必要だということをお願いしました。

本日は、私からお話をさせていただきますが、私も教育畑ではそれほど専門というわけではありません。長年、一研究者、一教育者として大学に籍を置かせていただきました。けれども、最近マネジメントをやっていますと色々な方々の声を聞く機会があります。教育に関する問題意識は多分一人ひとりに違いがありますし、組織間にもあろうかと思えます。色々な立場から見ると教育はどうかということを経験して、我々はどう考えるべきかを考える際の一つの参考にしていただこうと思いをさせていただきます。

最近、私は「Worldmapper」というサイトをよく見るのですが、ご覧になった方もおありかと思えます。インターネットで「Worldmapper」と検索すると、色々なテーマについて世界地図が出てきます。例えばこれは地理的な世界地図、メルカトル法ですが、大体国の面積がわかるようになっています。この「Worldmapper」はテーマを絞って、そのテーマでどの国が一番大きく見えるかということを経験の大きさで簡単に一瞥できるようにしたものです。色々な観点があり、おそらく項目は50や60並んでいたかと思えますが、興味があれば帰ってぜひご覧いただければと思います。

まず、私のモチベーションとして、教育の重要性を感じております。米国等でやはり教育、「教育」という言葉が本当に適切なエデュケーションの日本語訳かどうか分かりませんが、考え方についてかなり真剣な議論が行われています。これは2004年にアメリカの景気が著しく悪くなったときに、なぜだろうということを考えて、ギャザリング・ストームと彼らは言っていますけれども、Rising Above the Gathering Stormという委員会をつくっています。アメリカ全体が直面している国難について、エデュケーションを中心に考えようと、産業界、政府、そしてもちろん大学関係者や高校、色々な方々を集めて委員会をつくっています。そして、アメリカはこうすべきだ、こういう人材を育成することがアメリカ合衆国の将来を明るくするのだというレポートが出されました。しかしながら、また経済不況に陥って、もう一度見直すため、2010年の2月に第2回Rising Above the Gathering Storm（改訂

版)が出版されました。

我が国でも経済停滞が 20 年以上続いています。それについて、なぜだろうかということを考えてみました。研究者、技術者の数では、「Worldmapper」に出ていますように日本はアメリカに次いで多い。科学技術立国をあらわすように研究者が非常に多い。論文数はどうか。論文数も多いですね。国単位で言うと、アメリカに次いで多いかと思います。研究者の数も多い、論文数も多い。研究開発費、研究資金はどうか。これも官民合わせると、日本は十分に資金を出している。にもかかわらず、経済成長率は先進国の中で一番悪いと言ってもいいかもしれません。なぜなのか。

例えば OECD 先進諸国の中で 1 人当たりの名目 GDP の順位は、2000 年には 3 位でした。しかし、年を追うごとにこの順位は下がってきています。2007 年には 19 位となり、現在はもう少し下がっています。これはなぜか。なかなか国民一人ひとりの意識は、このように日本が凋落の一途をたどっているとは感じていないのです。ここが一つ大きな問題かと思います。

要約しますと、この横軸が GDP 当たりの研究開発費です。縦軸が人口当たりの研究者の数です。これを見ていただいておりますように、日本という国はどちらも 1 番です。アメリカはここです。それで、経済成長著しい中国やインドは 2007 年のレベルでまだ下の方です。現在、経済成長率のナンバー1 が中国、次いでインド、トルコです。つまり、長年日本は研究開発費を 5 年、10 年とつぎ込んで多くの研究者を輩出し、論文も発表してきたけれども、それは経済成長率に直接結びついていない。何が問題か。決して少なくない人材を国としても投資してきたはずなのに、なぜか。これは難しい問題です。私も結論はすぐには出せないと思っています。

恐らくアメリカもそう感じたように、我々もよく考えないといけないのは人材育成だと思います。いわゆる教育という狭い範囲ではありません。教育はもちろん含まれますけれども、これを端的に言うのであれば「育人」ということになろうと思います。人を育てる。これは苗を植えるのと同じで 10 年ぐらいかかります。あるいは本当に社会の中核として働く人になるまでは 20 年、30 年かかると思いますが、その先を見越して人を育てることが最も重要です。エビデンスを探してみましたが、なかなか見つかりません。人間開発指数というものが国連で定義されていますが、これは寿命であったり…寿命というのはその国の人口も関係しております…それまで歴史的に蓄えられた知識、それから生活水準、GDP などのパラメーターで構成されています。2002 年の人間開発指数を「Worldmapper」で見ると、日本はそこそこの大きさですが、中国やインドは結構大きくなります。またトルコも大きいのです。つまり、古代からずっと知識を蓄えて、人口も多い国は結構大きいのです。アメリカは期待したほど大きくないという感じです。今言いました人間開発指数というのは現在持っているものですから、今までの蓄え、積分値が効いている図だと思います。日本だけが著しく悪いというわけではない。

では、どうして日本だけが経済停滞が続くのか、あるいは明るい兆しが見えないのか。これはわかりませんが、人間開発の伸び率というのがあります。その伸び率を調べてみると、日本は非常に小さいのです。中国やインドはものすごく伸びています。トルコもそうです。アメリカの伸び率も非常に小さく、著しく悪い。これが日本にも実は関係しています。伸び率というのは、そのときの微分値で、上がり具合です。経済停滞はそれに関係しているのではないかという気がしています。つまり、これまでに培った積分値ではなくて、伸び率が大きく作用しているのではないか。これが大きいのは中国、インド、トルコ、アフリカです。アフリカはまだ経済レベルが非常に低いものですからそんなに大きくありませんが、結構伸び率は大きいのです。事実、経済成長の伸び率は人間開発指数の伸び率と同

じ順となっています。これはなぜか。つまり、人々にやる気を起こさせるというのが育人の最も重要なポイントであります。つまり人々に上向きの微分を感じさせるということが必要ではないかと思うのです。

先ほど来言っていますように、米国ではこれを憂慮して産官学、文部科学省は向こうにありませんが、教育行政だけではなくて、産業界、官、全部あわせて **Rising Above the Gathering Storm** という人材育成のあり方を二度、2004年と2010年にわたって、二度目はもちろんリビジョンですが、真剣に検討しています。我が国は教育といいますと比較的狭い意義にとらえられ、小学校・中学校教育、高等学校の教育、そして大学教育を所掌するのは文部科学省というように押し込められがちですが、実は育人、人を育てるということはもっと広い全省庁、全社会が考えるべき問題なのです。したがって、産業界はもちろんのこと、一般市民、そして学校関係者、大学関係者含めて議論しなければいけないということだと思います。

本日は、外部からいろんなご意見をうかがえると思いますが、では大学の教育というのはどのようにやってきたかを少し振り返ってみます。昔と書きましたが、私のわかる範囲で、自分が学生だったころ、1960年代ぐらいを考えてスタートしてみました。このときには「よき社会人たれ」という教育を受けました。そして研究をする人は「よき研究者になれ」。そして「よき市民になれ」ということで、教養教育がありました。それから研究者は研究室に入って、世界の論文を読んで、しっかり研究して、日本の国を支えなさいと教えられました。東大や京大を出た人たちは国を支える人材、人柱として働くのだという事柄から始まって、立派な医療者、あるいはよき市民になるような教育を行うべきだとされました。

ところが、ちょうど私が大学院に入ったころから、高度経済成長が日本に起こりました。猛烈な勢いで経済が伸びました。工学部にも各専攻に第2教室というのができ、理学部物理教室にも第2物理教室ができました。つまり大学が社会の要請を受けて拡大したのです。そのときの教育に対しては、スライドには企業人と書きましたが、社会人と言ったほうがいいかもしれませんが、経営者たるべく能力、そして研究開発ができる高度技術者を育ててほしいという要求が社会からありました。研究者もグローバル研究者であってほしいというようになりました。つまり、今では信じられないかもしれませんが、私が大学院生のころは外国に出張するということは、私たちより少し上の年代の人はそうですが、水盃をして外国へ出ていった。それぐらいの時代だったのです。したがって、国際学会に招待されて講演をするということ自体が大変名誉なことであって、それが研究者の一つの誇りであった時代があったのです。招待講演何件ありますかと、いろんなところで書かされました。現在でも書かされているのでしょうか、科研費の申請等々で書く欄がありました。招待講演は最近ではごく当たり前だと思いますが、その当たり前ということが感じられない時代だったのです。

一方、よき市民の育成という点について考えてみると、専門教育への重点化が高度経済成長で叫ばれ、医療、科学技術、それぞれの分野で専門教育が重要視されるようになって教養教育の弱体化が起こったというのは、恐らく全国のどの大学でも起こったことだろうと思います。1991年に法改正がありその後、全国の国公立大学のほとんどが教養部をなくしました。教養部に所属した先生は専門教育としての学部へ、あるいは大学院へ移籍をされました。本学でも総合人間学部と、人間・環境学研究科ができました。

しかし、時代が進み2000年以降になると世界は急速に小さくなって、世界を相手にしなければならないという時代に突入しました。そのときの教育に要求されているものは、グローバルリーダーを

つくることです。そのリーダーを支えるグローバル人材が必要です。つまり国境を越えて、産業活動に限らず、政治も経済も教育も、そして研究もそうだと思いますが、グローバルに活躍できる人をつくらなければならないという時代に入ってきました。そして研究者も、単に国外に出て知られている研究者、招待講演されてそこでちょっと発表したというだけではだめで、世界の学会を自らがリードするという立場にならなければならないという時代に突入したのではないのでしょうか。そして今、産業界を中心に、しっかりした知識を有する、よき市民をつくる教養ということを大学でしっかり身につけさせてほしいという声が上がっています。こういった流れの中で我々は教育を考えなければならないということだろうと感じます。

グローバルリーダーというのはなぜ必要かということですが、世界は小さくなって、国境はまだあり、国家間の利益の相反もありますが、やはり産業界を見ていてわかるとおり、国境というのは随分バウンダリーが低くなっています。個人個人の行動においてもそうです。国外へたやすく出られるようになりました。しかし、経済成長が進み、人々の数、つまり人口が増え、人々の生活水準が上がってくると多くの資源、資材、エネルギー、水、食料を使います。そういうものを生み出すための科学技術というのは必要です。研究者、教育者はそのために必要ですし、よき市民も必要です。「教育」をしっかりやって、何とか地球という星の中で人類文明が減びないように、さらに進歩するように頑張っているのです。

ところが、そういう生活が豊かになればなるほど重荷は増えます。どのようにして食料を確保するのか。どのようにして資源を開発するのか。どのようにして国家間のコンフリクトを解決するのかという問題がどんどん増えてきます。その重荷の要因である人口は指数関数で伸び、毎年1億人以上増えています。2050年までには90億人をはるか突破すると言われていて、今年の初めには70億人を既に突破しました。私が小学校のころ習ったのはたしか10億人や20億人とかいう数字だったと思いますが、恐ろしい勢いで人口が増えています。しかも、他の国の話でなくて、グローバル化された社会の中でお互いが影響し合います。つまり将来の地球という星に生きる人間の文明が減びないようにするためには、スライドのこの坂道にある地球をどんどん押し上げないといけないのですが、これが急激に悪くなっているという認識を私は持っております。

そして、どうすればいいかということですが、やはり世界全体を見渡して、個々人が自分の利益、自分の研究、あるいは自分の教育、自分の国のことだけ考えているわけにはいかないという時代に入りましたから、グローバルな視点から物事を考えるリーダーと、そのグローバルなリーダーを支え全体で進むグローバル人材が必要とされます。そのためには教育は大変重要で、強い自信というものを持って、少なくとも悪くなる一方の今の状況を抑えるという努力が必要だろうと思います。

つまり、現在の財政事情から言いますと、今以上に大学財政的基盤の底上げは期待できません。教育費をもっと増やすよう要求してもなかなか増えないと思います。だから、結局やる気を起こす、意気込みを感じる人を増やすということが重要です。これは全員に感じてもらえれば一番いいのですが、全員というのは大変難しく、広く・薄く・平等にというのはなかなか難しい時代に入りました。限られた資源・資材・財政のもとで、どういう人を、どこに力を入れて育てるかということを考えなくてはならない時代に突入したと思います。アメリカでは広く・薄く・平等にということはどう表現するのだと聞いたら、先ほどの *Rising Above the Gathering Storm* のメンバーだったノーベル賞物理学者も言っていました、それはアメリカではピーナツバター・オン・ザ・トーストと言うのだと言っていました。広く薄く余りおいしくないものも広げて、それを食べる。食べられないことはないけれども、

効果が少ない。むしろ集中的においしいバターを塗って食べたほうが良いということを知りました。

この4月にアメリカに5日間出張し、25人ぐらいの方々にお会いしてきました。ハーバード大学の学長、MITの学長、そして日本の学術会議にあたる組織の米国工学会の会長、副会長、そして上院議員、そういった方々と話をしてまいりました。やはりほとんどの方が、日本はピーナツバター・オン・ザ・トーストしているのではないかという共通認識をお持ちでした。

江戸時代の末期にはいろいろな人が苦しんでいました。その中から、国の全体を憂う人がごく少数出てきました。吉田松陰の松下村塾もその一つだろうと思いますが、当時まで日本国は非常にバックボーンの通った教育をしていたのではないかと思います。国や村など、全体のことを考えて個人が行動するという教育が行われていたと思います。皆さん吉田松陰をご存じかと思いますが、彼は1番目に、まず意志を持ち、心を磨き、志を立てよ。それができたら、その目標に向かって全力で進める気迫を持て。3番目にやっと、そのための知識と体力を身につけなさい。つまり1番、2番というのは世界観であり、哲学であり、なぜ人間が存在するのか、自国の未来の展望を持つことなのです。こういうことを彼は言っています。

だから、非常に回り道の事柄かもしれませんが、あらゆることにチャレンジをして、全体の事を考えながら進むということを考える人を我々はつくらなければならない。しかし、現在の大学は研究を要求され、教育も要求されています。社会貢献もその結果として求められています。

では研究はどうなっているかということ、高校生から見ると大学は研究しているということは漠然とわかっていると思いますが、どれぐらいの専門分野に分かれているかというのはなかなかわからないのです。我々が作成している高校生向けのパンフレットでも、例えば理学部、文学部、法学部と書いてありますが、その中身について詳細な記述はされていません。オープンキャンパスに参加していただいても、詳細を伝えることはできません。例えば学問体系というのはもともとは知的好奇心から始まったわけです。哲学から始まって、いろんな分野に学問が進展してまいりました。およそ2000年ほどかけて、薬学、医学から始まって、芸術、音楽、哲学、経済、歴史、法律、言語、物理、数学等々、様々な学問に広がってきた。この認識は高校生も持っています。

しかし、現実とはいいますと、京都大学だけを見ても非常に細分化された専門家集団になっています。つまり、枝から小枝が伸び、小枝からまた小さな小さな梢の芽が出る。その先端がそれぞれの専門で、競争しながらやっているというところなのです。ですから、大学院教育は小枝のところで行われています。教養教育というのは幹にあたることをやるはずなのです。ところが、4回生で学部の研究室に入りますと、いきなり研究室という単位に入りますから、小枝の先まで行くわけです。幹のところを十分に理解できる人はどれぐらいいるのでしょうか。つまり非常に細分化が進んでおり、さらに細かく分かれていっています。知の木はどんどん成長しています。だからといって全体として知恵がついたわけではないのです。

今回の大災害についても、これだけの専門家集団がいながら、大学からは声が出ないと社会から非難されています。これは学問の細分化が関係していると私は思います。つまり、もっと基本的な社会はどうあるべきか、人間たるは何であるかという「務本之学」、本を務める学、これは論語から出た言葉ですが、Focus On the Fundamentals ということが非常に重要だろうと思っています。Focus On the Fundamentals をどう呼ぶのかというのは大変議論が分かれるところではありますが、教養教育と呼ぶか一般教育と呼ぶかわかりません。

京都大学ではどう呼ぶかというのは議論していただく必要がありますが、私は人間としての全人教

育だろうと思っています。

我々京都大学と社会、あるいは大学全体と社会というのは温度差があるかと思います。例えば社会から見た大学教育、これはいろいろなメディア等で見聞きされているかと思いますが、本学の教職員がどれくらい熱心に把握しているのか気がかりです。現場にいますと、研究で忙しい、教育で毎日しっかりとやらないといけないという中で、こういった外の声に耳を傾ける必要があるかと思っています。大学のライター、総合学術会議、産業界、高校の意見を順次ご紹介いたしますが、大学ライターでよく知られた本に、『就活のバカヤロー』という本があります。その中で、「私は納豆のように粘り強い人間です」と決まり文句を連呼する納豆学生や、企業は教育の邪魔をするなど大学は叫ぶ割には就職実績をやたらと気にする崖っぷち大学が登場しています。そして営業のことをコンサルティング営業とって人材を獲得しようとするブラック企業、著者はブラックと書いていますが、企業群も一般的に人材獲得には必死です。そして企業と社会の未来をつくる行為が就職活動であったはずで、学生個人が未来に向けて大きな一歩を踏み出す行為であったはずの就職活動は、今や、だまし合い、憎しみ合いの様相を呈し、嫌悪感と倦怠感が渦巻く茶番劇になり下がった。一体だれが悪いのかという提言を著者はしています。こういう意見も一部にあるということです。この本は結構読まれているのです。

その次に、産業界ですが、経団連やいろいろな団体がありますが、ここでは関西経済同友会の声を一部紹介いたします。『産業界が求めているものは高度な専門力だけではなく社会力である。大学に対しては、研究を重視し過ぎて教育に対するミッションが見えない。そして、組織改革が進んでいないなど、強い危機感を持っている』と書かれています。産業界はもともと専門家を育成してくださいと高度経済成長時代には言っていたのです。現在はこのように言っています。『教員個人レベルでは、学生の学力や学習意欲の低下に危機感を持っているものの、組織的な取り組みは不十分である』と彼らは言っています。また、大学は教育機関としての研究だけではなくて、『教育機関としての使命を全うすべき』である。そして、『各大学・学部は、それぞれの個性に合った特色ある教育を行うべき』である。べき論がこうやって並んでいます。これが産業界の声です。

次に、高校の先生からの声の一部ですが、「高校の受験だけではどうしても偏った教養になってしまう。専門に入る前の教養講座の充実を期待したい。」「学生の学習意欲や研究意欲を高める授業の工夫、改善、学生へのメンタル・クリニックの体制充実を望みます。」「大学の入試制度が変わるたびに高校では学習指導に大きな影響を受けて、学生を集めるための入試制度改革ではなくて、生徒の学力を高めるための必要な入試制度の抜本的改革をお願いしたい。」こういう声が高校から上がっております。

また、総合学術会議ではもう少し幅広のことを言っておりますが、「教育の充実に向けた改革は『実行』が加速される時である。」つまり加速すべき時であると言っています。教育論については随分議論がされてきました。京都大学もシンポジウムは今年で15回目です。しかし、加速、また実行すべきフェーズに入っているということを彼らは言っています。また2番目に、「教育の見える化の推進は各大学の責務である。」と言っています。どういう教育をどのようにやっているかということ発信し、そしてみずから考え直し、それを社会に発信していくということが必要だと言っているのです。3番目に、教員の教育活動の…研究活動ではありません…充実強化及びその努力、成果の適切な評価をすべきであると述べています。なかなか書くのはやさしいですが、実行は困難ではありますが、これはやるべきであるということを行っているのです。4番目として、大学院修了者の質

の保証システムと達成度評価等の公表を望んでいます。以上のことを総合学術会議は言っています。

次の問題意識ですが、京都大学と他大学の教育に対する視点について、これはいろいろあるかと思いますが、全国に700以上の大学がありますが、どの大学の研究がいいと思いますか、順位をつけてください、というアンケートがまいます。学長が見て、個人的な意見として、教育はどうか、社会貢献はどうか、総合的にはどうかという質問が来ます。毎年、朝日新聞がやっていますが、2010年版の大学ランキングで学長からの評価が並んでいます。教育を取り上げてみると、教育分野の1番は金沢工業大学、以下、私立大学がずっと並びます。国立大学が12位で愛媛大学が出てまいります。筑波大学、広島大学、名古屋大学、東京大学、そして京都大学は23位です。もちろん下を見ても切りはありませんが、上を見てもこんなにたくさん大学があります。大阪大学、東北大学は27位です。教育というのは研究推進大学ではどうしてもおろそかになっているという産業界の見方はこういうところにあらわれています。学長自身もそのように思っているということです。これは700の私立大学を含めてですから、国立大学の学長だけの意見ではありません。ちなみに、総合では学長の総合評価では、幸か不幸か京都大学は1位になっており、研究力は京都大学は1位になっています。しかし教育はこういう現状です。

そこで、海外の大学と比べてみたらどうか。これは先生方一人ひとり、あるいは教育を熱心に考えていただいている先生は少なくともよくよくご理解のことと思いますが、古代ローマにおいて技術、アルスというものは手の技である機械的技術、*artes mechanicae*、自由人の諸技術と訳されていますが、*artes liberales*、つまりリベラルアーツのもとになった二つの事柄がアルスに含まれます。近代国家を見ますと、ヨーロッパの多くの大学では教養教育というものは中等教育、つまり高等学校までに身につけているはずであり、だから大学では主として専門教育をやることになっています。もちろん一本の細い専門ではなくて、副専攻というのを学ばせながらやります。いろんなサブジェクトを同時に勉強できるようにはなっています。これがヨーロッパ型の考え方です。日本で言うと、旧制高校では教養をやって、大学では専門という形であったわけです。米国は、学部は教養教育が主であると割り切っている大学がほとんどです。学部は教養教育である。専門教育は大学院でやってくださいとなっています。したがって、学生は学部から様々な大学院へ進学します。

日本はといいますとその中間でありまして、折衷型が行われてきました。折衷型というのは、例えば我々の大学で言いますと、1992年までは4年のうち2年間は教養教育、2年間は専門教育です。つまり欧州型、米国型の間をとってきたのです。しかし、92年以降は、楔型教育を行うとあって、教養科目があいまいとなり、そして専門教育が1年生から入ってくるという形になりました。このような折衷型は、これでいいのかどうか、我々はよく考えるべき時代に入っていると思います。

その次は部局と部局間についてです。これは全学で、学生の教育は学部が責任を持つこととなっています。全学共通教育は実施責任部局で決めています。基本的には全学でやりましょうという合意がとれています。当然ながら、それぞれの学部で教育方針がいろいろかと思いますが、その意識の差、温度差は厳としてあると思っています。何が専門科目で何が教養あるいは一般教育なのか。胸を張って大学の教員が京都大学は教養をちゃんと教えていますと言えるか。これは先生方一人ひとりの思いも違いますし、部局によっても考え方が違うと思います。京都大学の教養教育の責任はどこにあるのか。これは全学ということになっておりますが、一体何が専門科目で、教養教育なのかということはこのシンポジウムでもう一步審議を深めていただいて、実施する時期が来ていると私は思います。

最後になりますが、寺田寅彦の言葉をご紹介します。ご存じの方は多いと思いますが、

「科学者になるには、自然を恋人にしなければならない。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである」。これを見るに、教育はどうか。言葉が見当たりませんが、きっちりやっていたのだと思いますが、私はこんなふうに思います。「教育者は未来を恋人にしなければならない」。つまり上と重ねて書いてみました。未来という恋人は、やはり確とした育人によって確実に美しくなるものであると私は思います。

私も教員として京都大学で30年以上、実質大学には24歳から40年ほどいました。その間、教育に従事したのは35年ぐらいだと思いますが、自分を振り返ってみて、本当に教育に全身全霊全行を傾けたかと言われると、やはり研究というのがあって、自分なりには一生懸命やったつもりですが、本当に人を育てるという観点が自分にあったかと自問してみますと、教えようという思いはありましたが、目の前の学生を育ててやろうという気もありました。しかし、正直に告白しますと、社会全体の人を育てるのだ、みんなと一緒にやるのだという意識は私には希薄でした。しかし、だんだんと年をとると、それではいけないと思うようになりました。世界も高度経済成長の時代からだんだんグローバル化するということを感じておりました。したがって、国際会議に出ても、日本人を代表して頑張るのだという意識も芽生えました。国際会議の世話や外国の専門誌のエディターもやってきました。学生を外国で開催される学会へ連れて行って、君たちもいずれ世界で勝負するのだという教育を一生懸命やったつもりです。しかし、意識がまだまだ低かったと反省をしております。したがって、昔に全学シンポジウムがあれば、もう少し私自身も自分を改善できたかと思えます。教育というのは、そして大学というのは、改革が非常にやりにくい場所です。しかし、だれかが、いつか何かやってくれるだろうとみんな思っていて、何も起こらないということが今までのヒストリーではなかったかと思えます。私は大改革を一挙にやることは大学に余りなじまないと思っています。しかし、改善は不断の努力として必要で、改善を何回も繰り返す、つまり改善のn乗は改革よりもすばらしい結果をもたらさずだろうと思って、これから教育だけではなくて、大学全体の運営、研究、そして教育に取り組んでいきたいと思っておりますので、ぜひ本日は教育的に絞っていただき、本当に京都大学の教育は世界一だ。少なくとも日本一と言われるまで頑張っていただけないかと思っております。私もできるだけの努力をしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(拍手)

質疑応答

司会 松本先生、基調講演をどうもありがとうございました。

では、質疑の時間を少し持ちたいと思います。何か疑問な点、一言申し上げたいことなどありましたら、どうぞ御願いたします。

久保田信（フィールド科学教育研究センター） 育人ということですのですごい感動したのですがけれども、ちょっと気になったことがあるので具体的に教えてほしいのですがけれども、さっき心配しておられた研究とか総合では京大は1位ということですので素晴らしいのですがけれども、大学ランキングで700以上の私立大学を含めた教育関係では23位ということだったのです。国立大学で1番は愛媛大学ということなのですが、その基準といいますが、教育の基準はどういう基準でランキングをつけたのです

ようか。

松本 これは、ここに書きましたように学長からの評価ランキングなのです。アンケートが参ります。私のところにも参ります。だから、学長の全く個人的な、場合によっては偏っている意見の集合体だと思ってもらって結構かと思います。お互いに意見交換とか様子を見ながら、私はこう思うというのをアンケートに書いたものの集積体なのです。したがって、評価基準があって、これに点数をつけるというものではございません。

久保田 だから具体的な。

松本 何も書いてありません。教育についてあなたが一番いいと思う大学はどこですか。私はこう思うと。恐らく私立大学が並んでいるのは、私立大学は教育を一生懸命やらないと自分たちの存立基盤が非常に危ういというふうに感じておられると思います。教育分野1位の金沢工業大学を訪問させていただいたことがあります。非常に丁寧な教育をしています。勉強のできない学生を先生方が別室に集めて課外勉強をやっています。実験指導はとことん付き合っていてやっています。これがいいかどうかは議論の分かれるところですが、非常に丁寧な教育をしています。だから、いつも1番になるのです。総合力では京大に次いで2位に入っています。数が多いという意味だけです。

久保田 ありがとうございます。

司会 ほかにございますでしょうか。よろしいでしょうか。

どうも松本先生、ありがとうございました。

(拍手)

それでは、次のご報告をお願いします。淡路敏之教育担当理事・高等教育研究開発推進機構長より、「大学教育をめぐる状況」についてのご報告をお願いいたします。よろしくをお願いいたします。



第15回全学教育シンポジウム

京都大学における教育の現状と今後を考える

平成23年9月2日

京都大学桂キャンパス 船井講堂



第15回全学教育シンポジウム

京都大学の「教育」:問題意識の温度差

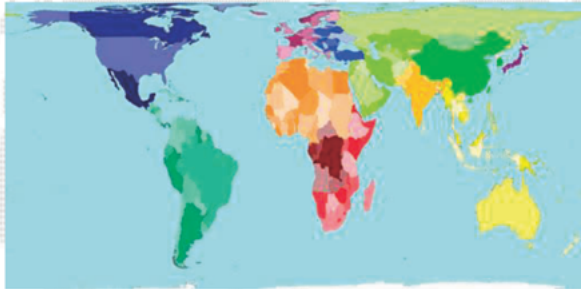
平成23年9月2日

京都大学総長 松本 紘

我が国の研究・教育環境を述べる際のキーワードとデータ

【Worldmapper】

経済や福祉、労働、環境など、いろいろな視点から世界を地図化



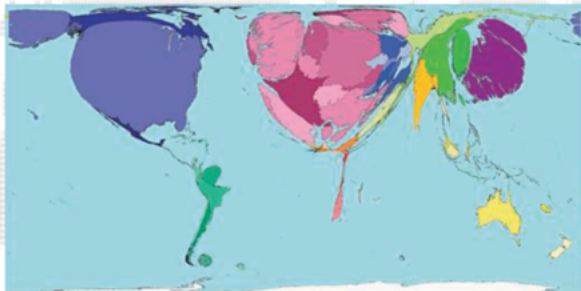
ヒト

研究者・技術者数 2006



モノ

論文数 Science Research(2001)

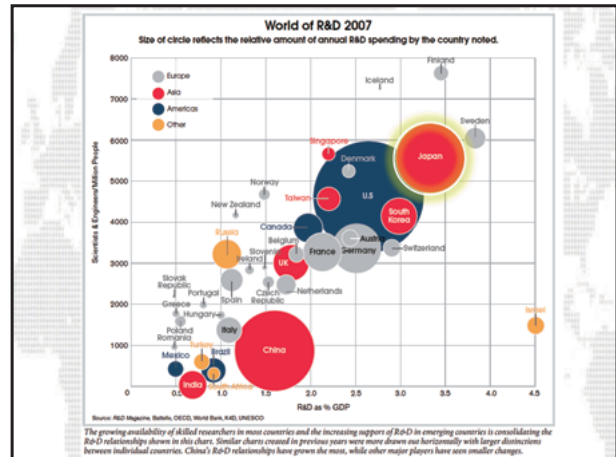
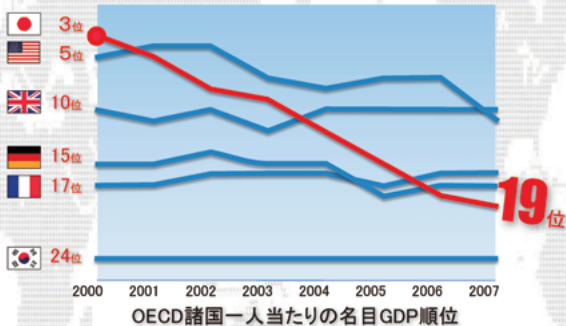


カネ

研究開発費 2004



研究・開発における資金、人数、論文 すべて世界トップクラスだったが...



問題整理

科学技術に対して、
決して少なくない資金と人材を
投入してきたが・・・
未だに長期化する経済停滞

では、何が問題か？

問題整理

それは、**人材育成**ではないか？
そのエビデンスを次に！



論点整理

これまで培った蓄積(=積分値)ではなく、
伸び率(=微分値)が大きく作用する！

人間性開発の伸び率は、**中国、インド、トルコ、アフリカ**が大きい

米国ではこれを要慮し、
産官学で“Rising above the Gathering storm”とい
う人材育成のありかたを二度にわたり検討

大学が育成する人材の推移

昔

1. 社会人
2. 研究者
3. よき市民

↓

1. 企業人：経営者+研究者・高度技術者
2. グローバル研究者
3. よき市民：専門教育への重点化
教養教育の弱体化

高度経済成長期

2000年以降

大学が育成する人材の推移

1. 社会人
2. 研究者
3. よき市民

↓

1. 企業人：経営者+研究者・高度技術者
2. グローバル研究者
3. よき市民：専門教育への重点化
教養教育の弱体化

↓

グローバル化

1. グローバルリーダー人材
2. リーダーを支えるグローバル人材
3. リーダーとなりうるグローバル研究者
4. 堅実な知識を有するよき市民

グローバル・リーダー・人材の必要性

停滞する経済

グローバル人材

理解・支援

グローバルリーダー

強い自信

衰退

2000年以降

1. 社会人
2. 研究者
3. よき市民

1. 企業人：経営者+研究者
2. グローバル研究者
3. よき市民：専門教育+教養教育

→ **グローバル化**

1. グローバルリーダー人材
2. リーダーを支えるグローバル人材
3. リーダーとなりうるグローバル研究者
4. 堅実な知識を有するよき市民

財政状況から
今以上にすべてを
底上げできない！
「広く薄く平等に」で
はなく、**微分値を変
えるための重点的
集中が必要!**

人材育成の姿勢：吉田松陰

●まず意思を持ち
心を磨き、**志を立てる**

●目標を定めたら、
全力で進む気迫

●やり遂げるための
知力と体力

**基礎的な能力と
人間としての裾野の広さ**

回り道を厭(いと)わず、あらゆることにチャレンジ



吉田松陰像 山口真文書

松下村塾出身者は、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋など内閣総理大臣2名、国務大臣7名、大学の創業者2名輩出

人材育成の姿勢：吉田松陰

●まず意思を
心を磨

●目標を定め
全力で

●やり遂げる
知力と体力

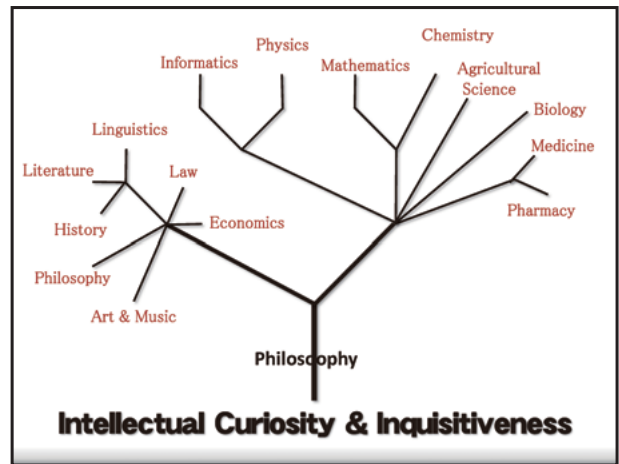
**基礎的な能力と
人間としての裾野の広さ**

回り道を厭(いと)わず、あらゆることにチャレンジ



吉田松陰像 山口真文書

松下村塾出身者は、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋など内閣総理大臣2名、国務大臣7名、大学の創業者2名輩出



The fragmentation and increasing complexity of scholarship

Highly Specialized Fields

**務本之学
Focus on the Fundamentals**

Taking a comprehensive view in order to understand the true nature of things

本日のタイトル
京都大学の「教育」：問題意識の**温度差** 1/4

大学 ↔ **世間**

社会から見た大学教育 特に気になったもの数例

大学ライター 産活のバカヤロー

総合科学技術会議
将来の産業社会の基盤を支える科学技術系大学院生のための教育改革
～大学院教育の「見える化」による改革の準備～

第5回 学習指導基本調査 報告書
高校

産業界
社会が求める大学の人材輩出戦略
～まずは卒業教員会の改革から～

社会から見た大学教育 特に気になったもの数例

大学ライター 龍活のバカヤロウ

将来の産業社会の基盤を支える科学技術系大学院生のための教育改革
— 大学院教育の「見える化」による改革の準備 —

「私は納豆のようにねばり強い人間です」と、決まり文句を連呼する「納豆学生」、「企業は教育の邪魔をするな」と叫ぶわりに、就職実績をやたらと気にする「崖っぷち大学」、営業のことを「コンサルティング営業」と言い換えてまで人材を獲得しようとする「ブラック企業」— 「企業と社会の未来をつくる行為」「学生個々人が未来に向けて大きな一歩を踏み出す行為」であったはずの就職活動は、いまや騙し合い、憎しみ合いの様相を呈し、嫌悪感と倦怠感が渦巻く茶番劇に成り下がった。さて、いったい誰が悪いのか。

社会から見た大学教育 特に気になったもの数例

● 産業界が求めているものは、高度な専門学力だけでなく「社会力」。大学に対しては「研究を重視しすぎミッションが見えない」、「組織改革が進んでいない」など、強い危機感をもっている。

● 教員個人レベルでは、学生の学力や学習意欲の低下に危機感を持っているものの、**組織的取り組みは不十分**

● 大学は**教育機関**としての使命を全うすべき

● 各大学・学部は、それぞれの個性にあった特色ある教育を行うべき

産業界

社会が求める大学の人材輸出戦略
～ 主として学際教育の改革から ～

平成21年7月
出典：人間学研究所
大学改革委員会

● 「高校の受験勉強だけでは、どうしても偏った教養になってしまう。専門に入る前の教養講座の充実を期待したい」(男性、58歳、普通科)

● 「学生の学習意欲や研究意欲を高める授業の工夫・改善、学生へのメンタルクリニックの体制充実を求む」(男性、54歳、普通科)

● 「大学の入試制度が変わるたびに高校では学習指導に大きな影響を受ける。学生集めのための入試制度改革ではなく、生徒の学力を高めるために必要な入試制度の抜本的改革をお願いしたい」(男性、59歳、普通科)

高校から大学への要望

卒業生等学習調査報告書

平成21年7月
出典：人間学研究所
大学改革委員会

社会から見た大学教育 特に気になったもの数例

総合科学技術会議

平成22年 1月27日
総合科学技術会議 基本政策専門調査会

社会が求める大学の人材輸出戦略
～ 主として学際教育の改革から ～

● 教育の充実に向けた改革は、「**実行**」が加速される時

● 教育の「**見える化**」の推進は、各大学の責務

● 教員の教育活動の充実強化及びその**努力、成果の適切な評価**

● 大学院修了者の「**質の保証**」システムと達成度評価等の公表

平成21年7月
出典：人間学研究所
大学改革委員会

本日のタイトル
京都大学の「教育」：問題意識の**温度差** 2/4

本学 ↔ **他大学**

大学ランキング2010学長からの評価ランキング (朝日新聞出版2010)

教育分野					
大学	人				
1	金沢工業大	132	16	名古屋大	11
2	国際基督教大	110	18	上智大	11
3	立命館大	49	21	東京大	10
4	桜美林大	32	21	山口大	10
5	早稲田大	31	21	北九州市立大	10
6	同志社大	26	21	岡山大	9
7	国際教養大	21	21	金沢大	9
8	関西国際大	21	23	岐阜大	8
9	慶應義塾大	19	23	京都大	8
10	玉川大	19	23	関西大	8
11	立命館アジア太平洋大	18	27	高知工科大	8
12	愛媛大	16	27	大阪大	7
13	立教大	16	29	東北大	7
14	筑波大	14	29	新潟大	6
15	広島大	13	30	山形大	5
				東京女子大	5

本日のタイトル
京都大学の「教育」：問題意識の**温度差** 3/4

本学 ↔ **海外大学**

欧米との比較：教養教育

古代ローマにおいて、「技術」(ラテン語: ars)は、「手の技である機械的技術」(アルテース・メカニカ工, artes mechanicae)と、「自由人の諸技術」(アルテース・リベラーレス, artes liberales)とに区別されていた。

ヨーロッパ 教養教育は中等教育が担当

日本 戦前の日本でも旧制高校はリベラルアーツ・大学に行けば専門という形だった

米国 学部は教養 大学院は専門教育 + 研究者育成

折衷型 これでもいいのか? これでもいいならその哲学を!

出典：教養教育と専門教育の協会(北大 包福 学)より改定



何が「専門」で何が「教養」なのか？
胸を張って京都大学たる「教養」を教えていると言えるか？
京都大学の「教養教育」の責任はどこにあるのか？

京都大学の「教養」とは何か？
今のままでいいのか？

科学者になるには**自然**を恋人としなければならない。
自然はやはりその恋人にのみまごころを打ち明ける
ものである・・・ 寺田寅彦

教育者は、**未来**を恋人としなければならない。
未来という恋人はやはり確とした育人によって
確実に美しくなるものである・・・松本 紘

学生だけでなく、我々スタッフ同士でも
対話と自学自習の精神で協同による創造の楽しみの共有を

ご静聴、ありがとうございました

6. 報告 1：「大学教育をめぐる状況」

理事（教育担当）・高等教育研究開発推進機構長 淡路 敏之



淡路です。ここ約 2 カ月、大学紹介や入試説明などで全国巡業に出かけており、当を得た話ができるかわかりません。その節はお許しください。それから、総長のような高尚な話ではなく、教育に関して当面どのようなことが京都大学には問われているのかということを中心にお話しさせていただきます。

パワーポイントの講演タイトルは配布資料と少し違うかもしれませんが、大学教育をめぐる今日の発表は、この表紙の 1 枚に要約できます。つまり、4 年一貫の学士課程教育、すなわち、教養教育と専門教育課程の質保証が問われており、入学時のアドミッション・ポリシー、卒業時の人材養成目標であるディプロマ・ポリシー、それをつなぐカリキュラム・ポリシーの 3 点セットが適正かつ効果的に機能し、分野別質保証がなされているのかということが、次期の認証評価、法人評価における

重点評価対象になると予期され、検証と改善すべき内容及び方策が問われています。実際、各学部の学士課程における学習目標の達成に向けて、教養教育と専門教育が最適に組み合わせられているのか、学部の目標達成に向けて工夫された教養教育であるかどうか第 2 期の認証及び法人評価において問われる可能性が高いと言われています。そのため、教養教育の実効性に各大学は大きな関心を払っています。現況をみますと、財政面は下り坂が続き、18 歳人口は減少の一方、大学の入学定員数はそれほど変わりません。ということは、本学が求める優れた人材の数は減少している可能性が考えられ、そのような条件下での確な質保証教育をいかにやり遂げるのかが問われていると言えます。その入り口と出口は今どのような状況なのか、これは今日午後のパネル課題でもあります。

大学の教育と研究は我が国の基礎体力の源泉であり、人材育成は国の将来を左右する極めて重要な要素であることは誰しもが認めるところです。総長も説明されたように、最近の多くのデータは、日本の大学の国際競争力の低下を示しています。運営費交付金の減少、若手研究者の雇用難、科学技術関係予算の低調な伸び等、我が国の高等教育機関への公的財政支出の対 GDP 比の伸び率は OECD の中であって低い現状です。一方で、この表からわかりますように、我が国だけが（GDP 比が）特に低いのかといえば、イギリス、ドイツ、フランスとそれほどは変わりません。そのため、科学技術や学術に決して少なくない資金を投入したけれども、長期化する経済停滞の原因は人材育成が一因ではないかと指摘されるようになり、社会的要請等を踏まえた実効的な教育の推進と体制が一層求められています。

大学を取り巻く状況を見てみましょう。財政面では運営費交付金と科研費は来年、10%程度削減される可能性が高いと言われています。昨年度も同様なことが言われ、大学関係者の取り組みや元気復活枠等で何とか最小減ですみましたが、本年は事情が一変しました。3 月 11 日に発生した東日本大震災で、今後 5 年間で 19 兆円の財政投資が必要だと試算され、厳しい切込みが予想されています。計算がしやすいので仮に 10%減だとしましょう。京都大学の運営費交付金は大体年 550 億円で、そのうち 7 割から 8 割が人件費です。教育研究への投資可能額はおよそ 100 数十億円だと見積もれます。

最大学部への配当額は 20 億円程度で、そのうち 5 億円は電気代という状況下で、交付金 1 割カットの相当額は約 55 億円の減少です。科研費も同様に 1 割減るとすると、本学は科研費等をおおよそ年 150 億円ぐらい獲得していますので、15 億円程度の減少が予想されます。かような厳しい環境下で、教育を如何に実効的に推進していくのかが問われています。

中央教育審議会（以下、中教審と略記）は平成 20 年に学士課程の構築に関する答申を公表しました。それを受けた形で平成 22 年に日本学術会議が大学教育の分野別の質保障について報告しています。そこでは教養教育の拡充の必要性が指摘され、社会力や生きる力（人間力）の涵養に教養教育は非常に重要であると繰り返し記されています。本学でも、分野を束ねる力や周辺力の養成に向けて、例えば大学院の研究科横断型の授業や文理融合型の先導的な教育を行うなど、複眼的な視点の習得に注力されるようになりました。

平成 20 年の中教審答申の「学士課程教育の構築に向けて」では、各学部は学生に履修を期待する共通・教養教育の内容を検討し、目標に照らした適切な科目編成と効果的な教育方法、ならびに順次性のある体系的なカリキュラムの作成、学生の実態に見合った教育の実施を検討するよう求めています。クイック・ルックしますと、第 1 章ではグローバル化、ユニバーサル化等をめぐる認識と改革の基本方向が書かれており、第 2 章では学士課程教育における方針の明確化、第 3 章では学士課程教育の充実を支える教職員の職能開発について触れています。また、先進諸国では、何を教えるかより、何ができるようになるのかが重視されている点についても触れています。

本学における全学共通・教養教育の質保障の基盤であるカリキュラムの企画と運営は、10 学部から付託された高等教育研究開発推進機構（以下、機構と略記）の全学共通教育システム委員会が所掌する仕組みになっています。このような教育課程の編成と実施にあたって、中教審答申は順次性のある体系的な教育課程とともに、厳格な成績評価の実施を求めていることに注意が必要です。また、日本学術会議の「分野別の質保証のあり方」では、各分野における専門教育と教養教育との関連について同時に検討がなされなければ一面的なものにならざるを得ないと指摘しています。加えて、教養教育の歴史に関するレビューを踏まえて、学習目標の達成に最適と考えられる教養教育と専門教育の組み合わせとそのようなカリキュラムの実装が分野ごとに重要だと指摘しています。そして、過去を学ぶことによって、あり得た現在を想像し、現在を深く知ることによって未来を構想する力を養成する教養教育の実践が現在重要だとし、不安定な現社会における学生の羅針盤づくりに役立つようにとの思いが込められているようです。東京大学の行動計画「FOREST」では、「教養とは」現在進行形の諸問題を歴史的な視野で考え、局所的な現象を普遍的な枠組みでとらえ、相互に関係づけることのできる能力であると記されています。

本学の状況はいかがでしょうか。昨年末から本年初めにかけて、3 回生以上の在学生を対象とした対話集会「キャンパスミーティング」を全学部で行いました。後ほど鈴木先生が報告されると思いますが、これはあくまでも標本集団であるという前提で申しますと、科目選択という観点からは、幅広い教養を身につけようとする意識が十分ではなく、楽勝科目の内容は記憶に残っていない一方で、ハードな授業でも達成感のある授業やスキルアップにつながる科目、未習者に配慮された科目の拡充を望む声が多いという結果でした。英語については、スキルアップの必要性を認識しているけれども抽象的で、動機づけの仕掛がほしいという声が多く寄せられました。高校からの学びの質の転換を意図したポケゼミの評判は高く、学生に歓迎されているようです。成績評価に関しては、担当教員ごとに結構ばらつきがあり、複数の学部からは答案の返却等、試験結果に関し何らかのフィードバックを求

めるという、耳の痛い批判的意見が寄せられています。TA 制度についてはおおむね好意的で拡充を望む声が多く、学びたいという意欲、学びの道筋を求めている学生の姿が垣間見えました。

本学の教育方針は、教員との対話を根幹に、知の歴史とその脈略及び成果を本物を使って学び、自学自習等で発展させることを重視するとともに、実験やフィールドワークと理論との統合を通じて、専門力、教養力、それを合わせた総合力の育成を大切に、例えば理学部の少人数クラス担任制のような、学生の志のバックアップ体制にも配慮するようにしています。本学の特色である自学自習は、授業等で学んだことを高いレベルで研鑽し対話型で発展させて、研究力及び学びのモチベーションを自律的に高めることを奨励するという、本学における学びのポリシーとも言えるものです。そのような能力が不十分だと、本学の理念で謳われている、分野を横断的に束ねて多元的課題に挑戦し解決することは難しい。先生方は授業をめぐる対話等で学生に気づきを与え、学生の内燃エンジンに火がついて学習が加速するよう、努力していただいているところです。

先ほど総長が話された朝日新聞のランキングに加えて、今週発売中のサンデー毎日に、高校の進路指導教諭による大学ランキングが掲載されています。その結果では本学はかなり深刻な評価を受けています。私は全国巡業の折に主要高校をいくつか訪問しました。それを踏まえますと、サンデー毎日の結果はあながち的外れとは言い切れません。総合力では京大は3位。教育力（在籍教員が頑張った場合の教育ポテンシャルという意味）は3位です。国際化は20位外、改革力の評価も同様です。私が気にかけている入学後に生徒を伸ばしてくれるランキングでは京大は13位。入学後の生徒の満足度では京大は6位です。先ほど触れました8月27日の東大・京大教育担当副学長バトル討論会に集った全国の公立トップ高校の進路指導教員との質疑応答やその後の交流会で、サンデー毎日の記事と同様な意見を多くの先生方から直訴されましたので、記事は結構当たっているなど思った次第です。

さてどうするか。各学部の権限と責任のもとに実施する学士4年一貫教育の中で、全学共通・教養教育にかかるカリキュラムの改善・整備、組織や規程の整備をなす必要があるでしょう。ポケット・ゼミに代表される初年次教育、ならびに特色のある全学共通・教養教育プログラムの拡充や国際舞台で活躍できるための英語運用力教育の拡充など、ステークホルダーである学生が卒業時さらにはそれ以降も学習成果を実感できる教育展開が肝要だと思います。このあたりに関して、京大広報ナンバー669、7月の洛書で、ウイルス研究所の豊島先生の記事が注目されます。すなわち、大学の講義は高校での学習が前提となっている。日本の高校教育は多くの場合、大学入試を最終目標にプログラムが組まれているので、入試に必要な科目はしっかりと勉強するが、そうでない科目は授業を受ける機会さえない場合がある。暗記中心は分野を越えてつながっている原理を発見することに対し負に働く。だから、学生の中に理科全教科と数学を学び、異分野融合を楽しんでくださいというメッセージは大変啓発されるものです。

さて、大学の講義の前提となる高校での学習状況について、教員は往々にして自らの高校時代と同様だろうと思いがちです。実際はどうか？現在の学習指導要綱と必修科目ならびに受験生の状況については、天王寺高校と駿台予備校さんの先生方に午後のパネルディスカッションで報告していただき、入り口の状況に対応した効果的な教育論議がなされることを期待しています。

話は変わりますが、先般、医学部人間健康科学科のFD研究会に招かれました。人間健康科学科では、教育目標、教育課程の概要に加えて、履修が望ましい教養科目がA群、B群毎にモデルプランとして学生に提示される等入り口のアドミッション・ポリシーと出口のディプロマ・ポリシーをうまくつなぐよう、カリキュラムをアレンジされています。これは専門課程と教養教育課程の接続に関する

良い取組例だと思います。

最近、全学共通教育システム委員会内に設置された全学共通教育システム検討小委員会から、全学共通・教養教育の問題点の整理と改善策について提言をいただきました。そこでは、複数科目群のあり方、科目群全体のあり方、開講科目の整理と整備等の必要性が述べられています。今後は全学共通・教養教育への提言をどのように実装していくかという、組織面も含めた全学的な検討がなされるのであろうし、そのことを通じて京都大学の教育ビジョンと行動目標の具体策が一層明確になると考えます。

繰り返しになりますが、教養教育の実施に当たっては、入学者の学習履歴と到達度を踏まえて行うことが肝要です。現在の高校では社会や理科で学ぶ科目は各3科目程度です。私たちの高校時代には理科・社会ともにほぼ全教科を学ぶという、*general education* のような状況では決してありません。従って、ある分野の具備する知識は中学校程度かもしれません。その場合、教育効果を上げるには相当な工夫と努力が必要となります。

東京大学は2011年に行動目標である「FOREST」を改定されました。そこでは、1) 知の公共性と国際性、2) 知の共創、3) 連環する大学の知と社会の知、4) 真の教養を備えたタフな学生の養成、5) 活力ある卓越した教員、6) 高い能力と専門性を持つ教職員と機動力のある経営を掲げ、日本のフラッグシップ大学としての役割を果たすと宣言しています。教育目標の関係では、国際的な広い視野、強靱な開拓者精神、公共的な責任を持って行動するタフな人間を育成する。その中で、先ほど申し上げましたように、現在進行形の諸問題を歴史的な視野で考えて解決できる人材育成にかなった教養教育を実施すると謳っています。

研究型大学を自負する本学においては、受験者へのメッセージとして、「能力の習得・涵養、キャリア形成に加えて、不安定な時代において羅針盤となる自分軸が形成できるよう、京都大学は心がけており、志を持って本学を目指していただきたい。さらに、法学研究科の木南教授（入学者選抜研究委員会委員長）のご持論である京大を使い回すために入学していただきたい。そのような受験者を京大は望みます」と公言しています。なお、ステークホルダーである学生にとっては就業力の保障は重要で、この種のデータは本年から公表が義務付けられた教育情報の対象であり、来るべき法人評価、認証評価においても注視する必要があります。どうか受験者や社会の期待にかなう教育の推進にご協力をお願いする次第です。

(拍手)

質疑応答

司会 時間がかかり押ししておりますけれども、どうぞご質問ございましたら、この機会に。

久保田信(フィールド科学教育研究センター) ちょっと速くて画像が見えなかったのですけれども、さっきの質問と連動するのですけれども、大学の順位の評価です。いつも東大に負けていて、東大はフラッグするから、またそれを説明して、京大は一体何を狙っているのかよくわからないのです。大学の教育、総合研究で、さっき松本先生が言ったのと順位が違っていたのですけれども、これは何を基準に。

淡路 平ていに申しますと、調査する標本集団が違うためだと思います。先ほども申しましたように、公立高校や私立高校で進路指導を担当する先生方が大学を診る際、一般的なデータに加えて、各大学に入学した学生の多様な意見を直接聞き、さらには、卒業後どうなったのかという時系列変化も勘案して個別の大学を評定する先生方もおられます。例えば、東京の大学に行った学生は語学力は伸びているけれども、京大に行った人は伸びませんねというようなことも言われました。この見解は個人的で、対象学生の資質に依存しますが、全国の高校の進路指導の先生方のアンケート結果であることを踏まえたと否定しにくいと思われま

久保田 ありがとうございました。

司会 よろしいでしょうか。このあと午後には大高接続のパネルディスカッションがあり、ますますいろんな意見が出るかと思

では、淡路先生、どうもありがとうございました。

(拍手)

司会 次に、鈴木晶子高等教育研究開発推進機構副機構長より、「キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後」についてご報告願

～全学教育シンポジウム2011～

「大学教育をめぐる現況」

—京大は如何に生き残るか—

4年一貫の学士課程教育(教養・専門教育)の質保証

アドミッションポリシー、ディプロマポリシーをつなぐカリキュラムポリシーの3点セット:

- ・適正で効果的に機能し、分野別質保証がなされているかは、次期の認証評価、法人評価における重点評価対象
- ・検証と改善すべき内容と方策が問われている

次期の認証評価では、各学部の学士課程における学習目標の達成に向けて、教養教育と専門教育が最適に組みあわされているか、共通な教養教育に加えて学部目標達成のために工夫された教養教育であるかが問われる可能性があり、教養教育の実効性評価に強い関心がはられている。

現況は、下り坂予算、高校生数の減少による大学定員数の相対的变化、求める人材確保の厳しさの中で、(入学者の質に過した)的確な質保証教育が求められている。人口と出口はどんな状況か?それを繋ぐ教育はどうか? がパネル開催動機の一つ

大学は科学技術を生み出し同時にそれを使う人を産み出す唯一の場

多くのデータは日本の大学の国際的競争力低下を示している。



我が国を取り巻く国家基盤状況

運営交付金の減少

競争的資金への偏向

若手研究者の雇用問題

科学技術関係予算の低調な伸び

世界大競争の激化

アジア諸国の躍進

大学への公的投資は OECD諸国中、最低水準

オバマ政権は、アメリカ史上最大規模の基礎研究投資

我が国の科学技術をめぐる状況

●博士(後期)課程への進学者の推移

[学校基本調査(文部科学省)により作成]



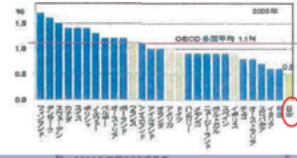
●科学技術関係予算の増減率(2004年→2007年)

[科学技術要覧(H21)により作成]

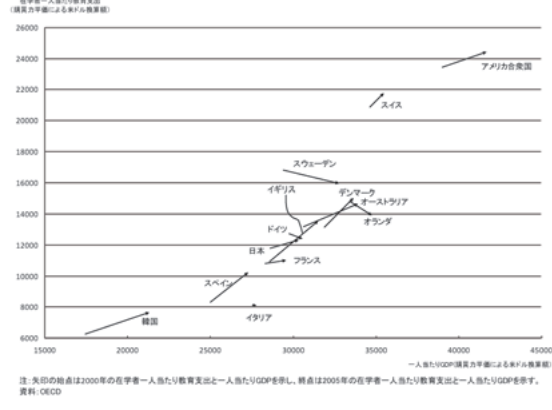


●高等教育機関への公的財政支出の対 GDP 比較

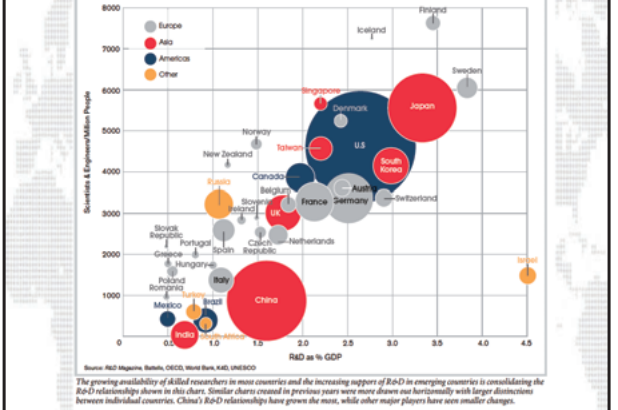
[出典:OECD, Education at a Glance 2008]



高等教育の在学者一人当たり教育支出と一人当たりGDPの比較の推移 (2000～2005年)



World of R&D 2007



科学技術に対して、決して少なくない資金と人材を投入してきたが...

未だに長期化する経済停滞

人材育成が一因ではないか?

大学の今日の環境

大学の研究・教育を取り巻く重要課題 + 国家財政の危機的な状況

交付金と科研費が10%削減されると・・・(70億減?)

3/11東日本大震災:今後5年間で19兆円の財投

これらを踏まえたフェーズでの実効的な教育の推進方針と体制の策定

大学を取り巻く教育政策環境と京大教育の展開

社会経済構造のグローバル化、学術の先進化・高度化・学際総合化、地球環境問題の顕在化等に伴い、社会課題解決、知識先導による社会発展が要請

中央教育審議会：
 学士課程の構築に関する平成20年3月の答申において、社会の持続的発展を担う人材育成、グローバル化の進展に対応できる国際的通用性を要請

日本学術会議：
 「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」(平成22年7月)で、大学教育の分野別質保証の具体策として、学士課程～大学院教育も視野に入れた教養教育の拡充の必要性

京大での取組例：教養教育+専門教育からなる基盤教育に加えて、
 分野を束ねる力、周辺力の養成に向けて、
 複数学部共通、研究科横断型、研究・教育ユニットによる教育
 複眼力・マネージメント力を育成する文理融合型の先進的教育
 共通・教養教育と専門教育、大学院教育との接続及び俯瞰
 21世紀COE、G-COE等の成果を反映

さらに、社会課題解決型研究に備えた教育の充実が要請
 広がりのあるsynergy型の連鎖系解明研究教育
 例：環境を形成する気候、生態系、海等の連鎖、共生型経済社会システムへの転換

**平成20年12月24日中教審答申
「学士課程教育の構築にむけて」**

本学の「学士課程における教養・共通教育検討会報告」(平成22年3月29日)：
 各学部は学生に対して履修を期待する教養・共通教育の内容を検討するとともに、教養・共通教育の目的に照らした適切な科目提供と効果的な教育方法の体系的な編成、ならびに学生の実態に合わせた履修のあり方、期待される効果を検討するよう求めている。

今般の全学部対象のキャンパスミーティングにおいて、共通・教養教育も含めた学部推薦のモデルプランとそのガイダンスを参考に、自らの判断で授業計画を立てたいという多数の要望があり、自学自習の目的の一つである自発的・自律的に学ぶ意欲・態度の育成と知的関心の触発を調和的に図る共通教育システムの強化が必要。

各学部がその責任のもとに行う学士課程教育の教養教育モデルプランを作成するにあたり、検討材料として分野別科目の区分(例えば、初修・基礎・基盤・展開)、ならびに順次性準拠の体系的な履修科目例を、全学の協力のもとに共通教育システム委員会と機構で準備することが現実的な方策と考える。

学生が自律的順次の体系的に履修計画をたてることにより、体系的学習と主体的に学ぶ態度の育成の調和を図り、自学自習の精神を涵養する履修方法を実効あるものとできよう。

平成22年日本学術会議「大学教育の分野別質保証の在り方」も必携

学士課程教育の構築に向けて
(答申)

Quick Look

平成20年12月24日
中央教育審議会

はじめに ～今なぜ学士課程教育か～ 1

第1章 グローバル化、ユニバーサル段階等をめぐる認識と改革の基本方向 3

1 大学を取り巻く環境の急速な変化 3

2 他の先進諸国と比較して少ない大学在学者数の対人口比率 4

3 これまでの改革の進展と懸念 5

4 競争と協同、多様性と標準性の調和 5

5 危機感の共有と実効ある改革の必要性 6

6 学位授与、教育課程編成・実施及び入学受入れに関する方針の重要性 7

第2章 学士課程教育における方針の明確化 8

第1節 学位授与の方針について ～幅広い学び等を保証し、21世紀市民にふさわしい学習成果の達成を～ 8

第2節 教育課程編成・実施の方針について ～学生が本気で学び、社会で通用する力を身に付けるよう、きめ細かな指導と厳格な成績評価を～ 15

1 教育課程の体系化 15

2 単位制度の実質化 20

3 教育方法の改善 23

4 成績評価 26

第3節 入学受入れの方針について ～高等学校段階の学習成果の適切な把握・評価を～ 29

1 入学者選抜 29

2 初年次における教育上の配慮、高大連携 35

第3章 学士課程教育の充実を支える学内の教職員の職能開発 38

1 教員の職能開発 38

2 大学教員の職能開発 41

3 大学間の協働 42

「学士課程教育の構築に向けて」
中央教育審議会答申の概要

1. 基本的な認識

- グローバル化する知識基盤社会において、学士レベルの質実能力を備える人材育成は重要な課題である。
- 地方、目先の学生確保が優先される傾向がある中、大学や学位の水準が曖昧になったり、学位の国際的通用性が失われたりしてはならない。
- 各大学の自主的な改革を通じ、学士課程教育における3つの方針の明確化等を進める必要がある。

2. 主な内容

【現状・課題】 (1) 学位授与の方針について

- 他の先進国では「何を教えるか」より「何をできるよくなるか」を重視した取組が進展
- 一方、我が国の大学が掲げる教育研究の目的等は総じて抽象的
- 学位授与の方針が、教育課程の編成や学修評価の在り方を律するものとなっていない
- 大学の多様化は進んだが、学士課程を通じた最低限の共通性が重視されていない

【改善方策の例】

- 大学は、卒業に当たっての学位授与の方針を具体化・明確化し積極的に公開
- 国は学士力に關し、参考指針を提示 (「学士力に関する主な内容」)

全学共通・教養教育
10学部の要請で行うもの、機構のシステム委員会が質保証も含めて所掌

1. 知識・理解 (文化、社会、自然 等)
2. 汎用的技能 (コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力 等)
3. 態度・志向性 (自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任 等)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

重視事項

(2) 教育課程編成・実施の方針について

- 学修の系統性・順次性が配慮されていないとの指摘
- 学生の学習時間が短く、授業時間外の学修を含めて45時間で1単位とする考え方が徹底されていない
- 成績評価が教員の数量に依存しており、組織的な取組が弱いと指摘

→ 順次性のある体系的な教育課程を編成
→ 国は分野別のコア・カリキュラム作成を支援
→ 学生の学習時間の実態を把握した上で、単位制度を充実化
→ 成績評価基準を策定し、GPA等の客観的な評価基準を適用

(3) 入学受入れの方針について

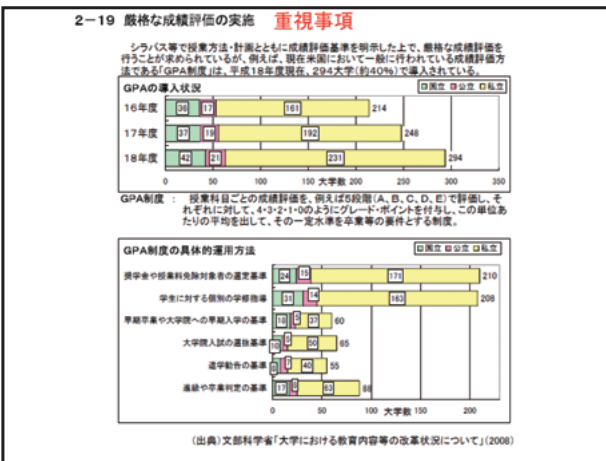
- 大学全入時代を迎え、入試によって高校の質保証や大学の人口管理を行うことが困難
- 特定の大学をめぐる過度の競争
- 総じて、学生の学習意欲の低下や目的意識が希薄化

→ 大学は、大学と受験生のマッチングの観点から入学受入れ方針を明確化
→ 入試方法を点検し、適切な見直し
→ 初年次教育の充実や高大連携を推進

(4) その他

- ファカルティ・ディベロップメント (FD) は普及したが、教育力向上に十分つながっていない
- 設置認可は強化されたが、質保証の観点から懸念すべき状況も見られる
- これらの活動に係る財政支援が不可欠

→ 教員、大学職員への研修の活性化と、教員業績評価での教育成果の実現
→ 自己点検・評価の実施、分野別質保証の枠組みづくりのため日本学術会議への審議依頼等の質保証の仕組みを強化
→ 財政支援の強化と説明責任の徹底



2-1-6 教員一人当たり学生数の国際比較

国	年度	教員数	学生数	教員一人当たり学生数
33年 (2006年)	平均	2,055,212	2,055,212	1.00
	教員数	164,473	164,473	1.00
	学生数	232,230	232,230	1.41
アメリカ (2003年)	平均	10,312,000	16,900,000	1.64
	教員数	692,000	692,000	1.00
	学生数	1,139,000	1,139,000	1.64
イギリス (2004年)	平均	1,391,608	2,257,540	1.62
	教員数	109,455	109,455	1.00
	学生数	169,651	169,651	1.55
フランス (2002年)	平均	1,347,291	54,838	0.04
	教員数	54,838	54,838	1.00
	学生数	237,124	237,124	4.32
ドイツ (2003年)	平均	2,019,400	1,019,400	0.50
	教員数	146,074	146,074	1.00
	学生数	237,124	237,124	1.62
中国 (2004年)	平均	12,335,900	12,335,900	1.00
	教員数	692,000	692,000	1.00
	学生数	1,139,000	1,139,000	1.64
韓国 (2004年)	平均	2,052,970	6,460,000	3.15
	教員数	64,460	64,460	1.00
	学生数	133,397	133,397	2.07

(出典) 文部科学省「教育指標の国際比較」(平成19年度)

日本学術会議「大学教育の分野別質保証の在り方」平成22年

要 旨

○ 作成の背景

平成20年5月、日本学術会議は、文部科学省高等教育局長から学術会議会長宛に、「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」と題する依頼を受けた。依頼を受けて日本学術会議では、同年6月に課題別委員会「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」を設置し、9月に第1回の委員会を開催し具体的な審議を開始したが、同年12月まで計4回の審議を行う中で、以下の理由から、委員会の下に3つの分科会を設置し、さらに具体的な審議を進めることとした。

分野別質保証の在り方について検討するということは、基本的に各分野の専門教育を対象とすることになる。しかし一方で教養教育・共通教育も行われており、これらと専門教育との関係についても同時に検討がなされなければ、大学教育における専門教育の在り方についての議論が一面的なものにならざるを得ない。また、学生が職業生活に移行する際、とりわけ文系の分野を中心に、大学教育の成果が顕著に認められないことに加え、むしろ早期化、肥大化する就職活動によって、分野を問わず大学教育自体の円滑な実施に課題を来している状況が起こっている。このような現実から目をそらしては、獲得力を待つ議論はならないであろう。

このため、文科省からの依頼を直接的に検討するために「質保証検討分科会」を設置するとともに、教養教育・共通教育の在り方に関して検討するために「教養教育・共通教育検討分科会」を、大学と職業との接続に関わる問題に関して検討するために「大学と職業との接続検討分科会」をそれぞれ設置し、平成21年以降は、3つの分科会が相互に緊密な連携を保持しつつ、それぞれの課題について審議を進めてきた。

本報告書が三部構成となっているのはこのような理由による。

分野別質保証といえども、教養・共通教育と一体的にとらえることが要請

②専門教育と教養教育との組合わせの最適化:
各分野で学習目標の達成に最適と考えられる教養教育と専門教育を組み合わせたカリキュラムを編成

(3)教養教育に関する大学の自主性ならびに「学士力」との関係:
平成20年中教審答申参照

4. 社会の変化と市民的教養の変容

(1)「豊かな人生」へのパスポートとしての教養概念の失効:
戦後間もない時代の教養教育の理念は、安定した職業につき、豊かな人生を送るためのパスポートであり、エリートのための「教養」
1970年以降の高度成長期から大卒者は経営幹部予備軍から普通のサラリーマン

(2)多様な参画に基盤を置く新しい市民社会の形成

(3)90年代以降の社会における教養:
長期安定雇用ではない、70年代前後の日本社会から不安定な社会へと変化。現状は多数のオルタナティブがありえた中の1つの現実態。ありうべき未来への対応力、つまり、過去を学ぶことによって、あり得た現在を想像し、現在を深く知ることによって、未来を構想する力を養成することが現在の教養教育の課題(羅針盤づくり)。
東大:現在進行形の諸問題を歴史的な視野で考え、局所的な現象を普遍的な枠組みでとらえ、相互に関連づけることのできる力

5. 現代における学士課程の教養教育について
現代社会における市民性の涵養という観点から見れば、共通する知の基盤形成。文系と理系が共有する「新たな科学技術リテラシー」という側面が重要性を増す。

3. 専門教育と教養教育との関係

(1)教養教育とは何か

①原点としての市民教育:
学士課程において専門教育との区別は、市民教育という理念が教養教育の原点

②現実の教養教育の多様性:
前期課程としての一般教養科目は、人文・社会・自然+外国語、保健体育に加え、初年次教育、リメディアル教育、専門基礎教育、キャリア教育など多様になった

(2)専門教育と教養教育との関係

①教育理念と科目区分との区別:概念図参照

図3 教育理念と科目区分との関係についての概念図

②専門教育と教養教育との組合わせの最適化
本報告書の第一節において、分野別の教育課程編成上の参照基準の策定を通じて、特定の分野を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき「基本的な素養」を特定するとともに、これを参照して各大学が十分な具体性を有する学習目標を定めて、それを達成するカリキュラムを編成

平成4年「教育課程等特別委員会カリキュラム等検討専門部会報告」

「各学部が4年一貫教育の中で『教養科目』を構想することは、同時に『専門科目』をどう考えるかということと必然的に関連するので、学部教育全体の根本的見直しに繋がらざるを得ない。

従って既存の教科目のうち、夫々の学部教育にとって何が『基本的』な教科目であるかを再吟味することを通じて、教育内容を『精選』し、ルーティンの教科目を整理する必要がある。(中略)この『精選』の作業は、各学部でどのような学生を育成しようとするかという根本問題とも直結している。(中略)学士課程教育の実施に関する答申に則り、学部が「教養・共通科目群から選択必修を決める」という共通教育システム委員会の決定に留意すべき。

各学部がその責任において実施する学士課程教育を支援するものであって、あくまでも共通する教育を横断的に一元化し、整合性、総合性、費用対効果に優れた全人教育の実施に貢献するというもの。

足元はどうか?
外部からの見え方
第2期中期目標・計画にとって重要

Campus Meeting for Education in Kyoto University(CMEKU)

実効性のあるカリキュラムに向けて
現況は?

キャンパス・ミーティング

—京大の教育を語ろう—
意見分布を概観すると、
(詳細版、早見版)

京都大学キャンパス・ミーティング

目 的

京都大学における(教養)教育の意義や内容、今後の姿について、教職員と学生がface to faceで語り合って、教育活動に対する意識の共有と向上を図り、教育の質向上に向けた実効ある改革への弾みとする。(授業者たる教員は知っておく必要がある)

対 象: 学部生、学部を持つ研究科の大学院生(各回10名程度)

回 数: 計11回開催(10学部各1回、工学部のみ2回)

時 間: 各回1時間半程度

※理事、理事補、高等教育研究開発推進機構教員、研究科長等が参加

京都大学キャンパス・ミーティング

＝科目選択の要因＝

(意見のまとめ)

いわゆる楽勝科目、「面白そう」または「将来役に立ちそう」という興味・関心、そして成績評価の方法が、学生が履修科目を選択する際の大きな判断基準になっている。

理系学部ではA群科目、文系学部ではB群科目の単位とするためにAB群科目を履修し、習得が望まれても、苦手、または関心の薄い科目を避けようとする傾向が伺えるように、科目選択にあたって幅広い教養を身に付けようとする意識が希薄であることが多い。

■その他の意見■

- ・少人数であれば必然的に内容が濃くなると考え、受講者が少ない科目を選択した。

京都大学キャンパス・ミーティング

全学共通教育の意義・受講した際の感想等

＝履修して良かった科目・受けてみたい科目＝

(意見のまとめ)

全共科目の印象が薄いという学生が多い。特にいわゆる楽勝科目の内容については記憶に残っておらず、厳しい科目ほど記憶が鮮明で役立ったという感想を持っている。

スキルアップ(or 次を生きるスキル)につながる内容、未修者に配慮された科目の拡充を望む声が多く聞かれた。

■その他の意見■

- ・高校までに学んできた事柄に、どのような意味があったのか、という問いに答えられる科目があればよい。
- ・A群、B群ともに未修者向けの科目を増やして欲しい。

国際通用性の向上

＝英語教育＝

(意見のまとめ)

入学時点では、多くの学生が英語力の必要性を認識しているが、その認識は抽象的で、必ずしも英語を学ぶモチベーションの向上につながっていないため、意欲付けのための仕掛けを望む声がある。なお、英語教育に対しては、概ねコミュニケーション等のスキル向上につながる内容を求める傾向にある。

■その他の意見■

- ・英語を使うしかない環境を作り出すことが必要。
- ・1回生から4回生まで一貫して英語力を磨く仕組みが欲しい。また、大学院進学後も学部生向け科目を履修できると良い。
- ・英語を学ばないという選択肢があってもよい。

ポケットゼミ

(意見のまとめ)

教養教育に対する印象が残っていない学生であっても、ポケットゼミについてはよく記憶しており、評価が高い。受講を希望したが抽選漏れて受けられなかった学生も散見されるため、ポケットゼミの一層の充実が望まれる。

■意見の例■

- ・学生に帰属意識を与え、人間関係を強化する。
- ・入学直後に研究室の雰囲気を感じることができた。
- ・1回生の前期に限らず、履修できるように欲しい。
- ・ポケットゼミによって学生にどのような能力を身に付けさせるのか、等の点について、教員間である程度の方針が共有されるとよい。

成績評価

(意見のまとめ)

全科目の成績が専門のコース分けに影響する学部では、担当教員毎の成績評価結果のばらつきに対して批判的な意見が寄せられた。

また、複数の学部において、答案の返却等、何らかのフィードバックを求める声が聞かれた。

※答案の返却や講評の公開は、成績評価基準の明示と学生の学習効果、双方の面で改善が期待できる。

(意見のまとめ)

授業評価アンケートは、有効活用されている学部もあるが、学生の目に効果が見えないために、記入しても意味が無いと考えている学生も多い。

TA制度

(意見のまとめ)

TA制度は、学部生・大学院生の双方から概ね好意的に捉えられている。(→厳しい予算環境に直面)

■意見の例■

- ・学部生にとっては、教員に尋ねにくいこともTA相手ならば質問し易い。
- ・下級生に教えるために自ら学ぶ良い機会になった。
- ・TAが良い経験になることに異論はないが、集中しすぎて本分である研究に差し支えがなくてはならない。

(意見のまとめ)

学生から幾つかの科目の必修化を望む声があり、学びたいという意欲、または学びの道筋を求めている様子が伺えた。

本学の教育方針

●入学直後からの全学共通教育

先人の学びの発想と展開の脈絡、知と技法を「対話を根幹」に体系的・順次の自律的に学び、交流を通して構想豊かに考える基礎的教養力を源泉に、

教員との対話を根幹に、知の歴史と成果を、本物を使って学び、フィールドワークと理論の統合を重視

●学部専門教育

専門の学芸を深め、学術の最前線に触れつつ専門力と総合力の育成
チャレンジ精神を重視

専門力と総合力を育成、小人数クラス担任制等のバックアップ

●複雑化・グローバル化が加速する現代社会:

- ・多元的な視点で分野を繋げる能力、
- ・専門性をグローバル社会で活用しえる交流力
- ・やり遂げる志、先見性と洞察力、人間力が肝要

良問入試と伸びる・伸ばせる教育の一体的推進

研究型大学京大: 自学自習を重視

○古典的理解

予習・復習で学習力を強化
授業外で学ぶ、授業に出ずに学ぶ

授業を巡る教員等とのdialogや他者との交流により、学生に気づきを与えることが、本来備えている学生の内燃エンジンを駆動・加速する重要な要素

○研究型大学京大での暗黙の了解

学んだことを東ね・発展させる自己研鑽・自己演習ならば(対話型交流力が暗黙に要請)

学際化・先端化する知識先導型社会に耐える基礎的能力

高いレベルの自学自習(発展型自学自習)を、研究力養成、モチベーションの高揚に重視

・自学自習力: 分野を横断的に東ねて課題を解決する総力戦の基盤

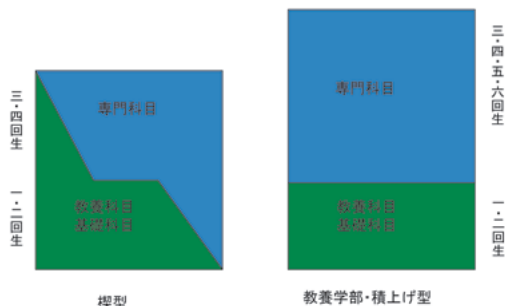
さらに、時代の進展とともに次を生きる力や開発・開拓力にも要請

自学自習とdialogを通して 気づかせる教育→東ねられる対応力のある人材

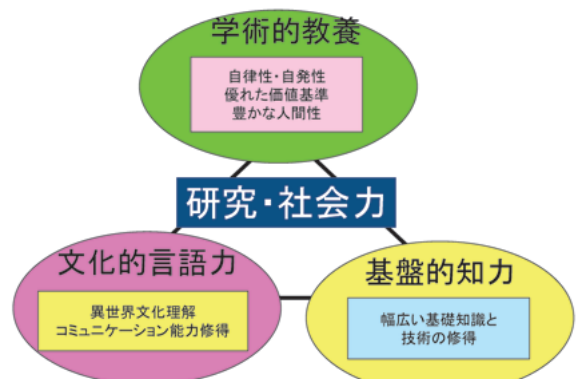


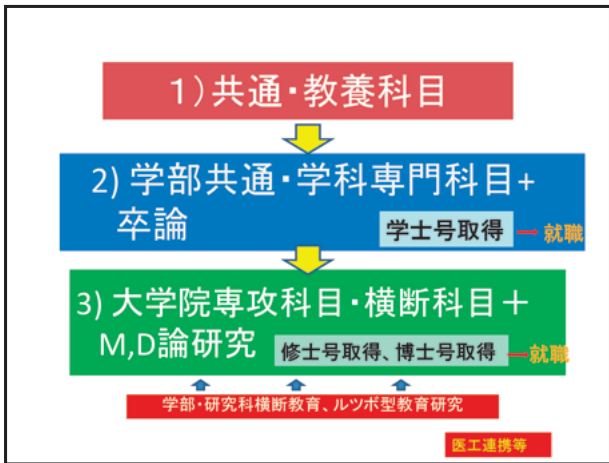
リーディング大学院は研究科横断教育の大規模展開

大学教育課程俯瞰: 楔型方式と教養学部方式



全学共通科目の目的





進路指導教諭が勧める大学ランキング

サンデー毎日 9月11日号(現在発売中)

総合: 国立大学では京大は3位
 教育力: 東大1位, 東北大2位, 京大3位(potential)
 国際化: 東大10位, 京大20位外
 改革力: 東大3位, 東北大7位, 阪大8位, 京大20位外
入学後に生徒を伸ばしてくれる大学:
 東大1位, 東北大2位, 阪大8位, 京大13位
入学後の生徒の満足度:
 東大1位, 東北大3位, 京大6位

全国入試説明会巡業、
 公立高校進路研究会副学長対談(於:東京)でも同様な印象を受けた。(京大入学者の力と入学後の学生の評価)これでのいいの?

・各学部の権限と責任のもとに実施する学士課程教育における共通教育に係る課題の解決カリキュラム、運営、組織及び規程の整備。

・少人数セミナー(通称ポケゼミ)や初年次教育等の現行の教養・共通教育における特色あるプログラムの拡充や、国際舞台での活躍に向けた国際通用力養成プログラム、キャリアパス教育等、近時の社会的要請ならびに高等教育行政の動向等への柔軟な対応が可能であるという視点を忘れてはならない。

・本学の第2期中期計画の達成に有益で、出口からみた前期基礎課程と後期専門課程の整備ならびに学生の進路保証は関心の高い教育情報である。

・加速するグローバル化時代に、指導的な人材を継続的に輩出していくに教養と専門からなる総合力育成の戦略的対応が求められる。

・国際教育の拡充に関しては、各学部・研究科における知識・見識を国際社会で十分に運用できることが必須の条件で、一般外国語教育と学部専門課程を接続するprofession English教育(強い英語力の養成)を実施する等、国際通用力、交渉力の育成を目指す新たな英語パッケージプログラムが必要かつ有効。機構が部局横断的に支援する。

・全学共通教育の整備にあたっては学習者目線を重視、キャンパスミーティング等で得た情報をいかに、少人数ゼミや寺子屋式対話型教育を通じて、研究の最前線を眼前に研究の技法と態度の体得、自律的なキャリア形成の精神を涵養することが肝要。

なお、教養・共通教育等のカリキュラムは入試方法とも関わる

・各学部の権限と責任のもとに実施する学士課程教育における共通教育に係る課題の解決カリキュラム、運営、組織及び規程の整備。

京大広報 Mno.669, 2011.7 洛書

豊島先生(ウイルス研究所)の記事
 大学は高校での学習を前提として講義がされる。日本の高校教育は多くの場合、大学入試を最終目標にプログラムが組まれているので、入試に必要な科目はしっかりと勉強、そうでない科目は授業を受ける機会さえない場合がある。暗記中心は分野を超えてつながっている原理を発見することに負に働く。学生の間に理科全教科と数学を学び、異分野融合を総合力育成の戦略的対応が求められる。

・本学の第2期中期計画の達成に有益で、出口からみた前期基礎課程と後期専門課程の整備ならびに学生の進路保証は関心の高い教育情報である。

・加速するグローバル化時代に、指導的な人材を継続的に輩出していくに教養と専門からなる総合力育成の戦略的対応が求められる。

・国際教育の拡充に関しては、各学部・研究科における知識・見識を国際社会で十分に運用できることが必須の条件で、一般外国語教育と学部専門課程を接続するprofession English教育(強い英語力の養成)を実施する等、国際通用力、交渉力の育成を目指す新たな英語パッケージプログラムが必要かつ有効。機構が部局横断的に支援する。

・全学共通教育の整備にあたっては学習者目線を重視、キャンパスミーティング等で得た情報をいかに、少人数ゼミや寺子屋式対話型教育を通じて、研究の最前線を眼前に研究の技法と態度の体得、自律的なキャリア形成の精神を涵養することが肝要。

高校や駿台さんからの現況報告をベースに、後ほどハネル討論

なお、教養・共通教育等のカリキュラムは入試方法とも関わる

人間健康科学科 学士課程の使命と目的

○医学・医療が高度化・先端化する一方で、疾病を予防し人々の健康を保持増進することや、疾病や障害と共生しながら質の高い生活を支援する健康科学への期待が増大

○複雑化する社会にあって、人間健康科学を新しい学問的分野としての追究が社会から要請

○人間健康科学科の教育目標:
 看護学専攻、検査技術科学専攻、理学療法専攻、作業療法専攻の4専攻を設置し、学問に対する探求心や高度な知識・技術、人間に対する深い洞察力や高い倫理観を兼ね備え、国際的にも活躍できる医療スタッフの育成を目的とする。

具体的には、一般教養としての全学共通科目と、専門基礎科目および専門科目を有機的に関連させ、学問に対する探求心や高度な知識・技術、人間に対する深い洞察力や高い倫理観を兼ね備え、国際的にも活躍できる医療スタッフを育成する。

○根拠:
 学校教育法第52条「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を展開させることを目的とする。」に基づく

教育課程の概要

人間健康科学科の授業科目は、全学共通科目、専門基礎科目、専門科目から成り立っている。全学共通教育は、個々の学問領域を超えた幅広い分野に共通する基礎的な知識および方法を教授するとともに、学生が高度な学術文化に触れることを通じて豊かな人間性を育むための教育を実施することを目的としている。

専門基礎科目は、医学部人間健康科学科全専攻の学生が個々の専門領域を超えて、医療従事者として共通する基礎的な専門知識を教授する。そして専門科目は、各専攻それぞれの専門分野における知識や技術を教授する。人間健康科学科は、入学当初より専門科目の一部履修やアーリー・エクスポージャー(早期臨床体験)、問題解決型授業、全専攻の学生が合同で学ぶ融合型授業を取り入れている。

修業年限は4年で、その間に全学共通科目、専門基礎科目、専門科目を履修する。いずれの専攻も初めの2年間は、主に全学共通科目を履修し、幅広い教養を身に付ける。全学共通科目と並行し、第IVセメスターまでに専門基礎科目を履修する。第IIIセメスターより本格的に、各専攻別に専門科目の履修が始まる。また、学年進行に伴い、病院などにおける臨床、臨地実習を、4学年では卒業研究を行う。

【履修することが望ましい科目】

群	科目名	単位	看護	検査	理学	作業
A群	健康心理学	2	◎	◎		○
	生活と健康	2	◎	◎		
	人間健康科学概論	2	◎	◎	○	○
B群	数学基礎1A	2	○			
	数学基礎1B	2	○			
	数学基礎2A	2	○			
	数学基礎2B	2	○			
	自然物理学A又は物理学基礎論A	2	○			
	自然物理学B又は物理学基礎論B	2	○			
	医療有機物化学	2	◎	◎		
	神経科学概論A	2	◎	◎	◎	◎
	神経科学概論B	2	◎	◎	◎	◎
	健康学概論	2	○			
	物理科学概論	2	◎			
	基礎化学実験	2	○			
	健康科学概論	2	○			
基礎情報処理概論	1					
生活実践情報概論	2			◎	◎	

◎: 選択履修することが強く望まれる科目
 ○: 選択履修することが望まれる科目

アドミッションポリシー、ディプロマポリシーをつなぐカリキュラムポリシーの3点セット: 適正かつ機能し、分野別質保証がなされているか?

学生への契約の履行という観点も含め、次期の認証評価、法人評価における重点評価対象検証し、改善すべき内容と方策を講じることが本学にとって喫緊に重要

○専門課程とうまく接続し魅力的な学士課程プログラムを支える共通・教養カリキュラムと履修システムづくりが喫緊の課題

全学共通システム委員会下の検討小委員会にて問題点の整理と改善策の報告がなされ、システム委員会にて検討中

検討項目:
 (1) 履修科目目録のありかた
 (2) 科目群のありかた
 (3) 開講科目の分類の導入:
 (i) 高等学校での選択制による高校での未修者等を視野に入れた導入的・分野横断的な教養科目
 (ii) 標準的な教養科目
 (iii) 文系学部の専門基礎的な性格を持ち文系学部の共通教育とも考えられる高度教養科目等
 およそ3段階程度のラベリングを行い、各学部並びに履修学生への分かりやすい情報提供を行う今後、複数学部共通教育、研究科横断、初年次教育、就業力に係る教育、教職関係教育、国際教育等の展開

○共通・教養教育体制の全学的検討

京都大学の教育ビジョンと行動目標の策定

従前の教養教育実施にあたっての考え方：
研究者養成大学の理念としてはよい

しかし、

- ・教育実践上重要な履修経歴と到達度という点で、社会3科目、理科2科目程度では、分野の俯瞰は難しく、学生は選択しようともその基盤がない。
- ・従って、教育効果が期待できない。入試で難問をだすのと同様。
- ・現状は人口減少期、入学定員は同一または増加で、学生の質と入学の動機は変化。
- ・研究者になれるのはわずか。その状況下で卒業後を考えると、大学設置基準という就業力の保障はステークホルダーにとっては重要な教育情報であり、来るべき法人評価、認証評価の対象である。

東京大学行動ビジョン(FOREST)

- ・知の公共性と国際性
- ・知の共創ー連環する大学の知と社会の知
- ・真の教養を備えたタフな学生

教育目標: 国際的な広い視野、強靱な開拓者精神、公共的な責任を持って行動するタフな人間の育成

教養教育: 現在進行形の諸問題を歴史的な視野で考え、局所的な現象を普遍的な枠組みでとらえ、相互に関連できる力、現実の諸問題に粘り強く応答し、あるべき解を求める態度の涵養

- ・活力ある卓越した教員
- ・高い能力と専門性を持つ職員
- ・機動力のある経営

研究型大学京大の教育システムへの改善案

順次体系的な総合カリキュラムに基づく
講義・演習・実験コアカリキュラム

発展学習型 自学自習

ソフト・ハード面でのサポート

- ・TRAによる学習相談
- ・オープン
- ・OCWIによる自習
- ・学びの気づき、学びなおしの情報メディア支援システム

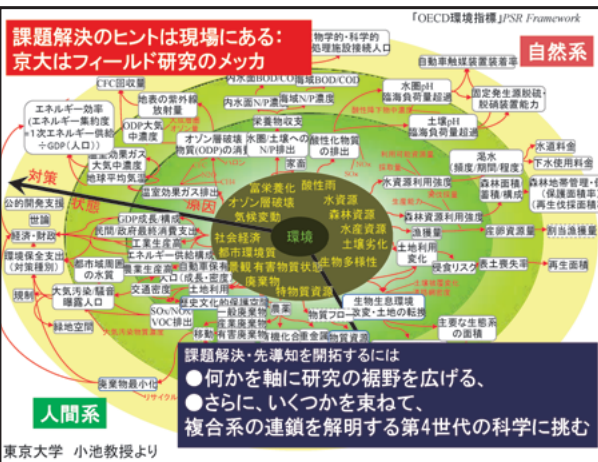
教員との対話や学内外との交流等を通して学力・研究力を高める

人間社会の高度化

第2~4世代の科学 地球規模課題

- エネルギー・材料技術
- 医療技術
- 資源問題
- 食糧問題
- 安心安全システム
- 新社会振興
- 国際問題

知識先導型社会、グローバル課題をリードできる人材育成



分野を横断するデータ・情報の融合と共有

世界で共有できる知

データと情報の見える化・魅せる化



気づきとひらめきを加速する
ビジュアルデータマイニング
双方向型学習支援システムを開発中

受験者へのメッセージ 能力の涵養・修得 キャリア形成

学生目線からは

時代を生き抜く羅針盤づくり
次を生きるスキルの発見・開拓
自分なりの判断軸の形成

大学目線からは

京大を使いまわしたい
受験者を望む

ご静聴に感謝します

7. 報告2:「キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後」

高等教育研究開発推進機構副機構長・教育学研究科教授 鈴木 晶子

ただいまご紹介にあずかりました鈴木晶子です。よろしく
お願いいたします。

今日は、キャンパスミーティングというのを昨年の秋以降
やってきたその結果等も踏まえつつ、今後の大学教育という
ことでどんなことが可能かということをご一緒にご一緒に考える、
そんなきっかけになればと思っております。

キャンパスミーティング実施の背景といいますと、先ほど
淡路先生からお話がございましたが、平成20年12月に、中
央教育審議会の学士課程教育の構築にかかわる答申というの
がございました。このときに学士課程という、学士一貫教育
ということを言われたのでございますが、学士力という言葉
が登場いたしました。これはかなり造語で、非常に落ち着いた

の悪い言葉なのですけれども、出口のところで能力がきっちり
とつきたかどうかが見える化してくださいということ、もちろ
ん産業界の要請もございまして、学士力ということがキーワード
になってきました。これによって大綱化以来、教養教育という
ものがだんだん軽く考えられて、専門教育のほうにシフト
しているのではないかという疑念あるいは批判というものに
対して、新たな方針を打ち出そうとしたと言えます。

それに続いて平成22年7月、去年の夏に出てきた新たな動き
もございました。文科省の高等教育局長から依頼がありま
して、日本学術会議のほうで分野別の質保証ということにつ
いて審議をしてほしいということが出てきて、その答申づく
りに入ったということでございます。私自身も教育学の分
野別質保証で若干かかわってきた経緯もございまして、こ
こで見えてきたことは、実はここでも学士力という言葉が
やはりキーワードになっていたということです。既に日本学
術会議が考える教養教育のあり方については、報告書で出
ておりますのでそちらをお読みいただければと思います。
この学士力を実現するための教養教育と言ったときに、ど
うやらその作業グループに入っていた委員の方たちがミ
ッション系の大学の方を中心にしていたということもあり、
非常にクラシカルなりベラル・エデュケーションに重点を
置くという方針で固まったようです。古典的なグレートブ
ックスを読むといった非常にヨーロッパの古典的な、つま
り知識教育というよりは能力鍛錬型の教育への注目という
ことをよしとする発想です。これが分野別の質保証を考
えるときにも大きく関係してきていたという内側の経緯
がございました。

この中で、大学院教育も視野に入れた教養教育とか、ある
いは教養教育の実際の見える化をどうするかということ
で、カリキュラムの編成の基準というものをスタンダード
化していこうという方向に向かったという経緯がござい
ます。こういった中で、特に各分野ごとには大ざっぱな
分野別質保証のガイドラインというのをつくれと言われて
、各分野ごとにつくられてはいますが、しかし、この大
震災以降、もうちょっと各分野ごとに具体化しなさいと
いう話のところはまだペンディングで、今の化学の分
野だけがかなり具体的なガイドラインを提示してござ
います。こういったスタンダードというものを一体どう
考えるのか。このような形で一元化していいのかとい
った批判も見られるところでご



ざいます。

京都大学の第2期中期計画の中にも、全学共通教育と専門教育、あるいは大学院教育といったものを俯瞰的に可視的にしていくということと、構成委員間の連携ということがうたわれてございます。このように考えていきますと、どうやら私たちも外の動きが変わってきている中で、今の京都大学はどのようなのかというのを、もう少し構成委員会で顔を合わせて、実際に会って車座で語れるような場があってもいいのではないかとという素朴な思いでキャンパスミーティングというのを企画させていただきました。これはまず学生のニーズを把握するというということと、あるいは大学教育がどこに向かおうとしているのか、あるいは教員たちは一体何を狙っているのか、そういうものを学生に知らせると同時に、また学生の期待を酌み取る場にしたらという願いがこもっておりました。それと、いつも言われることですが、京都大学の自学自習を可能にするには、今風にこれを翻訳いたしますと学生の学習設計力と申しましょうか、大学でのみずからの学びをどうデザインしていくか、この力を養っていく必要があるのではないかと。大学教育のあり方について、実際にそれを今受けている学生たちに聞くということは日本では余りなされてきておりませんし、このキャンパスミーティングの企画についてほかの大学の方たちにお話しすると、それはやっぱり京都大学の学生だから、自分が受けている教育について未来を展望していろいろ物が言えるのではないかと、このあたりがもう既に京大的なのではないと言われてしまいました。やはり学生の意見を聞いていきますと、もちろん全員の学生に聞いたわけではございませんし、限られた期間の中で、そこで出会った学生と話すという形でごく一部ではありますが、しかし顔を合わせて意見を聞かないよりはまずは聞いたほうがいいだろうというところで、ゼロからの出発で始めたキャンパスミーティングでございました。

実際には昨年11月15日、第1回、教育学部を皮切りに全10学部で実施しまして、工学部は2回実施しております。参加学生は、時間が非常に迫って短い期間でまずは集中的にということで、各学部の先生方に依頼して募集ということで、実施に当たりましては各学部の学部長の先生、あるいは教務関係の委員の先生方もお出ましくございまして、大変熱心にご協力いただきました。ありがとうございます。このキャンパスミーティングの成果につきましては、教育制度委員会のワーキンググループの鈴木委員長を中心に取りまとめをさせていただきまして、簡単な報告書ではございますが、先生方にもお配りさせていただいているかと存じます。この報告書とテープ起こした詳細版を見ればその場で起きたことはわかりますが、それは恐らくその場に出ておられた先生方それぞれの目線でいろいろな解釈が可能だろうと思われまます。それはいろいろな機会にお役立てさせていただいて、なおかつ、そういった形での教育を語ろうという場を広げていくということで、今後、学部等で、また学部教育であろうが、いろんな形で今後の大学教育について学生と語り合うような動きが出てくればいいなという期待を込めて企画した次第でございます。

本日は、私が見た中で大学教育の今後ということで、このあたりは皆様と共有してお考えいただきたいという点をピックアップしてみました。実際にはいろいろな観点で、なるべくバランスよく、いろいろな観点を含んで聞いてきたわけですが、このキャンパスミーティングから見えてきた事柄は二つございます。その一つ目です。学生にとっては単位を取得するというということと大学で学ぶということが乖離してしまっているという印象を私は受けました。本当に別な事柄になっている。例えば学生の時間割の組み方でございますが、これは高校時代と違って自分で自由に組めるという意味で、いよいよ大学生になったのだなという思いも入るところでございますが、実際には25コマすべてをとりあえず埋めておいて、そして、そこで相性のいい科目、これだったら比較的いい成績でクリアできる科

目といったものを残し、それ以外は辞退するという形で減らして削っていく。そういう取捨選択のテクニカルなことについてはフリーペーパーであったり、学部のサークルであったり、そういうところの情報で皆さん非常にテクニカルに組んでいる。あるいはクラス指定がある場合にはかなりの時間割がそれで固まってしまうので、その空いたところで、いかに省エネで、なおかつきっちり単位を取れるかというそのテクニカルなゲームになっているというのは、聞いてはおりましたが、実際に学生さんたちの様子を聞くと、そこまでしないとこなすことができないのだというような声も聞こえてまいりました。そしてもう一方で、自分の専門に早く触れたい。東大であれば理1、理2、理3とか、どの専門にも行けるような大ざっぱな括りで入りますが、京大の場合は何々学部の何々学を勉強したいという思いで入ってきた方たちが、何で専門の勉強に早く触れることができないのだという、もどかしさを持っているという姿も見えてまいりました。恐らくこういった中で、二つ目のほうはもうちょっと教員とのかかわりのところでも問題になるのですが、もう一つ見えてきた事柄としましては、やはり定食メニューではなく、セットメニューではなくて、自分で自由に選択したいという、この思いは非常に強くございました。他方で、かといって自分たちを放し飼いにしてしまうのではなくて、徹底的なトレーニングをしてもらうような、そんな場もあつたらいいのにと、こちらから見ると、どこに指導あるいはマネジメントの教職員側のサポートを必要としているかというのが、先ほど総長からは温度差ということがございましたが、なかなか教育を受ける側と教育をマネージしたり教えたりしている側の温度差というのが見えてまいりました。

では、このキャンパスミーティングをきっかけに私どもがどう考えて、何を考えていったらいいかということと言いますと、3点ほど私なりに挙げさせていただきました。まず学士号取得までの学習をデザインしていくという、これは恐らく自学自習だと思いますが、そこをどう学生さんに身につけていってもらったらいいのかという課題。それから専門教育段階に入ってから学生が学ぶ必要を感じたときに、例えば1回生、2回生のときに学んだ科目は何だったか覚えていない、科目名も覚えていないという学生さんが非常に多かったのですけれども、しかし専門に少し進んだときに、自分の専門は文系だったけれど、もうちょっと理科系のこの辺を学んでおきたかったということで、自分で単位と関係なく履修するというニーズを持っている学生さんも非常に多いということがわかってまいりました。これをどういう形でうまく提供できるシステムをつくるか。そして徹底的なトレーニングを必要とするような教育を教養あるいは共通教育で行うことはできないものだろうか。この3点あたりを私は個人的にしみじみ感じておった次第です。

では、ほかの国の大学はどうなのかということで、少し事例を挙げながら一緒に考えたいと思いますが、まずヨーロッパでもドイツの例を挙げさせていただきました。ドイツはギムナジウム、大学入学前の段階で相当成熟した成人というものを育てるのだという意識が、高校の段階の教育、中等教育の最後のところの目標として、学術をすぐ、専門をすぐ学ぶことができるほどに、人格的にも能力的にも成熟した成人であるということを目標にしているのです、やはり教養教育というのは大学では一切行わないという形になっております。ですから、入学する学生は大学に入ってからすぐ専門、しかも1主専攻に対して二つの副専攻の科目を取らなければいけないということになっています。このドイツの場合でも、しかし実際に授業の運営というところを見ていきますと、どうやら概論や入門など、大人数の授業にはベテラン教師が当たっているということが非常に日本とは違う部分だと思います。日本は概論という非常に若い方にお任せしたりすることが多いのですが、かなりベテランの方にお任せするようになっている。

ドイツの授業のカリキュラム編成原理を、大ざっぱではございますが、挙げさせていただきました。まず、1 回生から大学院生、あるいは論敵になっているような教員まで他大学からやって来て、その分野についての基本的なことと同時に、研究の最先端を入れた *Vorlesung* という講義概論に当たるような授業というのは基本的に主任教授というか、一番ベテランの教授が担当する。この担当をすることができる教授になるというのがアカデミック・デグリーの最高位に当たるわけで、それはそういうことができる資格を持った人にやってもらうということで、単位を特にに換算しないで、そこが一つの基本であると同時に、最先端の研究にも触れる場になっている。つまり活字になる直前の原稿を読み上げるといって、一切録音も禁止して、そこでいろいろなことをノートにとって、本になって出る前にその先生の研究の最先端を知る場にもなっているということで、新入生にとっては何が何だかわからないけれども、何でその先生と論争中のほかの大学の先生も来ているのだ、あるいは大学院の学生が来ているのだという、そういう場一気に入れ込むという形の講義の *Vorlesung* を非常に重視しております。その後いわゆる入門ゼミに入りますが、2 回生以上が関係するプロゼミナールは、今度はポストドクや助教といった非常にお若い方が自分のまとめた学位論文の研究の途中の苦労も含めて、その分野への導入ということをやっている。これは非常勤で若い先生に母校で、あるいはほかの大学で教える機会を提供するという形の入門ゼミを逆に導入していて、本ゼミはやはり教授、准教授が担当していくという感じで、また博士論文のコロキウム、これは学位論文を書くための最後の論文指導の場になるわけですが、ここは博士論文を実際に書いているという方だけではなく、これからいつか書きたいと思っている下級生も出ることができるという形で、大学によっていろいろ今、ボローニャ・プロセスによってヨーロッパ統一型のカリキュラムが導入されておりますので、ドイツ型のこのカリキュラム原理は少しずつ変わってきてはおりますが、しかし最も基礎的なことが最も難しいという、ある意味日本的な発想で言いますと、非常に収斂的な要素を最後の砦として入れ込んだ教育にしているという点がおもしろいなと思います。それと、やはり単位と関係のない領域というのをつくるということ、たわみと申しましょうか、そういう形での収斂型というのをどこかで維持する工夫をしている様子が見えてまいります。

では、ほかにアメリカの場合はどうか。先ほど来もう既にアメリカの状況等は総長や淡路先生からお話がありましたけれども、やはりリベラル・エデュケーション、古典的な教養教育とジェネラルなエデュケーション、いわゆる一般教育や共通教育にかかわるもの。一般に基礎教育といいますが二つの流れが歴史的にもあるかと思いますが、このリベラル・エデュケーションの部分というのをどう確保するかというのがアメリカの大学にとっても今一番難しいところになってきているようです。特に古典的なグレートブックスを読解するというので、例えばセント・ジョンズ・カレッジのリベラル・エデュケーションというのは非常に定評がありますが、それは日本で言えば ICU であるように教養学士的なものを出すということで、いわゆる学部専門教育ということを前提にしないで 4 年間きっちり教養をやるというシステムの中で生まれているものですので、大体 50 分のテキストブックを読むという時間を週 2 回、それと学生が中心になって議論する時間を 3 時間、これを 1 週間のサイクルで授業を行うという形で単位を出していくことをしています。そのためにかかる教育のエネルギーたるや大変なもので、教員は教育専門であることが大事だということが前提になっておりますし、学部の専門教育をやりながら古典的なリベラル・エデュケーションをやっていくというのは非常に難しいということがございます。ですから、セント・ジョンズ・カレッジでうまくいっていたからといって、ほかの大学でそれを取り入れようということ、ここ 50 年ほどアメリカの大学は非常に工夫

してきました。しかし、いずれもうまくいかないで、1~2年で終わっている。非常に熱心な方たちが教養教育を担当しようとしてやるのですけれど、やはり学部の専門教育を持っているという関係上、理想ではあるが実現できないという結果になっております。そういう中から、能力を訓練というところでは難しいので、分野別にバランスよく基礎知識を習得させようということで、ほとんどの総合大学では、専門教育の前段階としての知識に重点を置いた分野別のジェネラル・エデュケーションを行わざるを得ないという状況になっているようです。

少し古いのですけれども、この学部教育の再編ということでカーネギー教育振興財団のボイヤー委員会というのが、アメリカの研究大学の青写真ということで報告書を出しております、今でもアメリカの大学の先生たちは、これはなかなか画期的な提言であったというふうに評価しているものでございます。

若干かいつまんでご紹介させていただきますが、授業では研究中心の学習を基準としなさい。第1学年を探求中心型に構成して、こちらベテランの経験豊かな大学教員によってフレッシュマンのセミナーを必修にする。あるいは学生のほうに大量のレポート提出を求める。あるいは、ここあたりは大学と高校の高大連携、今日午後もお話がございますけれども、高大連携のあり方ということについても当時アメリカではかなり問題になっていたようで、補修教育というものは入学前に大学側の責任で高校と連携しながら修了させるということ、そして高校で既に大学の科目、大学に関連した分野をイメージできるような大学科目というのを履修する時間を大学の教員と協力してやっておりますので、その時間を利用して補修教育をしたらどうかという提言です。それから第1学年の基礎の上に積み重ねる。この基礎の上に積み重ねるといことは、基礎が終わったら応用に行けばいいのかというのではなくて、基礎というのは何度でも帰ってくるべき場所。ファンダメンタルというのは一見簡単そうに見えるけれども、その簡単な事柄の奥がいかにか深いかということを知っていくという意味で、最も最初にあって、そして最後の仕上げにも必要なものという発想が奥にあるようです。メンターシップであったり、あるいは学際的な教育を推進しなさいということも書いてございました。5番目としまして、コミュニケーション・スキルということと言いますと、成績評価に関して日本ではほとんどレポートが多いのですけれども、口答試験ですね。知識を口頭で披露するだけではなくて、それを自分の言葉でもう一回言えるようになるかという口述の試験をもっと導入すべきではないか。あるいは情報技術の問題。そして4年次セミナーを学部教育の仕上げとして位置づけてほしいというカーネギー財団らしい、産業界のことも意識しています。仕上げの教養教育と申しましょうか、人として社会に出ていく、その最後のところを専門的な知見を備えた上でもう一回、人たるゆえんに返っていくという循環型の教養教育ということが提示されておりました。あるいは大学院生の就職前の教員経験として大学院生を教育していく。その意味で、教育業績が次の就職を見つけるときのプラスポイントとしてカウントされていくシステムづくりをするということでございます。それと大学教育の報酬体系を変えるということが言われてございました。教育活動を教員の評価システムの中に組み込んだようにしないと難しい。

この前後に調査がございましたときに、研究大学といったときに、教育専門、研究専門、教員の割合というのを日米で比較した調査が行われましたが、アメリカは大体、研究よりも教育を中心に教員構成がなされている。日本は本当に皆さん研究中心で、教育というのに余り意識を持っていない先生方が多いという結果が出てきているのですが、それでも当時のアメリカでは、教育活動というものを業績に含めた評価システムということが言われております。それと大学教員の学内の委員会活動への

参加負担を軽減する。そうすることによって、むしろ教育のところにシフトしたエネルギーを担保してもらおうという、そんなことも書いてございました。あとはアカデミック・コミュニティの構築であったり、多様な人々の交流体験、そして大学の寮生活、共同研究活動という形で、実質的にフェイス・トゥ・フェイスで議論を戦わせるようなコミュニケーションの活性化によって、ある種キャンパス内をさまざまな方向に向かって、いろいろな課題について、一種電気が帯電しているような状況をつくっていく、それにはどうしたらいいかということが大きな課題であるというふうに挙げてございました。

私自身この経緯をずっと、先ほど来の中教審から、学力、学士力、能力というところにシフトせざるを得ない状況というのは、これからは領域とか知識中心ではなくて、ある程度能力ということを念頭に置いてカリキュラム設計をしていく。その意味では古典的なグレートブックスを読んでいくとか、あるいはそのグレートブックスの内容は時代とともに現代化したものになっていくかもしれませんが、恐らく就職していく学生であろうが、研究職に就く学生であろうか、同じ本を目の前にして、その本の書かれていることに対してどう深く読み、しかも自分の意見を言えるか、論述、口述の能力というあたりの学士力というのを各分野で、しかも大学としてどう考えていくかということがこれからの認証評価で問われてくるところではないかと思えます。

恐らく、今、日本の大学一般でも不足していると思われるのが、教育を教える、あるいは研究するというところのテクノロジーと申しましょうか、技や技術の部分では、個々の先生方は十分ご研究なさり、ご自分の学生を育てることに熱心であられる。これは非常にテクノロジーのところではきっちりいっているのだらうと思えます。それを学生の学習設計方を磨くところにどうつなげていくかといったときに、大学側のいわゆる教職員のサポート体制が必要になるわけですが、そのときにレギュレーションというふうにグリーンのところでは挙げました調整の部分というのが、アメリカから見ると日本社会は非常に弱いと言われておりますが、テクノロジーのところはしっかりしているけれども、しかし、そのテクノロジーをいかに用いていき、しかも、だれに対して、どのタイミングで、どう責任をとっていくか、あるいは責任をとるときの言葉の作りようはどうするのか、だれに向かってしゃべるのか、次の展望ということをどうやって伝えていくかという、このあたりのレギュレーション、これはマネジメントよりもっと深い広い意味があるかと思えます。まさにレギュレーションは呼吸ですので、生きた学問共同体としての大学をつくっていく。活性化した組織とか有機体としての組織というものをつくっていくための組織が呼吸するためのリズムを支えていくという意味で、単なる統制でもなく、単なる運営でもなく、ともに呼吸していくようなフェイス・トゥ・フェイスの組織の活性化というところで、このあたりは恐らく委員会活動だけで十分なのかということも私どもは考えていく必要があるかと思われれます。

それを支えている、原動力に持っていくのが評価、エバリュエーションでございます。このエバリュエーションですが、日本ではエバリュエーションといいますと、いわゆるミシュランの星いくつの世界の評価と混同してしまう傾向がございます。ただし、例えばアメリカの医学教育もそうですけれども、教師教育もそうですが、ある種の免許状を必要として、専門職として社会に必要とされる資質があるかどうかを保証するということは、恐らく賞味期限が切れた食品を市場に出してはいけないというところのぎりぎりのチェックと同じで、賞味期限が切れた専門家を社会に輩出することは、それは社会に対して不利益を生じさせることであるということで、専門家集団内で、専門家としての資質があるかどうかの厳しいチェックを行う。特に医学教育の現場などでは、医師というものの資質があ

るかどうか、資質がちょっと足りないという場合にはその人を徹底的にもう一回、資質向上のために専門家集団が責任を持ってそれを養成していくという、いわゆる評価の一番下の、日本で言えば質保証の部分の評価だろうと思います。それに対してミシュランの星いくつというほうの評価活動は、ある意味パブリック・リレーションであって、見える化すると言ったときに、私たちはこんな眼差しでこんな教育をやっていますということで、対外的に皆さんが安心して、例えば京都大学に行けばどうい教育が待っているかということをお安心と信頼をもって理解していただくためのパブリック・リレーションとしての評価活動は積み上げてあって、PDCA でいいかもしれませんが、質保証としてのエバリュエーションというところで、これは外部の人間が入ってきてもわからない。これは専門家集団相互にきっちり検証していかなければいけない部分という、評価にも恐らく2種類あるのではないかと思います。この二つの評価をどうやってうまく使い分けつつ、評価というものが組織の元気をなくしてしまうのではなくて、元気をむしろ生み出していくような評価活動というふうになってギアが入っていくと、テクノロジー、レギュレーション、エバリュエーションの三つが機能してくるのではないかと思います。恐らくこのレギュレーションのところでもまだまだ京都大学はやるべきことが多くあるのではないかと私は個人的に思っております。

私からは以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

司会 鈴木先生、どうもありがとうございました。教育をご専門とされる鈴木先生から、より教育の現場に近いご報告をいただいたと思います。そういう意味で、次の高見先生のお話とも関連がございますので、そのまま連続で高見先生にご報告をお願いしたいと思います。

司会 高見茂理事補より、「初年次教育について」というご報告をお願いいたします。高見先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

全学教育シンポジウム 2011年9月2日

キャンパス・ミーティングからみえた

大学教育の今後

高等教育研究開発推進機構・教育学研究科
鈴木 晶子

キャンパス・ミーティング実施の背景

平成20年12月 中央教育審議会
「学士課程教育の構築」に関わる答申

学士力、4年一貫教育のなかの教養教育
産業の発展を担う人材の養成
国際的通用性をもった大学教育

学士の資質・能力という観点から、大学教育を
「見える化」していく必要（出口、入口、中身）

キャンパス・ミーティング実施の背景

平成22年7月 日本学術会議
文科省高等教育局長からの依頼による
「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議につ
いて」

分野別質保証の具体策

- ・教育課程編成上の参照基準の検討
- ・大学院教育も視野に入れた教養教育
- ・教養教育の在り方に関する方針の明確化と
構成員間への周知の必要

キャンパス・ミーティング実施の背景

京都大学第2期中期計画

1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1-(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための措置

「全学共通教育と学部専門教育並びに大学院教育との
連関を俯瞰的・可視的に把握しやすくし、学生の学
習課程の理解や学習指針作りに役立てるとともに、
全学共通教育と学部専門教育との連携、学士課程
教育と大学院課程教育との連携、学部・研究科等と
附置研究所・研究センター等との情報共有を強化する」

キャンパス・ミーティングCM実施の趣旨

アンケート調査のほかに学生と教職員が直接顔を合わ
せ教育について意見交換する場を設ける

- ①学生のニーズを把握する
- ②大学教育がどこに向かおうとしているかを学生に知ら
せ、また学生の期待を汲みとる
- ③自学自習を可能にするためには、学生の学習設計力
を促進する必要がある。大学教育の在り方につい
て、学生自身が教職員と意見交換することでそうし
た姿勢を身につけていくきっかけとなり得る

キャンパス・ミーティングの実施

平成22年11月15日第1回教育学部を皮きりに、全10
学部で実施（うち、工学部は12月1日と翌年1月12
日の2回実施）

- ・参加学生は各学部の教員に依頼し募集
- ・実施にあたって学部長、教務関係委員に依頼
- ・教育制度委員会WG2・幹事委員長を中心に取りま
とめ - 報告書を作成、配布

質問や意見交換の主要点

- 1) 受講科目をどのようにして決定しているか
(カリキュラム・時間割の設計に関わる内容)
その際に、誰かにアドバイスを求めているか
何を基準に選択しているか
選択に際して、どんなサポートを必要としているか
予め系統だった科目群があったほうが選び易いか 等等
シラバスの分かり易さ
- 2) 授業の形式(授業の開講形式に関わる内容)
大人数の授業、少人数の授業
ゼミ・演習、実験、講義
集中型の開講形式について 等等

- 3) 専門科目の勉強と教養科目の勉強との兼ね合い
専門基礎教育、一般教育、教養教育それぞれへの期待
理系学生にとっての文系科目、文系学生にとっての理系科
目への希望
1,2回生で学んで良かった科目、学べば良かった科目、学ば
なかったが無かった科目
- 4) 大学の授業に求めるもの
外国語履修
読み書きなどの基礎力、コミュニケーション力、表現力
批判的判断力、道徳や倫理、社会との関わり 等等
- 5) 大学院教育にとっての教養
- 6) その他、成績評価、TA制度、授業評価アンケートなど

CMから見えてきた事柄

- ①単位取得と大学での学びの乖離
 - ・学生の時間割 — 25コマすべてを埋め、2年間でほとんどの単位を取得
 - いかに効率よく省エネでこなすことができるか
 - ・自分の専門に早く触れたい
 - 本当に学びたいことは専門の教育を学んでから分かるので、それから単位と関係なく履修

CMから見えてきた事柄

- ②自由選択へのこだわりと徹底指導への期待
 - ・科目は自由に選択し、自分の好きな科目を勉強したい — セットメニューには批判的
 - ・国際的なコミュニケーション能力、論理構成能力、文献解読能力など徹底的にトレーニングする場がほしい

CMから見えてきた課題

- ①学士号取得までの自らの学習を設計していく力を学生自身にどのように身につけさせたらよいか
- ②専門教育段階に入ってから学生が学ぶ必要を感じたときに対応できるような教養・共通教育を可能にするにはどうしたらよいか
- ③徹底的なトレーニングを必要とするような教育を教養・共通教育で行うことは可能か

諸外国の試み

ドイツの場合

- ①高校段階でLiberal Educationは終わっているという理解 — 入学する学生には専門から学ばせる
- ②1主専攻、2副専攻
- ③科目構成の工夫
 - 概論や入門など大人数の授業はベテランが担当

ドイツのカリキュラム編成原理

Vorlesung 講義・概論・教員による先端研究成果発表	<ul style="list-style-type: none">・担当するのは主任教授・参加は1回生から大学院生、教員まで自由
Proseminar 入門ゼミ	<ul style="list-style-type: none">・担当はポスドクや助教、自分の研究主題からゼミ内容を展開、研究方法も体験的に伝授
Hauptseminar 本ゼミ	<ul style="list-style-type: none">・担当は教授、准教授・本格的な演習
Doktorandenseminar 博士論文コロキウム	

諸外国の試み

アメリカの場合

- Liberal Education 古典的な教養教育
古典的なGreat Booksの読解と討論が中心
能力の訓練
セント・ジョンズ・カレッジなど
- General Education 一般教育、共通教育
分野別にバランス良く基礎知識を習得させる
学部専門教育を重視するほとんどの総合大学で実施

カーネギー教育振興財団ボイヤー委員会 『学部教育の再編 — アメリカの研究大学の青写真』(1998)

- ①授業では研究中心の学習を標準とする
- ②第1学年を探求中心型に構成
 - ・経験豊かな大学教員によるフレッシュマン・セミナーを必修にする
 - ・学生に大量のレポート提出を求める
 - ・補修教育は入学前に終了させる。高校での大学科目履修で空いた時間を有効利用する

- ③第1学年の基礎の上に積み重ねる
 - ・探求中心型学習、助言指導(メンターシップ)を高学年でも継続
- ④学際的教育の推進 — 低学年科目に導入
- ⑤コミュニケーション・スキルと授業科目を関連づける
 - ・授業内容の習得と伝達能力の双方の観点からの成績評価 — 口述、論述の導入
- ⑥情報技術を創造的に活用

⑦最終学年の経験を頂点とする

- ・4年次セミナーを学部教育の仕上げとして位置付ける

⑧見習い教員として大学院生を教育する

- ・大学院生の就職前の見習い教員経験として業績にカウントする仕組み
- ・教育助手TAの報酬など組織的支援を改善する

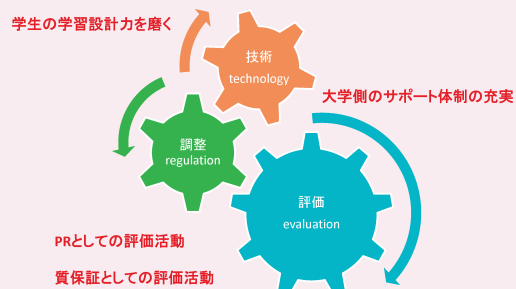
⑨大学教育の報酬体系を変える

- ・教育活動を含めた評価システムを構築
- ・大学教員の学内の委員会活動への参加負担を軽減する

⑩共同体意識を形成する

- ・アカデミック・コミュニティの構築
- ・キャンパスにおける多様な人々の交流経験を重視
- ・大学寮生活や共同研究活動を活用

いま大学教育に求められること



8. 報告3：「初年度教育について」

理事補・教育学研究科教授 高見 茂

高見でございます。よろしくお願いいたします。

今、鈴木先生の流れるようなしゃべり口調で、高邁な話がありました。私の話はかなり泥臭いというのが今政治の世界では流行っておりますが、結構それに近い話になろうかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

本日の私の話は、初年次教育というものがどういう必要性から出てきたものなのか、それから初年度教育というものの中身はどういう内容になっているか、それは極めて多様であるということですが、それらに加えて、昨年から我が大学におきましても、初年次教育を、昨年は試行、今年から昨年の結果を踏まえて少し工夫をしていくということで、前進的に少しずつ内容の充実を図っているということをご説明し、そういうものを含めて、最後にまとめというところに持っていきたいと思っております。

初年次教育というのは、これは一体どういうものなのかと申しますと、米国におきましてはファーストイヤー・エクスペリアンスとか、あるいはファーストイヤー・プログラムというふうに言われております。日本では初年次教育という言葉が一般的に使われておりますけれども、導入教育だとか、1年次教育と呼ばれることもございます。私の記憶では、大体10年、15年ぐらい前からこの問題が意識されまして、その意義が認められて、全国的にいろいろな大学でこれが導入されるということになっております。日本では国立教育政策研究所とか、あるいは同志社大学等々が、この問題について非常に熱心に調査研究をしておられると伺っております。

初年次教育の趣旨というものでございますけれども、これは先生方もご承知だと思いますが、高等学校から大学への移行問題、これはトランジションということですが、大学入学後の新しい環境に円滑に移行し、適応を図るといって、どの大学入学者も必ず直面する課題への対応を大学が組織的に支援することにあると言われております。移行問題では、新しい環境での学生のライフスタイルの調整とか、あるいは大学での学習目標とか動機づけの獲得、あるいは移行後に必要なさまざまな能力の獲得などが含まれているわけでありまして、移行問題に関しましては、普遍的にこれはどの大学でも存在しており、従来、米国におきましても、日本におきましても、それは学生が自発的に移行問題で発生する事柄については自分で解決し、自分でそれについてきちっと対応し、知らないうちに大学生活に溶け込んでいるという状況があると思われていたのであります。

それがなぜ課題になってきたのかということではありますが、こちらのほうの画面にございますが、やっぱり大学が学生に選ばれる時代になってきたことに起因するものであります。米国の事情を中心にお話を申し上げますが、米国ではトップ大学でも、入学率、いわゆる合格者を出したうちで何人が入学してくれるかということにつきましては、トップ大学でも大体70%台だと言われております。結局のところ、大学間の競争が非常に激しくなってきていると言われておりますが、日本におきまして



は、京都大学が合格者の内の入学者が 70%というようなことにはまだなっていないわけでありまして、私立大学ではかなり厳しい数字も出てきているという状況がございます。大学間の競争が激しくなっているということにつきましては、東大もわが京大も同じ傾向がございます、昔だったら入試説明会にどんどん出ていかれるということはなかったわけでありまして、担当副学長の淡路先生は大変多忙な日々を送っておられます。

大学が選べる時代になったということなのですが、選ばれる大学の必要条件は何か。結局のところ、大学教育のアウトカムの質がどうなのかということになるわけです。このアウトカムを支えている要素としては、卒業率をどう向上させているか、それから卒業生の質の向上をどのように図っているか。特に米国ではこの二つが重視されていると言われております。卒業率の向上というのは、規定年数でちゃんと留年しないで卒業しているか、学業の達成を規定年数でできているかということが問題なのです。それから卒業生の質の向上は、その大学を出た卒業生の学力、いろんな専門的な知識がきちっと身につけていて、企業へ入った時に戦力になっているかどうか、ここら辺のところ問われる問題だろうと思います。

この二つの要素は並行して存在するように見えるのですが、ある意味では両者はジレンマの関係といえますか、非常に複雑な関係にあると言われております。卒業率の向上を図ろうと思って非常に低いスタンダードを掲げますと優秀な学生が集まってこない。そうすると結果的に卒業生の質の向上ということをなかなか図りたいという状況になる。さらにまた、良い学生を集めようと思って高いスタンダードを設定いたしますと、ついていけない学生が出てきて卒業率が下がってくる。このジレンマに落ち込んでしまうという状況があるやに聞き及んでおります。結局そういうアウトカムというものをどのように向上させるかということが極めて重要な課題となっております、有効な施策として、やっぱり初年次教育の部分で、きちとした対応をこの段階でやっておくということが極めて重要であるということが分ってきたと言われております。

これは米国の話でございますけれども、初年次の成功は 4 年間の成功につながっている、大体、初年次にうまいこといった子は 4 年間順調に大学での学習をきちっと進めている、さらに、卒業しても上手く行っているし、就職後もそれなりの成果を上げているという調査結果があると言われております。

私の指導経験に照らしてみましても、初年次での挫折というのは、その後の様々な問題の原因になることが多く、非常に厳しい状況が起こってくる可能性が認められます。不登校といった問題がその典型例であります、大学での挫折は初年次に多発していると言われておりますことから、ここできちとした対応をすることが必要と考えられます。それから、学生というのは 4 年間に学ぶ内容の 3 分の 1 以上を初年次に学んでいるということだから、ここの部分の教育というのをどのようにシステム化していくかというのが極めて重要であると言われております。

それでは、わが国の場合にちょっと焦点化してお話をしてみたいと思いますが、学生の多様化ということにつきましては、昨日、最新のデータを調べてみましたが、平成 22 年度の場合、大学・短大の進学率が 57.8%にまで行っており、半分以上が大学・短大に進学するという状況が見られるわけがあります。そうなりますと、意欲とか動機も非常に多様化して参りますし、それぞれの学生のライフスタイルというものも極めて違ったものになって参ります。それから自力で学習する力も、学力のある者からそうでないかなり厳しい状況にある者まで非常に幅が広がっていつているという状況がございます。結果的に学生の多様化ということにつながって参りますし、あらゆる学生層へのガイドン

スと早期支援が必要になってくることとなります。大学生にふさわしいライフスタイルを大学生が自然に身につけることが極めて厳しくなっている。これだけ進学率が高まってくると、先ほど申しましたように学生が多様化するということと同時に、かつては大学進学者というのを見た場合に、親も高等教育をちゃんと受けたというご経験をお持ちの方が多かったと思うのですが、必ずしも親が大学教育を受けていない家庭の子どもも大学へどんどん進学するようになってきますと、大学のライフスタイル、大学で身につけなくてはならないことについて家庭内で準備をすることが極めて厳しくなっているという状況があるのではないかと考えることができます。

日本における初年次教育の歩みというのがどういう経緯の中で出てきたのかということ、私もこれを専門にやっているものではありませんので余りよく知らなかったのですが、関連の文献をちょっと調べてみますと、この10年ほど前は初年次教育といったら補習教育だという考え方が主流で、高等学校での学習が不十分な子に大学へ来てから補習教育をするものとして最初出発したようであります。ですから、単位を与えるような教育ではないという声もあったのは事実でございます。ところが、2007年ごろになりますと97%の大学が何らかの初年次教育を導入するというようになっておまして、結局、高等教育への重要な移行期の支援教育というものをきっちりと充実させなくてはならないという意識が広がってきたわけございまして、この段階になりますと、補習教育、リメディアル・エデュケーションというのは別の体系になっていったと言われております。

現在におきましては、さまざまな専門性を持った研究者が、やっぱり教育というのは非常に重要であるという意識のもとに、さまざまな分野から初年次教育の研究に参入されまして、初年次教育というのはプログラムとしての位置づけを獲得しているという状況でございます。こういう非常に普及していったというのは、教育系センターがいろいろと整備されていって、そこが中心となってこういう初年次教育をバックアップをされる体制が整ってきたというふうに評価していらっしゃる研究者もいらっしゃいます。

初年次教育というのは非常に多様だと申し上げたのでありますけれども、では大きく分けてどういうタイプがあるのかということで、いろいろともの本を調べてみますと、大体四つぐらいのタイプがあるのではないかとされております。

オナーズ型というタイプであります。これは特にやる気のある、優れた学生を選抜して、動機づけとか学習スキルのさらなる向上を促すために行われる教育活動でございまして、初年次全体の向上ということもありますけれども、やっぱり優れた学生の支援を意図しているというところに特徴があると言われております。

それから二つ目、右側のほうにありますところのスタディスキルアップ型というものがございまして、これは初年次の学生の幅広い学生を対象といたしまして、大学での学習研究活動の停滞を防止するために行われる教育活動でありまして、具体的にはノートのとおり方とか、レポートのまとめ方とか、あるいは発表の仕方とか、ディスカッションのルールとか、大学での学習活動の基礎となるようなスタディスキルの定着を目指しているものであります。

それから、アイデンティティ形成型というのは、初年次生同士とか、あるいは初年次生と教員・先輩との間で密な交流活動を通して、大学における自分自身の役割だとか将来の目的を発見させることを狙いとした教育活動でありまして、この活動というのは後に多くの学生が直面いたしますところの進路選択の問題、就職とか進学とかいろんなものがあるわけでありまして、そういう活動と密接な関連がございまして、キャリア教育としてこういう分野が扱われることがあるということでございます。

それから、セルフエスティームの向上ということですが、これは自尊感情ということになるかと思いますが、この自尊感情が満たされた状態であるとき、自己の存在をそのまま受け入れ、肯定的にとらえられるとき、社会への適応とか、あるいは学習活動が促進されるというふうな指摘がございます。初年次におきましては、多様な課題とか、あるいは他者との交流活動を通して学生の自尊感情を高めることが意図される、そういうタイプの教育であると言われております。

わが国で行われているこういう初年次教育というのは、もっと具体的に言えばどういう分野に類型化できるかといいますと、ここに示しました、これは国研の専門家の類型でございますけれども、スタディスキルアップ、ステューデントスキル、オリエンテーションやガイダンス、専門教育や導入、教養ゼミ、総合演習、情報リテラシー、自校教育、キャリアデザインというような内容のものがございます。

では京大においてどの程度フォローしているかということをいろいろと考えてみたのですが、私が今担当させていただいておりますのが、新入生特別セミナーという限られた分野なのですが、それ以外のところでも各部局の様子を、将来的にどういうカリキュラム設計しなければいけないかということについていろいろ調べましたときに、どんなことをやっておられるのだろうということを見ますと、ほとんど皆フォローされていらっしゃるわけです。例えばレポートの書き方とか、図書館の利用法なんかは図書館の方がオープンな指導をするような機会を、利用法を説明する機会を設けていらっしゃるし、あるいは先ほど鈴木先生からキャンパスミーティングについてのご報告がございましたけれども、ポケゼミでどんなことをやったのかと学生に聞きますと、レポートの書き方とか、資料の調べ方とか、プレゼンのスキルなんかを磨いたという話がありましたので、知らないうちにいろんなことをフォローできているのではないのかなと思っております。

具体的な実施内容、これは 2007 年の国立教育政策研究所の調査でございますけれども、国立・公立・私立のそれぞれの学校がどんなことをやっているのかということを見てみますと、国立大学で極めて多いのはオリエンテーションとかガイダンスです。これは絶対どこもやっっていると思うのですが、力を入れていらっしゃるところとしましてはやっぱり情報リテラシーとか専門教育への導入部分、それからスタディスキルあたりを非常に重点的にやっっているようです。まだまだそこまで実施が及んでいないところが自校教育というところですね。これは先ほど申しましたアイデンティティ形成とかセルフエスティームとか、そういうところにかかわる部分を啓蒙するならば、この辺のところも力を入れてやらなければいけないところなのですが、まだここまでは余力が及んでいないという状況が見受けられます。

23 年度の京都大学の初年次教育としてどういうことをやったか、どういう内容で我々は対応したかということなのですが、二つのプログラムでこれに対応するということといたしました。一つは、左側でございます新入生特別セミナーというものでございます。これは淡路先生を筆頭にやっただきました。下に受講生の受講状況の写真正がでございます。それから今年の特徴といたしましては、先ほど申しましたオナーズ型まではなかなか行かないにしても、意欲を喚起する、京都大学に来て、次の目標に向かって頑張るという意欲をどのように持ってもらおうか、そういう機会を設けることも必要ではないかということで、アイデンティティとか、あるいはセルフエスティームというところに焦点を当てた教育をやろうということで、京大スピリッツへの招待という先見性、チャレンジ精神というものを軸にプログラムを一度展開してみようということで、あくまでも今年は試行でございますけれども、こういうものも組み込みました。それぞれの部局に今出てまいりましたポスターを配布い

たしまして、出席するように督励をしていただいたかと思えます。機構の先生方にはピラを配っていただきまして、こういうプログラムがあるのでぜひ1年生は出てくださいということをそれぞれ督励をしていただいたわけであります。参加者がちょっと少なく残念な結果だったのですけれども、内容については私としては非常によかったと思っておりますので、その経緯についてはまた後でご説明をさせていただきます。

新入生特別セミナーの状況につきましては、4月2日工学、それ以外の全学部につきましては23日に実施いたしまして、今年はメンタルヘルスにつきましてはオリエンテーションのときに入れていただくということで、少し扱いを別にいたしました。この2日、23日にいたしました内容は、その四つでございます。世界の大学で何が起きているのか、キャンパスにおけるカルトの実態、コンプライアンス、キャリアを考えようというテーマにいたしました。2日は、工学のほうが時期的に早くこれをやっていたということと、それから単位という問題とつながっている部分があるということもございまして、大体8割を超える学生さんの参加がございました。23日になりますと約40%ぐらいに落ちてくる。これは出席をとってこれぐらいの状況になってきているのであります。2日、23日の分のトータルが大体54%ぐらいでしたか。5割ちょっとぐらいの参加ということでございました。4月7日には入学式のときにあわせて、総長からは「京大生の学び」という題で、それから自校教育という問題の部分についてもちょっとやる必要があるということで、西山先生から「京都大学の歴史を知ろう」という内容の話をしていただきました。いずれも非常にインパクトが大きかったと思っております。2日と23日の参加者のトータルが、ここに細かな数字で出しておりますけれども、工学は82.4%参加でございましたが、それ以外の部局は、23日に実施した部分につきましては、薬学部が一番多くて65%、総合人間学部も50%を超える参加をしていただいております。文学部が46.5%、医学部も46.5%、理学部も42.4%と、非常に多いところもございしますが、3割ぐらいというところもあり、部局により非常に差があったように思っております。全体としては54.3%の参加ございました。

京大スピリッツへの招待のほうでございすけれども、これは1回目、5月27日。これは1週間のうちの特定の曜日の特定の時間に決めればよかったのですが、なかなかそういう工夫ができなくて、空いているところで日程を決めまして、シリーズもので5月27日の金曜日から最終が6月30日の木曜日まで、1回目松本総長、それから2回目小山先生、3回目鈴木先生、4回目が伊藤紳三郎先生、それから5回目に富谷先生、6回目に淡路副学長に最後の締めをしていただくということで、新しい試みとしてこういうプログラムを展開いたしました。先生方には最先端の話で、意欲をかき立てるような内容の話をぜひやっていただきたいと思っておりますということで、先ほど鈴木先生からフォアリージングというのですか、非常に最先端の、今まさに学会でいろいろ論争されているような内容について、それに近いものをしていただきたいということでお願いをしておりました。

それにつきましてはまた後でお話をいたしますが、新入生特別セミナーの部分の意識調査についてどういう反応があったかということについて簡単にご説明をしたいと思います。世界の大学で何が起きているか、よかったというものが6割ぐらい、そして、こういうものについてやる意義があるということは7割の者からそういう反応がございました。ただ、留学の必要とか英語学習の重要性というのは、再認識できたという意見が多かったのですけれども、23日に実施したほうから、ほかのプログラムでこういう説明をされたので、それとダブっていたから調整が必要だったのではないかという話もございました。キャンパスにおけるカルトの実態ということにつきましては、カルト団体についての情報は余りよくわかっていなかったから、聞いて非常によかったという意見が大多数でございま

した。しかし 23 日の段階で、講師の先生が講演されたすぐ後で、もう既にそれとおぼしき団体から勧誘があって情報交換をしてしまったという話もありましたので、時期的にもっと早くこういうものはやってほしかったという話がありました。コンプライアンスにつきましては、非常にこれは必要なことなのですが、重要性は認識しているのだけれども、こんなのはわかり切っていることだし、あえて講義形式でこんなのを実施する必要があるのかという感想が結構ございました。それから、キャリアを考えようというプログラムでございますけれども、これから大学でどういうふうに学んでいけばいいのか非常に不安を抱えているという学生が多かったのですが、目標を持つ大切さを改めて認識することができたという意見が数多くございました。

結局、京大生が初年次教育でどんなことを学びたいのかということについてもアンケートの中で聞いたわけですが、これは工学と工学以外の集計を合算する時間がなかったものですから別々に出ておりますけれども、一番多かったのが、最も高いものは、工学の場合、ノートのとり方、レポートのまとめ方、発表、ディスカッション、スタディスキルというものに対する要求が極めて多い。工学以外もやっぱり同じ状況が見られます。その次ぐらいに出てまいりますのが、大学生活を送る上で必要な情報とか知識を得るための学習機会というものをぜひ設けてほしいという希望がございます。あとまた 3 番目のウグイス色の部分でございますけれども、教員・先輩との交流を促進して、大学における自分自身の役割とか将来の目的を発見できるような教育。ですから、先ほど申し上げましたモチベーションを引き上げるようなタイプの教育というものも極めて重要かというふうに認識しております。

京大スピリッツへの参加者の意識調査なのですが、本当に参加者は極めて少なく、やったのが特定の時間割のときに時間設定できれば、空いておればもっとたくさん来てくれたのでしょけれども、自分の授業とバッティングするようなことがあったということもありまして、極めて参加者は少ない状況でございました。これは非常に残念であったのでありますけれども、このスピリッツの講義を受けた者からどういう感想が寄せられたのかということについて、いくつか読み上げをさせていただきます。

「これから自分が何を考えながら学んでいくべきかよくわかった。また、話を聞いていて非常にわくわくし、学ぶことに対するモチベーションが上がった。」「今日の講演を聞いて、僕たちには大きな可能性があるかと実感しました。科学技術の研究は人類の幸福をもたらすものですが、そのために相当な苦勞をしているのだと思いました。とても興味深い話でした。」「今日聞いたことを胸にとめながら、将来のために何ができるかを考えて行動していきたいと思います。」「大学に来るまでは、ただ大学に行って、何かの仕事について、漠然としか思い描いていませんでしたが、京大の講義を受けて、先を見る努力が必要なのがわかり、今日の講義でも非常に強く実感しました。非常に有意義でした。」「非常に熱く志の高い総長からお話を聞いたことで、日常生活に埋没しがちな自分を一步高いところから眺めることができたような気分になった。一人ひとりの人間が、他の人たち、自分たちの子孫たちの幸せを考えて行動するのはとても美しいことだと思うし、自分にもそのようなことができればうれしい。それから、研究の上でも、これから先の人生を歩んでいく上でも非常に有意義なお話を伺うことができ、参加することができてうれしく思います。久しぶりにこんな濃密な 90 分を過ごしたように思います。ありがとうございました。」「大学に入ってから社会的責任なんて考えたことがなかったけれども、今回の講義を聞いて、社会に対する意識のベクトルが生まれた。また、まだ 1 回生だし時間もあって思っていたけど、自己を確立し、自分の人生をよりよくしていくための期間としては大学は

余りにも短く、また人生は余りにも短いと感じた。自分もこの大学生活を精いっぱい積極的に動いて、自分の人生の方向性をしっかり確立したいと思った。ありがとうございました。」「自分の可能性を大切に、志を高く持って社会に、人間の未来に貢献できるような人になります。」「京都大学に入学し数ヶ月過ぎたが、勉強や学問に対する意欲が落ちてしまい、みずからの学問に対する意識に刺激を与えようと講演を聞きに来たが、京都大学という可能性の大きさを改めて感じ、この大学にいるのに、ただ漠然と過ごしている生活をもったいなく感じた。今まだ自分には本格的な学問をする力はないが、このようにわからないなりに世界レベルの学問に触れる機会を設け、将来に向けて今やっている基礎的な学業への刺激にしたいと思った。京大らしさを自分につけていきたいと感じた。」「京大に入ってよかったと改めて思いました。自学自習の意味がわかった。」こういった極めて前向き、肯定的な満足度の高い感想が寄せられております。

今年、新入生特別セミナーと京大スピリッツへの招待ということをやりました。この二つを实际やってどういふことを感じたか、あるいは今後どういふことが課題として考えられるかということをごちらの方に少し書いておりますが、まだ十分練れていませんので、まとめとしては荒れた状態になっておりますけれども、私なりにここにこういふものを今日まとめて参りました。

一つは時期でございますけれども、実施時期はできるだけ入学後早い時期にやるべきである。これは各部局のご協力がなるとなかなか上手く行きません。それぞれ部局は年度初めにはいろいろな行事を予定していらっしゃると思いますので、その調整がいろいろとあるのではないかと思います。

それから、初年次教育としてやる場合、その中に含まれているものも、それを外でやられていること、いろいろ重複するような内容がありますので、それを整理するなど実施内容をもっと精選すべきではないか、特に意欲とかスキル向上に直結するような内容に少し焦点化することも必要かなというように感じております。

それから、実施主体の問題ですけれども、実施主体とか方法とか、もし将来的に評価という問題につながってくるとするならば、どういふ枠組み実施したらよいかということについても今後検討して行く必要があるのではないかと思います。特に実施方法といたしましては、先ほどキャンパスミーティング、あるいは淡路先生のお話もございましたけれども、やっぱりポケゼミという非常に少人数の中で、指導する先生方と受講生、学生さんとの間の距離の近いところでの密な人間関係というのは極めて重要であると思われまふ。今後、インタラクティブな指導方法をどう考えていくかということが課題であります。一つの手段といたしましてはポケゼミの充実ということもありかなと思っております。

それから、京大スピリッツへの招待のところ参加者が少ないという非常に残念な結果になったのですけれども、いかに参加を促進するか、これも重要な課題であります。今回、京大スピリッツに関しましては参加を促進するという意味でポスターをつくってもらって、それから予約券を発行して予約をして頂きました。予約券の出を見ておますと 100 とか 150 とかものすごい数が出ているのに、結局来ているのが極めて少ないということなので、その結果について初年次教育のご専門の先生と先だってお会いする機会がありましたので、こういふ結果だということをご報告しますと、いい内容をやっておられるというふうにご評価できるのだけれども、インセンティブと申しますか、単位ということもあわせて考えることが必要だよというアドバイスがございました。それぞれ参加者の主体的な意識を向上させる工夫というものを今後しっかりとやっていくことが必要かなと思っております次第でございます。

新しい環境に早く慣れて、学習・研究のスキルを習得して、未来の成功の基盤をつくってもらい、これが初年次において極めて大事なことではないかと思っております。私たちは学生のために、より豊かなつながりを求めて日々研鑽をしなくてはいけないのではないかと感じている次第でございます。

ちょっと時間をオーバーいたしました。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

質疑応答

司会 高見先生、どうもありがとうございました。

一つ前の鈴木先生並びにただいま報告いただきました高見先生にご質問がございましたら、どうぞ。

古賀崇(附属図書館) 鈴木先生、高見先生お二方にまとめてのご質問になるかと思えますけれども、京都大学で教える人間のスキルを高めていく方策というところで、今もいろいろな取り組みがされているかと思えますけれども、今後教える側のスキルの底上げをどういう形で考えておられるか、そのあたりをお伺いしたいと思います。

鈴木 恐らくFDという形で、既にその専門のセンターのほうで公開授業とかいう形ではやっているかと思えます。そこでできることと、そこだけでは無理なことと両方あるかと思えますけれども、恐らく教えるときの科目設計からすべてかかわってくる部分だと思えますので、各学部の先生方のFDということもあわせてだろうと思えます。

その中で、京都大学らしくなったときに、学びの共同体と申しましょうか、学生がみずからの学びをデザインすると同じように、教員自身も自分の学生との交流の中で一つの授業の形を見つけていくというような形、京都大学らしい一つのシステムを考えていくことは可能ではないかと思っております。具体的には恐らく探検型、フィールド型の授業等で既に先生方が学部教育の中でなさっていることで、同じ現場に入って、ものを見る目の深さを養っていくというような、そういったさまざまなノウハウはもう既に先生方お持ちのものがあると思えますので、それをむしろ結びつけていって、それを先ほど申し上げましたレギュレーションしていくところがうまく機能すれば、既にシーズはありますので、それを一つの方法のところへ持っていくことができるのではないかと私は個人的に思っております。

司会 よろしいでしょうか。

高見 もう鈴木先生のお答えですべて語り尽くされていて、私がお答えをするまでもないかというように思います。やっぱりその問題に関しましてはFDということに尽きるのではないかと思っておりますし、本学におきましては幸いセンターのほうでいろんな工夫をされ、今までの研究の蓄積なんかを持っておられますので、そのいろんな報告書も出しておられますので、そういうものを先生方とシェアしていただくということかなと思えます。

あるいは、キャンパスミーティングに参りましたときに、これはどこでしたか、薬学でしたでしょうか、授業評価をこのごろ各部局でして、私どもの教育学研究科もやっておりますけれども、その授業評価の結果で非常にスコアの高かった、いい授業をやっていたらという先生の授業をFDの

モデル授業ということで、それぞれその先生の授業なんかに参加されて、いい授業というのはどうい
うところがいいのか。声の出し方とか、あるいは教材の工夫とか、学生とのインタラクティブなやり
とりとか、こういうものを観察し、そのいい授業をそれぞれ普及・拡大するように各部局で努めてい
らっしゃるといふことでもありますので、そういう地道な活動の中からやっていただくといふことかな
といふふうに思っております。

司会 松本総長からコメントを一言。

松本 各教員が授業という形、あるいは実習という形、あるいはフィールドワークという形で学生と
接して教育しておられるといふことは承知しておりますが、今のご質問の背景に、今お答えになった
両先生のファカルティ・ディベロップメント、技術を習得するといふ話は重要だと思いますが、もう
1点、私どもの大学全構成員の責任、あるいは希望と言っていいかもかもしれませんが、大学がどのよ
うな教育をするかという枠組みについて全学部で検討されることは大変重要だと思います。学部の中
でもどういふ教育を行うかについては、おそらく、教育に関する委員会ができて、そこで議論してお
られますが、それをつなぐような、全学としてどういふ体制で、どんな教育をしましょうかといふと
ころが今まで欠落していたのです。それは先ほど鈴木先生のすばらしい指摘がありましたけれども、あ
の中で諸外国が考えている、あるいは他大学が考えていることにかんがみまして、私どもはそれをや
っていく必要がある。学部については高等教育研究開発推進機構がありますが、機構は全学共通教育
でありまして、各学部の専門は学部で行われていますので、それを網掛けするような全学的な京大の
すべきことは何かといふ議論をする場が多少必要かと思っております。これについて構成員の先生方に伝え
るといふことも私どもがすべきことではないかと思っております。

司会 どうも高見先生、鈴木先生、松本総長並びにご参加していただいております皆様、午前の基
調講演から報告までどうもありがとうございました。これで午前の部を終了させていただきます。

午後からですけれども、時間がかかなり超過しております。ゆっくり昼食をとっていただきたいとい
うことで、1時間の時間を取りたいと思っておりますので、午後の部は13時20分から、予定を10分ずらし
ます。13時20分から開始しますので、この会場にお戻りください。

平成23年度全学シンポジウム 初年次教育について



教育学研究科 高見 茂

本日の内容

1. なぜ初年次教育が必要か
2. 初年次教育の多様性
3. 京都大学における初年次教育の状況
4. まとめ

なぜ初年次教育が必要か



**大学が学生に
選ばれる時代**

米国ではトップ大学でも
入学率(入学者/合格者)は **70%台**

大学間競争の激化
東京大学, 京都大学でも同様の傾向

選ばれる大学の必要条件




卒業率の向上 **+** 卒業生の質の向上

↓


高等教育のアウトカム

アウトカムの向上をめざして


有効な施策としての初年次教育



初年次の成功→4年間の成功
さらに就職にも成功, 就職後も良い



大学での挫折例は初年次に多発している



学生は, 4年間に学ぶ内容の
1/3以上を初年次に学ぶ

学生の多様化・・・わが国も

大学・短大進学率57.8%(H22年)


↑
学生の
多様化

あらゆる学生層への
ガイダンスと早期支援

意欲・
動機

ライフ
スタイル

自力で
学習する
力



初年次教育のあゆみ

2000年ごろ

**初年次教育
＝補習教育**
単位を与える
ような教育で
はないという
声も・・・

2007年ごろ

97%の大学
が初年次教育を導入。
高等教育へ
重要な移行期
の支援教育と
いう認識が広
まる
→ 補習教育
は別体系へ

現在

研究者がさまざまな分野から参入、プログラムとしての位置付けを得る。
教育系センターが中心となって支援。

初年次教育の多様性

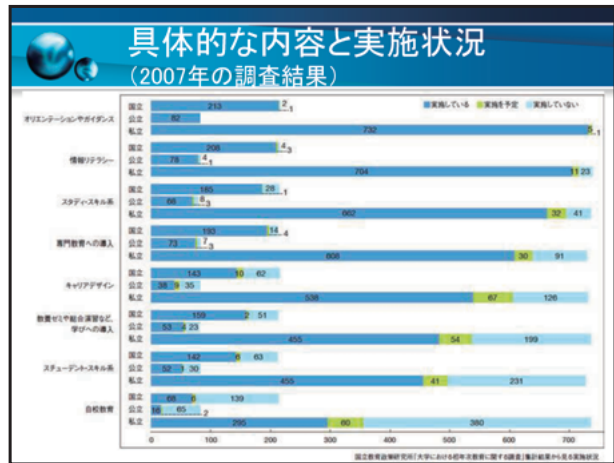


オナーズ型 スタディスキルアップ型

セルフエスティーム向上型 アイデンティティ形成型

国立政策研究所 総括研究官 川島啓二氏による 初年次教育の類型

	内容	京都大学における実施状況
スタディスキルアップ系	レポートの書き方・図書館の利用法・プレゼンテーションの方法など	○
ステューデントスキル系	学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活など	○
オリエンテーションやガイダンス	フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学びなど	○
専門教育への導入	科学、法学、物理学等、専門の基礎演習など	○
教養ゼミや総合演習	学びの導入を目的とするもの	○
情報リテラシー	コンピューターリテラシー、情報倫理など	○
自校教育	自大学の歴史や沿革、社会的役割、著名な卒業生の事績など	○
キャリアデザイン	将来のキャリアや進路選択への動機づけ、自己分析など	○



平成23年度 京都大学の初年次教育の概要

新入生特別セミナー

京大スピリッツへの招待

先見性・チャレンジ精神

新入生特別セミナーの概要

内容	出席率
4月2日 (工学部) 23日 (工学部以外の全学部)	約80%
4月7日	約40%
①京大生の学び ②京都大学の歴史を知ろう	ほぼ100%

参加者の内訳

学部	男	女	参加者計	在籍者数	割合
工学部			826	1,003	82.4%
文学部	61	44	105	226	46.5%
教育学部	8	15	23	61	37.7%
法学部	76	35	111	338	32.8%
経済学部	56	27	83	254	32.7%
理学部	119	15	134	316	42.4%
医学部	64	57	121	260	46.5%
薬学部	33	21	54	82	65.9%
農学部	61	39	100	319	31.3%
総合人間学部	47	18	65	128	50.8%
計	525	271	796	1,984	40.1%
全体計			1,622	2,987	54.3%

京大スピリッツへの招待の概要

1回目 5月27日(金)
太陽系文明をめざして
一天地人考一
松本 祐 総長

2回目 5月31日(火)
千年の時空を駆けたX線
小山 勝二 特任教授

3回目 6月2日(木)
科学を文化に・文化を科学に
鈴木 晶子 教授

4回目 6月27日(月)
あなたの価値を創り高めるために
伊藤 紳三郎 教授

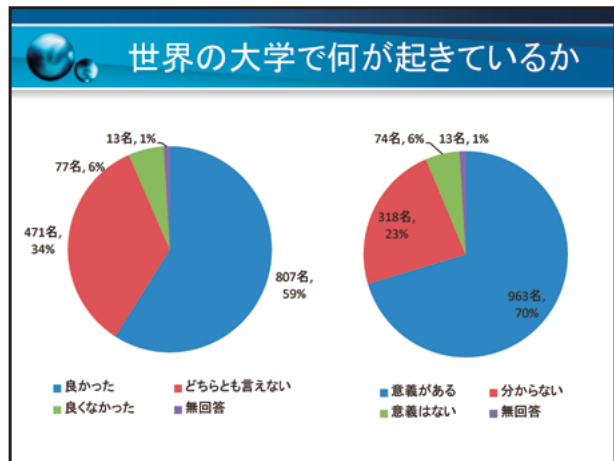
5回目 6月28日(火)
中国三千年の味を求めて
富谷 至 教授

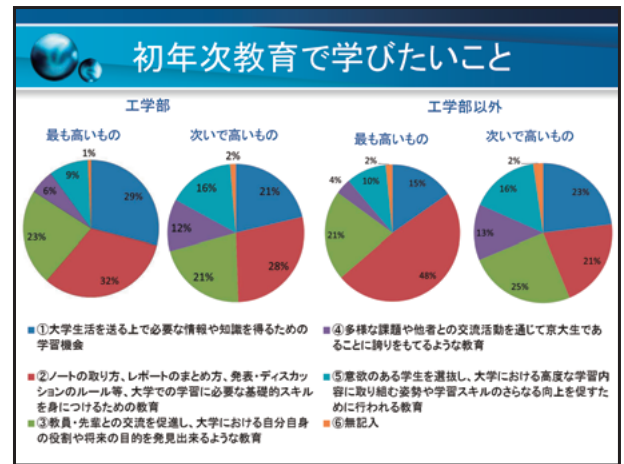
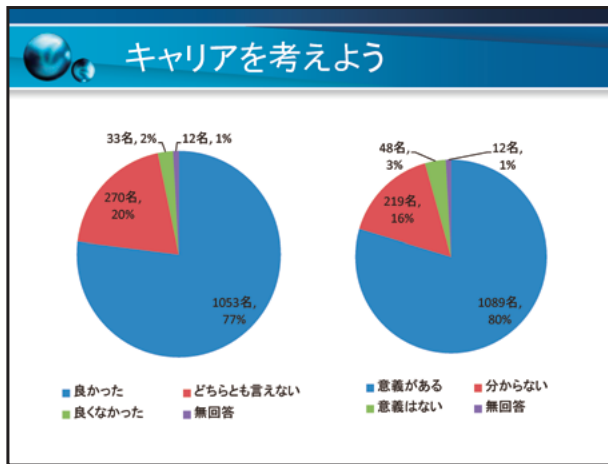
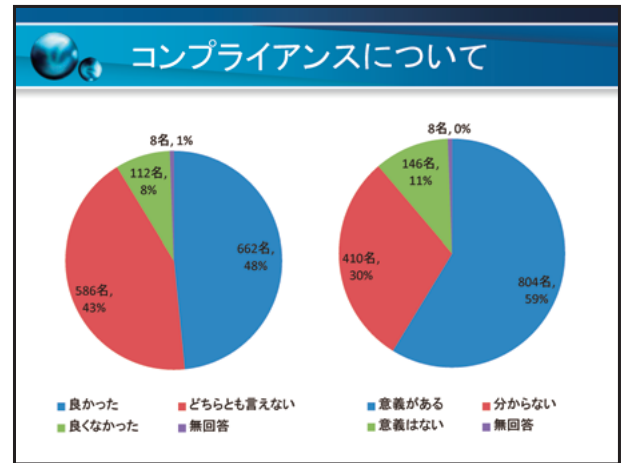
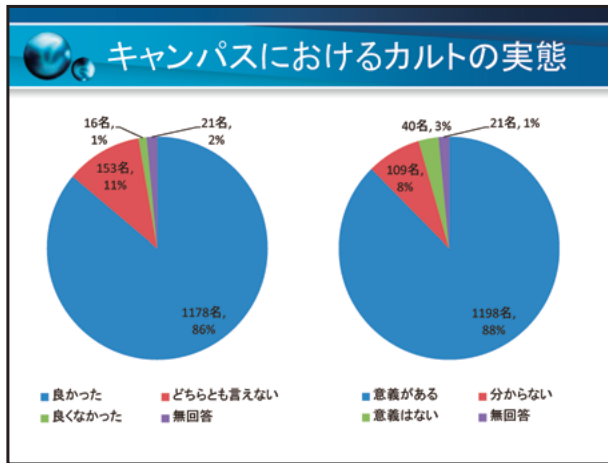
6回目 6月30日(木)
京都大学の教育理念と展開
淡路 敏之 副学長

学生アンケート調査より

新入生特別セミナー意識調査

対象: 全学部の新入生
人数: 1368名
調査日: 4月2日、4月7日、4月23日





京大スピリッツ参加者意識調査

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
非常に満足している	64	6	15	2	3	4
まあまあ満足している	18	2	9	7	11	8
どちらともいえない	3	0	1	3	1	0
あまり満足していない	0	0	0	3	0	1
全く満足していない	0	0	0	0	0	0



9. パネルディスカッション1：「大高接続と大学教育」

◇コーディネーター

理事補・理学研究科教授 森脇 淳
理事（教育担当）・高等教育研究開発推進機構長 淡路 敏之

◇パネリスト

京都大学総長 松本 紘
大阪府立天王寺高等学校 教頭 山口 智子
駿台予備学校情報センター長 石原 賢一
経済学研究科 教授 岩本 武和
医学研究科 教授 千葉 勉
高等教育研究開発推進機構 教授 舟橋 春彦



司会 予定の時間になりました。午後の部のパネルディスカッションを開始させていただきます。

最初は、コーディネーター森脇淳理事補並びに淡路敏之教育担当理事・高等教育研究開発推進機構長、及びパネリストの皆様による「大高接続と大学教育」というパネルディスカッションをお願いいたします。

まず、パネリストをご紹介します。

山口智子 大阪府立天王寺高等学校教頭

石原賢一 駿台予備学校情報センター長

岩本武和 経済学研究科教授

千葉 勉 医学研究科教授

舟橋春彦 高等教育研究開発機構教授

また、松本紘総長にはご登壇をお願いしてあります。どうぞよろしくお願いいたします。

森脇 それでは、午後の最初の部の「大高接続と大学教育」という、高大接続でも構いませんけれども、パネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。

午前中の講演でも出てきましたけれども、大学においては入り口、出口、それから途中の教育という意味において、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーというのがございますけれども、ここはそういう意味ではアドミッション・ポリシーに関係する入り口のところをこれから議論していきたいと思います。

まず、先ほど簡単なご紹介がございましたけれども、私のほうから改めてパネリストのご紹介をもう一度させていただきたいと思います。

まず、天王寺高校から来られている先生方ですけれども、今日は入り口という意味において、大阪府の公立高校というのは京都大学にとって多くの入学生が来ていただいている母集団です。高等学校における教育がどのような形に変遷してきて、今現在、高校の教育はどのような状況にあるのかということ、及び、実際天王寺高校から進まれた京大生からの意見ということで、高校のほうで把握されている内容についてご説明していただけることになっています。今日は天王寺高校からは校長先生が来ていただく予定でしたけれども、所用につき少しご無理があるということで、代表して山口教頭先生に来ていただいています。

それから、あとほかに2名の先生方にも来ていただいております。ちょっとお立ち願えますでしょうか。順番に武井先生と大木先生です。よろしくお願いいたします。

続きまして駿台予備学校情報センター長の石原さんに来ていただいております。石原さんは、大学入試については日本の中で右に出る者がいないほど精通されておられて、大学入試のことは石原さんに聞けばまず間違いがないという意味で今日は来ていただいております。高大連携にとっての一つの重要なゲートというのはもちろん入学試験でございます。そういう意味で、入学試験のプロという立場から、京都大学の入試というものが今どういう状況にあるのかということを入試分析も交え、若干の京都大学に対する厳しいご意見もあるかもしれませんが、今後、入学試験を考える際において重要なご意見を伺えるかと思っております。よろしくお願いいたします。

続きまして、ほかに学内からは、もちろんご紹介するほどでもありませんけれども、松本総長には高い見地からいろんなご意見を伺えると思っております。松本先生にご参加していただいております。

それから、あと経済学研究科から岩本先生に来ていただいております。岩本先生は、高校の出前授業等、いろんな高校に出て行かれて、高大接続、連携に関するさまざまな活動をされていると思います。その点の成果、あるいは問題点等を後で発表していただくことになっております。

それから、医学研究科から千葉先生に来ていただいております。医学部というところは、入学試験という意味においては、東大の理3と並びまして、日本では最難関の学部だと思っております。そういう意味において、学力という意味においては遜色がないと思われがちですけれども、意外とそうではないというようなご報告があるかと思っておりますので、今後、これからの教養あるいは共通教育を考える上で重要な提言になるかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それから最後に、高等教育開発推進機構から舟橋先生に来ていただいております。高等教育開発推進機構というのは、10学部の委託を受けて教養あるいは共通教育のシステムをつくっていくところでございますけれども、その教員の立場として初年次教育等、あるいは今年から履修相談室等、いろいろな形で高大接続がスムーズに行くような活動をされていると思います。その点での問題点をいろいろな形で報告していただければと思います。よろしくお願いいたします。

それでは最初に、天王寺高校の山口先生からご報告をお願いします。

それで、パネリストの皆さんですけれども、画面が後ろ向きに見なければ見にくいという事情がございますので、一旦、発表がある間だけは下においていただいております。



よろしく申し上げます。

山口（大阪府立天王寺高等学校） ただいまご紹介いただきました大阪府立天王寺高等学校の教頭の山口と申します。本来、先ほどご紹介もいただきましたけれども、校長がご依頼をいただいたのですけれども、どうしても外せない校務がございまして、私が代わって務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。



私事ですが、今現在、教頭2年目をさせていただいているのですが、その前に昭和63年ぐらいから天王寺高校のほうで一昨年まで、化学の教師として20数年間教えておりました。そういう経験もありまして、少し話させていただければと思っております。

私のほうからは、高等学校における教育課程の変遷と、それがもたらしております、高校としてとらえている京大へ進学した者の現状ということについて話をさせていただきます。

まず、最初の表ですけれども、これは昭和23年、戦後からの必履修科目の科目数と単位数、それから卒業単位の変遷を一覧表にしたものです。専門学科、工業とか、今は理数科などがあるかもわかりません。それも書いてありますけれども、一般的には普通科のほうを見ていただければと思います。

ちょうど戦後から教育制度が安定し、さらに高度成長期、進学率の高まりということで、必履修科目の数、それから必履修単位が増加してきましたのがちょうど昭和38年度、ここの教育課程だと思います。ちょうど50代半ばから60代前半、このころの世代の方の教育課程が昭和38年度です。そこからほぼ教育課程が10年ごとに見直しがありまして、私はちょうど48年の教育課程を学んだ者なのですけれども、現在の必履修教科の基礎となるようなものが出てきていますのが昭和57年です。ここが今現在の状況の基礎になるような教育課程になっています。

見ていただきましたらわかると思うのですけれども、昭和38年に比べまして、必履修科目数、単位数とも、ほぼ半分になっております。現在、大体30代半ばから40代半ば、先生方の中にもいらっしゃるかもわかりませんが、その世代の方々は、この教育課程を受けておられます。現代社会とか理科Iといったような総合科目が新設されたのがこのころからです。私もこのころ教員生活を始めました。ちょうど昭和56年から教員生活を始めたのですけれども、理科Iというのを教えるのに試行錯誤したというのを覚えております。

細かい表というのがその後出ているのですけれども、表のほうは見にくくなっています。お手元のほうにも細かいの出ているかと思っておりますけれども、必履修科目というのは例えば理科で言いましたら理科Iだけになりました。必履修が理科Iだけになったもので、有名な私学の工学部とか、そこでは工学部でありながら理科が1科目で受験が可能になる。例えば物理を履修しなくても工学部に入学できるというような状態があったのを覚えております。

さらに、平成14年から公立高等学校に導入されました完全学校週5日制というのが始まりまして、教育課程が見直しされました。それが平成15年度からの教育課程になります。これがちょうど現在20代半ばから、つまり大学院生よりも若い世代が受けた教育課程になっています。先ほどの表と見比べていただいたらいいのですけれども、必履修科目の単位数が38まで上がってきたものが、また31

というふうに減らされました。必修の単位が 38 から 31 に削減され、それから卒業に必要な単位数というのも 80 から 74 というふうに削減されました。それから、先ほどの表でも縦の長さとかで見ていただいたらわかるかと思うのですけれども、31 年のは非常に短いです。それに対して平成 15 年は長いです。つまり選択科目が非常に増えております。科目数が増えて多岐にわたっている。つまり生徒たちは以前に比べて、共通な科目を同じようなレベルで学習するということがなくて、限られた授業の時間内で、特に理科、社会などは選択というものが非常に進みました。それから課題研究というのも平成 15 年のこのころから取り入れられて、重要視されるようになってきたのもこの教育課程からです。

ただ、今も言いましたように、単位数が減る。選択科目が増えている。それから、さらに完全週 5 日制ということになりまして、総授業数というのが非常に減少しました。授業時間数の減少を意味します。そのために非常に学習内容が削減されてきました。特に小学校、中学校における削減というのが顕著で、私も化学の教師なのですけれども、中学校で例えばイオンというものの考え方がなくなる。それから、非常に定量的な考え方が大幅に削減されて、数字でものを考えるというのがなくなってきて、定性的な考え方、ざくっとした内容になりました。物理や化学ではだめなのですから、知識のみでとらえて高校に上がってきているという状態になりました。それからまた既習の内容、習った内容に対する練習量も非常に激減しました。そのために、例えば計算が非常に遅いとか、そうでなくても、例えばこういう数値が出てきたら絶対おかしいやろうというような、一見したらおかしいと思う感覚ですね。ぱっと見たら数値で、こうなってきたら、こんな数値にはとてもならない、桁数が全然違うのにとこのものの感性というのが非常に鈍っている。量的な感覚は、何回も何回も同じことを繰り返して数字を見るということで磨かれていくものだと思うのですけれども、そういう感覚が非常に鈍いと思います。

だけど、週 5 日制のために授業日数が減ってきておりますので、学習したらどんどん前に進んでいかなければいけないのです。十分に定着、消化したかどうか、そういうのも余り見ないで、とにかく前へ進んでいく。短期的に知識の確認だけをしながらどんどん進んでいく。それがゆえに、ここにも書きましたけれども、短期的な記憶というのはできているのですけれども、長期的な記憶とか知識の融合というのができない。そういう状態があるように思います。

短期的記憶、これは一旦ぱっと覚えるのですけれども、それは非常に表面的な知識でして、すぐにはがれやすいのです。はがれていって剥離していく。剥離化と書きましたけれども、非常にはがれていくもので、スパイラルな積み上げになっていかないというのがあるかと思えます。

ここまでが一般的な高校生全体の状況だと思うのですけれども、そしたら京都大学に入学している生徒というのはどうかと言いますと、公立高校から行く者は、何とか受験に必要な知識は身につけて、入試問題は解けるようにして合格していきます。短期的記憶を懸命に重ねて、長期的な記憶に結びつけて、入試問題を解けるように、何とかして合格させていただいているのでしょうけれども、それが知識を背景にした、さらに深い教養とか知恵といったものにまではなっていない、そういうものが多いように思います。特に入試に直結しない一般的な教養というか、そういうものに欠ける場合があるかと思えます。また具体的な例は後で進路部長から話ができればと思います。ですから、課題研究というのが重視されていると言いましたけれども、やはり考えるもとがない、知識がないと、創造的な発想までには繋がっていかないと思います。

京都大学で、もちろん大学に入ったら専門課程に進むのですけれども、その背景とか土台になって

いくものを身につけさせるというのは、恐らく大学の1回生での教養の授業なのだと思います。天王寺高校でも入学したときには中学生から来たばかりで、天高の1年生というのはなかなか天高らしくというか、高校生らしくなっていません。そこでいろんな行事を行います。海へ行ったり山へ行ったり、結構ハードなこともします。行事の取り組みなんかも、いっぱいいっぱい時間をかけるのではなくて、与えられた時間の中でやれというようなことをしたりします。短期的な行事を行い、時間を上手に使う体験を通して、『天高生にする』という合言葉で体力やら精神力を鍛えています。

高校と大学というのは恐らく同じではないのかもしれませんが、京都大学でも期待されるべきものをまだ十分に身につけていないという意味では、京都大学の1回生の授業というのは、まさに京大生にするという意図があるのだろう、意義があるのだろうと思います。大学の目指すべき方向性というのをしっかりと見えるようにしていただいて、京都大学での期待されているものを自覚させることが大切なのだろうと思います。

ときどき卒業生で、教養講座というのはあんまりおもしろくないというような話を耳にすることがあるのですが、そういう教養の授業の意義とか意図というのが学生に伝わっていないのではないかと思います。専門ではなく、『教養にはどんな意義があるのか』というのを授業の中で伝えていただけるとというのが大事なのだろうと思っています。その教養を身につけるには、授業の中でぜひ負荷をかけて要求しないと成長していきません。学生たちは勉強するために大学に行っているのだから、大いに負荷をかけて鍛えていただきたいと思います。学生がどれだけ理解したのか、なかなか不十分な点もあろうかと思いますが、ぜひ問いかけをしていただいて、学生との対話、つまりキャッチボールをしていただき、大いに知的好奇心を刺激していただいて、そうすれば京都大学に進んでいる者というのは知的刺激に非常に敏感です。知的好奇心が刺激されて、目的、こういうのがあって、それが土台になっていくんだよということがわかれば、自学自習というか、そういうのが進んで、広い素養に立った上のさらに専門分野の進化というのが進んでいくのではないかと考えております。

また具体的な例につきましては後ほど別の教員のほうからさせていただければと思っております。勝手ないろんな意見を述べさせていただきましたけれども、これで私からの話とさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

森脇 ありがとうございます。ご質問等があると思いますけれども、また後でまとめてということでよろしく願います。

続きまして駿台予備学校の石原先生から、報告をよろしく願います。

石原(駿台予備学校情報センター) どうも高いところから失礼いたします。駿台予備学校の石原と申します。よろしく願います。

私は、今は東京のほうで日々勤務いたしておりますが、5年前までは関西の駿台でずっと勤務いたしておりました。実は東京に異動して、関西での京都大学に対するイメージと東京でのそれはずいぶん違うなということを感じております。今日はそういうところも踏まえて、少し大学入試という観点から京都大学についてお話をしたいと思っています。

冒頭、森脇先生から、京都大学の先生方にはちょっと耳の痛い話もあるというお話がありましたが、実は私も京都大学を昭和56年に卒業いたしております、OBがゆえに母校に叱咤激励という意味もございますので、その点はあらかじめご了解願いたいと思っております。

それでは、お手元のほうに資料がございますが、同じ内容をスクリーン上のパワーポイントを使ってお話しまいります。まず、スライド1をごらんください。

今の大学入試全体の状況がどうなっているかといいますと、非常に国公立大学志向が強くなっております。関東はもともと早慶大があることから私立大学が強いエリアだったのですが、この春の入試ではほとんどの国公立大学の志願者が増えています。また、いろいろな高等学校で志望校調査をしても、高1時点では国公立大学を第1志望にしている割合が大きく増加しているなど、かつてとは大きく様変わりしています。それから、文科系の学部の方にはちょっと辛いお話かもしれませんが、人気の上では「理高文低」になっています。ところが、これはいい話だけではなく、「なんちゃって理科系」という生徒も多くなっています。つまり、「理科が好きだ」とか「数学が好きだ」とかではなく、就職に有利だとか、保護者をはじめとした周囲からの勧めによって、無理やり理科系にされてしまっている生徒も増えているのが現状です。それから難関大志向です。



いわゆる旧帝大や東工大、一橋大といった難関大への志望が増えています。しかし、よく見ると、ほどほどの難関大志向なのです。つまり、関西で言えば神戸大あたりにもっとも多く志望者が集まる。関東でも、東大を第一志望にしても最後は一橋大に志望変更したり、さらに筑波大や千葉大に変更したりといった感じで、「なぜ2番じゃダメなんですか」というのが今の受験生の考え方です。1番になって辛い目に遭うより、2番でいいじゃないかということです。どこかの大臣の「1番でなければダメなんですか」という発言がありましたが、まさに今の受験生はそう思っているのです。それから医学部志向です。これは悲しい話ですが、成績が優秀な層に対して、医師以外のやりがいある進路を見せられない大人の責任です。ぜひ、先生方をお願いしたいことは、いろんな世界があることを受験生に伝えていただきたいのです。それから地元志向。これは保護者との関係による場所も大きいです。特に男子が顕著で、よく母親と男の子は赤い糸でつながっているなどと言いますが、今は赤いワイヤーロープです。幸いにも、京都大学は京阪神都市圏という人口が多い地域に在りますから、赤いワイヤーロープをたくさん使えますけれども、地方の大学では非常に大変です。人口の少ない地域ではなかなか外から学生を呼べないという話になっています。その点、女子は大丈夫で、本人たちは外へ出る意欲は満々です。

ここで、スライド2で具体的な数字をお見せします。私どもが前期に実施した模試結果ですが、青い棒グラフが前期の志望者数の前年度指数です。後期は廃止により減少したり、他大学の廃止による流れで増加したりしますが、前期は大学の人気を反映しています。まず、関西では京大、阪大、神戸大はいずれもほぼ前年並みです。関東では、特に東大、東工大が増えています。ただし、一橋大は社会科学系が不人気ということで、その系統しかなくちょっと苦しいところがあり減っています。つまり、関東での難関国立大学への志向がより強くなっているのです。

スライド3の系統別志望動向では、文科系はおおむね減っています。ただし、人文社会系とか国際関係系の人気が高くなっています。文学部志望者は、卒業後の就職を気にするよりもほんとうに歴史が好きだとか、文学が好きだという人が志望しており、就職状況の変化に影響を受けにくいところがあります。それからグローバリズムの拡大です。今話題のIAEAの事務局長は日本人ですし、国連を

はじめとした国際機関でも日本人の活躍が目立っています。一方で、伝統的には文系学部の法学部系や経済・経営・商学部系の人気がありません。繰り返しになりますが、先生方のお力で、どんどん高校生に訴えかけていただきたい。こんなに面白い学問だとか、社会のこんな仕組みがすごいんだということを書いていただきたいのです。文科系に進んでも、将来は大臣になっても泣かなければいけないとか、公務員もいじめられてばかりだとか魅力がないという話ばかりです。逆に理科系は、どの系統も概ね人気が高いのです。以上の状況が今の系統別の志望動向なのです。

次にスライド4では、実際には浪人生がどれぐらいいるのかという話です。8月に文部科学省の学校基本調査の集計速報値が発表になりましたが、東日本大震災の影響で東北3県が未集計のままで、よくわからない部分があります。そこで、去年のデータなのですが、大学・短大を志願した人数が74万5,000人で、大学・短大に入学した人数が66万9,000人、引き算すると7万6,000人ぐらいがいわゆる浪人生なのです。ところが、センター試験では11万人もの既に高校を卒業した人たちが出願しており、少なくとも3万人以上の学生が大学をやめて再受験しているのです。このやめた大学のほとんどは難関大なのです。東大、京大は少ないですが、例えば阪大の後期に入学したけれども、阪大をやめてもう一回チャレンジしている。早慶大に入学したけれども、やっぱり国立大学に行きたい。同志社大に入学したけれども、もっと上位の私立大学や国立大学に行きたい。そういう学生がたくさん生まれているのです。今は、大学は無理をしなければ割に簡単に入れます。さきほども言いましたが、今の子どもたちは負けることが嫌いなのです。1回でも落ちたら、もうだめだと思っています。つまり、連戦連勝で入学できるように受験大学を選ぶが、入学してみると、やっぱり合わないと思ってやめてしまう。これは、彼らにはリセットなのです。転部・転科したら、あるいは学士編入したら、大学院から他大学に変わったら、こういった考えはないのです。ゲーム世代、リセットボタンで最初に戻って、スタートから始める。それしかないと思っているのが今の子どもたちです。

それから、ライバルとは思っていらっやらない先生方が多いのでしょうか、世間ではライバルといわれている東大と京大との違いはどうでしょうか。スライド5をご覧ください。入試システムでは、東大は学園紛争で東大の入試を中止した昭和44年の翌年に改定して以降、自前の一次試験、共通一次試験、センター試験と一次試験の形態が変わった以外は、一切変えていません。京大はころころ変わりますよね。来年も変わります。ということで、高校の先生は高3生を指導するのは、4年に1回しか回ってこないわけです。これが、中高一貫校だと7年に1回となってしまいます。先生方には、以前の指導経験が活かせる東大に対して、ころころ入試が変わってしまっって経験が活かせない京大と思われると思います。

選抜方法は、東大は理一、理二、理三、文一、文二、文三と科類別です。京大は学部・学科・専攻別の募集です。そうすると、一つの高校から東大や京大にはそんなに多数は合格しませんから、募集単位が大きい方が大体これぐらいの成績なら理一は合格する、文二なら合格するという感覚が高校の先生方の中に残りやすいのです。京大は、学科ごとでレベルが違うので、進学相談の際の合格可能性の見極めが難しいわけです。

それから、入試科目は東大が文理ごとでそろっているのに対して、京大は、最近はかなりそろってきましたが、ご存じのように工学部などでは学科間でもばらばらでした。すると、京大の中での志望変更によって他学部、他学科へ流れにくいわけです。入試科目が合わないと京大が無理だったら、阪大へ行こうなんていう話になります。

それから、二段階選抜は東大では毎年多くの不合格者がでます。京大はほとんど不合格にならず、

理学部では絶対基準です。すると、センター試験により一生懸命取り組むのはどっちかという東大志望者です。東大志望者は第一段階選抜不合格で二次試験を受けられないのは嫌なので、センター試験もがんばります。しかし、京大志望者はセンター試験にはあまり力を入れずに、二次試験を頑張ろうという気持ちが強くなります。結果として、合格者のセンター試験平均点は東大のほうが高くなっています。ショックですが、文科系では一橋大にも負けています。一橋大は第一段階選抜での不合格者がほとんど毎年出ますから。

それから入試問題は、東大は問題のレベルはそんなに高くなく、とにかく何でも屋さんです。京大は常に全力投球、本物の学力を試されます。今日ご出席の天王寺高校の先生方は優秀ですからどちらの問題にも対応されると思いますが、どちらが指導しやすいかというと、東大型のほうがやりやすいと思っている高校の先生方が多いです。京大の問題は難しいです、たとえば英語の全文訳とか英作文は相当な力量がないと指導できないと思われています。

それから学部への進学では、東大には進学振分けがあります。今の高校生は昔と違って、先生方の時代の中3生が高等学校を決めるぐらいの気持ちしか持っていません。となると、その段階で学部、学科、専攻まで決めろというのは非常に難しい。いくらアドバイスを与えても、さきほどお話ししたように、合わないと簡単にやめてしまう学生も出てしまいます。そうすると、とりあえず東大を勧め、「東大の中でいろいろなものを見て、駒場で勉強して、本郷へ行くときに決めればよいよ。おまえに任せよう」といった感じで指導しやすいということもあります。

今年度入試で、北大は文理別の総合入試をはじめましたが、この効果で人気があっただけで、北海道の高校の先生方に聞いたところ非常に評判が良いです。とりあえず文理だけ決めて入学すれば、あとは北大入学後に進学振分けをやってくれるというシステムになったからです。

こういった状況のもと、スライド6の駿台全国模試における合格ラインの推移を見ていただくと、上の点線が東大の文一、文二、文三ですが、過去10年間の折れ線グラフを目を細めて見ていただくと少しラインが上がっています。京大は残念ながら少し下がっています。つまり、東大と京大の差は全国的に見れば少し差が広がっているのです。文科系ではこのすぐ下に一橋大が迫っているという状況です。

スライド7の理科系はどうでしょうか。東大はほとんど変化がありません。理二あたりが少し上がっているぐらいでしょうか。実線の京大を見ていただくと、医学部はほとんど変化がありません。しかし、理学部、工学部、医学部、薬学部、農学部あたりでは少し下がっている。これが現状なのです。

スライド8は、医学部医学科と京大との選択についてです。はっきり言ってしまいますと、今、成績上位層から順番にみていくと、一番上位が医系に進み、次に理科系で、最後が文科系です。文科系では、数学ができなかったらすぐに早慶大などの私立大学に行ってしまう。医学部では先ほども言ったように地元志向があります。親が子どもを地元に残したかったら、地元でいい仕事というと、企業もあんまり地方はないですから、医師になれという。公務員も今はあまり人気がないですね。高校の先生など教員志向は結構多いです。あと地方では、京大とか東大を卒業した学生が納得するような職場はなかなか難しいです。大企業があっても工場だったりするので、いわゆる研究職に就こうとなかなか難しい。それから、今、地方では医学部が易しくなりました。地域枠が作られています。一般入試ならセンター試験で85%ぐらい取らなければいけません。地域枠でしかもAO入試だとか推薦入試ならば70%ぐらいで入れる大学があるのです。福島県立医大、名前を出してまずかったかもしれませんが、この春の入試では実際に7割ぐらいで合格しています。いろんな事情

もあるので、来年はもう少し下がるかもしれないですね。あと、医師の師弟は富裕層が多く、私立の中高一貫校に通う生徒が多いです。スライド 8 の棒グラフは駿台の高校生（現役）クラスの中で一番成績レベルの高い東大・京大・医学部を目指している生徒の在籍高校です。関東では 8 割が私立中高一貫校です。関西でも 7 割ぐらいが私立中高一貫校です。こういった高校は結構お医者さんの師弟が多く医学部へ行ってしまいます。そういう流れがあって、京大の理科系に来てほしいような層が医学部に流れているという現状があります。

スライド 9 は、この春に大学を受験した受験生のセンター試験 900 点満点の得点を 10 点刻みでわけて、それぞれでどこの大学を受験したかを示したグラフです。なお、データは駿台予備学校とベネッセコーポレーションが一緒に合否追跡調査した結果によるものです。一番下の青いところが東大です。赤が京大、それから黄色く見えるところが一橋大ですが、圧倒的に 9 割、810 点以上取れている層では東大に出願しているのです。京大は、ご覧になられたらわかるとおり、上位の得点帯でも一橋大に負けているところも多いのです。これはさっき言ったように、京大はセンター試験というものに対して非常に軽い扱いをしているからです。スライド 10 の理科系もそうで、やはり東大です。それから上のほうの青い部分が医学部医学科です。これは、旧帝以外で、東大、京大、阪大などの医学部は各大学で集計しています。これを見ていただいてもやはり、ちょうど 780~800 点から上位層では医学部が非常に大きな占有率を占めている。東大はそれでも医学部をしのぐぐらい上位層ではきちっと占有率が高いのですが、京大はその両方に挟まれて、結構浸食されているという状況が見て取れると思います。

受験生の気質の変化という話もあります。スライド 11 から 13 に示したグラフは 15 年前、1995 年と去年調査した受験生対象の意識調査の結果です。大学進学で何が変わったかという、減少したもの示してみると、教養・視野の拡大、専門知識・技術の取得、より深く勉強するため、人格形成を図るといった前向きな理由が減ってしまっていて、就職に有利、学歴取得など 15 年間で実利主義に変わってしまいました。それから、大学選定の基準も、大学のイメージだとか、所在地だとか、それから知名度が増えていて、意外と就職状況とか、先生方が一番売っておられる教授陣とかカリキュラムとか入試科目は余りにしない。たとえば、就職はどの大学でも厳しいことには変わりはないのであまり気にしないのです。イメージとか、家から通える、知名度の高い大学、こういうのが今の受験生が大学を選ぶ基準になっています。

もう一つは保護者との関係です。保護者と意見が合わなかったらどうですか。15 年前は 3 分の 2 の受験生が自分で決めます、自分の希望を押し通すと回答しました。それが、今は半分以下になりました。保護者と妥協するに従うというのが半分以上です。それから、大学合格には保護者の協力が必要ですかという問いに対して、肯定的な回答は 15 年前では全体の 3 分の 1 です。それが、今は半分が、保護者が協力しないと大学には通らないと思っている。保護者の関与が非常に強くなったというのが今の特徴です。

そういった受験生の気質の変化をスライド 14、15 にまとめてあります。先ほども天王寺高校の先生もおっしゃったとおり、今の生徒たちというのはマニュアルや答えを欲しがります。大学教育とは相反するところに今の高校生がいるという状況になっています。それから、国語力、計算力の低下です。また講義を聞くというのは板書を写すことだと思っています。板書が少ない先生は下手くそな先生だと思っている。予備校でもきれいな解答のプリントを配れという時代になってきている。それから自主性が乏しいです。どことは言えませんが、いろいろ週刊誌でとりあげられる、進学実績が近年伸び

てきたような中高一貫校出身の生徒がより顕著な傾向です。「このとおりにやらない」「塾も予備校も行かなくていい」「うちの高校いうとおりに従ってやればいいよ」と育てられたので、予備校に入学しても、「予備校では宿題はないのですか」と聞いてきます。大学に入っても多分一緒でしょう。浪人すれば予備校でこういった生徒を預かることとなりますが、現役で入学すれば先生方がお預かりになるという話です。保護者も大学合格が最終目標です。その先を考えている人は意外と少ないです。

最後に、スライド 16・17 で繰り返しになりますが、京大入試について少しだけ、やってほしいことをまとめました。まず、学部ごとに入試科目や配点が異なることのはやめてほしいです。京大に行きたいという生徒を京大に行かせたいのですけれども、法学部から経済学部へ志望変更する場合には、経済学部は科目選択の制約の少ないので問題ないのですが、経済学部から総合人間学部への志望変更をしようと思ってもセンター試験で公民を受験しているとうまくいかないといったケースがある。それから、センター試験で得意科目を受けられない制度はぜひやめていただきたい。第 1 回解答科目では苦手なものを受けなさいという文、法、総合人間科学部。一番得意な理科の科目を二次試験に残しなさいという医学部医学科。こういった矛盾を解消するために、センター試験と個別試験の関係をもう一度考え直していただきたい。苦手なものから受けなさいなんていうのは、一番教育的でないやり方です。それから、受験生に対して挑戦的な数学の出題範囲です。高等学校では、数学 C は 3 分野から 2 分野を選択して履修してします。それを京大入試では 3 分野とも出題範囲に指定されています。また、過去の指導要領の内容が出題範囲の目安と選抜要項に書いてあります。受験生は昔の指導要領などは知らないです。東大でも平気で現行指導要領の範囲を逸脱している出題があります。たとえば、確率で条件付き確率などという範囲内かどうか不透明な分野でも無視して出します。でも、事前にも言いません。事後に何か突っ込まれたら、「そうでしたか」と答えています。京大もそういった大人の対応をぜひよろしくお願いします。

それから、選抜要項がわかりにくいです。経済学部、薬学部薬学科、工学部、農学部の入学定員の内訳に若干名と入っています。何かわからなくて、京大に問い合わせたら外国人枠らしいのです。そういったものはあえて書かなくて結構です。逆に若干名どこか裏から入学するので、一般の募集人員が減ってしまうのではないかと思う受験生とか保護者がいるのです。東大も同様の制度はあるようですが、どこにも書いていないのです。

お話したようなことは関西では当たり前で、天王寺高校の先生などは、「そんなことわかりきっている」ということばかりかもしれません。しかし、京大が学生を全国区で集めたいのならば、絶対やめられたほうがいいです。全国的には煩わしい入試とされています。結局は、東大、一橋大、東工大は入試制度が簡単なのです。今の時代、保護者がうるさいです、ちょっとおっかない保護者も多くなっています。進学指導で下手なミスなど起して「受験できなかったのは先生のせいだ」と言われることを恐れる高校の先生も多いと思います。どうしても、楽な指導ができる大学を勧めようとしません。すると、京大はみすみす優秀な受験生を逃していると思います。

最後、結論でございます。私は関西での生活が長かったものですから、その時は思わなかったのですが、東京で勤務して 5 年。関東や全国で、京大が煩わしい大学、難しい大学とされていることがわかりました。しかも、入試問題じゃないですよ。入試のシステムが難しい大学とって、食わず嫌いで避けている高校の先生や受験生がたくさんいます、ぜひ、こういう状況を改善していただきまして、たくさん優秀な受験生を受け入れて、優秀な学生を育成していただきたいと思います。

失礼な物言いが多く失礼しました。私からのご報告はこれで終わりたいと思います。どうもありが

とうございました。(拍手)

森脇 ありがとうございます。非常にありがたいお言葉をいただきましたと思います。後でまたその点については議論したいと思います。

続きまして、経済学研究科の岩本先生からご報告をお願いいたします。

岩本（経済学研究科） 経済学研究科の岩本でございます。

非常に挑発的な石原さんの問題提起の後に、言いたいことも皆さんたくさんおありじゃないかと思ひますし、私もたくさんあるのですが、ちょっと違う角度から私は時間をいただきまして問題提起をさせていただきたいと思ひます。

先ほど森脇理事補からもご案内がありましたけれども、私自身これまで何回か幾つかの局面で高校教育ということにかかわりを持ってきました。そういうことで私も今回ここに出させていただいていると思ひますけれども、まず一番最初のかかわりというのは、もう時効というか、守秘義務が切れているから言ってもいいのだと思ひますが、約 20 年ほど前に、入試センター試験の出題委員を 2 年間しまして、ある公民科目の出題を 2 年間、駒場に通って携わりました。当時、不幸の手紙と我々は言ったのですが、そういうものが来てまして、不幸の手紙と言うぐらい、こういうことに携わるとは非常に大学の教員としては負担であるという意識が当時においても、今でもあるということが、本日こういう場を設けなければならない一つの根幹の問題であると私は感じています。

もう一つのかかわりというのは、その少し後だと思ひますけれども、高校生の公民科目の教科書を執筆させられました。これもさせられましたと私が表現しているように、非常に負担な業務で、私の恩師の伊東光晴という先生がずっと携わっておられましたので、その関係で、当時私もまだ若かったので、若い人間で執筆してもらいたいということで、何年間か携わりました。何年間か携わったことによって、当時学習指導要領なんかを一応読みましたし、文科省の検定というのがどういうものであるかということは身をもって体験しました。

高校の教科書というのは大学の先生が執筆しているのです。現場の先生との往復でその教科書は成り立っていて、まさに今現にある高大接続の現場と言ってもいいかもしれません。しかもその中には学習指導要領という制度が絡んできて、文科省の検定制度、国の制度が絡んできます。そういうところにいた立場からちょっと言わせてもらいたいということです。

また去年から膳所高校のスーパーサイエンスハイスクールの運営委員にも携わっています。膳所高校のある社会科の先生から、滋賀県社会科の先生に対して講演をしてもらいたいということの依頼がありましたので、1 日だけ、2 時間ぐらい話す機会がありました。今日のお話というのは実はそのときに使ったパワーポイントがほとんどで、そのときのタイトルは、「日本における公民教育のガラパゴス化について」というものでした。先ほど申しましたように、センター試験にかかわって公民の教科書も執筆したことがありますが、実は公民の教科書の執筆はもうやめました。ある出版社から続いて書いてくれと言われましたけれども、相当絶望しましたので、執筆が負担だということ以上に、執筆そのものが絶望的な気がしましたので、やめました。



私の結論というのは、ここに書いてあるとおりです。高校教育と大学教育の連続と断絶があるのかというと、ほかの科目は私は知りませんし、公民科目というのは恐らく二次試験にも京大では課していませんので、社会科でもマイナーな科目かもしれませんが、連続性なんて全くないというのが結論で、断絶しかない。そこに書いたように、文理共通の英語とか数学とか、理系の物理、化学とか、あるいは文系の地歴科目、特に京大の文系で課しているようなB科目、地理、日本史、世界史というのは、私は専門ではないのだけれども、大学においても連続性は恐らくあるだろうというふうに教科書を見て思いました。ただし、先ほど言ったように、政経の教科書、あるいは現社の科目、倫理は知りませんが、経済学だけとってみれば現状では断絶しかなくて、これは日本の経済学教育にとっては致命的な欠陥であって、この致命的な欠陥をつくっているのはいろんな制度ないしは人の共犯関係ではないかというふうに、私自身は乏しい高校の教育との関連で思っています。

これは去年のサンデー毎日の3月17日に松本総長が書かれた、伸びきったゴムというのが実は松本先生が言われたいことだと思のですが、タイトルは「入学までに学んだことはすべて忘れてくれ」。高校の先生や予備校の方もいらっしゃる中で非常に失礼な話だと思ったのですが、私も少なくともさっき言った自分の専門に近づけて話をさせていただいたら、こういうことにならざるを得ないです。もうちょっと具体的に申し上げますと、絶望的だと書きましたが、何が絶望的かというと、驚異的な暗記量なのです。恐らく地理とか世界史とかも年号とか暗記しなければいけないことがたくさんあるかもしれませんけれども、この山川出版社の用語集で経済だけで数えてみたら1,000語あります。これはグルゴリー・マンキューの『プリンシプル・エコノミクス』ですが、日本では3分冊になっていて、ノーベル経済学賞を取ったスティグリッツのも3分冊あって、そこにはグロッサリーというのがついていますけれども、それでも約450語です。大学で覚えなければいけない経済用語が450語であるのに対して、高校の経済分野で覚えなければいけないのは1,000語あるわけです。これは一体何たることかとまず思いました。

これは政治経済の最新の検定教科書、通ったばかりのホヤホヤのもので、パート1は政治、パート2が経済になっていまして、その経済のほうの第1章です。第1章の最初のページです。まずタイトルが「資本主義経済の発展と社会主義経済の変容」となっているのです。ここは経済の先生も3~4人いらっしゃるのはわかっているのですけれども、唾然とするのです。これでびっくりするのは、資本主義経済と書いてあるのですが、実は後からお見せしますが、これとは別に市場経済という言葉がついてきます。山川出版社の本を見ると市場経済と資本主義経済と違う定義がなされています。私なら多分、市場経済と計画経済という書き方をすると思います。社会主義経済は変容したそうです。私なら崩壊したと書きますが、やはり資本主義経済と社会主義経済という言葉が好きなんですね。驚くべきことは生産手段の私有という言葉です。生産手段の私有という言葉が高校生にわかりますか。これが経済の一番最初の冒頭に書いてある文章なんです。後からアメリカの高校生が使っている経済の教科書をお見せしますが、全く違います。今日最初から聞かせていただいているのですが、経済に一番近いお話、経済学者にわかりやすい話をしてくださったのは松本総長です。松本総長はこんな情報を知りたいですかね。こんな情報は全くどうでもいい話だと私自身は思います。歴史認識としてはいいかもしれませんが、でもこんなこと要るかなというのがずっと出てきます。

さらに驚くべきことは、人名が多い。アダム・スミスが出てきます。アダム・スミスぐらい出してもいいかもしれませんが。例によってマルクスが出てきます。ご丁寧にケインズが出てきます。見える国家、夜警国家、安価な政府、レッセフェール。こんな言葉をゴシックでいっぱい書いて、高校生

が理解できるかなど。もっと身の回りに起こっている経済現象というのは山のようにあるわけです。高校生が知りたいと思う経済現象は山のようにあって、それを議論しなくても、経済リテラシーと経済学的なものを見方をすればどのように理解できるだろうかというふうな考え方を全くしないのです。いきなり資本主義が出て、資本主義経済の弊害があって、変容があってと、続きます。市場経済、計画経済が出てきて、混合経済、資本主義経済の発展、貧富の格差、すべて知識なのです。すべてが知識の詰め込みであって、何ら経済学的な考え方で現在の経済現象を考えようかというかけらも何もないのです。最後に丁寧に、社会主義経済の特質と現状。現状ってあるのかな、知りませんけど。やはりマルクスやエンゲルスがあって、計画経済、ペレストロイカ、ソ連邦は消滅した。これで本当にいいのかなど。

ちょっとお見せするのを忘れましたが、フリードマンという名前まで登場して、そんなのどうでもいいじゃないか。アダム・スミスぐらいはいいかもしれません。マルクスもいいかもしれません。ケインズ、フリードマン、そんなの要るかなど。生産手段の私有、こんな言葉はどうしてわかるの。会社は株主のものだとなぜ言い換えたらだめなのかとか、じゃ会社は株主のものなのは本当か、会社は一体だれのものなのかというようなことを考えてみましょうなら話はわかりますけれども、生産手段の私有と言われて本当にわかるかなど。

市場経済、これが次の章です。ここで需要曲線、供給曲線が出ていて、本来は価格機構の話をするほうがいいです。価格機構を話して、例えばこれだけのメカニズムでどうということが身の回りの経済のことがわかるのだろうかという話をしたらいいなと思ったら、いきなり市場の失敗に来るわけです。問題点と限界という典型的なやつで、高校生はこれを見て太字のところを覚えるだけで、資本主義はこうだ、原則はこうで、問題点はこうだと覚えるだけで、ほとんど何のリテラシーにもならないのではないか。

これは私の専門の国際経済です。ここは重要な比較優位の原理を書いているのですけれども、驚異的に難解な数値例です。イギリスが毛織物を一反生産するのに 100 人、ポルトガルは 90 人、ワインを生産するのに 110 人、ポルトガルが生産するのに 80 人と書いてあります。なぜこのような驚異的に難しい数値例を出すのかといえば、これは 1817 年にデービッド・リカードという人がこの比較優位の原理を書いて、その原書にこの数値例が書いてあったからです。だからこれをずっと踏襲しているのです。これを踏襲している教科書は非常に多いです。私が書いたときに、これと違った、もっと簡単な 1 対 2 ぐらいの比率の教科書を書きました。高校の先生からリカードどおりにしてくださいとクレームがきました。また前と同じように、自由貿易の問題点を書いてあって、自由貿易はこうだけれども、保護貿易はああだと書いて、ポイントとして自由貿易の長所と短所は何だろうかと学生に問うているのです。わかるはずないと思います。絶対にわかるはずない。この両開きのページだけです。しかもまたここに、保護貿易政策を言った人はドイツのリストだと書いてありますが、リストなんていう名前は絶対に大学の経済学では教えません。保護貿易は重要ですからやりますけれども。リストはゴシックなのです。覚えなければいけないようになっているわけです。リカードもゴシック。

これは日本語訳ですけれども、アメリカの高校生が読んでいる高校の教科書です。全く違うのです。第 1 章は家計の経済学です。希少な資源をどのように配分するかというのが経済学の基本問題で、まずここから教えています。希少性を教えて、次は企業の経済学、その次は金融、政府、そして外国貿易というふうになっていてわかりやすいし、これが高大接続なのです。これのほうが続いているのです。覚えることなんかそれほどないです。例えばここに固定金利、変動金利とあります。これは、

日本の高校の教科書にはありません。難しいからです。これを書くと高校の先生が難しいと言われるのです。固定金利と変動金利には、いろいろ重要な考え方があるのですけれども、考え方とか、どのように考えてというのとは全然ないです。

なぜガラパゴス化したのかということをお自分なりに考えて、第1は、執筆者の問題だと思っています。執筆者の問題で、ここは割と重要だと思います。しかも若手の経済学研究者は、大学の初年次教育、ましてや高校の教育などに全く関心がない。自分の研究で手いっぱいであって、私ぐらいの年になって初めて後ろを振り返るということで、それが大きな理由だろうと思っています。

もう一つ、ここは自分が経験して制度的に非常に大きな問題だと思っているのですが、学習指導要領の縛りと検定制度です。もう20年前のことですが、最初に検定官に会ったときに言われたことです。本日は検定意見を申し伝えることが目的であり、ここは先生方と議論する場ではありませんと最初に言われました。ああそうですかと私は言いました。そういうところだなというふうに理解しました。

また第1、第2の理由と関係しているのですが、第3の理由も非常に大きいと思うのです。すべての教科書を読んだと言いましたけれども、ほとんどが変わりばえしません。ほとんどが変わりばえない金太郎飴型の教科書です。これは学習指導要領と検定の制約を受けているということだと思うのですけれども、過当競争という言葉があります。今は余り使わない言葉ですけれども、10社以上の出版社があります。10社以上の出版社があって、過当競争しています。その教科書の内容というのはほとんど、あんまり変わりばえがしません。これはいいことかなと。学習指導要領と検定制度は私としては制度としては事業仕分けして、もっと自由な教育内容にしたほうが望ましいと思います。ただし、最初から学習指導要領という縛りがあったほうが、みんながそこにのっかって、書くほうも教えるほうも、そういう基準があったほうがいいように思われているのですけれども、しかしそれだったら、結局出てくるものが全く経済学で言えば同質材にしか過ぎません。こういう縛りをなくして自由化することによって差別化されて、いろいろ多様化されて、最終的にどこに収斂するかといったら、消費者、高校生がどのようなものを選ぶかということによって選ばれたほうが私自身は望ましいというふうに思っています。決して私は市場経済万能派でも全然ありません。競争がすべて良いとも思いませんけれども、少なくとも今の高校の教育は非常にそういう意味で縛りが多過ぎるのではないかと。これは高校の先生方に言ったら余りにも失礼な内容なので、申し上げることはしません。

もう時間がなくなったのでここは簡単に申し上げますが、経済学部ではどういう取り組みをしているのかということをお簡単に話しますと、平成15年から21年にかけて、まずカリキュラム改革、学部改組ということをおずっとやってきました。カリキュラムは体系的で横断的なことをできるようにしてきました。多様性選抜という、今、入試制度の批判が経済学部に対してもあったと思いますけれども、非常に多様な選択をしてきて、初年次教育について理系数学と、あとは入門演習で、10クラスほど設けて、25人の学生を相手に1年度からやっています。アカデミックリテラシー及びできるだけ経済リテラシーというものにも主眼を当てた形でやっている。縦に1回生から順番に積み上げ式でできるようになっていて、かつ横のものも自由に取れるようになっていて、この辺から線が入っていることがだんだんと専門性が高くなっているという意味ですけれども、こういう取り組みを行っているところです。

本来はうちの部局のことをお話したらよかったのですが、またそれは後でパネルディスカッションのときにご質問があればお答えしたいと思います。ちょっと的外れなことだったかもしれませ

んが、以上で私の問題提起とさせていただきます。ちょっと長めになりまして、申しわけありません。

(拍手)

森脇 ありがとうございます。教科書作成のときの恨みつらみがよくわかりました。

続きまして、医学研究科の千葉先生からご報告をお願いいたします。

千葉（医学研究科） 医学研究科の教育担当をしております千葉でございます。



私のほうはどちらかというと専門教育と一般教養教育との関係についてというお話をいただいていたので、今までの方々が主として高校から大学というのに対して若干ニュアンスが違っているかと思います。ですから、スペシフィックになりますけれども、主として大学の中で医学部の教育の問題点をこの機会にご紹介させていただいてディスカッションいただきたいのと、これを聞いていただいて、先ほどの話ではないですけれども、誰でも彼でも医学部を目指すのは間違いだということを高校の先生にお伝えができればいいかなと思っています。

いきなり優等生的なことを書いていますが、京大の場合にはやはりトップクラスの大学ということもありまして、単に医師を育成するだけでなしに、指導的な医師、それから優れた医学研究者を育成するというミッションがあって、そういう意味では一般的な医学部に比べて多様性がある。いろんな人を育てんといかんというミッションがあるわけです。特にもう一つ重要なポイントは、我々が悩んでいるのは、ちゃんと患者さんが見れる医師。京大の卒業生の8割以上はいわゆる患者さんを診療する医者になるわけです。そうすると職業教育という側面が非常に強くて、ですから、ほかの学部はどうか知りませんが、できないやつはそれでいいじゃないかというのでは済まされない。したがって、上はしっかり育てないかんけれども、下の底上げというか、最低ラインの確保というのもしなければならぬというのが医学部の非常に大きな教育の問題点だと思います。

現在、医学部が抱えている教育の問題点というのはどういうことがあるかということ、一つは、医学、医療の急速な進歩で知識量がすごく増えている。ある報告によりますと、ここ10年で5倍になったということがあって、しかしながら、ここをマスターしないとちゃんとした医者になれんというのも事実なのです。昔、我々の時代は先輩がクラブで、勉強なんか医者になってからしたらええんやということをよく言われたものですが、正直、今では絶対それは通用しません。それは僕は学生にもはっきり言っているのですけれども、そういう問題点があります。それから、さっき言いましたように、職業人としての医師育成の社会的要請が非常に強くなってきた。とにかく失敗したら許されない。裁判沙汰も山ほどありますし、患者さんの要求も非常に強いですし、したがって職業人として失敗したらいかんという社会的要請ですね。

それで何が起こったかということ、ご承知のように10年近く前に、新たな初期研修制度というのができたわけです。これは非常に大きな問題点です。2番の話と絡むのですけれども、その結果、結局、大学院受験になる時期がずれるのです。2年間遅くなった。そういったようなこともあって、それから職業、つまり医師養成という社会の要求が非常に高いものですから、ここで満足するというか、こ

こが目標になってしまって、大学院受験者が減りつつあるという非常に大きな問題ができてきております。

それからもう一つは、こういった 2、3 と絡んで、医学部卒業生がその後、大学病院でいろいろ研修をしたり、あるいは大学病院というのは日本の医療の中心だったわけですが、それが医学部生の大学離れということが起こっていて、これは私はとりもなおさず日本の医療、医学レベルの低下につながるということを非常に懸念しています。それから、これは高校教育と関係するわけですが、平成 24 年度からご承知のように理科が選択になって、必ずしも生物を受けなくてもよいという制度になってきているわけで、そうしますと 27 年度入学生から、高校で生物学を学ばなかったという人たちが入ってくる。これをどうするのかというのが非常に大きな問題になっています。

これは非常にシリアスな問題なのです。どういうことかという、これは高校の先生にもご認識いただきたいのですが、以前は現役は 24 歳で卒業して、即、卒後研修に入って、卒後研修は自分の行くところをほぼ決めて行きますので、5 年間ぐらいお医者さんをするわけです。そうすると大体初期の研修は済んで、そこから大学院に入学する。4 年間過ぎて、留学する人は一番早くて 33 歳ぐらいで留学するということがあったのです。ところが、この新卒後研修制度になって、2 年間、全員義務として研修をなさよという時代になって、この 2 年間で私たちから言わせると必ずしも有効に働いていない。学生の延長だというので、僕らはこれは短縮すべきだということを言っているのですが、いずれにしてもその結果どうなったかという、これが 2 年間ずれ込んで、結局専門研修開始が 2 年おくれて、大学院入試が 2 年おくれてということになって、まともに行くと 26 歳で専門研修を開始して、31 歳で大学院に入学しますから、大学院を出たら 35 歳になる。こうなるとええおっさんになって、この間、結婚でもしてたらどうして食っていくんやということになるわけです。このようになり年いってから大学院に入学しますので、基礎研究とかに対してのモチベーションとか、それから経済的な問題、家族を養わなければならないという問題で、結局さっき言ったように大学院入学生が減っているわけです。ここから医者をしていたほうが儲かるやないかという実態になっているわけです。ですから、我々の最大の課題は、専門性の要求が増大する専門教育の期間、つまり専門教育というのは卒後の研修が長引く中で、いかに一般教養教育を行うのかというのが、今日の課題と絡めて非常に大きな問題になるわけです。

私があえて申し上げたいのは、余りにも長過ぎる、一応全部卒業するまでに時間がかかり過ぎるというのを解決しようと思ったら、これはどうしても初期研修の短縮、専門教育の前倒しですね。ですから、教養教育時期に専門教育を、これはいろいろ議論はありますが、前に持ってこないこの問題は解決できないと考えています。そういう意味で、特に初期のときに、そういったことも視野に入れたアーリーエクスポージャー、つまり、あなた方は医者になるのですよ、医学教育を目指すのですよといったようなことを教養教育の 1 年目からしっかりたたきつけるということが必要だと思います。それからもう一つは、先ほど言いましたように高校で生物を学ばない人たちが入ってくるという現実の中で、特に 1 年目に、いかに生物教育を充実したものにするかというのも必修課題となるわけでありませう。

医学部生の一般教養教育の問題点というのは、先ほど高校の方もおっしゃられたのですが、なんちゃってという話も出ましたが、成績がいいというだけで医学部を受験していて、医師になるという志を持っていない。それを大学に入ってからどうするかというのはかなり大きな問題で、これは根幹の問題で、高校だけでも解決できない、それ以前の問題だと思いますが、こういう問題が

非常にあります。ですから、昔の京大医学部数はほうっておいてもよかったけれども、今の京大医学部生はほうっておいたらあかんというのが現実です。

それから、あえて申し上げますけれども、そういう中で現在の教養教育が有効に稼働しているとは恐らくどなたも思っていないんじゃないと思うのです。この間オープンキャンパスがありましたけれども、そのときに300人か何百人、医学部のオープンキャンパスに来られて、私が話したのですけれども、すごく熱心に聞いているのです。えらい目が光っている。僕は4年生の授業をしているのですけれども、何かとろーんとした目になって、この2年間の間に後退したのと違うかというふうに思うぐらいのところがあって、遅刻はざらやし、欠席するし、服装はええ加減やし、態度は悪いし、カンニングの問題とか、これは教養教育以前の問題だと思うのですけれども、これは大学全体として1年目から非常にシリアスに受けとめないかん時代になってきたと思います。ですからこういうことがあると、自由に勉強せえ言うても、結局こういうことがあると破綻を来すということになると思っていて、私は非常に危機感を感じています。

先ほどちょっとお話がありましたけれども、ヨーロッパは大学は専門教育の場であるということで、アメリカは一般教育というふうに言われていましたけれども、医学部は4年間カレッジへ行ってから行きますので、これは基本的に大学院です。その後、大学院へ行くことはないわけです。したがって、そこで専門教育即、大学院教育みたいなニュアンスがあると思います。

そこで日本はどうするかということが求められるわけです。私は、やはり目的意識のない一般教養教育というのは余り意味がない。だから、君らは何になるかわからないけれども哲学をやっておきなさいとか、そんなふうに言われても今の学生さんは特に困ってしまうと思います。先ほど天王寺高校の先生がおっしゃられたけれども、やっぱり負荷を与えるような形で教育しないとちゃんと身につかない。それから、意義を説明しておかないかんということと言われて、僕は非常に重要だと思いますけれども、何で一般教育をするんやということがわからんとしてこれを押しつけても絶対だめや。そのためには私は1年目に病院に行かせて、こんなことをやっておるんやということを見せた上で、また一般教育に戻る。あるいは専門教育の前倒し、それからもう一つは、やはりここに挙げたように、医学部生の一般教育というのは患者さんを目の前にして、患者さんと対話したり、私は医学部というのはある意味で唯一、学生時代から外に向かって開けている学部だと思うのです、臨床実習に行きますから。そういう中で一般教育の素養というのを身につけてというのが非常に重要であって、だから一般教育をやっておかん専門教育に行ったらいかんというのは大きな間違いだと思っていまして、そういう意味でこそ専門教育を実地の教育も含めて前倒しにしたほうが、より有効に働くのではないかと考えている次第です。

生物の問題は、本当にこれは問題でして、それこそ高校の先生方とも一生懸命話し合わなければならぬ問題だと思っています。それは特に今回は触れませんでしたけれども、一応そういう提言をさせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

森脇 ありがとうございました。

では、最後になりますけれども、高等教育研究開発推進機構の舟橋先生からご報告をお願いいたします。

舟橋(高等教育研究開発推進機構) よろしく申し上げます。所属の高等教育研究開発推進機構は一般教養を担う部署です。

学外向けの広報誌「紅萌」に紹介して頂きましたが「全学向初修物理学」を担当しています。＜理工系お断り＞ですので、まさに教養としての物理学です。これを使って今後何か仕事をしようなどということの専門性を目指すのではない人に向けて物理を講じています。物理という非常に価値中立なくわかりやすい＞学問で、＜予想・討論・実験＞という構造、ここで実験と言っているのはちょっと抽象的な意味で、＜予想の正否を確かめる手立て＞というような意味でとらえていただければ、こういった構造が理工系に限らないということで、全学向の教養として学んでもらうに値すると思っております。



教養ということでは、運用力ということではない外国語としての数学、異文化理解のための外国語に触れて欲しい、ということもあります。＜理系の人間がどんなふうの世界とかかわりたいと思っているか＞ということです。京大の文系の学生は運用力がないかということ、京大の数学の二次試験も受けていますからかなりのレベルなのですがこんなことがあります。この講義の中で、天井から振り子を吊って＜その周期を条件を変えながら調べる＞というものがありますが、理工系の専門基礎教育のように先にさっさと運動方程式を解いてしまうのではなくて、現象的に進めていきます。吊る糸の長さを2倍にして予想を問うてから実験して見せます。「周期が2倍になると思ったら、そうじゃなくて1.4倍とは！」、すぐに長さ3倍にし予想と実験を積み重ねます。「今度こそ2倍？、えっ1.7倍なの!？、これはもしかしてルートに従っている？」というストーリーをわざと演出することによって、彼らの全員ではないかもしれませんが、必ず典型的に、「もう受験でおさらばしたと思ったのに、ルートにこんなところで出会うとは」と思わぬ再会の驚きを開陳してもらうことがあります。これは珍しいことではありません。「あれは数学の虚構であって、世界にあるはずはないと思っていたら、目の前の日常的な現象が自然科学の法則に従っている上に、ルートという数式できれいに書いている。」と、新しく異文化＝＜日常の中の物理現象とそれを支配する数学的法則＞の在る世界観、に接してくれたなと思える手応えを得ています。

我々の部署は、「接続」ということで言うと、高校生だった入学生が最初に出会う窓口として、特に共通教育推進課の職員の皆さんはガイダンスを初め、学生さんに向き合っていただいています。機構の最近の大きな変化としては、我々教員が実人員で配置されています。職員さんにいろいろ Web ページのお世話もしていただいていますけれども、最近、機構の専任教員のページもつくっていただきました。機構のページ

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/>

を普段あまりごらんになっていないかもしれませんがたまにはご覧下さい。

こういったメンバーでやっております。

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/teachers.html>

まめにいろいろ会ったり、メールであったり、議論を交わして、機構の担うべきものを意見交換しております。

この後のディスカッションの時間がどれぐらいあるかわかりませんが、人よりも1年長く学

部生活を愛し、人よりも2年半ほど大学院生活を愛し、それ以前に、京大に入る前に1年ぐらい余分に京大へ向かって受験勉強するというのを愛したぐらい長いこと京大に居りますが、「古き良き京大」というものを擁護するような立場から発言したいと思います。

あと、一般教養の中で重要な項目としてポケット・ゼミが挙がっております。多くの先生方に担当していただいておりますが、今後やってみようかなという新しい方のためにも、ポケット・ゼミの紹介のページが充実しておりますので、ごらんください。

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pocket.cgi>

下のほうにざっと科目が出てきます。今170前後提供していただいていると思います。私も、「“仮説実験授業”をたのしもう！」ということで、この前期と、着任した昨年度の後期に担当しました。

http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pocket.cgi?action=course_detail&id=1577

これは後期の様子ですけれども、それぞれのゼミが、違ういろいろなスタイルでやっていますので、多様な試みができると思います。今は単位の出る学部が増えましたけれども、開設当初の単位とは関係ない、インセンティブが単位とは別のところにある、教員とゼミの参加者との間の学問的な学習意欲にドライブされた、いい空間ができていると思うので、そういう大事なところを残してほしいと思っています。

『共通教育通信 GE』は機構の共通教育推進課の職員さんが交代で編集に当たっていただいています。

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/link.cgi?t=PR>

こういったのも余りお目にとまっていなくてもいいかもしれませんが、新入生はそれなりに見てくれています。最新の号(vol.16)では、先ほどのポケット・ゼミの紹介もしてもらっていますのでごらんください。

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0305.pdf>

午前でも少し紹介いただいたかもしれませんが、機構の教職員と副機構長と分担して、4月の1週間、お昼休みに「履修相談室」を開設しました。この時期は各学部のガイダンスが終わってすぐ、そしてもうすぐ登録を確定させる、というような開講第1週に当たります。お昼休みに大変な長蛇の列ができてしまったらどう対応できるのだろうと心配していましたが、不思議なことに稼働率100%というか、空くと次の相談者がちょうど来るぐらいで、対応教員数と丁度つり合った数でした。数にして大したことはない、来訪者は全対象者に対して2.3%で、これは大変頼もしいことだと私は思っています。相談のテーマとしては教職課程履修についての詳しいことだったり、自由なコマに対してどう有効に使ったらいいかということだったり、非常に建設的な相談事が多かったように思います。「相談室」といったものがあるべきだろうけれども、これにとっても高い需要があっても心配なことだなど思っています。

今日はかなりしっかり教養教育のほうにフォーカスしているので問題ないと思いますが、いろいろ教育の議論があるときに、教養と専門基礎と専門と、どういった学生向けなのだという話が混乱してしまうといけなないので、その辺ははっきり分けた議論がしたいなと思っています。あと、私は教養教育を担当するに当たって、受験生根性をどうやって早く洗い流してやって、一緒に<研究>ができる人たちにしていくのかという問題意識でいます。でも今、法学・医学・神学という昔からの学問、Ph.Dではない学問、に関してはその社会的使命から、ちょっと別に考えていかなければいけないのかなど、先ほどのお話を伺って少し思いました。また、経済学だとどうなのでしょうね。高校生では難し過ぎるというようなことがあったりするのでしょうか。高校に限らず、初等中等教育の内容を、本当にど

うしたらいいのかという根底的な議論が必要なような気がいたしました。

最後だったので、質問がてら余分に話させてもらってごめんなさい。(拍手)

森脇 どうもありがとうございました。そしたらパネリストの先生方、また壇上のほうによろしくお願いたします。

それぞれの先生方からの熱の入ったご報告がありまして、時間のほうが予定外に過ぎてしまいました。これからディスカッションを少ししたいと思うのですが、もう残り時間がないので、なかなか皆さんにいろんな意見を聞くというわけにはいかなくなっております。そういう意味で申しわけございません。

それで、まず最初に松本総長から、それぞれのパネリストの先生方からのご報告を聞いてどのような感想をお持ちになったかというご意見をいただけるとありがたいと思いますが、どうでしょうか。

松本 時間が限られている中、時間をちょうだいいたしまして、ありがとうございます。私は高等学校の先生と話をすることもございますが、具体的な話というよりも全般的な教育論について話をさせてもらうことが多いのですが、今日は山口先生から、高校の科目がいかに減っているか、必修科目が減っているかという話を聞いて私も愕然といたしました。大学に入ってからしっかりしごいてくれという話でしたが、やはりこの国の将来を考えると、基礎学力をもっと若いときからきっちりと学べるようにカリキュラムを組んでいただきたいという印象を非常に強く持ちました。



それから石原先生は、京大の独自性を浮き上がらせていただいたと思いますが、入学試験の制度そのものが全国の大学の中で非常にユニークといえましょうか、変わっているといえましょうか、独自なんですね。これに対する良さももちろんあるでしょうが、問題点とすればこういうものがあるよということをおっしゃっていただきました。これは各部局にお帰りになったら、ぜひ広く大学の入試制度を考えると意味でご検討いただければと思いました。私も大学全体で教育をどうするかということをお考えと同時に、入学試験をどのようにしていったらいいかという議論の発端の一部になればと思って聞かせていただきました。

そして、学内から岩本先生、千葉先生、舟橋先生、それぞれの立場からご講演いただきました。私も、ふだん感じていることをはっきりと伝えていただいたと思っております。

1点だけコメントというよりも、大学に入ってアンラーニングしてくださいというのは、高校の教科内容を否定したものではありません。詰め込み教育を行うと、それ以外のところが見えなくなるというところがあるので、もう少し自分の中の知識を消化して、そして疑ってみるということも必要ではないかということをおっしゃった言葉があのような記事になって出ております。しかし、頭の中に入った記憶というものをどう組み合わせるか、自由に組み立てられるか、持っているものが不都合だということがわかるような考え方を1、2回生のうちにしっかり勉強していただきたいと、私はそのように希望しております。専門になりますとまた非常に忙しくなりますし、しっかりと教育をしていただいていると思いますが、教養と専門の関係、教養と言っていいのか一般教育と言っていいのか

わかりませんが、その両方を全人教育、人間として学んでおくべき事柄として漠としてとらえるとしても、それをどのようにしたらいいか。意味のない何となくふわふわと勉強するのはやめたほうがいいという千葉先生の明快なご意見もございましたが、私もやはり同じ勉強をするのであれば、きちっとした意思を持って勉強していただけるように初年次教育等をしっかりとやりながら、大学全体でのカリキュラムのあり方について、現在、淡路先生を中心に検討していただいておりますが、全学部が参加しながらぜひやっていただきたいと思っていますところでございます。

皆さんありがとうございました。

森脇 どうもありがとうございました。

今日は天王寺高校と駿台予備学校から来ていただいております。山口先生から貴重なご報告がございました。それにつけ加えて、天王寺高校で卒業生の声というものを聞いてきていただいております。武井先生、よろしいでしょうか。せっかく来ていただいたので、ご報告をよろしく願いいたします。

武井（大阪府立天王寺高等学校） 失礼します。大阪府立天王寺高等学校進路指導主事の武井と申します。京都大学様におかれましては、本当に本校の生徒をたくさんご指導いただきまして、ありがたく思っております。どうもありがとうございます。



本校の卒業生なのですけれども、天王寺高校のほうに戻ってきていろいろな話をしてくれます。大学に入ってよかったという話もありますが、幾つか私どもが生徒から聞いたことだけですので、それがすべてとは思いませんが、こういうことがもしもあるのであれば、ちょっとお考えいただいたらありがたいなというところだけお話しさせていただきたいと思います。

まず初めに、卒業生というか、彼らは高校時代どういう状況であったかということなのですけれども、先ほど言いましたように、なかなか今の子どもたちは学習のストラテジーというか、やり方というのは塾とかで小さいころからたたき込まれているのですけれども、一般教養というものは私たちが見てもびっくりするようなところがあります。例えば私は英語の教師なのですけれども、英作文で「私は山中湖に行きました」というふうな文章を英語にしなさいと言ったときがあるのですけれども、山中湖というのを作文で「Lake in the mountains」と書いてあったのです。Lake in the mountains って何と聞いたら、先生、山中湖（さんちゅうこ）じゃないんですか。何それと聞いたら、これは山の中にある湖の総称じゃないんですかと言われて、違うよ。山中湖というのは富士五湖の一つの云々かんぬんという話をして、えっ、そうなんですかということで、いわゆる英語の文法面であるとか英作文の力はあっても、そのメッセージを伝えるというところの大本の知識ですよね。それは英語力ではないと思うのですが、そういうところがない。

もう一つは、これも一つの英語の文章なのですけれども、やはり京都大学様に入学したいと思うような生徒はかなり抽象度の高い文章を一生懸命読んでいます。正直、教科書レベルを越えたような、自然科学、人文社会、哲学、いろいろな文章を読んでいるのですが、その中にこんな文章がありました。「昨今の環境学者たちは悪いことばかり言っている」というふうなことを言いたいときに、「オオカミと叫んでいる」というのがあったのです。批判的に昨今の環境学者たちのことを書いている文章の中の比喻だったのですが、「オオカミと叫んでいる、これはどういうことだろう」といったときに、

子どもたちが「オオカミが生態系を荒らしている」と答えに書くのです。違うよ。オオカミというのは、昔、イソップ童話というのがあって、オオカミ少年というのがいて、オオカミが来たといつも叫んでいて、周りの人を騙して、本当にオオカミが出てきたときに助けてもらえなかった、そういう寓話があるのだけれども、そのことに例えているのだよと言ったら、何かよくわからない顔をしていたので、イソップ童話を知っている人って手を挙げさせたら、半分ぐらいしか手が挙がらなかったのです。イソップ童話は別に学校で教えることではありませんけれども、やはり学力というものと、先ほども本校の教頭が申しましたけれども、相重なって本当の自分で考えられる知識になるのではないかなと思います。

そういうふうな子どもたちなのですからけれども、やはり京都大学様にお世話になりたいということで一生懸命勉強して、抽象度の高い文章も読み、そして合格をいただき、意気揚々として入るのですが、一つだけお願いなのですからけれども、帰ってきた生徒がたまに言います。「先生、英語の力が落ちた気がします」「何それ」と聞いたら、「何かちょっと」というふうなことです。やはり彼らの知的好奇心に合ったようなことを教養の時間に、英語というもの、『英語は目的ではありません、手段だ』とずっと言っていますので、そういうものを通じて広げていただきたいなと思います。本校の生徒たちは貴学に大変な期待を持って、あこがれて入ります。その中で、『さすが大学というところは違うな』というふうなことを初年度に示していただければ、彼らの知的好奇心は一層広がって、よき専門教育につながるのではないかなと思います。もちろんすばらしい教育を受けているということも言っています。ポケット・ゼミに関する評価はとても高いです。「ポケット・ゼミ、先生いいですよ、みんな取るように言ってください。でも、あれは競争率が高いのですよね。」そういうふうな話も聞きました。あとは、ほかの語学に関しても、「先生、僕の習っている語学の先生はすてきです。」とか、「ドイツ語の先生の熱意をもって僕は学問の楽しさを知りました。」という声もありますので、そういう意味で、若い者たちの知的好奇心をかき立てるような講義をしていただけたらなと思います。ありがとうございます。(拍手)

森脇 どうもありがとうございました。英語については少し耳の痛い話ですがけれども、今後努力をしていきたいと思います。

それからまた、今日は石原さんに来ていただきましたけれども、東アジアというところを見てみますと、韓国、中国というところが大きな国でございますけれども、そちらのほうにおいても入試の制度というのがかなり変わってきております。そういう意味において、日本の入試制度というものはある意味において戦後からほとんど、基本的な形というのはそう変わってきていないという状況でございます。

石原さんに少し意地悪な質問をしたいと思いますが、これから日本というものを考えてみて、このままの入試制度を続けていくほうがいいのか、それとも今後、秋入学等というのが東大あたりから出てきていますけれども、そういうのを契機に、別の入試制度というものを模索すべきだと思いでしょうか。そのあたりのご意見を、入試のプロという立場からお聞かせいただけるとありがたいのですが、いかがですか。ちょっと難しいお話ですがけれども。

石原 入試自体はもう既に変革期を迎えていると思うんです。780 ぐらいある大学で、実際本当の意味で入試が機能している大学は国公立大学の大半と私立大学の 100 大学ぐらいですよ。あとは実際には全入ですよ。AO 入試というのは、筑波大学とか東北大学はアドミッション・オフィス入試ですがけれども、多くの私立大学ではオールオーケー入試で、名前を書ければ入学できるというように、

もう既に入試というものが現時点でも一括りで括れなくなっている。先ほどもちょっと申しましたが、地方の医学部地域枠の AO・推薦入試でも比較的簡単に合格できるようになっている中で、私の理想では、旧帝大クラスではセンター試験は薄く軽くやっていただきたい。全然課さないとな今の受験生はモチベーションが上がらないので、勉強しなくなりますから、5教科7科目を勉強させるのはいいと思うのです。ところで、京大の個別試験の問題は非常にいいと思っています。これは私一人の意見じゃなくて、うちの各教科の講師もみんないい問題だと言っています。そこで、個別試験をもう少し全面的に出していただいて、そちらでとるところを進めていただいて、そこにユニーク性を出していただけたらいいと思います。具体的に言うと、センター試験の得点 900 点をそのまま利用して、それを 9 分の 1 に圧縮、そんなところでは学部ごとに変えない。あとは個別試験でいろんなことを出題していただく。そこにはまさしく京大のアドミッション・ポリシーを反映させて、こういう入試で、こういった能力の学生が欲しいのだというメッセージを全面的に出していただく。

そういう面では東大の後期入試というのは非常に私はおもしろいと思っています。文理共通問題で 100 人を選考しますが、合格者は理科系が 8 割ぐらゐを占めます。でも、進学先は科類の定員どおり文科系 4 割、理科系 6 割となるというのがおもしろいと思っています。

ところで、京大文系学部の個別試験では、まさか採点が大変だからとかいう理由ではないと思うのですが、地歴を 2 科目課さずに 1 科目にしておいて、センターで他の 1 科目代替するというやり方です。しかし、ここは堂々と京大らしく地歴 2 科目を個別試験でどんと思い切ってぶつけていただきたい。科目負担が重いか問題が難しいとはいうことで、今の難関大志望者の意識を考えると志願者数は減りません。絶対に減らないです。ですから、そういう形で入試がおこなわれることを期待したいと思います。

森脇 ありがとうございます。ほかにいろいろ聞きたいこともありますけれども、時間が押している都合で、大高接続という意味において、今日は天王寺高校から来ていただいているのは、大阪府のほうでグローバル・リーダー・イン・ハイスクール、GLHS というような大阪の府立高校のトップ 10 校が集まって、グローバルな人材をどのように育てていくかということの組織の取りまとめを天王寺高校でされているということからです。そういうところに出ていきますと、スーパーサイエンスというか、SSH のほうで理科系の高校生が少しアドバンスなものを学ぶための教材というのは比較的準備ができるが、問題は文系の科目であるとおっしゃられます。人文社会であれ社会科学であれ、少しそこら辺のノウハウがないので、大学の先生方のお知恵を借りたいというご要望があります。そういう意味においては、岩本先生、いかがでしょうか。岩本先生は多分いろんなところでそういうことをされていると思うのですが、グローバル人材を育てるという意味において、文系の教材というものをこれからどのような形で発信していけばいいかということ、そこら辺のご意見をもしお持ちであれば、少し教えていただければありがたいかと思います。

岩本 予想外の質問で非常に困っているのですが、経済学に限って言えば、至るところに経済現象というのがあります。それを先ほど言いました高校の教科書、暗記型のものでなくて、できるだけ経済リテラシーを使ってどのように説明できるかといったようなことはできると思います。例えば私自身が、膳所高校から毎年何人も京都大学に来ていただき、1 クラス 15 人ぐらいの授業を行い、そういう問題意識を持って私自身がパワーポイントをつくって高校生に聞いてもらい、その後授業評価もしてくれます。割と興味を持って聞いてくれます。いわゆる高校までの暗記科目だと思っていた政経とは全く違う、目からウロコではないのですが、確かにこれはおもしろいという形で聞いて

くれます。そういう形で、少なくとも私の分野では可能かなというふうには思っています。

森脇 ありがとうございます。だいぶ時間もなくなってきましたので、これから会場のほうからご質問等がありましたら、あるいはさっき私が言いましたけれども、高大接続のための特に文系の教材、人文社会であれ社会科学であれ、私だったらこんなことができるんだよというようなご意見を含めて、それ以外にでもパネリストの方々に質問等があれば、どなたかしていただけるとありがたいと思うんですけれども、いかがでしょうか。

小山田耕二（高等教育研究開発推進機構） 大変ためになるお話をありがとうございました。

午前中のお話の中でも、高大連携の一つの柱として、高校の段階で大学の単位を取るといようなお話が1点あって、アドバンス・プレメントと言うのでしょうか、そういったものがうまく機能しますと、入試という柱のほかにもう一つ、先取りしてというのでしょうか、大学の授業、すばらしい授業というものを経験するというのがあり得ると思うんです。具体的に、特に天王寺高校の先生方とか、予備校のほうでもそうだと思うんですけれども、そのようなご検討をされたことがあるのかどうか、ちょっとお伺いしたいのですが。

山口 失礼します。まだ今あるのはSSH というようなので、高大連携というので、今、実際、集中セミナーとかで、京都大学ではなく主に大阪大学の先生に、夏休みとかに本校へ来ていただいて1日4時間ぐらいぶっ通しで物理とか化学とかの講義を集中的にやっていただいています。それを何日間かやる。今ちょっと発展的に大学のほうにも生徒が行ってということで、1単位ですけれども、そういうのを単位化としているというのは実際にあります。今、先生がおっしゃいましたように文系にもそういうのがどんどん広がっていければ非常にモチベーションがあがると思います。こつこつと大学入試めがけて1年生から英語や数学を勉強するのですけれども、その先には、大学へ行ったらこんなすばらしいいろんなことができるんだよと、やはり志を非常に高く持ってほしい。それが今やっている受験勉強とかそういうのにもつながってきます。ですから、ぜひそういうのは見せていただけたらなと思っております。

小山田 ありがとうございます。先ほど単位というお話でしたけれども、それは大阪大学に入ったときに単位になるのでしょうか。

山口 それは高校での単位になっております。

小山田 もしよければ駿台のほうから。

石原 予備校には単位がないものですから、大学の合格通知しか生徒に与えるものはないのですけれども。

ちょっと観点は違いますが、先ほど私も言ったように、今、非常に固定観念をもって浪人してきて、自分の進路というのを非常に狭く持っている受験生が多いものですから、それをぶち破るためにも、関西でしたら京大、阪大、関東ならば東大、一橋大、東工大、早慶大の先生方が来ていただいて、講演をお願いしています。

私どもから講演をご依頼するときには、大学の説明はいいから、受験生にはわからなくてもかまわないから、本気で生の大学の講義に近い内容を話してほしいとお願いしています。また、医学部の先生には、医学部がいかにつらくて、汚くて、しんどいものかというのを話してもらいます。もちろん、女性であるとか、ちょっと聴覚に不自由な生徒でも医師への道は開けていることは話してもらいますが、むしろ厳しいことを覚悟して、それでもほんとうに医学部に行きたいものがめざせばよいということです。

かつて、実際に駿台での講演を聞いたことがきっかけでインド哲学をやりたいといって東大に進学した生徒もいます。そういう意味では、広い視野を開かせるいい機会になるので、大学の先生方、特に第1志望として狙っている生徒が多くいる大学の先生方から本物の学問の一端を見せていただく機会をできるだけ多く持てるようにしています。

森脇 もうだいぶ時間が迫ってきましたので、あとお一人ぐらいご質問があれば受け付けたいと思いますけれども、どなたかおありでしょうか。

古賀崇（附属図書館） 石原さんへの質問ですけれども、スライド3番目で一つ奇妙に思ったのが、国際関係の志望者が増えている一方で外国語の志望者が大きく落ち込んでいるというのは何となく矛盾しているような気もしますけれども、実態は石原さんから見てどういうことなのでしょう、

石原 ツッコミが来るといったところでございます。ご説明申し上げます。

今年から東京外国語大学が学部の改組を予定いたしております、従来、外国語学部1学部だったのですが、言語文化学部と国際社会学部の2つの学部に分かれます。私どもの模試の学部系統分類では国際社会学部というのは国際関係系に分類している関係で、集計上は外国語が減って国際関係が増えています。合わせれば10%ぐらい増えているので、外国語と国際関係を合わせた系統でグローバルズの拡大ということ意識している成績上位層の気持ちは高まっているという形でございます。

古賀 ということは、外国語を使って仕事をしたいという志望者は増えてはいるということですか。

石原 まさしくおっしゃるとおりでございます。

古賀 ありがとうございます。

森脇 ありがとうございます。

最後になりますけれども、淡路理事から一言おありということで、よろしく申し上げます。

淡路 いろいろと耳の痛い話から役に立つ話まで聞けて大変よかったと思っています。ぜひ教育に反映させたいと思います。

先生方や職員の方々に1点お願いがあります。この間、全国を回り、高校や予備校にも寄せていただきました。福岡県の修猷館高校を訪問したとき先生方から言われたことは、「私どものところでは東大に行けないから京大に行くという高校生は若干いるとは思いますがほとんどいない。なぜかという、卒業生が機会あるごとに戻ってきて、自分は今京大でこんなことをやっている、京大はこんなところだよと生徒に直接語ってくれる。そのことによって京大を目指す生徒が多い。」これは京大を知っていただく草の根になっていると思います。

先ほど岩本先生もおっしゃったように、先生方が高校に出向かれる折には、授業をやっていただくなり、ご自身の研究内容をご紹介いただくと大変有難い。高校生の実像もわかりますので、教養教育や入試等に役立ちます。このような経験が全学に共有されますと教育論議がかみ合い、集団知が得られるのではないのでしょうか。

この間、この高校にも行った、あの高校にも行ったという先生方にお目にかかりました。岩本先生もいろいろな高校から声をかけられ、高校教育との接続についてよくご存知だと思います。これは大事なことだと考えます。

当然のことながら、このような大高接続には何らかの形で大学が支援するシステムを整備しなければならないと思っております。ここにおられる総長には、先生方の大高接続の活動をいろいろな仕組みでご支援くださいますようお願いする次第です。

森脇 ありがとうございます。

総長、お願いします。

松本 今日の議論は高校と大学、あるいは大学の中の教育ということを考えている先生方がパネリストに参加していただきましたけれども、全国レベルで見ますと、本当に氷山の一角を我々が知ったということだろうと思います。

京都大学は、いろいろ要望が出ましたように、大学の外側の意見も取り入れて、自分たちが考え直すという機会にぜひしていただければと思っています。例えば外国語、あるいは国際関係で仕事をしたいという人が増えているのに、京都大学では英語で授業をしてください、できるだけしてくださいと私がお願いしても、なかなか学部単位ではイエスと言ってくれません。こういうことでいいのでしょうかと私は常々感じております。

それから、学部単位を取るということのメリットはあると先ほど申しましたが、デメリットもあるということも承知しております。それでは大学全体で入試制度をどうするかということを考える時期だろうと思います。予備校の先生も来ておられて、大学進学指導をやっていただいておりますが、高校の先生ももちろんやっています。ところが、最近は幼稚園から予備校化が進んでいまして、大学へ入るのが目的となっていないかという懸念が多く大学の教員でシェアされています。したがって、受験戦争あるいは競争というものが緩和されていく方向かもしれませんが、これでいいのかということをおもひは考えなければならない。センター試験をどう利用するかという話もご指摘がございました。しかし、もっと抜本的に入学試験とは何ぞや、大学教育の質保証をどこでするのか、入学試験だけであるのかという話も我々は重く受けとめたと思っています。

淡路先生から制度をいろいろ考えるようにと、高大接続のポイントについてもお話がございましたが、それは大学全体で皆さん方と議論しながら、ぜひ教育ポイントの低い大学として、ぜひもう一度実力を発揮していただいて、それを向上させるということに取り組んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

森脇 どうもありがとうございました。では、これで1番目のプログラムを終わりたいと思います。

司会 次のパネルディスカッションは15時40分から開始させていただきます。

(休憩)

高等学校における教育内容の変化

大阪府立天王寺高等学校
教頭 山口智子

2011年9月2日(金)
於 京都大学全学教育シンポジウム

＜必履修教科・科目、単位数の変遷＞

実施年度/学年等	普通科		専門学科		卒業単位数	特記事項
	必履修科目数	必履修単位数	必履修科目数	必履修単位数		
昭和26年度	6	30	6	30	60	1947年11月1日(旧制)から38年度まで
昭和31年度	10~12	48~61	9	39~55	85	必履修単位数の増加 英語・家庭が必修科になる 外国語が必修科になる 家庭が女子のみ
昭和48年度	男子 17 女子 18	88~74 70~77	14	科目 47~58 単位 48	85	必履修科目の増加 外国語が必修科から必修 家庭が女子のみ
昭和57年度	男子 7 女子 7	42	男子 7 女子 8	科目 27 単位 31	35	必履修科目の削減 家庭が女子のみ
平成6年度	11~12	30	11~12	科目 35 単位 30	60	社会・経済・文化・健康・総合・環境・国際・数で2単位の必修科目設定 理・数・英・国・家庭が必修科になる 理・数・英・国・家庭が必修科になる
平成15年度	13~14	20	13~14	科目 31 単位 25	50	理・数・英・国・家庭が必修科になる 理・数・英・国・家庭が必修科になる

- 高度経済成長期においては、進学率の高まりとともに、必修科目数、単位数とも一貫して増加傾向にある。
- 必修科目の設定に関して、現在の状況の基礎ができあがったのは、昭和57年実施の学習指導要領からである。国語、現代社会、理科」といった、いわゆる「総合科目」の新設の影響があり、主として1年次に履修するこれらの科目のみを必修に設定することで必修科目の単位数を削減させている。

高校の教育課程

昭和57年から平成15年までの教育課程の変遷 →

＜必履修教科・科目、単位数の変遷＞ →

資料 教育課程表

昭和25年 昭和26年 昭和31年 昭和38年 →

昭和48年 昭和57年 平成6年 →

平成15年 →

入学直後の教養教育 →

京大卒業した今、振り返ると →

S25実施	S26実施	S31実施	S38実施																																																																																																																																																																																																																																																																																
<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2	<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2	<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2	<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																																																																																																
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																																																																																																
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																																																																																																
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																																																																																																
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																																																																																																

S48実施	S57実施 説明	H6実施 説明																																																																																																																																																																																																												
<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2	<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2	<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																											
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																											
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																																																																																																																																																											
国	国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
英	英語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
理	物理	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
数	数学	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
社	社会	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
家	家庭	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
外	外国語	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
文	文化	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計数	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
音	音楽	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
体	体育	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
道	道徳	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
職	職業	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
学	学芸	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
特	特別	2~6	2																																																																																																																																																																																																											
計	計	2~6	2																																																																																																																																																																																																											

H15実施 説明																																																																				
<table border="1"> <tr><th>教科</th><th>科目</th><th>単位数</th><th>履修科目数</th></tr> <tr><td>国</td><td>国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>英</td><td>英語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>理</td><td>物理</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>数</td><td>数学</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>社</td><td>社会</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>家</td><td>家庭</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>外</td><td>外国語</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>文</td><td>文化</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計数</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>音</td><td>音楽</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>体</td><td>体育</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>道</td><td>道徳</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>職</td><td>職業</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>学</td><td>学芸</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>特</td><td>特別</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> <tr><td>計</td><td>計</td><td>2~6</td><td>2</td></tr> </table>	教科	科目	単位数	履修科目数	国	国語	2~6	2	英	英語	2~6	2	理	物理	2~6	2	数	数学	2~6	2	社	社会	2~6	2	家	家庭	2~6	2	外	外国語	2~6	2	文	文化	2~6	2	計	計数	2~6	2	音	音楽	2~6	2	体	体育	2~6	2	道	道徳	2~6	2	職	職業	2~6	2	学	学芸	2~6	2	特	特別	2~6	2	計	計	2~6	2
教科	科目	単位数	履修科目数																																																																	
国	国語	2~6	2																																																																	
英	英語	2~6	2																																																																	
理	物理	2~6	2																																																																	
数	数学	2~6	2																																																																	
社	社会	2~6	2																																																																	
家	家庭	2~6	2																																																																	
外	外国語	2~6	2																																																																	
文	文化	2~6	2																																																																	
計	計数	2~6	2																																																																	
音	音楽	2~6	2																																																																	
体	体育	2~6	2																																																																	
道	道徳	2~6	2																																																																	
職	職業	2~6	2																																																																	
学	学芸	2~6	2																																																																	
特	特別	2~6	2																																																																	
計	計	2~6	2																																																																	

昭和57年から平成15年までの教育課程の変遷

1、必履修科目減
卒業単位数減

2、選択科目増

3、完全週5日制
(総授業時数の減少)

- ・学習内容減
- ・練習量が激減
- ・短期記憶が長期記憶にならない
- ・記憶の剥離化

京都大学教養教育 → 「京大生」にする！！

- 専門課程への土台作り
- 京大生として期待されるべき教養を身につける

◆教養教育の意義を学生に伝える

学生との対話
授業の中で負荷をかける
自ら学ぶ姿勢の獲得

◆専門教育への深化

第15回 京都大学 全学教育シンポジウム

パネルディスカッション
「大高接続と大学教育」について

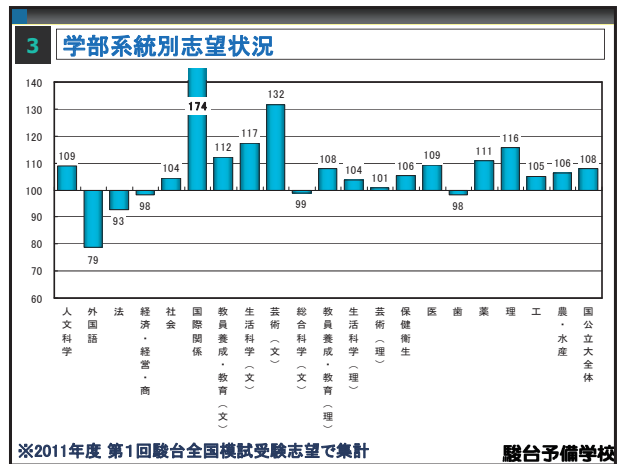
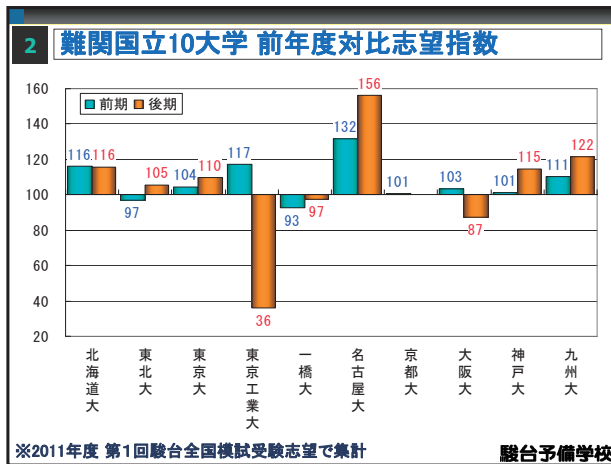
2011.09.02

駿台予備学校

1 2011年度・2012年度の入試動向

- 国公立大志向
 - 私立大の優位が続いていた首都圏でもついに
- 理高文低
 - なんちゃって「理系」も増加
- 難関大志向
 - ただし、ほどほどの(無理はしない)
 - なんて、2番ではダメなんですか？
- 医学部志向
- 地元志向
 - 都市部の男子が家から離れたがらない

駿台予備学校



4 安易な妥協・不本意入学者の増加

■ 3万人を超える再受験生？

直面する「困難」から「楽な方向」に逃げて、
結局は「大きな回り道」をしていることのムダ!!

■ 2010年度入試(※文部科学省集計データより)	
(A) 大学・短大志願者数	74.5万人
(B) 大学・短大入学者数	66.9万人
(C) = (A) - (B)	7.6万人 → 最大の既卒受験生数

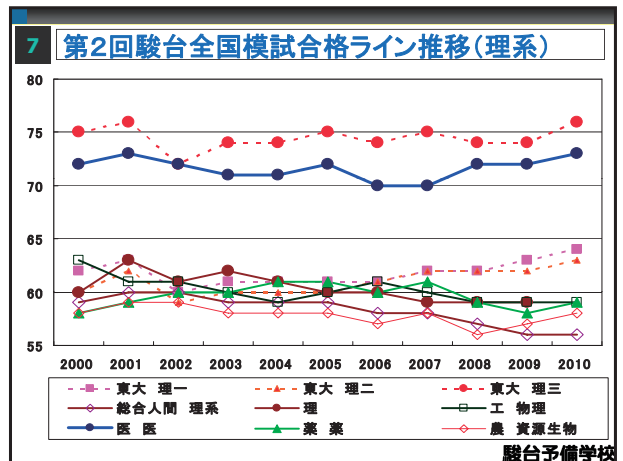
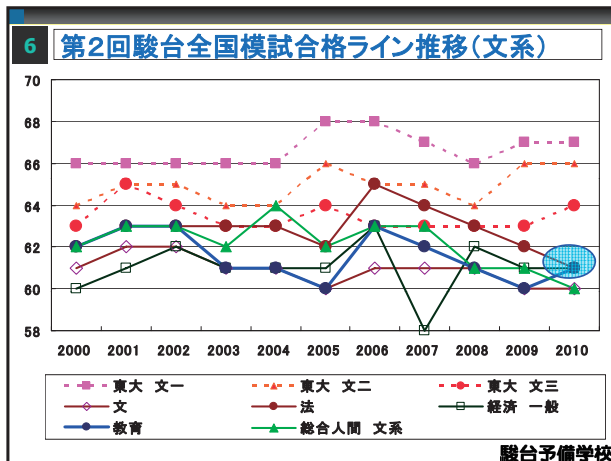
■ 2011年度センター試験(※大学入試センター発表の志願者数(確定)より)	
(D) 純粋な既卒生志願者数	11.0万人
(D) - (C)	3.4万人

駿台予備学校

5 東京大 vs 京都大

- 入試システム **長年変化なし vs 変化が多い**
※高校での入試対応
- 選抜方法 **科類募集 vs 学部(学科・専攻)募集**
※合格可能性の確かさ
- 入試科目・配点 **文理で統一 vs 学部・学科の独自性**
※大学内の第2志望への流れ
- 2段階選抜 **例年実施 vs ほとんど実施なし、絶対基準**
※センター試験への取組み
- 入試問題 **多彩な出題、作業量、形式重視 vs 思考力、創造力、自由な発想**
※受験指導のやりやすさ
- 学部への進学 **進学振り分け vs 入学時確定**
※進路決定の指導が難しい **北大が人気**

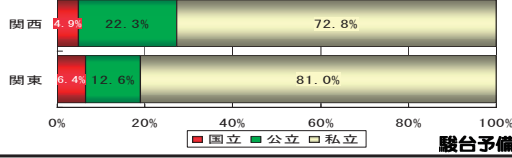
駿台予備学校



8 医学部医学科 vs 京成大

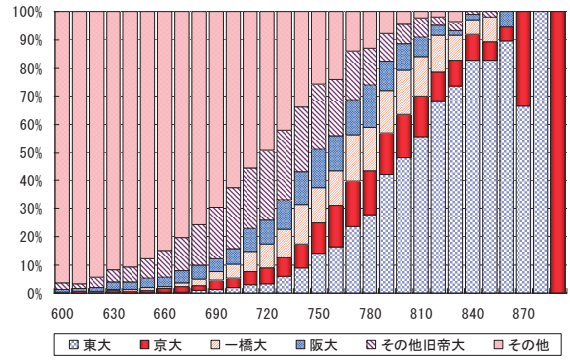
- 医系 > 理系 > 文系
文系はすぐに私立(早慶)へ
- 地元志向(親が離さない、地方の少子化の進展)
- 地方の就職難
- 入学定員増員、地域枠の設置(低い合格ライン)
- 医師の師弟→富裕層→私立中高一貫校

駿台高3クラスSuコース在籍者高校設置別割合



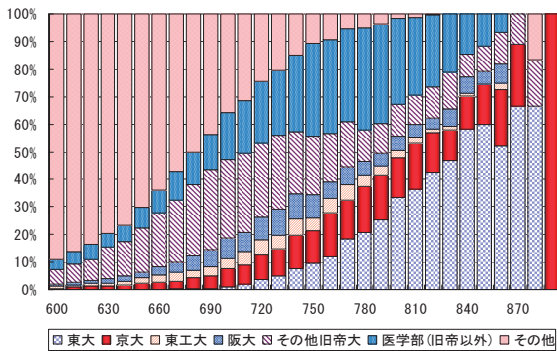
駿台予備学校

9 センター試験得点帯別受験大学(文系)



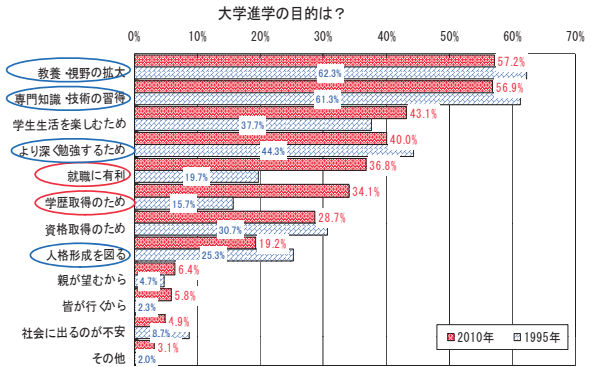
駿台予備学校

10 センター試験得点帯別受験大学(理系)



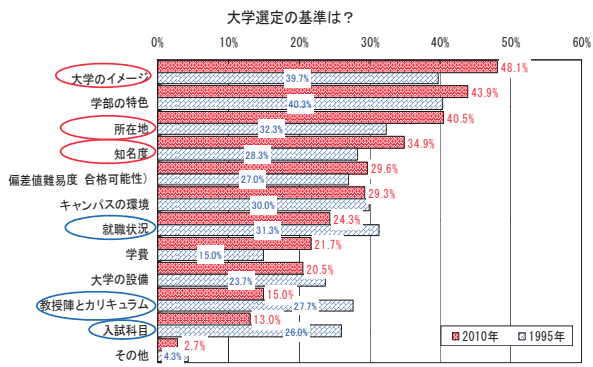
駿台予備学校

11 受験生の気質の変化(大学進学目的)



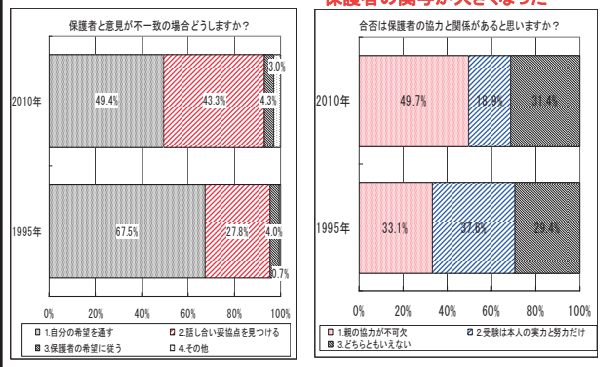
駿台予備学校

12 受験生の気質の変化(大学選定の基準)



駿台予備学校

13 受験生の気質の変化(保護者との関係)



駿台予備学校

14 受験生の気質の変化(まとめ)①

- 自分の志望理由を説明できない
- 周囲に流されやすい
- 諦めが早い(志望を高く持たない)
- 無理をしない
- すぐ納得する、素直すぎる
- 保護者頼り
⇒親を離れたがらない・離さない(特に男子)
- マニュアル・答えを早くを欲しが
⇒答えだけわかれば立ち去ろうとする
⇒「考える楽しさ」を知らずに育った

駿台予備学校

15 受験生の気質の変化(まとめ)②

- 国語力、計算力の低下
- メモが取れない
→「講義を聴く」
=「板書を写す」ことだと思い込んでいる
- 自主性には期待できない
→やらせられることに慣れている
→低学年の塾の影響が大
- 「大学合格」が最終目標
→将来まで見据えて大学や学部を選択していない
(夢を持たない、持てない、持たせない)

駿台予備学校

16 京大の入試について①

- 学部ごとに入試科目や配点異なる
 - 学内で志望変更せずに、阪大等へ流れる
- センター試験で苦手科目を受験させるシステム
 - 文、法、総合人間(文)の地歴
(得意科目は第1解答科目にできない)
 - 医(医)の理科
(一番得意科目は個別試験に温存)
- 挑戦的な出題範囲
 - 数学の「数学C」3分野指定、過去の指導要領の内容が目安

駿台予備学校

17 京大の入試について②

- 選抜要項のわかりにくい表現
 - 経済学部、薬学部(薬学科)、工学部、農学部の入
学定員の内訳の若干名
- いずれも、関西圏の高校にとっては常識なのかもしれないが、全国的に見れば、煩わしいと思われる。
- 結局は東大、一橋大、東工大が簡単(指導にミスがおきにくい)と思われており、京大はみすみず優秀な層をのがしているのではないか？
- 関西圏以外で、「食わず嫌い」を作って欲しくない。

駿台予備学校

第15回京都大学 全学教育シンポジウム

京都大学大学院経済学研究科
教授 岩本 武和

1

私と高校教育の関わり

- 約20年ほど前、** 入試センター試験出題委員を2年間
- 高校の公民教科書執筆
 - ・都留重人・伊東光晴『政治・経済』(** 出版)
 - ・伊東光晴・赤岡功『国際ビジネス』(** 出版)
- ** 高校SSH運営指導委員(2010年~)

2

高校教育と大学教育の連続と断絶

公民科目(特に「政治経済」「現代社会」)教育と
大学の「経済学」教育の断絶

- 文理共通の英語・数学、理系の物理・化学等、文系の地歴科目には、高校教育と大学教育に明らかな連続性がある(と思う)。
- 経済学だけは、現状では、断絶しかない。これは日本の経済学教育にとって致命的な欠陥。

3

『サンデー毎日』
2010年3月21日

京大・松本紘総長
編集長インタビュー

4

絶望的な「政治経済」「現代社会」の教科書 驚異的な「暗記量」

- ◆『政治・経済用語集』(山川出版社)の「第II部 現代の経済」だけで、約1000語
- ◆Gregory Mankiw, Principle of Economics (邦訳は、マンキュー『経済学入門』『ミクロ経済学』『マクロ経済学』3分冊)
- ◆Joseph Stiglitz and C.L Walsh, Principle of Economics (邦訳は、スティグリッツ『経済学入門』『ミクロ経済学』『マクロ経済学』3分冊)等の Glossary(用語解説)は、約450語

5

1 経済社会の変容と経済のしくみ

資本主義経済の発展と社会主義経済の変容

資本主義経済の発展

1900年、アメリカの独逸産業に匹敵した独逸は、アメリカの工業生産を凌駕した。...

福利国家の発展

1800年代後半、ドイツの経済学者オットー・フォン・グERICKEは、...

第2編 現代の経済 第1章

①「資本主義経済の発展と社会主義経済の変容」

「経済体制」の違いって、高校生にとって重大問題？ なぜ、もっと彼らの身近な経済現象から問題提起できないのか？ 多数の人名と写真！ マネタリスト(フリーマンマン)まで登場！

「ニューディール」(資本主義経済の変容)、社会主義経済の「崩壊」を含め、『世界史B』に任せよう！ なぜ「市場経済」と「計画経済」にしないの？ 「生産手段の私有」って高校生に分かるの？ なぜ「会社は株主が所有している」って言ったダメなの？

「会社は株主だけのものか？」という問題提起(利害関係者[stakeholders]は株主だけではない、経営者・従業員・顧客[取引相手]・消費者・地元住民・社会一般)や、「全ての経済活動が民営化(株式会社化)されて良いのだろうか？」という問題提起の方が、はるかに「考える政治経済」!

9

第2編 現代の経済 第1章

②「市場経済の機能と限界」

市場経済のしくみと現状

国際経済のしくみと現状

国際分業と貿易

自由貿易と保護貿易

10

市場経済の機能と限界

市場の失敗

競争と独占・寡占

11

市場経済の機能と限界

市場の失敗

競争と独占・寡占

11

驚異的に難解な数値例

	イギリス	ポルトガル
毛織物 単位の生産に要する労働量	100人	90人
ぶどう酒 単位の生産に要する労働量	120人	80人
毛織物の生産	220人の労働者で 2.2単位	—
ぶどう酒の生産	—	170人の労働者で 2.15単位

特化後、イギリスでは、220人の労働者が比較的生産費の低い毛織物の生産をおこなうことによって、2.2単位(220人÷100人)の生産物を得ることができる。

同様に、ポルトガルでは、170人の労働者がぶどう酒を生産することにより、2.15単位(170人÷80人)の生産物を得ることができる。

つまり、世界全体でみると特化前にくらべ、毛織物については0.2単位、ぶどう酒については、0.15単位の増産が可能である。

このようにして各国は特化し、貿易をおこなうことによって利益を得ることができる。

13

驚異的に難解な説明

- 1.「自由貿易の長所と短所は何だろうか？」
 - ◆たったこれだけの難解な説明で「正解」は教えられる？
- 2.「資本蓄積」(⇒相当に高度な概念)、「生産条件の差異」(⇒これだけで分かる?)、「国際分業は世界における資源利用の効率化を進める」(⇒これが「自由貿易の長所」?)、「幼稚産業保護」「セーフガード」(⇒いきなり来るかあ～)
- 3.リカード、リスト(!)⇒何故「人名」が必要?、リストなど大学の教科書でさえ発見が困難!
- 4.「比較生産費説」(theory of comparative costs?)
 - ◆日本独自の表現。正確には「比較優位の原理(principle of comparative advantage)」。「比較優位」という考え方は非常に重要!
 - ◆この場合の「生産費」は「機会費用」(100/120) < [90/80](opportunity cost)。「機会費用」という考え方は非常に重要!

14

『アメリカの高校生が読んでる経済学の教科書』

目次

はじめに 「72のプリンシプル」……………3

第1章 家計の経済学 — どうすればお金を増やせるのか? —

希少性 Scarcity — 資源は有限、人間の欲望は無限……………14

インセンティブ Incentive — 人間の選択は報酬に左右される……………21

効率的な選択 Economic Choice — たくさん人の選択からどれを選ぶ?……………26

取引とお金 Trade and Money — 取引はみんなが得をするシステム……………35

労働 Labor — 給料は雇主と労働者の気持ちで決まる……………42

税金 Tax — 道路、橋、学校、公共サービスの提供に必要な資金……………51

利息 Interest — 預金の金利は預金に対する見返り……………55

第2章 企業の経済学 — 経営者は利潤の最大化を目指す —

起業家 Entrepreneur — より大きな報酬のために起業……………64

企業 Enterprise — 個人所有の企業 VS. 利潤の獲得……………69

企業は競争する Productivity — 競争が技術進歩と経済成長を生む……………74

均衡価格の作り方 その1 市場価格 Market price — 買い手と売り手の間に市場がある……………82

均衡価格の作り方 その2 消費者の欲求 Demand curve — 価格はインセンティブのシグナルを送る……………89

均衡価格の作り方 その3 売り手の供給 Supply curve — 取引は市場価格の均衡点で成立……………96

資金 Pay — 資金は労働力の需要と供給で決まる……………107

15

第3章 金融の経済学 — 銀行から上手にお金を借りる方法

銀行から上手にお金を借りる方法

第4章 政府の経済学 — 政府も市場も失敗する

パーソナルファイナンス 借入金 Personal Finance: Government bond

財政政策 Fiscal Policy — 政府は企業の代わりに公債を発行……………173

経済成長と生産性の向上 Improvement of productivity — 企業は生産性の向上を目指し、政府は経済成長を目指す……………184

16

なぜ「政治経済」教育がガラパゴス化したか？

- 最大の理由は、日本の多くの「政経」「現社」の教科書の執筆者が多くが、未だに守旧派学者で占められていること。しかも、若手の経済学研究者(多くは英米でphDを取得)は、大学の初年次教育(ましてや高校教育)などに関心が無い(自分の研究の底上げで手一杯)。私ぐらいの歳になって初めて後ろを振り返る(若い世代の教育の底上げにも問題意識を持ち始める)。
- 第二の理由は、学習指導要領と検定制度。しかも、検定官は、重箱の底をつつくことが唯一の存在意義。「本日は検定意見を申し伝えることが目的であり、ここは先生方と議論する場ではありません」
- 第三の理由は、ほとんど変わり映えのしない「金太郎飴」型の教科書(「学習指導要領」⇒「検定」の制約を受けている)にも関わらず、10社以上の出版社が「過当競争」をしており、著しい資源の無駄遣いをしていること。

17

「ガラパゴス化」からの脱却は可能か

- ◆ 制度の問題は、さしあたり、以下の共犯関係。
 - ① 学習指導要領
 - ② 検定制度
 - ③ 教科書の執筆者(大学教員)
 - ④ 多くの出版社が生産する「金太郎飴」型の同質財(教科書)
 - ⑤ 大学入試の出題者(大学教員)
- ◆ ①②⇒制度として「事業仕分け」!
- ◆ ③にまともな経済学者を資源配分すること。
- ◆ そこまですれば、④でも「差別化財」が生産(教育内容の自由化)され、⑤も多様化されるはず。
- ◆ 最終的には、消費者(高校生)の効用・嗜好によって、今とは違った形で教育内容が標準化(収斂)するはず。これこそが、望ましい「教育内容の市場経済化」のはず。

18

「ガラパゴス化」からの脱却は可能か 高校の先生方へのお願い

- 高校の先生方には、まず「市場経済＝価格メカニズム」の仕組み(家計、企業、政府/財市場、労働市場、金融市場、外国貿易、為替市場...)を、つまり、価格・金利・賃金・為替レート...の「価格」の動きと、家計の効用最大化で決まる需要・企業の利潤最大化で決まる生産量・ジョブサーチと失業・資金供給や貨幣需要・外為市場や資本移動...といった「数量」の動きの関係＝メカニズムを、徹底的に教えていただきたいです。その際、数学など全く不要です。数学を使った厳密な経済学は、大学で徹底的に教えます。
- 経済学(政経・現社)は「暗記科目」ではありません。できれば、大学の「ミクロ」「マクロ」の初学者向けテキストも、再度学習していただきたいと思えます。
- 用語の丸暗記は、教える方が理解していないからだとご理解下さい。例えば「投資」という言葉は難しいですが、正確に教える必要のある概念です。また「効用」という概念が教えられるべきではないとは思えません。われわれの物凄く身近なところから、経済を教えるのに、効用概念は不可欠なのに...
- 「生産手段の私有」なんて、今や高校生の(社会認識)にとってクソの役にもたないし、逆に日銀の「公開市場操作」なんて、高校生が理解すべき(経済認識)には全く不要です。「拡大再生産」というマル経用語と、「経済成長」という一般概念と、どちらを高校生に教えるべきかは、ご自分の良心にしたがってお考え下さい。この2つの用語が、同一教科書に並存していることは、日本の経済学教育がガラパゴスの経済学である典型例です。
- もしも「政経・現社＝現代経済事情」といった認識をお持ちならば、その認識は捨てていただきたいと思えます。「新聞を眺め」と書くと、新聞の経済面を理解できるはずもないし、その内容(新聞情報)はあてにならないことが多いです。

19

カリキュラム改革・入試改革・学部改組 (経済学部:H15~H21年度)

- カリキュラム改革・入試改革・学部改組(H15~H21年度)
 - ① 専門課程のカリキュラム改革(H15)⇒体系性
 - ①入門科目[1・2回生担当] ②専門基礎科目[2回生以上担当]
 - ③専門科目Ⅰ[2回生以上担当] ④専門科目Ⅱ[3回生以上担当]
 - 全ての科目をセメスター制に移行
 - ② 学部改組とコース制の導入(H21)⇒横断性
 - 経済経営学科の1学科に統合
 - ①理論・歴史コース ②政策コース
 - ③マネジメントコース ④ファイナンス・会計コース
 - ③ 入試改革(H21)⇒多様性選抜
 - 一般入試[190名]・論文入試[25名]・理系入試[25名]
 - 留学生入試・外国学校出身者入試・編入学試験も継続
 - ④ 入門演習(H21)⇒初年次教育
 - 多様性選抜(入試形態別の10クラス)に対応
 - アカデミック・リテラシーに主眼
 - 文系数学(経済学部教員が2クラス担当)+理系数学(既存の理系数学)
- ⇒今日の経済学研究の展開状況に即した、領域横断的で系統的な科目履修が可能となる新たな教育スキームを整備

20

平成21年度からの入試内容の変更(経済学部) 理系入試の導入+論文入試の変更

- 論文入試定員50名⇒論文(25名)+理系(25名)
- 25名を文系の才能に秀でた学生選抜、25名を理系の才能に秀でた学生選抜に特化
⇒経済学・経営学の教育・研究の高度化・多様化に対応できる。
- 「論文Ⅰ+数学+論文Ⅱ」⇒「論文Ⅰ+論文Ⅱ+国語+英語」。配点は、「論文300+英語200+国語100=計600」時間配分は、「論文Ⅰ=3時間(1日目)」「論文Ⅱ=2時間(2日目)」
- なお、入学後の教育として、「一般入試」「論文入試」「理系入試」それぞれで入学してきた学生に対して、秀でた能力をさらに伸ばしたり、不足している能力を補完したりできるように、入試改革と平行してカリキュラム改革を行う。

21

平成21年度の改組とカリキュラムの変更 —「2学科⇒1学科」と「コース制」の採用—

- ◆ タテの体系性
 - 入門科目(1年生)、専門基礎科目(2年生以上)、専門科目Ⅰ(2年生以上)、専門科目Ⅱ(3年生以上)
 - 先端的・実務的な特殊講義(大学院との共通科目や社会人講師による講義)、演習(1年次から)
- ◆ ヨコの横断性(コース制)
 - 「歴史・理論コース」「政策コース」「マネジメントコース」および「ファイナンス・会計コース」という4つの履修モデル
 - 一定の条件(各コースに相当された「専門科目Ⅰ」「専門科目Ⅱ」のうち、2/3の科目を履修し、かつ履修した科目の1/2が「優」の成績を取得)を満たした学生を、当該コースの修了者と認定。

22

入試科目	履修科目	履修科目	履修科目	履修科目
一般入試	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目
論文入試	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目
理系入試	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目	経済学基礎科目

23

平成21年度からのカリキュラムの変更 理系入試合格者に対する「数学」

- ① 理系入試合格者に対して、下記の理系数学の科目を新たに1クラス開設。
 - 微積分学A(1年次前期:2コマ4単位)
 - 微積分学B(1年次後期:2コマ4単位)
 - 線形代数学A(1年次前期:1コマ2単位)
 - 線形代数学B(1年次後期:1コマ2単位)
- ② 下記の文系数学(経済学部はクラス指定で開講)のうち、「数学基礎A(前期2コマ4単位)を経済学部教員が担当し、文系入試合格者に対応。
 - 数学基礎A(1年次前期:2コマ4単位)
 - 数学基礎B(1年次後期:2コマ4単位)

24

平成21年度からのカリキュラムの変更
1回生ゼミ(入門演習)

- ①1年次前期(配当単位2単位)に、あらかじめ指定されたクラス別に入門演習を開講する。
- ②1クラス約25名×10コマ(クラス指定に際しては、入試種別を考慮に入れる。例えば、一般入試7クラス、理系入試1クラス、論文入試1クラス、外国学校出身者入試・留学生入試1クラス)。
- ③初年度は10名の担当教員が相談して、(合格者の内訳や成績等を参照のうえ)「入門演習1～入門演習10」の内容やクラス編成等を決める。

京大医学部の教育における使命

1. 優れた医師を育成する。
2. 指導的医師を育成する。
3. 優れた医学研究者を育成する。

医学部教育の問題点

1. 医学医療の急速な進歩
知識量の急速な増加(ここ10年で5倍)
2. 職業人としての医師育成への社会的要請
2年間の卒後研修制度必須化
3. 医学部卒業生の大学院受験者の減少
基礎医学研究者の減少
4. 医学部卒業生の大学離れ
日本の医学医療のレベル低下
5. 高校における生物の非必修化(H24年度)

医学部卒業生のキャリアパス

	以前	現在
24歳	卒後研修開始	卒後研修開始
26歳		専門研修開始
29歳	大学院入学	
31歳		大学院入学
33歳	留学	
35歳		留学

専門性の要求が増大する(専門教育の期間長期化する)中がで、いかに一般教養教育をおこなうのか？

医学部生の低学年教育に求められるもの

1. 初期研修の短縮を目指した専門教育の前倒し
2. 職業人育成を視野に入れたEarly exposureの充実
3. 初等生物学教育の充実(医学部生向け)

医学部生の一般教養教育の問題点

1. 成績が良いというだけで医学部を受験しており、医師になるという志をもっていない。
2. 現在の教養教育は有効に稼働していない。
遅刻, 欠席, 服装, 態度, カンニング

医学部生の一般教養教育の問題点

1. 成績が良いというだけで医学部を受験しており、医師になるという志をもっていない。
2. 現在の教養教育は有効に稼働していない。
遅刻, 欠席, 服装, 態度, カンニング

京大の「自由な教育」主義の破たん！

医学部の一般教養についての考え方

1. 欧米
大学は専門教育の場であり、一般教育は高校までですませる。
2. アメリカ
医学部は大学院に相当する(専門教育の場)
3. 日本??

医学部生に対する一般教養教育 への提言

1. 医学部生の一般教養教育は、臨床実習（職業教育）の中でおこなわれるべきである。
2. 目的意識のない、一般教養教育はあまり意味がない。

医学部生に対する一般教養教育 への提言

1. 医学部生の一般教養教育は、臨床実習（職業教育）の中でおこなわれるべきである。
2. 目的意識のない、一般教養教育はあまり意味がない。



3. Early exposureの導入
4. 専門教育の前倒し
5. 初期一般教養教育の充実

10. パネルディスカッション2：「グローバル化社会と大学教育」

◇コーディネーター	高等教育研究開発推進機構副機構長・理学研究科教授	有賀 哲也
	理事（教育担当）・高等教育研究開発推進機構長	淡路 敏之
◇パネリスト	京都大学総長	松本 紘
	(株)島津製作所 人事部長	平田権一郎
	(株)毎日コミュニケーションズ常務取締役 就職情報事業本部長	浜田 憲尚
	国際交流推進機構長	森 純一
	工学研究科 教授	杉浦 邦征
	高等教育研究開発推進機構 准教授	塚原 信行



司会 定刻になりました。次のパネルディスカッションを始めたいと思います。

有賀哲也高等教育研究開発推進機構副機構長をコーディネーターとし、淡路先生も引き続きコーディネーターとして加わっていただきます。

パネリストをご紹介します。

平田権一郎 株式会社島津製作所人事部長

浜田憲尚 株式会社毎日コミュニケーションズ常務取締役就職情報事業本部長

杉浦邦征 工学研究科教授

森 純一 国際交流推進機構長

塚原信行 高等教育研究開発推進機構准教授

また、このパネルディスカッションでも松本紘総長には引き続きご登壇をお願いしております。

それでは有賀先生、よろしくお願いいたします。

有賀 高等教育研究開発推進機構の副機構長をさせていただきます有賀です。よろしくお願いいたします。

最初に簡単に私のほうから、このパネルディスカッションの狙いを一言ご説明させていただいて、パネリストの先生方をもう一度ご紹介させていただきたいと思います。

午後前半のパネルディスカッションが京都大学のいわば入り口にポイントを絞って、高大接続、要するに高校から見た京都大学の教育というのを考えるという主題だったと思いますけれども、後半は、今度は出口側に目を移して、大学を卒業する卒業生がその後社会に出ていくわけですが、就職して企業に行くという企業のほうから見て、京都大学の教育というのがどういふふうに見えるのかと



いうことを中心に、京都大学の教育についてディスカッションしていただくというのがねらいでございます。その中で、切り口としてグローバル化ということ、今日前半の基調講演等でもありましたけれども、社会がグローバル化していく中で京都大学の教育がどういうふうにあるべきか、変わっていくべきかというような観点からディスカッションしていただきたいということでございます。

それで、パネリストの先生方を私のほうからもう一度ご紹介させていただきますけれども、まず最初に、島津製作所の人事部長をされていらっしゃる平田様をお願いしております。島津製作所は、理科系の、特に実験系の研究室には、どこの部屋に行っても島津と書いてある計測機器が必ずあると思います。計測機器だけではないのですけれども、非常にグローバルに活動されている企業です。そういう企業の人事の立場から、京都

大学を卒業して入ってくる人がどういうふうに見えるのか、京都大学に対してどういう教育が求められているのかということの話題提供をお願いしております。

その次に、毎日コミュニケーションズの常務取締役で就職情報事業本部長の浜田様をお願いいたします。毎日コミュニケーションズは皆様ご存じだと思いますけれども、大学を卒業して会社に就職する間のつなぎ手の役目をされているところで、広い目で企業が、特にグローバル化という観点から見て、大学に対してどういう人材を求めているのかということをお話いただくようお願いしております。

それから次に、国際交流推進機構の森機構長をお願いしております、京都大学としてグローバル化社会に向けてどのような取り組みをしているかということをお話いただきます。

その次に、工学研究科の杉浦先生に、グローバル 30 で京都大学としては唯一つくられた国際コースを運営しているというお立場から、実際に留学生を受け入れて英語で教育をしている、日本人の学生に対してもしている。私もそうなのですが、皆さんあんまり具体的なことはご存じないかと思うので、そういうことをお話しいただきたいと思います。

最後に、高等教育研究開発推進機構の塚原先生、ご専門はスペイン語なのですが、大学の外国語教育というのはどういうふうにあるべきかということをお話しいただきたいと思います。特に外国語教育のあるべき姿ということが一つあるのと、もう一つは、英語が非常に重要だということはもちろん疑いようがないことなのですが、英語以外の外国語の教育ということについてもご意見をお持ちだと思いますので、その点についても触れていただけるといいと思っております。

そういうことで、5名のパネリストの方をお願いしました。

それから、前半のパネルディスカッションに続いて、松本総長には、パネリストの皆さんのお話に対して、京都大学のマネジメントをしているお立場からコメントをいただけるとありがたいと思っております。

そういうことで進めさせていただきます。

それで、順番にパネリストの方にまず話題提供をお願いしたいと思います。後ろを使いますので、一度壇上から下におりていただいて、順番にパネリストの方に話題提供をお願いしたいと思います。

平田（島津製作所） 島津製作所の人事部長の平田と申します。

実は私、本学の OB でございます。30 年近く前でございますけれども、法律知らずの法学士ということでございますが、卒業後、島津製作所に入社いたしまして、約 20 年は海外営業部に勤務しておりました。人事部に異動になりましたのが 2004 年ということで、人事畑では 7 年ということでございます。

本日、お題をいただきまして、忌憚のないところをと事務方の皆様からは言われておるのですが、京都大学様は島津製作所にとりましては最も重要なお客様の一つでございまして、どこまで忌憚なくというのは、なかなかばかりもございまして、そこら辺はお含みおきをいただいてということでございます。

お時間の関係もございまして、端折らせていただきますが、まずは当島津製作所の概要でございます。社是「科学技術で社会に貢献する」、経営理念「人と地球の健康への願いを実現する」ということで、創業は 1875 年。136 年目でございます。グループ売上高は、海外のオペレーションも連結してのグローバルベースでの売上高 2,527 億円が直近期（2011 年 3 月期）でございます。約 1 万名の連結従業員がおりますが、ざくっと言いますと、島津製作所本体で約 3,000 人、国内グループ会社 32 社で約 3,000 人、海外 44 社の海外従業員が約 4,000 人、3 : 3 : 4 で約 1 万名ということでございます。

会社の沿革でございますけれども、私どもは研究開発型企業という DNA を 136 年継承しておるということで、創業 1875 年から極めて早い時期に日本で初、世界で初というようなことを連綿と社業としておるということでございます。1896 年、これはレントゲン博士が X 線を発見した 1895 年の翌年に、京都大学の前身の第三高等学校の先生と一緒に日本初の X 線写真撮影に成功したということでございます。

現在の当社の事業分野でございますが、環境、医薬、医療、半導体、モビリティ、食品、エネルギー、素材等の多分野に亘っておりまして、皆様方、特に工学部系、理学部系の先生方のイメージは分析計測機器ということでございましょうが、広くあらゆる産業分野を顧客、市場としているという企業でございます。

直近の決算期の売上 2,527 億円の構成でございますが、約半分、6 割近くは分析計測機器で、医用が 2 割、あと航空機器、産業機器、その他もろもろという構成比となっております。昨今、成長を牽引しているのは中国を始めとする海外事業です。国内は、残念ながら大きな伸びは期待しにくい状況で、当社の連結業績の伸びは海外が牽引しているという構造であり、直近では海外売上高比率は約 40%。一方、これからの 5 年、10 年に向かってということでございますが、先ほどの売上構成比でお示しました事業内容に加えて、新しい分野として次世代医療、産業計測、環境・エネルギー分野への展開を考えております。当社の田中耕一が、貴学とご一緒に共同研究をさせていただいているのは次世代医療分野ということでございます。

本年度からの中期経営計画でございますが、図の右上段、今後の会社の方向性として、真のグローバル企業を目指そうじゃないかと。3 年後には今の売上高 2,500 億円から、3,000 億円を超えてという



ことですが、将来的に 10 年のスパンで言えば、海外売上高比率が半分を超える絵姿でして、中国の現地法人責任者に聞きますと、そこまで待たずに、本社単体の売上を逆転する勢いということになります。

そういう事業内容の当社でございますけれども、当社従業員の特徴についてということで、内輪の資料でございますのでコピー配付は差し控えていただきましたけれども、適性検査というので広く流布している SPI というのがあるのはご存じだと思いますが、そこから垣間見える当社従業員の特徴と言うのが、どちらかと言うと内向的で、慎重派、繊細で受容的、かつ現実重視派。当社の従業員の公約数的な特徴というのはこんなものかなと。因みに申しますと、本社約 3,000 人のうち約 3 分の 2 が広い意味での技術系です。適性なるものに絶対的な長所とか短所というのはない訳でございますけれども、良く言えばおとなしく、もの静かで、物事を掘り下げて考えて、人の気持ちを大切に、努力の過程を重視するのが島津の平均的社員ですということですが、悪く言えば、引っ込み思案になりやすく、ちょっとリスクを気にして、悲観的になりやすく、出来れば競争を避けようとする、そんなタイプだよねということも言えるわけでございまして、全体特徴をまとめますと、当社の平均的社員像として、じっくり考えることは得意、ただし素早く行動に移すということはどうも苦手ということかと。それが当社らしさであったりする訳でございますけれども、何分、我々を取り巻く市場環境というものが大きく変わったということで、すなわち、冷戦構造は終焉して、情報化社会、運輸革命が始まって、地球が小さくなった。いわゆるグローバル市場経済が本格始動して、世の中はフラット化が進展し、新興国がキャッチアップしてきている。競争は激化し、また新興国から市場のプレーヤーも増加してくるという中で、どのようにして我々は民間企業として生き残り、成長し続けるのか。これが先進国共通の課題であり、当社の課題であろうということで、当社が求める、期待する人材像というものもおのずから変化していかざるを得ない。一方で、136 年の DNA、我々のアイデンティティは変わらない。目指すところは科学技術で社会に貢献し、人と地球の健康への願いを実現することです。

先にご紹介のとおり、中期経営計画で掲げたスローガンは、世界の顧客に選ばれるナンバーワン・パートナーを目指したいということですが、当社は依然として、広い意味では典型的な日本企業でございまして、基本的には暗黙知といいますか、言わなくてもわかるというようなある種のコミュニケーション風土でございます。そこで、ここは敢えて「期待される人材像」ということで、歴代トップの発言をテキストマイニングなんかもいたしまして、2008 年に言葉にしてみました。それがこうのことです。カギ括弧の小見出しはオリジナルには入ってございませぬけれども、キーワードとして変革と挑戦、スピードと責任感、成長意欲と自己学習、信頼醸成と全体最適、こういったものを当社が期待する人材像としておこうと。

採用活動におきましては、会社に入って、当社という場の中で成長して行って、こういう人になってほしいという社員向けのメッセージがここに掲げたところでございますが、その入り口、要は新しいメンバーシップとして大学を卒業して当社に迎え入れる、そういう一つの過程として採用があるわけでございますけれども、新卒採用において、ご志望いただいている学生さんを見る一つのメジャーとして、この中から四つの要素として抽出しましたのが、掲げております変革する力、挑戦的実行力、最後までやり抜く力、社交性・共感性で、これらを採用活動において当社が学生さんを見る視点としておきましょうということになります。

社交性・共感性。これは周囲の人に積極的に働きかけて、友好・信頼関係を構築しようとするパー

ソナリティ、変革する力とは、多くのことに興味関心を持って、広い視点から物事をとらえて、新しいアイデアを出して、創造性を発揮するような力、挑戦的な実行力とは、自分の意思を持ち、言葉だけでなく、みずから積極的に行動に移して、失敗を恐れずに高い目標に挑戦するような力、最後までやり抜く力とは、物事に責任を持ち、困難な状況になってもプレッシャーに負けず、最後まで確実にやり抜く力。今の今、そういう力を持つ人というより、そういうポテンシャルがありそうな人を面接では選んでくれということで、社内のリクルーターを動員しての学生さんとの接触の折、また、説明会、セミナー等々で、こういうメッセージを出しております。

当社は技術系、研究開発型企业ということで、マクロな話になりますけれども、この国における理系離れの現状というのを憂いております。基本的には進学率の向上、それから女子学生の増加により、大学生の総数は維持されているということでございますけれども、工学部系の志願者数はだいぶ減っているということがあります。加えて、工学部系卒の方の進路ですね。メーカー離れという二重苦があるということでございまして、これは広い意味で、行政なり大学サイドの方でも、なにがしか対応をお考えいただきたい部分だと思っております。私どもも、民間企業として出来る範囲で、でんじろうさんじゃないですけども、小中学校などで、そういうのが大好きなOBの協力も得て、理科は楽しいよというような出前授業などの取り組みもしておりますが、理科離れの防止というのは、この国の競争力という観点では重要なことであると思えます。

昨今の学生気質として、採用担当者がどうも気になる傾向がここ数年あるなということで、これは京都大学の学生の皆様がということではなく、一般論でございますが、どうも物事を深く考える習慣というのがなかなか身につけていないようなタイプが多いように思います。

あと、リスクを取って挑戦するというよりも、失敗を恐れてでしょうか、安易に妥協点というか、「正解」というか、どうもそういうものを追い求めているような傾向があるように感じます。非常に器用で賢い学生が多いのですが、どうもブレークスルーを生むような、こいつは何かやるんじゃないかみたいな期待感を感じさせるような人材はちょっと減ってきているのではという印象です。

それと、他者との関わりを通じて、葛藤して何かを成し遂げるといったような体験がどうも足りない気がいたします。上辺の上手さといいますか、非常に喋りも上手だったりするのですが、どうなのだろう…。他者との摩擦、対立というものを上手に避けるという意味での言葉の上手さだったりするのではないのかなという、そういう感じがやや目立ちます。

基礎的なコミュニケーション力というのは、共感性というキーワードにもつながるのですが、非常に上手に喋る、プレゼンテーションも上手。だけれども会話になるとちょっとズレがある。どうも質問にストレートに答えない、受け止めていない。ないしは他者への共感性に欠け、鏡を見て喋ってるんじゃないかというようなタイプも少なからずいるように思います。

新卒採用において、当社は工学部系、理学部系においては、広く日本全国からご志願をいただいているわけでございますけれども、最近、文系出身の私などは、ぱっと聞いただけではどういう学科なのかよくわからないような学科名が増えております。社内の区分けでは、機電情報、機械・電気・電子・情報系、その他化学・生物系と管理しておりますが、面接時に、所属学科名を聞いても、何屋さんかわからないというような学生さんが少なからずいらっしゃいます。お話を聞いてみても、どうも研究内容が高度専門化しているために、日本語で言うとタコつぼ、英語で言うとサイロなのでしょうけれども、専門分野において、視野がちょっと狭くなっているような感じがします。あと、みずからの研究内容を深く理解して、主体性を持って取り組んでいるのかどうか疑わしいような方も少なからずお

られる印象です。当社は技術系の役員クラスになりますと相当な手練れのように、そこら辺は面接をすると、どうもかなり瞬間的にわかるらしいのです。

最後に、当社の社長が、大学の工学部系の学部生の皆さんに行ったプレゼンからそのまま引いてきたのですが、革新的技術を生み出す研究開発に重要なことということで、あくまで民間企業の視点でございますけれども、産学官の連携ということが一つ。あと産産ですね、これは形がもっとビジネスライクになると M&A みたいなことになるのですが、産産の連携ということも非常に重要になってくる。あと、チームワークということで、少し砕きますと、チームで目標を達成しようとする意識、自分の専門領域だけでなく、他メンバーの専門領域にも踏み込んでということで、口裏を合わせたわけではないのですが、当社トップのメッセージにおいても、人事部で採用においてメジャーとして立てたことと平仄の合うメッセージを出しているということです。

同じく学生さんに対する当社の社長からのメッセージですが、大学で学ぶということは学理を実地に応用できるようにすることで、それができなかつたら死に学問だ、と続々らしいのですが、広く社会、文化、いろいろなことに興味を持ってほしい。それと、人的な交流、先輩・後輩、学部を越えていろんな人と交流してほしいと。あと、長期的な視野。何かに興味や疑問を持ったら徹底的に深掘りしたらどうですか。失敗を恐れず挑戦し、やり遂げる気持ちを持つ、こういったことを学生さんにメッセージとして出しております。採用活動もそういう軸で、あえてキツイ言い方をすれば、選抜する軸として立てているということです。

雑駁なお話となり恐縮ですが、私のほうからは以上でございます。どうもありがとうございました。
(拍手)

有賀 どうもありがとうございました。ご質問があると思いますけれども、後でいただくことにして、次の浜田様にお願いしたいと思います。

浜田（毎日コミュニケーションズ） 毎日コミュニケーションズの浜田と申します。

マイナビという就職情報メディアを通しまして、人材を求める企業様と学生様をつなぐことを事業といたしております。日本の新卒を採用される多くの企業様、それと就職活動されるほぼ日本全国の学生様は私どものサービスを結果的にご利用いただくという形で、今、事業を展開しております。

私どもの立場で言いますと非常に企業様に、もちろん大学様を通じまして学生さんとも日々コンタクトはあるのですが、クライアント様としての企業様に近い立場として、あるいはその中間に立つ立場といたしまして、今の就活市場でどのような人材が求められているのかということについてお話をさせていただきたいと思っております。

私ども社内にはリサーチセンターみたいなのがございまして、いろんな学生向けの調査データとか、企業様向けの調査をやっているのですが、そういうデータをひも解いて、こんな人材が世の中で求められていますというようなお話をすることは簡単なのですが、10分という短い間での話題提供ということでしたので、ちょっと実感値的なところからざくっとお話をしたいと思っております。

実際、先ほど島津さんのお話もありましたが、求める人材像というのは、当然ながら経済環境に応



じて変化いたします。確実に変化する。急激にいきなり1年で変わるというものではないですが、確実に変化しています。では、この数年の日本経済を取り巻く中で一番大きな変化というと、当然ながらグローバル化ということになるかと思えます。日本経済のグローバル化という視点からどういう人が求められているのかというのを少し簡単に図にまとめてみました。

今さらわざわざ解説申し上げるようなことではないかもしれませんが、左のほうに今の日本の企業が置かれている経済環境、それと右側に取り組むべき課題というふうに書いています。国内の市場は完全に縮小傾向でして、マイナス成長が予想されています。国内では残されたデフレ市場でどんどん死闘をかけて生き残り合戦をしているというような状況です。

変化の加速。この変化というのは当然ながらグローバル化ということなのですが、昨日まで正解であったことが明日には正解ではなくなっている可能性が示しています。しかも、今までチャレンジしたことの無い新しい市場にどんどん日本の企業は出て行って、成功体験がないというか、成功への答えがまだ見えないままに突き進んでいっているというような状態だと思います。

競争のグローバル化は、これまで闘ったことの無いマーケットで、想定もしていなかった相手と新たな闘いがどんどん始まっているということを意味します。それは一方ではチャンスでもあり、発展途上国を中心に日本の企業が海外にどんどん出ていっている。

そのような中、日本の企業が得ている教訓は何かというと、自社だけでは何もできないなど。ノウハウを持たない市場なんかにはチャレンジしていくときに、いろんな合従連衡とか合併、あるいはM&Aとか提携とか、それも時間があれば自社で例えばグローバル人材を育成するにも時間をかけていけばいいのですが、なかなかそうもいかない。スピードを求められているという中では、自社のノウハウや人材の活用だけではなくて、他社とアライアンスを組んでいくというような機会が非常に多くなっているということです。また、昨日と同じやり方では生き残れないと先ほども言いましたが、現在のグローバル市場ではこれまでの成功体験が単純には通用しないというような状況にもなっています。

そういう中で、組織あるいは人材という点で、どのような課題が出てきているかということ、成果を出すには他人とか他社とか、今まで一緒に仕事をしたことがない人と仕事をしなければいけなくなっているということだと思います。これまでは日本人同士だけ、あるいは自社内だけでよかったのが、日本とは全く異なった企業文化を持った人たちと常に一緒に仕事をするとか、これまで会ったことのないビジネスパートナーと一緒に仕事をするとか、そして時には昨日まで敵だった人と一緒に仕事をするシーンが増えてきている。そして生き残るために、これまでの成功体験だけに頼らず今、何をすべきか見出さなくてはならない。本質的な課題を見通す力とかいうことだと思うのですが、みずからの頭でマーケットを見て、考えて、状況を把握して、なすべきことを的確に実行できるようにならないといけない。特に何をすべきかとをきっちり見出せる力というのが組織として、個人としても求められていると思います。

このような課題の中で、どのような人が求められてくるかということになりますが、全然価値観が違う人たちと一緒に仕事をすると、違う社会的なバックボーンを持った人たちと一緒に仕事をすることによっていきますと、こうした他人あるいは他社から信頼され得るリーダーになり得るかどうかなんとかいうようなことが大きなテーマになってくると思いますし、置かれた環境に照らして取り組む課題というものを自分の力で見出し、周囲からの信頼を得ながら実行できるかどうか、解決できるかどうかということが非常に大きなテーマというふうになってくるかなと考えています。

そういう中で、先ほど島津さんのお話にもありましたが、グローバル化ということで企業が

どんどん海外へ出ていく中でこういうテーマにぶつかり、課題が出てきているということなのですが、一つは、なぜ今、日本の新卒を採るのかという話に持っていきたいのですが、いろんな方々といろんな形で仕事を始めることによって、あるいは現地で全然異なる文化を持った外国人と一緒に仕事をすることになってくると、彼らに日本企業としての自社の DNA をそのまま受け継いでもらおうと思ってもなかなか難しいという問題が出てきます。自分にとってどういうメリットがあるかとか、そういう価値観で特に中国人とかは動くわけです。そういうことになってくると、アイデンティティの危機、あるいは自社の理念の再認識みたいなものが非常に企業の現地化とともに重要なテーマになってくると思います。グローバル競争にさらされる中で改めて会社の中の理念とか DNA みたいなものをしっかりと受け継いで、引き継いでいけるような人材、そこに日本の学生を新卒で採用する理由というのがあると思います。というのも、恐らく力だけで見れば、今、外国人留学生、あるいは海外で出会う優秀な学生層のほうが、人事さんから見たら明らかに能力が上だと思うんです。だけど、そこをあえて抑えて日本人を採っている。その日本人を採っている意味は何だろう。どんどん優秀な外国人が自社の入社試験を受けにくる。彼らはバイタリティーもあるし、すごくハングリー精神もある。勉強もするし、どこから見ても日本人よりもいい。それなのに外国人を落として日本人を採る意味というのを改めて考えてときに、あえて言うなら、DNA を受け継ぎ、引き継げる人材というものを企業というものは残していかないとだめなのではないかということで、今、日本の学生を新卒で採用する理由ということになっているかと思えます。

では、その日本の学生に対する期待度はどうなのか。この4月に、これは京都大学さんのデータではないです。一般論としてなのですが、11卒、この3月に卒業された方々の就職率は厚労・文科の調査で見ましても過去最低となっています。それだけ内定している、決まっている学生が少ない。実際のすべての大学さんの実感値でいきますともっとひどい数字です。

あと、これは全く別の観点で見てみたのですが、国内採用の各企業様の採用にかかるコスト。我々はある意味採用の事業をしていますので、そこは実感しているのですが、今、国内採用にかかる各企業様の採用コストというのは恐らく過去最低です。それほど採用に対してお金をかけない。採用というのはある意味投資なのです。いい人を採るための先行投資みたいなところがあるのですが、そこにお金をかけずどこにお金をかけているかという海外大生の採用。海外大に留学している日本人学生、あるいは海外にいる優秀な人材に対する採用コストというのは恐らく過去最高のコストになっています。我々のほうでも海外大に留学している日本人学生向けの就職のイベントとかサイトとかあるのですが、そちらのほうはすごく今、企業様のニーズが高まっています。ということはどういうことかということ、日本の新卒学生に対しては投資もしないし、採らない。お金も払わないし、採りもしないということ言えば、恐らく日本の新卒学生に対する期待というのは過去最低ということだと思えます。これが現実だと思います。

では、日本の新卒学生に対する評価はどういうものか。日々、各企業様のほうにいろいろ足をお運びする中で、採用担当者様から求める人物像とはちょっと違う角度で話してみようと思ったのですが、よく出るコメントみたいなところなのですが、とにかく生きるエネルギーが弱い。あと、先ほどもありましたが、正解を教えてもらいたがる。正解が必ずあると思っていて、それを知りたがる。知ってから動きたがる。打たれ弱い、ぶつかり合えない。要は摩擦に弱いということです。摩擦したがない。我々が学生向けにどんな企業に入りたいですかみたいなときに、社風のいい会社とかはすごく評価が高いです。社風がいいというのは何となく緩く見えるかもわかりませんが、人と人とがバンバ

ンぶつかり合ったりするようなイメージではないですね。雰囲気の良いところで働きたいとか、そういうところにもつながってきていると思います。失敗を恐れる。

生きるエネルギーが弱いというのは、確かにそうだと思うのです。海外大の外国人留学生とかが、いろんな形で各企業様が採用に取り込まれる中で、本当に中国の奥地から出てきた学生で、自分でバイトしながら本当に苦勞しながら日本で学んでいるような学生、何かをつかんで母国に持って帰ろうとしている学生と、今のゆとり教育、簡単には言いたくないですが、そういう環境の中で育った日本の優等生なのだけでもサバイバル力が弱いというのですか、生き延びる力が弱い学生と比べると、明らかに中国人留学生のほうがよく見えてしまう。あと、正解を教えてもらいたがるというのも、正解を知ってから行動したがるのか、失敗したくないとか、そういうふうに考えている学生がすごく多いです。こうした点を各企業様の実感知としてコメントをいただくケースが多くなっています。12卒はグローバル採用元年と言われていますが、採用活動自体がグローバル化する中で、日本の学生のポジションが結果的に相対的に低下してしまっているという状況にあると思います。

そうした視点から、今日このシンポジウムのテーマである大学教育に求められているものは何か、大学教育が変わることによって何かが変わるのか？、そのあたりについて、皆様とお話させて頂き、ヒントを頂く中で、勉強させていただきたいと考えております。

本日はよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。(拍手)

有賀 どうもありがとうございました。

続きまして、国際交流推進機構の森先生にお願ひいたします。

森(国際交流推進機構) 森でございます。



今、現在の状況について非常に厳しい認識を教えてくださいました。傷口に塩を塗るわけではないですが、私も決してここで甘いことを申し上げることはできません。というのは、今、私のポジションは国際交流推進機構ということで、対外的な国際交流、それから日本人の国際教育について、特に本学はグローバル30の拠点校にも選ばれておりますので、そういったものを引っ張っている一人として、実は財界の方あるいは官界の方々と多くのチャンスにお話をする機会があります。その中で最近感じておりまして、本学が真剣に取り組まなければいけないということをごく手短にお話ししたいと思います。後ほど杉浦先生のほうから実際に学部教育、これは本当に頭が下がるところを努力をされておられます。そのお話をできるだけ長くしていただきたいと思いますので、私のほうはできるだけ短くしたいと思います。

先ほど申しましたように、国際的な人材教育取組のなかで、最近、非常に大事なキーワードが出てきました。これが今日のタイトルにもなっておりますが、グローバル人材という言葉であります。昨年の政府の新成長戦略の中にグローバル人材という言葉が盛り込まれまして、それ以来さまざまな場で、日本がどんな人材を必要としているのかという議論が幅広く行われてまいりました。例えば4月に経産省、それから同じく文科省、それから6月には日本経済団体連合会。そして7月には内閣府が中心となり各省庁が集まりましたグローバル人材育成推進会議も中間取りまとめを発表しております。ぜひ皆さんお時間があれば、本学の学部生あるいは院生、どういう人材を育てるかということ

考えるときに、これらの資料を見ていただきたいと思います。非常に多くのデータが集められております。

内閣府の中間取りまとめには、先ほどから話に出ています、どんな資質が必要かという議論がございました。グローバル人材の資質は、もちろん外国語でコミュニケーションできなければ困るのですが、先ほど学士力という言葉が言われておりましたように、積極性、それからどんな局面でもみずから力をふるえる主体性あるいはチャレンジ精神、そして語学だけではなくて、異文化理解とアイデンティティ、こういった五つぐらいのものがあるのだらうと思います。これに対して本学はどういう学生を育てようか、そのための具体的な取り組みは何か。座学では何が必要か、フィールドワークでは何が必要か、あるいは海外へ送るといって何が必要か、これを真剣に議論する必要があると思います。

先ほどから企業代表の皆様からグローバル人材の話が出ております。私は少しマクロ的にお話をしますが、なぜ今グローバル人材か。日本のガラパゴス化という懸念があります日本はこれまで新しい技術を開発してフロンティアをつくってまいりましたが、もうそれだけではやっていけない。技術に加えて世界に通用する新しいビジネスモデル。恐らくそれが求められているのだらうと思います。

それから2番目といたしまして、ここの表にもございます。これはスイスのIMDが毎年出しております世界の競争力の順位表でございます。日本の地位は2009年17位、2010年27位、2011年26位。下がってきております。これは何もしなければもっと下がります。

では、それは何をすればよいのか。一つは、みずからのアイデンティティ、日本人としてのたくましさ、負けないぞという気合といったものが必要なのかもしれません。それからもう一つは、多様な人材を取り入れられる新しい社会システムの構築といったものが必要なのかもしれません。こういったことが内閣府の中間取りまとめにはまとめられております。

先ほどからメーカーの海外生産比率、海外での業務強化という話が出ております。今日はたくさんのグラフを使うことができませんので、お示しするのは二つのグラフだけですが、私もじっと眺めていて非常にショッキングでありました。中期的な海外事業及び国内事業全般に係る見通しについて、JBICが我が国製造業の海外事業展開に関する調査をいたしました。2010年、去年でございます。これを見ますと、これが国内、こちらが海外です。

国内事業を強化すると述べた企業は2008年はまだ4割ございました。これが2009年、2010年と3割ぐらいに落ち込んでおります。縮小するとの答えはさすがに少ないですが、もうほとんど現状維持以上のものではないということです。

こちらが海外事業ですが、強化・拡大する答えが多い。今、8割の企業は、海外は強化する、国内は現状維持である、これが現実です。日本が少子高齢化する中で、これが逆転するということはないだらうということが現実であります。

日本の産業界の言葉に耳を傾けないといけないと思います。これは日本経団連のグローバル人材の育成に向けた提言のなかのグラフです。何を大学教育に期待するかという問いの回答です。専門科目を外国で履修するかカリキュラムをつくってほしい。企業の経営幹部、実務者からグローバルビジネスの実態を学ぶカリキュラムをつくってほしい。日本文化、歴史を学び、海外から日本人がどう見られているかを考えられるカリキュラムをつくってほしい。海外大学との連携による交換留学やダブルディグリープログラム等の実施をしてほしい。教育現場における外国人人材の確保。これが経団連のほうで出されているということでもあります。我々はこういったことにもう少し耳を傾けねばいけない

のではないのでしょうか。

さて、次に、これは先ほど企業の採用につきまして浜田様からお話がありました。これも同じような資料に出ております。企業の採用計画です。今どういう採用活動をしているか。パナソニックは、2010年は500人採用して700人でした。2011年ですが、全世界で1,390人を採用した。国内は290人、海外は1,100人でございます。これは完全に逆転どころか、国内はできるだけ減らしている。パナソニック、これは関西最大の企業でしょう。パナソニックの人事の方ともお話をいたします。それ以外にも、私のところへ少なくともソニーや他のメーカーの方々、いろいろ来られます。ぜひいい留学生を採りたい、エンジニアを採りたいということで工学の先生なんかにおつなぎすることが多いのです。

それからユニクロを運営するファーストリテリングでございます。今や日本を代表する流通企業となりました。こちらが2010年は300人、国内200人、海外100人でしたが、2011年には300人、300人になっております。それからローソンもグラフがあります。私の感じでは、私のところへ来られる日本企業は今、真剣に留学生を採りたいということを書いてきておまして、9月の末に留学生の工場見学をタカタとかイシダといったメーカーでのご協力を得て企画をしております。

そういったグローバル化の現実の中で、私どもは先ほど申しましたG30の拠点大学の一つになっております。今日は余りG30の話をする時間はございませんが、今年からまた新しい取組がG30の中に加わってまいりました。それは昨年、思い出すのも嫌な事業仕分けを2年続けてやられました。昨年、二度目の見直しが決まりましたときに、学士会館で、私も含めましてグローバル30採択大学の副学長クラスの方が集まりまして共同声明を出しました。私はその後、この共同声明を持って蓮舂さんの事務所へ行きました。そしたら20代の秘書さんが出てきて、声明をお渡しして終わったのですが、産官学のご努力も得て努力して一昨年並の予算をキープしたわけです。そのときに産業界のほうから大変に強いプッシュがございました。これからグローバル人材の確保が大事なのだ。したがって、グローバル30をもう少し広範な目標に広げてほしい。一つは、G30成果はG30大学ではない、より幅広い大学へのインパクトのあるものにしてほしい。例えば授業や、あるいは教材、FD、こういったものはぜひ共有をしてもらいたい。それからもう一つが産業界との対話、協調の重視ということも挙げられました。これはどういうことか。今日お話をしているようなグローバル人材、これは一体産業界はどう考えているのか。あるいはもう少し広げて官界も含めて、どのような人材が必要なのかという議論。カリキュラムの作成からぜひ協力してもらいたい。それからもう一つは就職です。育てた人材がどういうふうに着職して、日本の発展に役立つかという議論をしてもらいたいということでした。

次に非常に大事な日本人学生の国際化のお話をいたします。日本人学生は内向きだと言われております。私は決してそう思っておりませんし、昨年の教育シンポジウムでも、この点は国際交流センターの河合准教授が大変緻密なアンケート調査でご報告申し上げました。我々の学生は、きっかけさえ与えれば幾らでも海外に飛躍できるポテンシャルを持っております。ぜひそれをすべきでありまして、そういった日本人学生の国際化に意を用いてほしい。

日本経団連も新しい取り組み始めました。日本人学生で3回生で交換留学して4回生の半ばに帰ってくると、就職活動は全部終わってしまいました。非常に可哀想な結果になるわけです。これではおかしいということで、交換留学生のための奨学金を経団連がG30大学を対象に来年度からつくります。恐らく今年の秋から募集が始まります。この奨学金の対象となる交換留学生には就職への配慮という

ことで、6月に帰ってきて4回生でも日本を代表するトップ企業に就職できるような活動をしましよ
うというお約束になっております。G30大学である京都大学からは応募が出来ます。

K.U.PROFILE についてですが、ここで現状を報告しておきます。全体でいきますと私どものプラン
は9研究科プラス経営管理大学院、それから工学部で12の英語コースを立ち上げます。おかげさま
でほとんどすべての英語コースは予定どおり立ち上がって、あと1コースが予定どおり今年開設され
ます。これに伴い150人の学生がこの英語コースで学んでいます。そのうちの18人が日本人です。
ですから、当初、留学生のためだけと思ったコースに日本人学生の方が入ってこられているというこ
とであります。

K.U.PROFILE にはトータルの目標がございます。これを見ていただきますと、留学生受入数は平成
20年には1,353人（留学生比率6%）でした。22年は1,543人が目標だったのですが、ごらんいただ
ければわかるとおり、2,001人（留学生比率8.3%）と相当増えております。25年の目標はこれでござ
います。この間に多数え方は変わっています。本学の教育情報システムの改善がございまして、従
来は5月と11月現在だけの数字だったのが、現在は期中に滞在した全学生が把握できるようになり
ました。したがって、統計上の若干の差はございますが、目標は、ここはクリアしている。しかし
交換留学生、いわゆるセメスター単位の留学あるいは受け入れは目標を下回っております。我々は
交換学生派遣をもう少し真剣に考えないと、とてもこの目標をクリアできません。これからが正念場
でありまして、これからお話いただく杉浦先生の学部英語コース、それから実は本学には30人近
い外国人教員をこのプログラムのために雇いましたが、そういった方々をどう生かしていくのか。2
年半で切れるところで今後どうしていくのか。それからいまま述べた交換留学。こういったことが残っ
ております。

最後にまとめですが、K.U.PROFILE をこれからどうやって全学的にこの成果を生かすかというこ
とが大事なことだと私は思っております。本学全体で英語だけで卒業できるコースができました。しか
し、ここだけでとどまっていはいけないので、それをどう増やしていくのか。それから学部の英語
コースについては、他の大学、大阪大学、九州大学等はカレッジ化して複数の英語コースをつくって
おりますが、本学は地球工学科の国際コース一つということで、大変なご努力をいただいております。
これを全学の教員の方が、例えば日本人の方でも英語で講義をして、このコースに授業を出して
いただくことをぜひお願いしたい。

それからもう一つ、またあいつが言つとると言われるかもしれませんが、やっぱり世界の流れは英
語での講義が増えているということです。韓国では30から100%英語で講義をするという大学も出
ています。もちろん100%英語でというのは非常に問題があると思います。しかし、たとえば全学で学
部の英語講義は年間で30しかありません。これではもう世界の流れについていけないと思いま
す。

また内向き日本人からの脱却ということで短期派遣を進めています。JASSO で今年からSS・
SV(short stay/short visit)というプログラムができました。海外に出る学生に1人8万円の補助が出ます。
本学ではとりあえず350人分のSS・SVの補助金を取りました。約3,000万円でございますが、これ
を来年度もっと活用していただきたい。恐らく秋にこれの募集がございます。もう少し細かくわかっ
たところでまたご案内いたします。

次の大きな課題は、私はダブルディグリーだと思います。先ほど産業界からの要請としても出てい
ましたけれども、やはり世界で今、質の保証のために大学間連携をしているわけです。その取組とし

てダブルディグリーが必要ではないかと思っております。

最後に一言だけ、この夏、面白い本を読みました。産業界のトップの方々の言葉を集めた『リーダーの言葉』ということで、元 JR 東日本の細谷英二氏が、変化への対応力そのものが経営の本質だ。それから HOYA の鈴木洋氏が、日本の商売にこだわっていてもだめだ。もうグローバルだよ。住友生命の横山進一会長は、ノーから入るのではなくて、イエスから入れ。僕らは変革の時にあります。ノーと言うのは簡単ですが、やはりイエスから入らないと本学の将来はないと私は思っております。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

有賀 どうもありがとうございました。

続きまして、工学研究科の杉浦先生をお願いします。

杉浦（工学研究科） 工学研究科の杉浦でございます。

今日は森先生から、特に学部の国際コースに関しましては十分学内全体に周知されているというか、理解していただいているわけではないので、ぜひ PR の場を設けますから話をしてくださいというようなことで、今日この日になっております。それだけでは我々の現在の問題点も含めると物足りないというか、不十分ですから、今日はお願いも含めてお題をいただいておりますけれども、学部国際コースの教育目的と実践、同コースに在籍する日本人学生の状況と今後という内容に関して全体を、これまで 1 分野・専攻・学科の問題というわけではありませんから、皆さんに考えていただきたいわけですが、そういう背景をお話しさせていただきまして、実際、地球工学科の国際コースでどういう教育を目指しているのか。我々の国際コースには日本人の学生さんも入っていただいておりますので、彼らの声を少しご紹介させていただきたいと思っております。



まず最初に、地球工学科国際コースの設置の背景ということです。これはどの産業においても同じことかと思えますけれども、日本の社会は当然皆さんご存じのとおり約 2005 年程度で人口が最大になりまして、それから徐々に減少している。海外で働くというか、仕事をされている日本人は約 200 万人程度の人。逆にその倍以上の人たちが海外から日本に働きに来ているというのが現状となっております。緩やかに増加しているというようなことを理解していただけたらと思えます。

同じように、今、日本の経済活動というか、産業の活動度というのは徐々に増加というか、上がってきているわけですが、当然、2000 年以降に関しましては非常に停滞気味だというのが現状かと思えます。もう 2010 年におきましては、GDP に関しましては中国に抜かれまして、日本は第 3 位になっているというのが現状です。人口からして中国の場合は、昨年統計によりますと、国勢調査によりますと 13 億人を超えているというのが現状だということです。

実際に建設産業、建設投資に関しましてこれまでの推移をご紹介させていただきますけれども、1990 年過ぎに関しましては約 80 兆円の産業規模がありましたけれども、それがこの 15 年、20 年ぐらゐの間に半分に減ってしまった。ちょうど私が大学を卒業したころ、1980 年ごろの規模に落ち着いてしまっているというのが現状です。それは当然ながら先進国としては十分なインフラを整備してきたのでということで、それ以上あと何がというような話になりますけれども、やはり都市内においても利便性とか快適性、安全性というのはさらに求められるという状況で、まだまだ今後も少ないなが

らに、そういう投資は続いていくというのが現状かと思えます。

それに対しまして世界を見てみますと、日本一国の規模を基準にしまして、例えばアメリカでしたら大体3倍規模の建設投資が行われております。中国を除いた東南アジア、東アジアの地域に関しては日本とほぼ同じぐらい。中国一国だけでも約5倍ぐらいの建設投資を実際、さらに今は徐々に増えているのが現状だと思います。欧州全域、EU全体に対しても同じように日本からは5倍以上というようなことですから、日本の市場だけにこだわるのではなくて、やはり世界に向けて建設業も活動の場を広げていかないと今後やっていけないだろうというのが大きく背景にあるかと思えます。

いろんなところでランキングという話が出てきますけれども、建設業の売り上げのランキング、2009年のものになりますけれども、皆さんもご存じのとおり、建設ゼネコンの大手、清水、鹿島、大林、大成、竹中というのは大体10数位のところにランキングがされています。

この数字が海外でどれぐらいの事業を受注しているかということですが、国内に向いているところは約10%程度、海外でも多く仕事をしているところは20数%というのが現状かと思えます。それに対しまして、一体どの地域の、どの事業を、どれぐらいの割合で企業が取っているのかと見ますと、世界のほとんどの地域に関しましては欧米の企業が事業を受注しているというのが現状です。日本におきましては若干アジアであるとか中東あたりである程度の割合を持っておりますけれども、最近の特徴としては、中国が非常にアフリカでの事業を受注しているというのが現状かと思えます。やはり欧米の企業は、例えばフランスの会社の場合ですと37%海外で、ドイツのこの会社に至っては約90%他国で事業を受注しているというような状況に対しまして、日本の企業というのは別に技術が劣るというわけではありません。むしろ非常に高い技術力を持っているのに、なぜそういうところで仕事が取れないのかということに関して我々は少し考えざるを得ないというのが現状だと思っております。単に言葉だけの問題かと言われると、そうではありませんということだと思います。

今は産業界の話ですが、実際に今、少子化ということでどんどん人口が微減というか、減りつつあります。現状、大学に在籍している高等教育を受けている人たちは、日本の場合は約250万人、大体4分の1に割りましたら60万人ということですから、今年の大学の入学者は約61万2,000人程度が大学に入っています。進学率は54%。各国の比較をしてみますと、21年、2年前の統計データになりますけれども、日本が47%、進学率は徐々に増えている。ですけれども、総数は減っているというのが現状かと思えます。アメリカが62、英国56、ドイツ34。国々によって若干違いますけれども、アジアの国々においては、中国はまだまだ進学率は低い。お隣の韓国とか台湾は非常に進学率が高い。やはり技術で生きるといふ国の特徴があるのだと思います。卒業という視点から見ますと、この春卒業した人が約55万2,000人程度ということで、その当時の入学者数から考えますと約90%ぐらいが、少なくとも大学にとどまることなく、卒業されて社会に出ておられるという形になるのだと思います。

今回、学部の国際コースということでK.U.PROFILE等の背景にありますのが、要は大学で教育というのが非常に重要になっておりますので、世界でどういう形で留学生を確保すべきか、責任を負うべきかというのが背景にはあります。オーストラリアのレポートによりましてその理由づけというか、根拠を示すことになりますけれども、2003年では200万人、将来2035年には約760万人程度の留学生が全世界に渡っていますよというのが報告されております。現状、2008年の統計データですと約300人が全世界におられます。そのうちの日本に来て勉強されている方は、約4%程度というのが現状です。このG30のプロジェクト、K.U.PROFILEでは、2020年600万人程度そのときに留学生がいるだろうということで、その5%がGDP、国の世界に対する貢献として受け入れざるを得ない、受

け入れるべきだろうということで考えられて、30万人計画というのを持っておられます。ですから、現状13万人程度の留学生の方がおられますので、それを倍増させていくというのが基本的な流れだと思います。

ここに日本人の学生さんの留学する総数を示しておりますけれども、徐々に同数、外国人が来られる。日本人が留学するというのは増減がありますけれども、右肩上がりでも少なくとも上がってきたわけですけれども、2000年あたりから日本人が外へ出るということに関しましては頭打ち、むしろ減少しているというのが現在の現状だと思います。これは先ほど来ご説明があったことだと思います。

我々工学、土木の中で実際留学生をどれだけ受け入れて、学位を与えて、卒業していただいたか、修了していただいたかという比率をお示しておりますけれども、過去10年間に約400人程度です。ですから、年間40人程度の留学生さんが学位を取られて、本国に帰ったり、いろいろなところで就職しているというのが現状です。見ていただいてわかりますけれども、その多くは中国、韓国、お隣の国々から来ていただいているというのが現状です。また学位のレベルとしましては、博士と修士でほとんどです。ほとんどが博士の学位だと考えていただいたらいいかと思います。ですから、日本の一つの技術のレベルを見ていただいたら、非常に高い技術が当然ありますので、それを本国に持って帰っていただいて、母国のほうにそれを適用していただいているというのが現状なのだと思います。学部は6%です。ほんの数人しか日本で、京大で学んでこられなかったということで、これを何とか増やしましょうというのが今回のG30プロジェクトの中で、K.U.PROFILEの中の1コースとして我々の取り組みになっている。当然、修士課程も同じように非常に低い割合になっておりますので、修士に関しましても同じように国際コースを連続させて、博士に関しましては各個別に教員が対応できるということもありますので、座学が中心になるような学部と修士に関して何とか留学生の確保を進めたいというのが今回の流れになろうかと思えます。

実際ここ10年ぐらいの間にいろんな書物が、いろんな記事が出ております。今、私がなぜ国際コース長を仰せつかって担当しているかということ、2年前に専攻長をしておりました。そのときにG30のプロジェクトの公募がありまして、専攻長、あなたやりなさいというような形で準備をさせていただいた。そのまま引き続いて今に至っているわけですけれども、結局、世界に、特に中国、東南アジアが多くなりますけれども、リクルートしていると欧米の大学から非常に多くの人たちが来まして、ヘッドハンティングじゃないですけれども、人材を奨学金付きで連れていかれるというのが現状だということを理解しております。ですから、いかに大学で教育をして、将来それを人材として自国の国力を増強するために役立つようにしてあげるかというのが問われているというのが現状だと思います。

7月の終わりごろに東大がこんな記事を出されました。秋入学。世界のアカデミックカレンダー、学年歴は異なりますから、世界の標準に合わせようということで、こういう提案をされております。我々工学の中の地球工学科の1コースということで、こういうようなことはできませんけれども、我々なりにどう対応すべきかというのはいろいろ考えておりますので、ご協力、ご支援いただけたらと思います。

実際、国際コースで、この春から1期生を受け入れております。すべて英語による科目履修で学位を取得ということで、学部でパイロット的に、試験的に設置のほうをさせていただいております。アジア、アフリカを中心とする開発途上国、特にこういうような地域においていろいろ問題になります都市開発、社会基盤整備、防災など非常に社会的な要望が高いということですから、そのあたりで活

躍できる人材を育成しましょうということになります。

G30のプロジェクトは単に外国人の留学生を受け入れるというだけではありませんで、大学の国際化ということが中心になりますけれども、一つ、留学生の受け入れに関して弊害になっているのは、どういう形で選抜を行うか。多くの欧米の大学はほとんど書類選考でされているということですが、日本の場合の可能性として、やはり2月の試験で、海外から来ていただいて受験をしていただいて合否を判定するというのは非常に難しいということで、別の形の入学者の選抜というのを設置させていただいております。外国人を対象に、この夏休み、8月、9月に選抜を行うということで、地球工学科としましては全体の定員が185名ありますけれども、そのうちの30名を上限として海外で選抜試験を行って選抜をしていくということです。今回、この国際コースに関しましては、単に外国人留学生ということで海外から来ていただくということだけではありません。本来の目的は、日本人を育成して海外で活躍していただくというのが大きなテーマとして残っておりますから、2月の試験で合格した人から10名程度、何人かを同じく国際コースに入れて、工学としてのクラス単位が約40名から50名程度になりますので、それぐらいの範囲内で試験的に運用していきましようということになっております。

それで、今回の場合は、日本人の方も10名、国際コースに入っております。3月14日という入学手続の日に、我々は当初、何名ぐらい本当に日本人で手を挙げてくれるかというのは非常に心配でした。180数名の合格者の中から、後からアンケートを取って学生の意識を調査しておりますけれども、約2割程度、興味を持っていただいております。なぜあなたは選ばなかったのですかということをお聞きしたら、英語でやっていける自信がありませんというのがほとんどでした。ただ、その中でもやはり約1割程度の学生さんが、13名ですが、説明会に来ていただいて、そのうちのさらに11名がコースに所属されることを希望したいということで、面接しまして10名を最終的に選んで、国際コースに入らせていただいたというのがこれまでの経緯です。

それで、こういうような先ほど来ご説明がありましたグローバル化社会の中での建設産業というのは、一般企業の取り組みとしましては、社内の公用語を外国語にしましょう。いろんな弊害があるかも知りませんが、そういうものを採用していくであったり、積極的に人事交流を国内・海外で進めていく、もしくは国籍によらないような人事制度を実際に進めていこうというような取り組みがあるかと思います。

建設産業に関しましては、先ほど言いましたように、もう国境というのがありません。社会資本形成自身が輸出産業になるべきだ、なっていますというのが現状ですので、どうしても海外拠点、海外の企業も含めまして共同企業体をつくって取り組んでいくというのが求められているということです。

特に社会基盤施設というのは、単につくってそれでおしまい、普通に大量消費のものではありませんので、50年、100年、さらにそれ以上の期間使っていくというのが前提条件になります。ですから、特に、つくって使いこなすという時代が来ておりますので、その場合には当然オペレーション、それからメンテナンスという技術も含めて、一括して発展途上国等に展開していくというのが求められています。現状、例えば道路会社等でしたら、もう海外拠点をつくっておられます。鉄道等、さらに建設だけではなくて、オペレーションも含めて総合的な企業でしょうけれども、同じように海外で拠点をつくって、いろんな受注活動をされているというのが現状です。電力プラント、水道、こういうような社会基盤すべての分野で海外に、いろんな意味で支援も含めながら事業展開されているというこ

とだと思えます。

ただ、そこで求められている人材というのは、こういう事業全体をコーディネートするようなシステム・インテグレーター的な役割を担える人が非常に少ない。日本人でもおられますけれども、総数が限られているというのが現状だと思えます。そういうところに京都大学工学部地球工学科の国際コースの卒業生がぜひ展開していただければと我々自身は考えています。

ですから、求める人材としては、やはり世界各国で活躍できる人材を、教育としては今、日本人だけではなくて、多様な国籍の学生さんが一緒に学べるような環境をつくるということで、すべての科目を英語で提供しましょう。ですから、その成果としましては、実際そういうような異なるバックグラウンドを持つ学生さんが同じ部屋で学ぶということで、実際異文化に接して、自分自身の価値観とをいろんな意味で戦わせて、そこでもまれるというようなことを早い段階から、よりいろんな意味で進めていただきたいと思います。高校までの環境とはガラッと変わって、いろんな意味で、より広い視野でものを考えられるような人材になってほしいというのが現状かと思えます。

特に最近、私自身がこの春に技術者として国際展開をどうすべきかというシンポジウムを1回しておりまして、その中のパネルディスカッションの中で、海外に長く技術者として海外の技術者と一緒にプロジェクトを進めている人が言われたのが、先輩というか、外国人の方から言われたのが、**Do not find difficulty but find solution** ということで、日本人の場合でしたら、知ってる知ってるで、その先がない。ですから、これは難しい、それ以後何も進まないではなくて、我々技術者である以上、何か答えをそこに出して、実際ものを動かしていく。そこまでの柔軟性、展開力というのをこのコースの中で養っていただければということを考えております。

就職先としましては、当然ながら日本企業が前提になるかと思えますけれども、少なくとも海外事業に従事していただけるようにであったり、先ほど紹介したような多国籍企業に就職したりであったり、国際機関の職員、国連であるとか世銀であるとか、よりいろんな形での国際的な機関での活躍を我々は願っているというのが現状だと思えます。

卒業要件としましては、ほかの日本人の学生さんと一緒です。工学の中では大体このような比率になるかと思えますけれども、134単位以上の単位取得を一応条件として課しております。ただ、今、英語で科目を提供する難しさというのを理解していただきたいということで、それぞれA・B・C群の、それから専門科目の条件がここに記載してありますけれども、このK.U.PROFILEのプロジェクトの中でいろんな支援をいただいて提供できている科目は、例えばA群科目でしたら8科目16単位だけです。ですから、一つも落とせないというのが現状です。B群科目に至っては28単位以上なのですけれども、15科目34単位以上。若干余裕はあります。C群科目に至っては、科学英語を我々のほうで提供しておりますけれども、6単位。それから日本語は国際交流センターのほうで提供していただいておりますけれども、これも最低限のレベルしか提供していただけていない。全部この提供科目の単位数をカウントしていただいたら146単位程度です。ですから、ほとんど余裕がないというのが現状です。後から紹介させていただきますけれども、それが学生さんの不満でもあり要望でも出ているというのが現状かと思えます。

実際、国際コース1期生、日本人学生10名、外国人4名。外国人4名は、中国、韓国、ケニア2名、それぞれこんなような構成になっております。今回、K.U.PROFILEで特定教員ということで雇用していただいている先生方の国籍は、中国、韓国、マレーシア、ネパール、パキスタン、イラン、ペルー、ウクライナ、ハンガリー、ドイツ、ベルギー、もう1人はスイスの方を予定しているというよ

うなことです。ですから、非常に多国籍の教員も学生も含めて、これから一緒に学んでいくという環境づくりを我々は想定していますということを理解していただけたらと思います。

それで、実際、日本人の学生さんも含めまして、国際コースの学生さんのケアを我々はいろいろ考えております。学期の開始、終了、特に1期生、最初の学期にどういう形で学生の意識が変わっているかというのを日本人の学生さんは日本語で、外国人に対しては英語で面談を、コース長の私と教務委員長、それからコースの教務の先生の3人で見てきております。それから、先ほど、やはり異文化というものを少しでもわかっていただくということがありますので、外国人の先生方の国籍は多様です。ですから、学生さん一人ひとりに外国人の教員をチューターとして割り当てておまして、月2回程度の面談を毎月毎月していただいたというような形になっております。

最後、彼らの意識ということになりますけれども、やはり連休明け、非常に学生さんは不安になりました。当初11名の学生さんが選ばれて10名入っているわけですがけれども、その当時は大学へ行っているいろんなことをやりたいということで国際コースということで入ってきました。でも、1カ月たつて非常にしんどいということで、このまま本当に卒業できるのかというような不安をその当時それぞれが感じ取っていたかと思います。その多くのコメントとして上がってきたのが、各先生方は非常に多くのレポートを課します。毎日レポートを書くだけで1日が終わってしまう。これまで勉強しないと我々はだめなのではないかというのが学生さんからの意見でした。ほかの日本人の学生さんはほとんど何もしていない。大学にも来ていないような人がいっぱいいるのに、なぜ僕たちはこれだけここでやらないとだめなのですかということをその当時だいぶ言っておられました。

もう一つ、最近の学生さんの考え方の中にあるかと思えますけれども、本当にこれで単位が取れるのかということに関して非常に不安になっておられました。それは先輩もいない、前例がない。ですから、どんな試験になって、どういうふうに我々は学んでいったらいいかというようなことに非常に不安を持っていたというのが現状かと思えます。ただ、最終的に前期が終わりまして、何人かは何単位か落としておりましたけれども、結局このまま国際コースとしてやっぱり我々はやっていきたいというような意思を持っておりました。

特に日本人の学生からは、こんな要望が出ておりました。先ほど来言っていますように提供科目が非常に少ない。落としたら再履修を翌年もしくは翌々年にしないとだめだ、本当にそれでできるのかということ非常にまだ学生さんは不安に思っております。特にA群科目はびっただし数字しかありません。教員比率10%は外国人にというのが一つの目標になっております。そうすると、少なくともA群科目の10%は当然英語で提供されるべきだというような形になろうかと思えます。先ほど30%というような数字が出ていたかと思えますけれども、こういうところをぜひ全学でご支援いただけたらと思います。我々工学の中の専攻の修士の国際コースに関しましては、日本人教員で約5割は英語で提供するというのでプログラムから成り立っております。ですけれども、学部に関しましては我々工学の教員だけでカバーできるわけではありませんから、ぜひとも全学の支援が必要なところだと我々は思っておりますので、ご要望として上げさせていただきたいと思えます。

面談の中で学生さんが言っているのは、この10名に関しましては非常に海外留学、海外で何か経験をしたいということを要望として上げておられました。

今後の課題ということで、最後、挙げさせていただいておりますけれども、特にA群科目の充実を図っていただければということになろうかと思えます。あとは、それぞれ日本人、それから外国人に対して課題があるわけですがけれども、非常に各国間で中等教育まで、高校までの学習内容というのが

大幅に違っております。ですから、その人たちを同じところで、はいスタートというような形で各基礎科目、教養科目を学ぶというのは非常に難しい。特に我々は理系ですから、理系の数学であるとか、物理であるとか、そういうような科目に関しては難しいというのが現状かと思えます。ですから、制度的に今はありませんけれども、入学前に何とか予備教育が行えるようなシステムが全学でできないだろうかということをお考えしております。

逆に日本人に関しましては、十分京都大学に合格してくる人たちですから、数学、物理、一部はそれほどではないかも知れませんが、ある程度のレベルは確保できているということですが、英語ということに関しましてはまだ不十分だと。ですから、我々は科学英語という形で何科目か提供しているわけですが、それでもやはり不十分だ。英語の演習というのをもっと実務的に、技術というレベルでの理解を深められるような指導をカリキュラムの中に入れていかないとだめだと考えております。特にレポートの書き方に関しましては学生から、これが非常に課題であるので、何とかカリキュラムの前半のところに入れていただければというようなことでした。

あと、先ほど申し上げていますが、非常に留学志向があります。ですから、3年の後期から4年の前期ぐらいの1年間、半期ぐらいに何とか短期の交換留学ができるような制度をこれから順次、彼らが3年生になるときまでには整備していきたいということを考えています。それには当然パートナーになる海外の大学のプログラムが必要になりますので、そのあたりも含めながら、今後の課題ということで我々は考えています。

あとは学内の問題になりますけれども、文書類の英文化であったり、経済的な支援というのが留学生獲得には非常に大きな課題になっているということをご理解いただければと思います。

以上で私からの報告を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

有賀 どうもありがとうございました。

それでは最後に、高等教育研究開発推進機構の塚原先生をお願いします。

塚原(高等教育研究開発推進機構) 高等教育研究開発推進機構の塚原です。担当はスペイン語です。



英語の話は今までたくさん出てきたと思いますが、それ以外の言語についても触れつつ、少し話をしたいと思います。

グローバル化社会に向けた外国語教育のあり方というのがタイトルですが、そもそも題に問題がある。外国語教育というのがそもそも問題なのです。なぜ外「国」語なのか。なぜ国が入るのか。ほかの言語の言い方では国は入らないですよ。ですので、私は異言語教育などという言い方をしているのですが、ここでは慣例に従って、外国語教育という言い方もします。

さて、異言語でのコミュニケーション能力をおおまかに、どういうものから構成されているかを概念化してみると、まず一つはスキルです。いわゆる狭い意味での運用能力。何かしゃべれるかとか、書ける、読めるということですが、これを専門にやっているのは多くの場合は語学学校です。これだけを一生懸命やるということになっています。例えば単語を一生懸命覚えるとか、文型を覚えるだとかいうことをやって、TOEICは何点だとか、TOEFLは何点だとかというようなことをやっている。ここで言うスキルというのは、ああ

いうテストで測ることができるスキルとと思ってください。ところが、大学というのはあまりそういうことはなく、教養も要るのだということを言うわけです。大学一般というのはスキルと教養の二つを合わせてやっていることが多いです。

ところが、スライドを見ていただくとわかるように、ほとんどの場合、やっているのですけれども、離れていることが多いです。密接には関連していない。言語の授業の中でももちろん教養的な話がされているとは思いますが。例えば本学の場合で言うと、私はスペイン語を担当していますが、ではスペイン語圏と言われている地域について概論的に学ぶ授業があるかということ、ほとんどないですね。ラテンアメリカ関係の授業が一つだけありますけれども、それだけです。ですから離れてしまっている。場合によっては、一生懸命スキルはやっているのだけれども、教養はあんまりやらない。教養というのはどういうことかということ、ある言語が話されている地域だとか社会について理解するために必要な知識と思ってください。そういったものが提供される機会が少なく、あるタイプの私学では言語能力を上げてやろうということで、TOEIC の点数を上げるということを一生涯やるのですけれども、ではそれはどこで話されているのか、どういう社会で話されているのか、話されている地域にはどういう歴史があるかということは手つかずです。予算や時間、能力といった制限からやり切れない。一方、教養が占める割合が大き過ぎるという場合もあります。もしかしたら本学はこういう傾向があるのかもしれません。例えば、よく引き合いに出されるのは、英語の詩のことばかりやっていてどうするのだとかですね。もちろんこれは詩を扱うことが悪いわけではありません。言語学習全体の中で適切に配置されているかという、要するにバランスの問題です。スキルと教養というものはくっついていなければならない。本来は密接に関連しているものなのに、テクニカルな意味でのスキルのみを抜き出して教えている、または、教養的な部分のみ突出して教えるという状況があります。適切なバランスで密接に関連させながら教えるということ、なかなかそれができていないという状況があります。

以上も重要なのですけれども、グローバル化を視野に入れた大学の異言語教育のあり方としては、もう一つ視点が必要だと私は思っています。それは何かと言うと、メタ言語観といったものです。メタ言語観というのは、言語、特に異言語ですけれども、これにどうやって対峙するかという姿勢、総長の言い方を借りると哲学というようなものです。例えば私が英語で *He don't understand.* と言うとします。違うだろう、文法的に間違っているぞ、と言われる。けれども、場面によってはそれで十分コミュニケーションできてしまいます。確かに間違っている。けれど、理解できるかどうかのほうが文法的な間違いよりも重要な場面がある。そうした場面で、「あなたは私が言ったことを理解できたでしょう、だからいいじゃないですか」というような相対化するような態度がとれるかどうか。それは恐らくメタ言語観的な、言語というものはどういうものかとか、あるいはコミュニケーションというのはどういうものなのかという一つの考え方が身についているかどうかだと思うのです。

この間よく聞いたのは、例えば国際学会に院生が行って英語でプレゼンをする。プレゼンはさんざん練習しているからできるのだけれども、質疑応答になったときに何か質問されると黙ってしまう。一つは英語の能力というのがあるかもしれないのですけれども、もう一つは、そして決定的に大事なことは、よくわからなかったから言い直してくれということが言えないということなのです。それは恐らく英語の能力ではなくて、ここで私が言っているメタ言語観の問題です。言語というのは必要に応じて必要なだけできればいいのだとか、ネイティブのようになることがだれにでも求められているわけではなくて、必要な場所で必要なだけできればいいのだとかという一種の相対化するような見方

を持つには至らず、結果として黙り込んでしまうというようなことが起こり得るわけです。

では実際どうするのかという話になるのですが、実はメタ言語観というものが異言語学習のコースに入っているか、それを要素として含めているかどうかということだけでだいぶ違ってくるはずで、なぜなら、現実のコミュニケーションのためのスキルというのは、今挙げたような例でもわかるように、相対化する態度、一種の冷めた態度、ツールとしてちゃんと使えばいいのだという態度と同時に、言語というのはツールだけでは済まないということを了解していることが必要になります。ツールとしてだけでは済まないというのは、最初に言ったように、例えば英語はペラペラしゃべれるけれども英語圏のことは何も知らないとか、「何も」ということはあまりないでしょうが、英語だけ、例えばスキルだけやっているとそういうことがあり得る。それは英語という大言語だからあまりないと思われているだけで、それ以外の言語だったら当然出てきます。なぜかという、多くの場合、大学の言語の授業というのは90分授業が週2回。それが15回あることになっていますけれども、それだけの時間で言語のスキルを上げて、なおかつその言語の実際の使用を下支えする知識、ここで言ういわゆる教養的なものをどこまで入れ込めるのかというと、時間的な制限があって非常に難しい。でも、それは入れていくべきでしょう。密接に関連していることですから、入れていくべきだろうと私は思っています。そのときに、メタ言語観とここで言っているものを蝶番のようにして入れていくことができるのではないかと。スキルと教養を結びつけるための接着剤のようなものとして。恐らく、理想的にはこういう形なのですよね。こういうことが最終的には目指されるべきだと思うのですが、実際なかなか難しい。なかなか難しいというのは、一つはいろいろな条件が違うから。高校まで勉強している英語とそれ以外の言語では当然扱いが異なるはずで、いわゆる初修外国語と言われている、英語以外の言語の場合は、スキルの部分を大学に入ってからやらなければいけない。英語というのはそうではないですよ。

京大に赴任してきてとても不思議だったのですが、京大生は英語があまりできないという話を聞きます。しかし、京大生ができなかったら誰ができるのだろうか。東大生でしょうか。ともかくそれだけの入学試験をくぐり抜けてきているのにできないというのは非常に不思議で、それは恐らく試験では問われないタイプの運用能力について話しているということもあるのですが、もう一つは言語に対する向き合い方というのをどこでも学んでこなかった。英語ができれば十分だとか、外国語といえば英語しか知らないというようなことでずっと来て、大学に来て初めてそれ以外の言語について触れる。ところが、今まで外国語といえば英語というところで教育を受けてきた人がそれ以外の言語に触れても、対峙の仕方が恐らくわからないのです。どうやって未知の言語に向き合ったらいいのか、どうやって考えたらいいのか。だから、京大の異言語のコースではそれを要素として入れていくべきだろうと思います。教養的なことは十分入っていると思うのですが、もう一つ、どうやって異言語に対峙していくのかという言語観も要素として取り入れる。そして、言語観をそこにスキルと教養を上げていくということをやります。グローバル化ということに向けてということであれば、必要なことはこれではないか。実際のやり方としてはいろいろあると思います。英語には英語に適したやり方があるだろうし、それ以外の言語の場合はそれに合ったやり方があるだろう。いずれにせよ、スキル・教養・言語観、これら三つの軸を備える、しかもバランスよく備えていくということがこれからの異言語教育、しかもグローバル化社会を見据えたという大学の異言語教育には必要なだろうと私は思っています。

これで終わりです。皆さん大変長かったので、私は早く終わることにします。ありがとうございます。

した。(拍手)

有賀 どうもありがとうございました。以上で5名のパネリストの方にお話しいただきました。もう一度パネリストの先生方、壇上にお上がりいただけますでしょうか。お願いします。

質疑応答

司会 ということで、5名のパネリストの先生方に話題を提供していただきました。非常に多岐にわたる話題でしたけれども、大変刺激的で参考になる話題が多かったと思います。会場からも多分ご質問等たくさんあると思いますけれども、会場からどなたかご発言、ご質問等ございますでしょうか。

麻生川静男（産官学連携本部） 私は2008年京都大学に来ましたがその前3年間は兵庫県が神戸に設立したカーネギーメロン大学の日本校のプログラムディレクターをしていました。そこはアメリカの大学であったため、授業はすべて英語でしておりました。そのため入学基準の英語は、TOEFLで本当を言うと100点ぐらいが望ましいのですが、90点以上の学生を受け入れていました。しかしそのTOEFL 90点レベルの学生でもカーネギーメロンに来ましてから、予習復習でほとんど数時間しか寝る時間がありません。TOEFL 90点という点は、京都大学の学生で言いますと多分トップの10%ぐらいだと思います。

さて、先ほど来、京都大学の学生は英語ができる、という意見と、反対にできない、という両方の意見ができましたが、私のカーネギーメロンの経験も踏まえて、この点に関して一言申し上げたいと思います。

この英語ができる、できないというときに、判断の観点が違うと思います。例えば陸上競技で言いますと、短距離走と長距離走というのは全く別物です。短距離走で幾ら走れる人でも長距離走は必ずしも走れるとは限りません。この点から言いますと、大学の入試というのは短距離走しか測っていないのです。ところが、神戸のカーネギーメロンでもそうですし、今回の地球工学のほうで始められた国際コースでも、長距離走の学生が欲しいわけです。

英語の短距離走と言いますと、例えば入試では穴埋め式の問題とか、長文読解と言いましても、たかだか2ページぐらいの問題です。また和文英訳にしても3、4行の問題です。ところが、長距離走と言いますと、300ページ程度の本を読んで、それについて議論する。ないしはレポートだというと10ページほど書く力が求められます。つまり短距離走で幾ら脚力を鍛えても、それは基礎体力を付けるのには役立ちますが長距離走をやらせた途端に完全にニュアンスが違って来るわけです。今後、京都大学でも国際コースなどの学生は長距離走を強める必要があると私は考えます。

もう一つ言いたいのは、英語で自分の意見を言える訓練をすることの必要性です。私は現在KUINEPの授業を二つ持っています。前期は《日本の情報文化と社会》後期は《日本の工芸技術と社会》。どちらも日本をテーマにした授業です。テーマが日本のことでありながら、最後の論述形式の試験で同じ課題を50分間書かせますと、留学生、それも欧米の留学生だけではなく、中国の留学生が非常に高い点を取ります。試験用紙1ページの裏表をきちっと書きますし、文法的にも間違いがほとんどありません。当然中国では留学生になるには英語がかなりできないといけないとは聞いていますので、中国人の学生のうちでも優秀な学生が京大に来ているのだと私も認識はしています。一方、京大生の英文は、ごく一部の例外的な学生を除けば、書く分量も少い上に、主張するポイントが不明瞭です。

私がここで言いたいのは、英語の力というのは、文法力や解釈力だけでなく、もっと広く人間としての力が問われているということです。つまり英語力以前にも課題が多くある、ということです。

有賀 どうもありがとうございました。特に英語教育、大学以前も含めてということだと思いますけれども、ご意見をいただきました。

ほかに先生方。どうぞ。

岡田暁生（人文科学研究所） グローバル化というと真っ先に世界中でしゃべられているので英語というふうになるわけですが、端的な言い方をすれば、英語能力をもっと伸ばしたいのだったら第二外国語を省いてしまえという議論、当然その負荷を減らせという話になりかねないわけです。私はその方法というのは全く間違っている。つまり英語をある意味、別のスペイン語なり、中国語なり、韓国語なり、さらにもう一つの外国語を学ぶことによって英語を相対化するという能力というのは非常に重要なことだと思っているのですが、そのあたりの第一外国語としての英語、それからもう一つ、大学に入ってから学ぶ語学というか、そのあたりの位置づけをどう思っておられるか、聞かせていただけますでしょうか。

有賀 塚原先生、何かご発言ありますか。

塚原 私が答える質問かどうかちょっと。もちろん私もそう思います。だから、さっき言ったメタ言語観というのは、これは私の印象ですけれども、英語だけしか知らないと非常に育ちにくいと思っています。それからもう一つ言うと、私はスペインの専門で、その中のカタルーニャというところの専門なのですけれども、論文を書くときは英語の文献とスペイン語の文献とカタルーニャ語の文献を少なくとも使うのです。だから、英語しかできないというのは、それだけ視野が限定されるので、英語しか知らないと相対化しにくいというのは確かにあるとは思いますが。

岡田 実は私が申し上げたかったのもそのことで、僕自身も実は英語が十分使えるようになり始めたなど思ったのはドイツ語が流暢に喋れるようになり始めてからなのです。だから、案外と別の語学をやることで、ぽつと英語のほうを使い回しができる能力が発達するということがしばしばございますので質問した次第です。

松本 私は答える立場かどうかわかりませんが、全学の共通教育、学部の教育の中で語学がどのように扱われているかというのは、前者であれば高等教育研究開発推進機構で検討されています。学部であれば学部で、語学をどうとらえるかということも専門教育でやられています。その中でそれぞれの考え方があってしょうけれども、私個人の意見を問われれば、先生と全く同じ意見です。つまり、英語が重要だから国際語の英語に絞れというような意見は恐らくこの大学ではどなたもおっしゃらないと思います。ただ、スタンダードなインターナショナル・ランゲージになっている英語を、先ほど麻生川さんが短距離走でないという表現をされましたが、要するに大学入試に必要な英語能力、特に京大の英語の問題の出し方というのは独特のものがありますけれども、そういう能力だけはいけないということをおっしゃいました。そのとおりでありまして、英語の授業を増やすだけではなくて、ほかの科目もインターナショナル・ランゲージで授業を行ってみてすそ野を広げる。外国語の教育の枠の中で英語を増やして他言語を減らすというのは間違いだと私は思います。ほかの教科で、当然英語が主体になると思いますが、英語でやっていただいて、海外の考え方になじんでいくということが重要ではないかと私は思っております。

私も含めて、この中の多くの方々には外国へ留学された方が多いと思います。当然、外国の大学あるいは大学の研究機関でいろんな環境を見てこられたと思いますけれども、レポートの出し方、学生に

対する対応の仕方というのは日本の授業とは大きく異なります。それがいいかどうかはそれぞれがその場で感じられたと思いますけれども、私は先ほどおっしゃったようにカーネギーメロンの日本校で4時間しか寝ないということ、これは外国の有名大学では当たり前です。4時間ぐらしか寝ていない学生はいっぱいいます。ものすごく勉強しています。京大生はそうしているだろうかと思問自答してみますと、おそらくノーだろうと思います。勉強量が全然違いますから、大学に入るときのレベルは日本学生のほうが高いですけれども、出るときには日本学生のほうがはるかに低いという現状はそれをあらわしていると思います。ですから、私はいろんな角度から国際化ということ、語学だけではなくて進めるべきではないかと、強く思っております。

有賀 ありがとうございます。

淡路 先生がおっしゃった点につきましては、各学部や全学レベルで議論されてきたと思います。その結果を踏まえて現下の学生にどのような能力を身につけるよう留意する必要があるのか、その具体的方策について、全学の共通教育を対象に、学生の状況に見合った実効的教育の改善に努めます。

有賀 どうもありがとうございました。グローバル化というときに外国語というのは一つ重要なポイントだと思いますけれども、最初のほうで平田様とか浜田様がおっしゃったように、必ずしもグローバルに活躍する上で外国語だけでできればいいというわけではなくてという話があったと思います。そういう点に関して何かご発言、ご質問はありませんでしょうか。外国語のことでも結構ですけれども。

麻生川 私は先ほど述べました KUINEP の授業の他に、一般教養で《国際人のグローバルリテラシー》という授業もしています。確かに企業の方々がおっしゃっていたように、国外に出て活躍できるリーダーが必要だと私も感じていますし、京大生もそうあるべきだと考えています。ただ、リーダーを育てるには実際の訓練の場が必要ですが、大学ではそういった場を作るのは難しいので座学が中心になります。しかし座学といっても、普通の講義のように一方的に教えるのではなく、議論、ディスカッションを通して自分たちで考えていく、そういうやり方をしています。テーマ的には日本、欧米、中国、韓国、それとイスラム。このそれぞれの文化圏について、キーになる概念は何だろうか、と考えさせることが重要です。その時、歴史とか地理とか単眼的視点でなく、複眼的視点から考えることを強調しています。高校の授業では、生徒達は世界史と地理とか分けて考えたりしがちですが、そうではなく、世界史とか地理にまたがった観点から見るということです。その上、人文系だけでなく、物理とか、化学、数学、医学などいわゆる理系も含め全分野にわたって議論しながら考えるということが重要だと私は考えています。確かに1学期間の授業時間が20時間ほどですので、全部がわかるわけではありません。しかし、議論を通じて各人がそれぞれ疑問を持った点というのがあるわけで、おのおのが心の中に疑問を感じて、自分から進んで本を読み、自分の中で体系化していく欲求を感じる訳です。そういった意味で私は自分の授業が一つの触媒のような役目をすればよい、と考えています。教えてもらうのではなく、自分で掴み取った思想が、最終的にグローバルで活躍できる人間には必要であり、大学ではそういうきっかけを提供するべきだと私は思います。

山木吉彦(高等教育研究開発推進機構) 私は数学をやっているのですが、ずっと大学にいるもので、今日のような話というのは非常にショッキングというか、いろいろ考えさせられるところが多くて、現在の学生気質と、さっきの高校生の自主性がないとかいう話とか、外国人が優秀で欲しいとか、そういう話を聞くと、いっそほとんど京大に外国人を入れてしまったほうがいいのではないかと思うぐらいショッキングだったのですけれども。それはさておいて、企業のほうで欲しがる人物像ということで、だいぶ日本人がひ弱であるというようなお話があったのですが、例えばそういったところに

何か一つ改善なり、よりよい人物を育てる上で、大学における教養教育にご要望なり、物足りない点など、私は所属上、教養教育に結構携わっておりますので、望ましい人物を育てるのにどのような教養教育がいいとか、何かご意見がありましたら伺いたいと思います。

平田 ただいまのご質問に対してでございますけれども、大学における語学の話というのが前段でございましたが、これは企業の観点で申しますと、英語は上手なのだけれども仕事はできないというタイプはままあります。私どもは、いわゆる学部卒、技術系では修士卒がメインになっておりまして、そう申しますと、基本的なところをきちっと身につけているかというのは、どうしても理科系のほうは必要条件として見る傾向がございます。文科系ですと学部卒が中心ですが、そのときにどうなのでしょう、英語の力、もちろん最近では学生さんのほうで一生懸命勉強していますから、TOEIC800点、900点というのも珍しくなくなって、ある意味では差別化にはなっていない。我々も TOEIC が高いからマルだとか低いからペケだとかいう観点は余りなくて、まだ当社なんかはそうなのですけれども、新卒の場合、長期雇用が前提で、40年近くは付き合いをするつもりでの採用です。その中で、人件費というある意味では、投資にリターンしてもらおうという長長尺で考えた場合、大学の4年なり6年なり、その中での括弧付きのスペシャリティーと仕事のマッチングを新卒採用時に精緻に考えて、短期的に投資を回収するという発想ではございません。昨今は、企業の中でも育成のあり方をどうしたらいいのだらうということに悩んでおり、当社におきましては、オフ JT よりも OJT なのだろうと考えております。人間というものは、おのずからなるものがあって、要はそれが発現するかどうかは場次第だというような感覚が私自身、最近すごくしております、そういう意味で、企業の観点で入り口で見るのは、ある種の常識的な最低限のリテラシーみたいなものではないかと思えます。

例えば高校からのつながり而言えば、昨今理系・文系の進学コース設定が極めて早い。そういう意味で、最終面接でよく尋ねるのですけれども、文系の子にあなたはちゃんと物理・化学を履修したのと聞いたら、履修していないと言う子もいるわけです。理系の子だったら、地理・世界史はやったけれども日本史はやってないとかですね。それはちょっと困るということでもございまして、これは特に大学に対してということではないのですけれども、いわゆる学生というフェーズを終えて企業に入るというプロセスの中では、ある程度、日本人としてのベーシックなリテラシーというものは一定のレベルで身につけておいて欲しい。語学や、技術系の人間でしたら業務上必要ないろいろなテクニカルなもの、それは会社に入ってからきちとした場を与えて、キレない程度に目配りしながらストレッチさせて身につけさせていく。メインは OJT、補完的にオフ JT ですが、若手向けにはオフ JT の場として、企業に入ってから教育・啓発の観点で、もっと大学さんとの連携みたいなことがあってしかるべきと思います。昨今、そういうトレンドがあるように思いますし、私としても何かそういった協力関係を模索していきたいと考えております。お答えになっていないかもしれませんが、そういう状況でございます。

浜田 企業から高く評価される人材の特徴として、異なる文化とか異なる世代と接触しているとか、うまくやっていけるというよりも、議論しながらチームワークをつくることができる人が求められているのですけれども、大学教育にもし求めるということになると、今の大学、今日は特に京都大学さんの中でどういう取り組みが行われているのか詳しく存じ上げないですが、いろんな世代の人と大学時代から交わるというか、異なる価値観を持った人、学部が違っただけでもだいぶ学生のタイプも違いますし、もちろん外国人の留学生もそうですし、OB・OGの方々とか、もちろん経済人のトップとかばっかりでなくてもいいと思うのですが、例えばいろいろなハンディを持った方々とか、様々

な立場の方々といろんな議論をして、とにかく摩擦を大学時代にしっかりと経験させる、そして自分の頭で深く考えさせたりとか頭をじっくり揉ませて、答えてなかなかないねということをつかせるような教育というか、そういう場が今、先ほど私の話の中のつなぎで言うと、やっぱり欠けているのではないかというふうに感じているところです。

それと、語学の話ですが、最近、英語ができる前に正しい日本語をとという企業様からのお話は結構多いですね。先日も某総合商社の人事の方がおっしゃっていたのですが、英語は入社してからできるようになる。逆に中途半端に英語ができる、TOEIC700 何十点ぐらいだと逆に中途半端に何をやってきたのみたいな、できるなら 900 点ぐらいとって欲しい。できないならば、入社してから「ぐりっと」鍛えれば間違いなくできるだけだけの能力の人を採っているから、別にできなくてもいいです。むしろ日本語で、例えばある総合商社だったら、(どこの会社でもそうだと思いますけれども)、自分のところの会社のドキュメントのあり方みたいな、文書の作り方とか、物産だったら三井物産らしい堅い文章だったりするのですけれども、ドキュメントの作り方とか、回し方とか、そういう伝統みたいなものがあるのですが、そういうのをじっくりと 1 年かけて「ぐりっと」学ばせたりとかするのですが、それを学ばせるのになかなか苦労している。日本語の文章の能力とか、そもそもの論理の展開力とか、そういうトレーニングが余りされていないところに英語の能力をのせていいのかという話はよくお聞きするかなというところです。

そんなところでよろしいでしょうか。

有賀 どうもありがとうございました。ほかにもあると思いますけれども、講義の 30%を英語でやるようにするとかというようなお話もございましたけれども、あるいは A 群科目の 10%はぜひ英語でしてくれとかというお話もありました。そういうことに関して先生方、何かありませんか。なければ結構なのですけれども。

多賀茂（高等教育研究開発推進機構） 私はフランス語を全学では教えております。教える側の立場として、今日いろいろ午前中から話があり、知らなかったこと、全然重要度を考えもしなかったこと、いろいろ教えていただいて、実際教育を行っている教員一同、今日のさまざまな報告や発言を深く心にとどめたいと思っております。

その上で、もう一つだけ違う観点を最後に言っておきたいと思うのですが、日本人の学生、あるいは日本人の研究者が外国でなかなか積極的に発言できない、リーダーシップをとれないということの一つの原因が、日本人全員が恐らく失敗を起こすことのコンプレックスといいますか、常に完璧でいたいという一種強迫神経症のような状況になっているために、一歩が踏み出せないという状況だと思えます。私は研究の都合上、精神分析なども研究しておりますけれども、そういった場合に、「さあ一歩踏み出せ、もっと喋れ」という教育をしても逆効果なのです。

4 年間の教育を私たちがずっとしていきますけれども、その教育は単に知識を教えるという授業だけではなくて、ある意味でメンタルケアを行う、学生のメンタルヘルスを保ってあげる。あるいはコンプレックス状態にある学生のコンプレックスを解いてあげる。そういう意味も大学の授業にはあるのかなと思います。高校までずっと凝り固まってきた、あるいは日本社会の中で生きていて知らぬ間に築き上げられた神経症状態を京都大学の授業で解いてあげる、そういう授業をこれからしていくという気持ちも私たちの中に必要なのではないかと思います。

その一番重要なポイントは、よく京大の教育のシステムで言われていますけれども、対話といえますか、単に少人数ということではないのです。学生の目を見て、そして一人ひとりの心の中で何が起

こっているのかということを考えられる教員になりたいなど、そういうふうに関心しました。

有賀 最後に、松本総長からお願いいたします。

松本 ありがとうございます。今日のディスカッションのテーマは国際性となっております、英語教育とはなっていません。淡路先生が午前中に講演をなさいましたけれども、非常にいいポイントをたくさん示しておられました。国際性は京都大学は高いかどうかということをお一人ひとりが自問自答してみる必要があるのです。あのスライドの中に 20 位の欄外と書いてありました。全国の大学の国際性を何で測っているか多少怪しいとも私も思いますが、個々の研究レベルでは何の問題もないのですが、教育観点で国際性を見ているのかどうか分かりませんが、国際性が低いというふうに関心のある集団は思っているのです。これに対して我々が発憤しないといけなと思います。

教育についても、授業だけが教育ではないということは先生方はよくよくご存じだと思います。研究室に入ってきて、研究室のゼミ、あるいは研究活動を通じて一人ひとりの学生を卒業させる、そんな過程があるかと思えます。そのときに、サバイバルできるような力強い人が欲しいという産業界なり社会の要求、先ほど浜田さんがお話されたと思いますが、そのとおりに思います。これは研究室によっては、かなり厳しくやっておられるところもあります。これで世界を知る、あるいは先生の姿勢を知る、あるいはどれだけ頑張らないといけないかということを知るということもあると思えます。

ご参考までにどうか、参考にならないかもしれませんが、私がちょっと異常だったかもしれませんが、私の研究室の学生は、企業に就職して、一流企業にたくさん行きましたが、帰ってきて異口同音に、企業というところは楽ですと言いました。先生、研究室のほうがずっとしんどかったです。しかし、すごく楽しかったですと言ってくれたのです。私はそれは大変うれしく思いました。私は別にいじめたわけでも何でもありませんが、ゼミをやったり、一緒に遊んだり、勉強したり、国際会議に連れて行ったりしましたが、そういう雑草みたいな強さを育てるとするのは各研究室で行われていると思えます。それが十分に発揮できていないというのはちょっと残念なことだと思います。

それから授業も、日本人の先生が日本人に教えるのに何で英語で教える必要があるのかという不平はよく聞きます。また、日本語で教えると効率が悪くなるから十分教えられないという話も聞きます。それはそのとおりに思います。しかし、これは乗り越えなければならないと私は思っているのです。3 割の授業を英語でやってみたらどうでしょうかと森機構長のスライドにありましたけれども、九州大学は先ほど言いましたが、4 割というのを各学部長と大学で協議をして決定しておられます。ソウル大学は 80%が英語で行われています。アジア諸国、日本の大学がすべて国際化に向けて、この状況を見て歩み出していることにかんがみますと、京都大学もぜひ、言葉だけではありませんが、国際的なセンスに向けてぜひ先生方一人ひとりが踏み出してほしいと思うのです。一番行いやすいのは研究室だと思います。その次は授業だと思います。それから全体のシステム。これを 10 学部長の先生方と教育担当理事と私ども含めて、どのようにすれば学部教育が教養教育を含めてよくなるかということをおぜひ一歩踏み出したいと思っておりますので、先生方には今日の各界のお話をお聞きになって、どのようにすればいいかということをお学部長のもとでいろいろご議論をお願いしたいと強く望むところでございます。

どうもありがとうございました。

淡路 総長がまとめられた後に言うのはおこがましいのですが、グローバル化時代には、異質性のある社会で主張し、かつ協調性のある行動をなせる能力が大事ではないかと思っています。それは外国云々だけでなく、日本社会で勤める、あるいは他の地へ移動する場合も基本的には同様でしょう。そのとき知力や経験等人間力が必要になるでしょう。日本社会では使用言語が同じなので楽ですが、外国に行くとコミュニケーションに欠かせない外国語運用能力（特に地球語としての英語力）や文化的素養が求められます。先ほど有賀先生がおっしゃったように、それに耐えうる社会的総合力が要りますから、トータルにサポートするパッケージ的対応が国際化には必要です。8月27日に東大・京大副学長バトル討論会が東京であった際に、東京大学の佐藤副学長が秋入学について高校の進路指導の先生方に若干説明されました。私は法的な整備も含めてパッケージ的にやらねばならないと申し上げたところでした。



有賀 ちょっと時間が超過してしまいましたので、以上で終わらせていただきたいと思います。

最後になりましたけれども、貴重な時間を割いて話題提供していただいたパネリストの先生方にもう一度拍手をお願いいたします。

(拍手)

司会 どうもありがとうございました。それでは、これでパネルディスカッション第2部を終了させていただきます。

それでは最後に、鈴木晶子高等教育研究開発推進機構副機構長より、閉会のご挨拶をお願いいたします。

SHIMADZU

第15回京都大学全学教育シンポジウム
「グローバル化社会と大学教育」について

2011年9月2日
株式会社 島津製作所
人事部長 平田権一郎

SHIMADZU

会社の概要

社 是： 科学技術で社会に貢献する
経営理念： 「人と地球の健康」への願いを実現する

創 業： 1875年
設 立： 1917年
資 本 金： 266億円
従 業 員 数： 3,125名(単体)
9,819名(連結)



グループ売上高： 2,527億円(2011年3月期)
グループ会社： 76社(国内32社, 海外44社)

2011年3月31日現在

SHIMADZU

沿革



創業者 島津源藏



二代目 島津源藏



軽気球飛揚に成功(1877)

1875 京都木屋町二条で創業
教育用理化学器械の製造を開始

1877 日本で初めての
有人軽気球飛揚に成功

1896 X線写真撮影に成功

1897 蓄電池の製造開始

1909 日本初の医療用X線装置を完成



初期のX線写真(1896)



日赤大津支部に納入した
医療用X線装置(1911)

SHIMADZU

分野

SHIMADZUのサイエンステクノロジーが、社会のさまざまな分野を支えています。

<p>環境</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 大気・水・土壌の分析計測 □ 排出物・廃棄物の分析 	<p>モビリティ</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 航空機の安全運行と搭乗者の快適環境 □ 自動車の安全性・快適性評価試験 □ 産業車両や建設機械の動力源
<p>医薬</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 開発プロセスにおける分析計測 □ 品質管理支援 □ 生産設備の管理支援 	<p>食品</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 原料の特性評価・成分分析 □ 安全性評価 □ 風味・食感測定試験
<p>医療</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 医療機関での診断治療支援 □ 新薬の研究・開発支援 	<p>エネルギー</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 太陽光発電・パネルの効率化 □ 次世代電池開発における分析計測 (太陽光発電・リチウムイオン電池)
<p>半導体・電機</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 半導体の製造工程 □ 液晶の製造工程 	<p>素材</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 石油化学製品や新素材の分析計測評価 □ 金属・ガラス・セラミックスの分析計測評価

SHIMADZU

事業領域

2011年3月期連結売上高 2,527億円

売上高構成比(2011.3)

産業機器 11%	計測機器 56%
航空機器 10%	医用機器 20%
その他 3%	

SHIMADZU

海外事業展開

地域のニーズに応える体制をグローバルに展開しています。

売上高構成比

日本 80.3%	中国 12.7%	欧州 7.3%	米州 9.0%	その他アジア 7.5%	中近東・オセアニア・アフリカ 3.2%
----------	----------	---------	---------	-------------	---------------------

SHIMADZU

新事業展開

次世代医療

分析・計測技術と医用技術を融合させた「分子イメージング」技術の研究開発を通じて、病気の超早期診断や革新的な創薬支援に貢献し、健康で豊かな生活を実現

産業計測

半導体・フラットパネルディスプレイ、自動車などの生産性向上に求められているリアルタイムモニタリングやインライン計測システムの提供

環境・エネルギー

環境汚染状況の分析・計測から浄化までの一貫した環境浄化ソリューションの提供。「省エネ・創エネ・蓄エネ」のさらなる向上に、先端技術で貢献

SHIMADZU

中期経営計画

新中期経営計画
【2011.4～2014.3】

基本方針 “世界の顧客に選ばれる No.1パートナー” を目指して

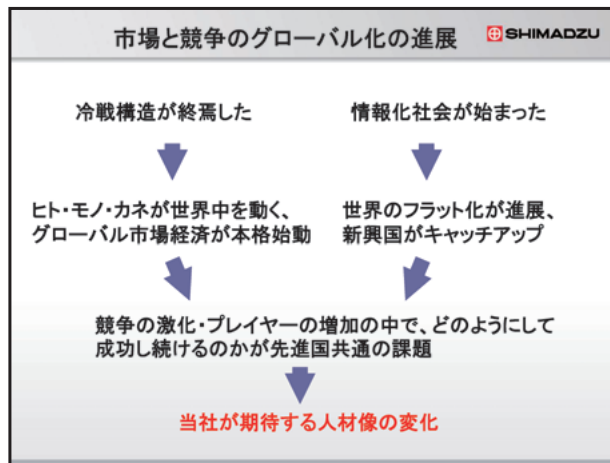
成長戦略
「グローバル戦略商品・ソリューションで世界をリード」
グローバルでの成長の追求
顧客への新しい価値の提供
成長市場・強い事業への集中

収益体質改善

グローバル組織・機能

前中期経営計画
【2008.4～2011.3】
マーケティング力
強化による成長の持続

将来
真のグローバル企業へ
売上高: 3200億円
海外売上高比率: 45%以上
世界シェア15%以上の製品拡充



当社が「期待する人材像」

島津製作所の目指す姿:「社是・経営理念」
 (社 是) 科学技術で社会に貢献する。
 (経営理念)「人と地球の健康への願い」を実現する。
 (2011~13 中期経営計画)“世界の顧客に選ばれるNo.1パートナー”を目指して

「期待される人材像」(歴代トップの考えを明文化[2008])

- 「変革と挑戦」
高い志と長期的な展望を持ち、前例・慣習にとらわれず、自由な発想と進取の精神で、新しい分野に、失敗を恐れず、果敢に挑戦する。
- 「スピードと責任感」
スピード重視で行動し、一旦、取り組んだら、責任感を持って愚直に取り組み、やりきると共に、過程や経験を次に生かす意識を持つ。
- 「成長意欲と自己学習」
成長意欲を持ち続け、担当組織の総合力の継続的な強化・向上に努め、また、顧客や競合に負けない知識や技術を獲得し、その道(担当部門・組織の運営・担当分野・専門分野)の第一人者を目指す。
- 「信頼醸成と全体最適」
顧客や社内外の関係者の期待に誠実にこたえる努力を惜みず、信頼醸成に努めると共に、人との連携を大切に、私心なく、全体最適のために行動する。

新卒採用で特に重視する4要素(=求める人材)

日本における「理系離れ」の現状 SHIMADZU

- 人口減少(少子化)の現状と影響
 - 少子化は年々深刻化(15才未満比率 13.3%は世界最低水準)
 - 19~22才人口529万人は、10年前645万人の約90%(20年前729万人)
 - 一方で、学部生総数250万人は、10年前とほぼ同水準(微増)。
 - 人口減少なるも、進学率向上、女子学生増加により総学生数は維持。
- 工学部系学生の減少
 - 工学部系学生40万人は、10年前47万人の85%
 - 全学生に占める比率は16%(60~90年代は20%前後を維持)
 - 工学部系進学の本志願者数は29万人で10年前の60%程度。
 - 工学部系への進学は、確実に減少している。
- 理系離れの問題
 - 2015年には理系学生は1学年5.5万人で97年の約60%程度に減少と予測。
 - 小中学生の理科に対する興味の薄れ。大人の科学技術に対する関心の薄れ。
 - OECD諸国の中でも科学技術に対する関心が低い。
 - 大学受験時の理数学習の負担、大学院進学による経済的負担が大きく、文系への進学に比べて敬遠されやすい。
 - 最近では、ゆとり教育見直しや理数教育充実による「質」向上策は打たれている。しかし、理系人材の「質」「量」をどのように確保するかは大きな課題。

革新的技術を生み出す研究開発に SHIMADZU

重要なことは・・・

- 産・学・官の連携
 - 製品開発における要素技術の確立
 - 世界市場への進出に向けた標準化・規格化
 - 連携による新たなイノベーションの創出
- 産・産の連携
 - メーカーサイド・ユーザーサイドが連携し、顧客ニーズにマッチした技術開発
 - それぞれの企業の得意分野を融合し、新たなビジネスモデルの創造
- チームワーク
 - チームで目標を達成しようとする意識
 - 自分の専門領域だけでなく、他メンバーの専門領域にも踏み込む

研究者・技術者をめざす学生の皆さんへ SHIMADZU

大学で学ぶということは
 「学理を実地に応用」できるようにすること
 (2代目源蔵の言葉)

- 科学的なことだけでなく、社会、文化などいろいろなことに興味を持つ
- 先輩/後輩、他学部/大学、先生など、いろいろな人と積極的に交流する
- 長期的視野に立って、計画を立てる
- ブラックボックスとせず、疑問を持ち理解しようとする
- 失敗を恐れず挑戦し、やり遂げる気持ちを持つ

企業の経営環境から考える求められる人材

経済環境 取組むべき課題

国内市場の縮小 ⇨ マイナス成長への対応

変化の加速 ⇨ 成功への答えがない

競争のグローバル化 ⇨ 予想外の競合との戦い

機会のグローバル化 ⇨ 新市場(海外)での成長
⇒企業のグローバル化

他人(他社)から信頼されるリーダー

置かれた環境に照らして取組む課題を見出せる人材

日本の学生を新卒で採用する理由

アイデンティティの危機
自社の理念の再認識
理念(DNA)を受継ぎ、引継げる人材

日本の新卒学生に対する期待は？

- 11卒就職率 91.1%
過去最低 文科と厚労5月発表
- 国内採用に対する採用コスト
過去最低
- 海外大生採用に対する採用コスト
過去最高

日本の新卒学生に対する期待・・・過去最低

日本の新卒学生に対する評価は？

採用担当者からのコメントとして

「生きるエネルギー」が弱い

「正解」を覚えてもらいたがる

打たれ弱い

ぶつかりあえない

失敗を恐れる

ここ2年で、大きく変わった
なぜ？

採用活動のグローバル化
(グローバル採用元年)

↓

日本の学生のポジションが
相対的に低下

↓

大学教育に
求められているもの

グローバル人材を巡る議論と 本学の方向性

森純一
副理事・国際交流推進機構長
京都大学

グローバル人材を巡る報告書

- 本年4月:「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」の報告書「～産学官でグローバル人材の育成を～」(経済産業省)
- 本年4月:「産官学によるグローバル人材育成会議」の報告書「産官学によるグローバル人材の育成のための戦略」(文科省)
- 本年6月:日本経済団体連合会が、「グローバル人材の育成に向けた提言」(日本経団連)
- 本年7月:内閣官房長官(議長)、外務、文科、厚生労働、経済産業、国家戦略担当大臣からなる「グローバル人材育成推進会議」が同会議の「中間まとめ」を発表(内閣府)
- その他、日本創成会議(JAPIC)、産業競争力懇談会(COCON)等でも議論

グローバル人材とは・・・

- グローバル人材の資質は・・・
 - 異文化理解とアイデンティティ
 - 積極性
 - チャレンジ精神
 - 主体性
 - 外国語でのコミュニケーション能力

内閣府の「中間取りまとめ」から

なぜ今、グローバル人材？

- フロンティアの喪失による「日本のガラパゴス化」への懸念
- 人材枯渇による我が国の地位後退への懸念
- 海外に目を向け、自らのアイデンティティを見つめ直す
- グローバル化時代にふさわしい社会システムの構築

(内閣府、「中間とりまとめ」から)

国・地域名	2011年	2010年	2009年
香港	1	2	2
米国	1	3	1
シンガポール	3	1	3
スウェーデン	4	6	6
スイス	5	4	4
台湾	6	8	23
カナダ	7	7	8
ドイツ	10	16	13
中国	19	18	20
英国	20	22	21
韓国	22	23	27
日本	26	27	17

WCR, IMD World Competitive Yearbook

日本の製造業の事業強化姿勢

【図1】 中期的(今後3年程度)海外事業 展開見直し

【図2】 中期的(今後3年程度)国内事業 展開見直し

(IBC: 我が国製造業の海外事業展開に関する調査報告2010年度)

変化する日本企業の雇用政策

- 日本企業の雇用政策の大きな変化
- グローバル人材であれば日本人に拘らない

【図3】 n=514社

グローバル人材育成に向けて大学に期待する取り組み (複数回答)

海外大学を外国語で履修するカリキュラムの構築	271
海外の優秀幹部・実務者から、グローバル・ビジネスの専門知識を学ぶカリキュラムの構築	269
日本文化・歴史を学ぶ、海外から日本・日本人が学ぶ環境を整えるカリキュラムの実施	215
海外大学との連携による交換留学やダブルディグリー・プログラム等の実施	197
教育現場における外国人材の確保	179
海外からの留学生受入れ拡大に向けた取り組み	159
大学が特許して、海外の企業やNPO等でインターンシップを実施、甲斐化	116
海外高校を卒業した日本人、国際バカロレア資格取得等の受入れ拡大	79
その他	20

出典:日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」2011.6

企業の採用活動における外国人採用数の増加

● 近年、グローバル展開を目指す企業に、国内学生の採用数を抑制し、海外採用や外国人留学生の採用数を増やす企業が増加する傾向が見られる

【バリエーション(株)】

2003年以降、欧州、米国、中国、アジアにも、リサーチセンターを設け、現地における新卒採用を積極的に行っている

	2010年度	2011年度	増減
採用総数	1,250名	1,390名	+140名
国内採用	800名	290名	-210名
海外採用	750名	1,100名	+350名

【(株)ローソン】

2008年入社の新卒採用より、外国人留学生の採用を本格的にスタート、2009年度は中国・韓国・台湾・ベトナムなどから採用

	2008年度	2009年度	増減
採用総数	110名	120名	+10名
国内採用	100名	80名	-20名
海外採用	10名	40名	+30名

【(株)ファーストリテイリング】

2012年度は、新卒採用1000名超に拡大、98.2%は外国人採用を予定

	2010年度	2011年度	増減
採用総数	300名	600名	+300名
国内採用	200名	300名	+100名
海外採用	100名	300名	+200名

(出典:産官学によるグローバル人材の育成のための戦略(案)(概要))

G30 を巡る新しい動き

- G30成果の広範な利用
- 産業界との対話・協調の重視
- 留学生受入と合わせて日本人学生の国際化
- 日本経団連の新政策
 - 交換留学生への奨学金
 - 交換留学生の就職への配慮

事業仕分け 2010秋

グローバル30締結大学による要領書発表の記者会見

K.U.PROFILEの現状

- 予定英語コースの開設は完了
- 留学生数の増加
 - ここまでは順調
 - 短期交流学生受入の増加
 - 交換留学派遣は予定を下回る
- これからが正念場
 - 学部英語コース
 - 外国人教員
 - 交換留学(受入・派遣)

	平成20年実績	平成22年目標	平成22年実績	平成25年目標
留学生総数	1,353	1,543	2,001	2,121
大学院生	913	1,017	1,307	1,339
学部生	187	156	145	266
その他	253	470	694	516
留学生比率	6.0%	7.2%	8.3%	9.3%
交換留学生数				
受入	76	90	87	150
派遣	51	70	48	150

本学の方向性

- K.U.PROFILEの全学的な波及効果
 - 外国語による授業の増加
 - 学部の英語コースの支援
- 全学の英語での講義を3割に
- 内向き日本人からの脱却
 - 短期派遣の実施
 - SS/SVプログラム
 - 部局のプログラム
 - ダブル・ディグリーなどへの積極的取組



英語講義のためのFD研修



豪州短期派遣プログラムの案内

Reference

- ”Survey Report on Overseas Business Operations by Japanese Manufacturing Companies, Result of JBIC 2010 Survey”, Japan Bank for International Cooperation, 2010 Dec, Accessed on August 28th, 2011
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議、「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」、2011年4月28日


K. U. PROFILE
 Kyoto University
 Faculty of Engineering
 Undergraduate International Course Program of Global Engineering


【京都大学全学シンポジウムPD:グローバル社会と大学教育】
 2011年9月2日@京都大学桂キャンパス(船井哲良記念講堂)

- ✓ 学部国際コースの教育目的と実践
- ✓ 同コースに在籍する日本人学生の状況と今後


工学部地球工学科国際コース (平成23年4月開設)
 国際コース長 杉浦邦征(工学研究科社会基盤工学専攻)

本日の話題提供の道筋

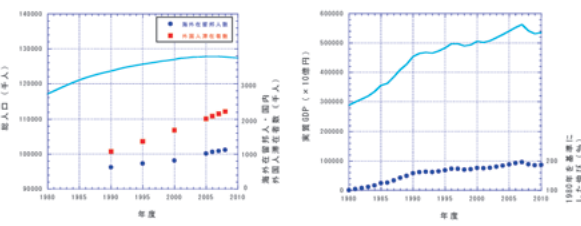
- 地球工学科国際コース設置の背景
 - 日本の国力(人口とGDP)
 - 建設投資の現状, 日本企業のランキング
 - 学習者人口, 留学生数
- 国際コースでの教育
 - 3コースから4コースへ
 - グローバル社会での建設産業
 - 教育方針, 卒業要件, 1期生
- 日本人学生の状況と今後
 - 日本人学生の声
 - 国際コースの課題



- ✓ 地球工学科国際コース設置の背景
 - 日本の国力(人口とGDP)
 - 建設投資の現状, 日本企業のランキング
 - 学習者人口, 留学生数
- 国際コースでの教育
 - 3コースから4コースへ
 - グローバル社会での建設産業
 - 教育方針, 卒業要件, 1期生
- 日本人学生の状況と今後
 - 日本人学生の声
 - 国際コースの課題



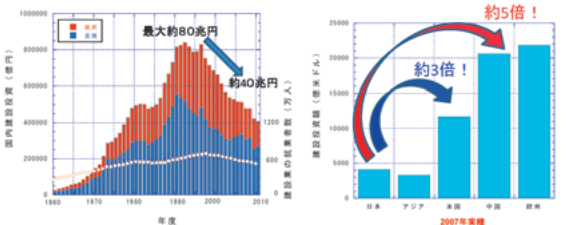
日本の国力(人口とGDP)



【ニュース】

- 2010年の名目GDPは米ドル換算で5兆4589億ドルで、中国のGDP(5兆8783億ドル)を下回った。
- 2010年11月1日時点での中国の人口(香港、マカオ、台湾は除く)は13億3972万4852人。

建設投資の現状(日本と世界)

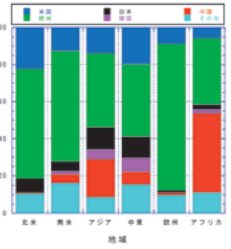


先進国として、十分な社会基盤形成が確保されてきたが、更なる「利便性」、「検索性」、「安全性」が求められている！

世界の建設市場は約600兆円を上回る規模
国内市場の15倍以上！

ENR2009による総売上高(建設事業)企業ランキング

順位	会社名	国名	2008年 海外売上高 (億ドル)	海外売上比率 (%)
1	VINCI	France	49,901.0	37.1
2	CHINA RAILWAY GROUP LTD.	China	34,548.1	3.9
3	BOUYGUES	France	34,405.0	39.4
4	CHINA RAILWAY CONSTRUCTION CORP. LTD.	China	32,417.1	6.0
5	HOCHTIEF	Germany	29,284.4	89.4
6	CHINA STATE CONSTRUCTION ENGINEERING CORP.	China	27,659.4	12.7
7	CHINA COMMUNICATIONS CONSTRUCTION GROUP (LTD.)	China	25,965.9	22.6
8	GRUPO ACS	Spain	24,015.6	21.2
9	CHINA METALLURGICAL GROUP CORP.	China	23,314.4	5.9
10	BECHTEL	USA	21,659.0	64.6
14	清水建設	日本	19,042.5	10.3
15	鹿島	日本	17,853.3	20.9
17	大林組	日本	16,457.0	24.2
21	大成建設	日本	14,935.0	19.1
23	竹中工務店	日本	13,284.0	10.0



ENR2008実績

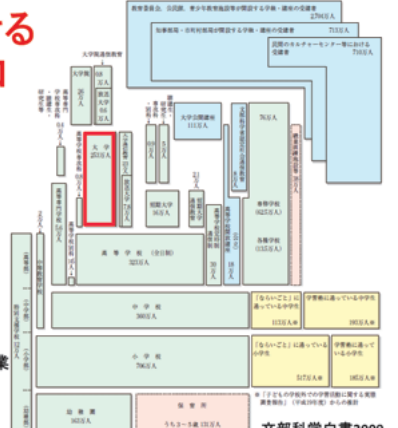
欧米の企業並みに世界で活動すべき！

欧米に負けない技術力があるのに言葉(英語)だけの問題か？

日本における学習者人口

平成23年度 学校基本調査(速報)
612,858人が大学に入学
※総数は徐々に減少(高卒者の54.4%)

【参考(H21)】
日本: 47%
米国: 62%, 英国: 56%, 独逸: 34%
中国: 14%, 韓国: 61%, 台湾: 88%



552,794人が大学から卒業(入学者の90.1%)

文部科学白書2009

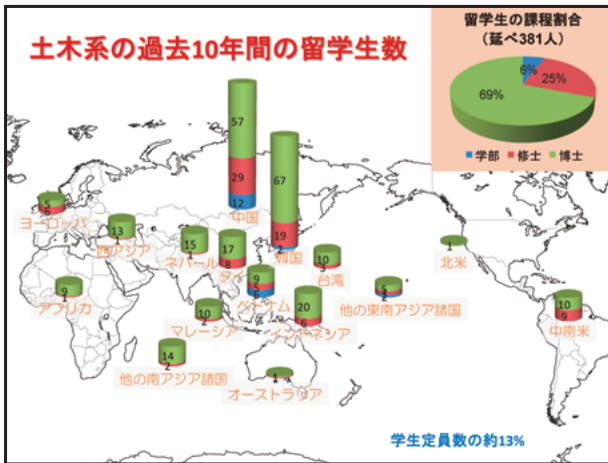
世界における留学生数の実態

IDP reportによると、2035年には、全世界の留学生は7.6百万人！
※2003年時点では、2百万人

Anthony Bohm et al. "Global Student Mobility 2025-Analysis of Global Competition and Market Share", IDP Education Australia Canberra, 2003.



2020年では、6百万人程度と予測
国力増強・留学生30万人計画(5%を受入)！



- 地球工学科国際コース設置の背景
 - 日本の国力(人口とGDP)
 - 建設投資の現状, 日本企業のランキング
 - 学習者人口, 留学生数
- ✓ 国際コースでの教育
 - 3コースから4コースへ
 - グローバル社会での建設産業
 - 教育方針, 卒業要件, 1期生
- 日本人学生の状況と今後
 - 日本人学生の声
 - 国際コースの課題

地球工学科: 3コースから4コースへ

工学部 地球工学科国際コース(平成23年4月開設)

『英語による科目履修で学位を取得』

アジア・アフリカを中心とする開発途上国において潜在的に存在する都市開発・社会基盤整備・防災などの幅広い社会需要に応える国際的な人材開発を推進する

英 語による入学者選考 (外国人対象:8月に実施予定)	最大30名選抜	国際コース 定員: 最大40名(予定)
日本語による入学者選考 (2月に実施される入学試験)	最大185名選抜	

※既存の土木・資源・環境の3コースと連携し, 国内外で活躍できる人材育成に努める

- ### グローバル社会での建設産業
1. グローバル社会への一般企業の対応例
 - (1) 社内公用語として外国語(英語, 中国語)を採用
 - (2) 日本国内一海外現地との積極的な人事交流, 国籍に依らない人事制度の採用
 2. 国境を越えて公共事業を実施 — 社会資本形成も輸出産業に— 海外拠点, 共同企業体(JV)の立ち上げ
 3. これからは、『つくり, 使いこなす』時代 — 持続的社会形成— 運転&メンテナンス技術の需要が増大
 - (1) 道路: 道路会社(NEXCO)の海外拠点設立
 - (2) 鉄道: 連携企業での鉄道システム輸出の為のJV立ち上げ, 現地拠点の設立 (新幹線, 都市鉄道システムの輸出: 政府のトップセールスの支援が必要)
 - (3) 電力プラント(原子力, 火力など): 電力会社の海外支援活動
 - (4) 水道: 自治体(大阪市, 福岡市など)と商社の連携でJVを立ち上げ
- …>事業全体を現地でコーディネートする“システムインテグレータ”等の人材不足!

地球工学科国際コースでの教育目的と実践

1. 求める人材

世界各国の都市と周辺地域の地球環境・エネルギー問題に配慮しつつ, 社会基盤の整備・マネジメント, 防災, 国土保全などに貢献できる人材育成を目指す.
2. 教育の実践方法

地球社会の持続性可能性に取り組む国際的技術者の養成を目的に, 多様な国籍の学生が共に学べるように, 全ての授業を世界共通語の英語で提供する. ※外国人留学生30名と日本人学生20名程度でのクラス編成を目標.
3. 教育の成果

日本人学生と外国人留学生とが共に学ぶ課程において, 異文化との接触・交流によりお互いの価値観の相違点を体験・理解し, 自分自身を再認識し, 自分を取り巻く世界との時間的・空間的な関わりについての理解を深め, お互いに信頼できる関係を構築することで将来の国際的な人的ネットワークを形成.

“Do not find difficulty, but find solution”

【就職先の例】
日本企業の海外事業に従事, 多国籍企業に就職, 国際機関職員(国連, 世銀など)

- ### 卒業要件(134単位以上)
- 全学共通科目
 - A群(16単位): 8科目16単位を提供
 - B群(28単位以上): 15科目34単位を提供
 - C群(12単位以上): 科学英語(3科目6単位), 日本語(3科目6単位)
 - 専門科目(66単位以上): 40科目84単位を提供
 - ※新設科目の例
 - Exercises in Infrastructure Design
初年次教育の一環としての新設科目. 社会基盤設計に関する文献調査, プレゼンに関する科目
 - International Internship
 - International Construction Management

国際コース1期生(日本人学生10名, 外国人留学生4名)



【外国人教員の国籍】
中国, 韓国, マレーシア,
ネパール, パキスタン,
イラン, ベルギー, ウクライ
ナ, ハンガリー, ドイツ,
ベルギー, スイス(予定)



【外国人留学生の内訳】
中国:1
韓国:1
ケニア:2

国際コース学生のケア

学期開始時と終了時に面談・指導

- 日本人学生には、日本語で。
- 外国人留学生には、英語で

外国人教員によるチューター面談

- 講義内容の理解以外での多様な質問に対して、国際コース学生(日本人学生を含む)1人ずつに外国人教員をチューターとして割り当てる
- 面談の回数は月に2回程度を目処で、英語で行う

※外国人留学生には、日本での生活に慣れるため、学生チューターも別途割り当てる
(40時間/半期)

地球工学科国際コース設置の背景

- 日本の国力(人口とGDP)
- 建設投資の現状, 日本企業のランキング
- 学習者人口, 留学生数

国際コースでの教育

- 3コースから4コースへ
- グローバル社会での建設産業
- 教育方針, 卒業要件, 1期生

✓日本人学生の状況と今後

- 日本人学生の声
- 国際コースの課題



国際コース日本人学生の声

講義関係に関して

- 積極的に授業に参加しようとしている
- レポートが多く, 大変である
- 単位取得ができるか不安である
(選択科目数が少ないことも関係している)

→ 前期試験終了後の面談では、ほとんどの学生が国際コースでやっていける手応えを掴んでいる

国際コースへの要望

- 提供科目を充実させてほしい(特に, A群科目)

その他

- 多くの学生が、海外留学を希望している

今後の課題

- 受講可能な科目の充実(特にA群, ポケゼミ)
- 授業の理解度に応じた入学前予備教育, 英語演習
 - 高校までの理系科目の履修内容が違うため, 外国人留学生は数学, 物理科目の理解に苦労している
 - 日本人学生は外国人留学生と比べて英語の読解や発表に苦労している
- レポートの書き方等の指導を先行(特に, 日本人学生に対して)
- 短期交換留学制度の整備(半期または1年程度)

※文書類の英文化対応(特に, KULASIS), 経済的支援

世界の貧しい人々の暮らしを豊かにするために
「自分たちの道は自分たちで直せる」
という意識を広げたい



ご清聴ありがとうございました。

訪問の後に、皆で写真を撮りました。村人のうれしそうな笑顔が忘れられません。皆様のご支援が世界中の村人の笑顔につながります。ご尽力をよろしくお願いたします。

 NPO法人 道普請人
(みちぶしんびと)

理事長 木村 亮(京都大学 教授)
連絡先 〒606-0015 京都市左京区岩倉橋本町1665-5
福林良典(理事) Tel&fax 075-706-5083
<http://michibushinbito.ecnet.jp>
info@michibushinbito.ecnet.jp

グローバル化社会に むけた外国語教育の あり方

異言語コミュニケーション能力

スキル

異言語コミュニケーション能力

スキル

語学学校

異言語コミュニケーション能力

スキル

教養

異言語コミュニケーション能力

スキル

教養

大学一般

異言語コミュニケーション能力

スキル

教養

異言語コミュニケーション能力

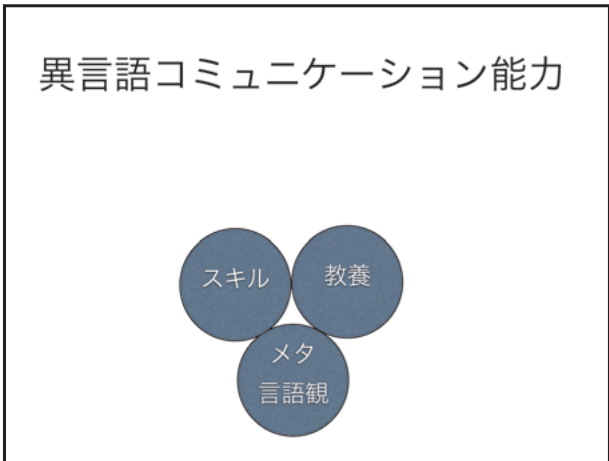
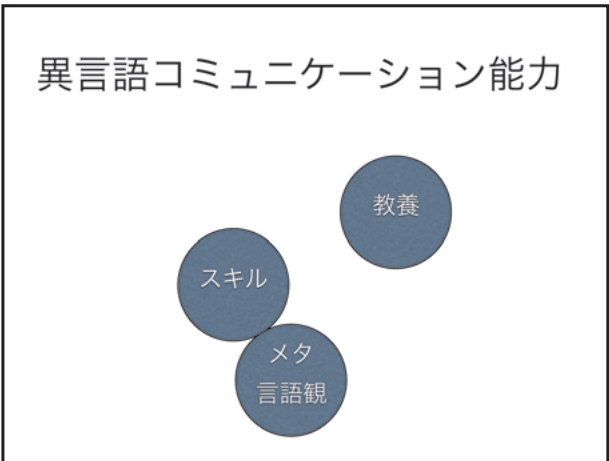
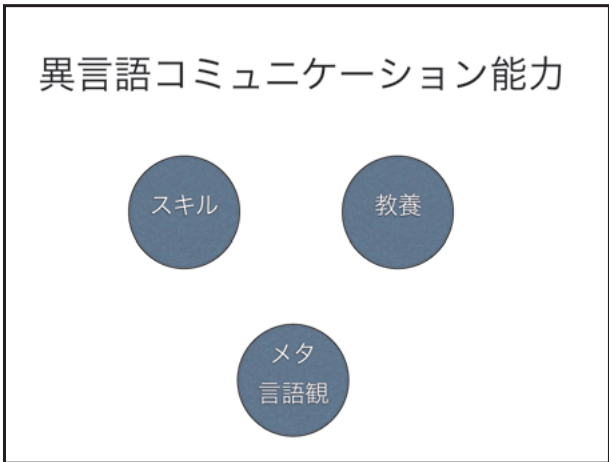
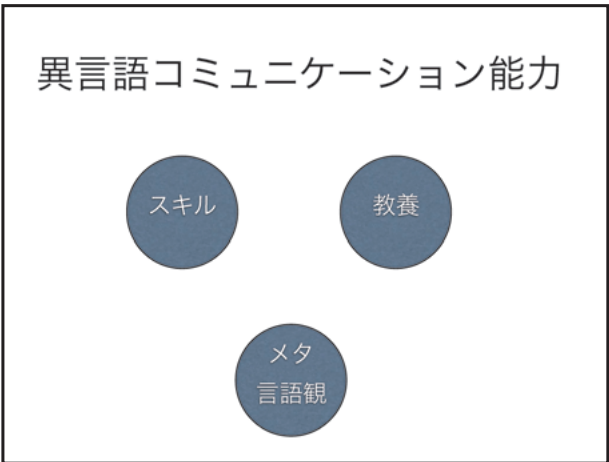
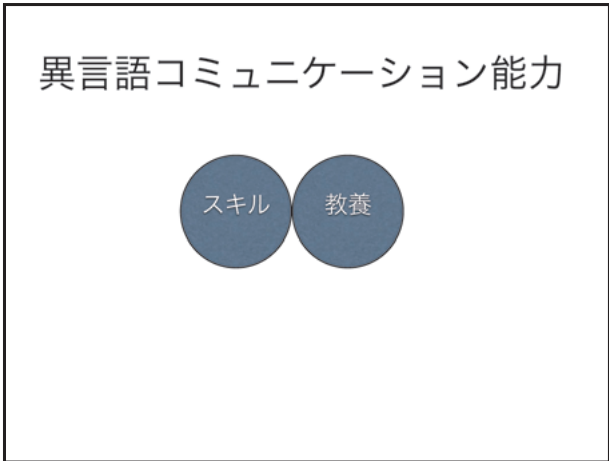
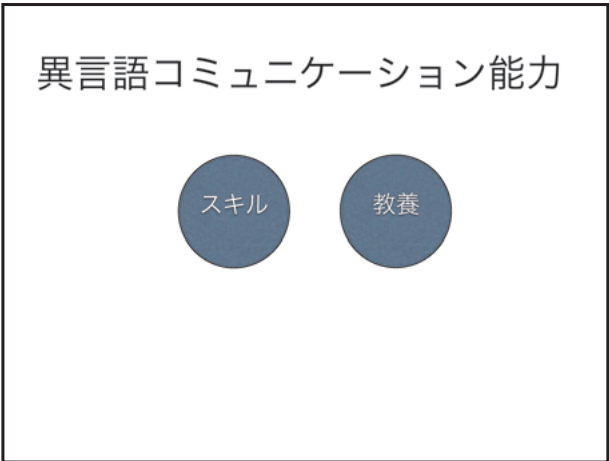
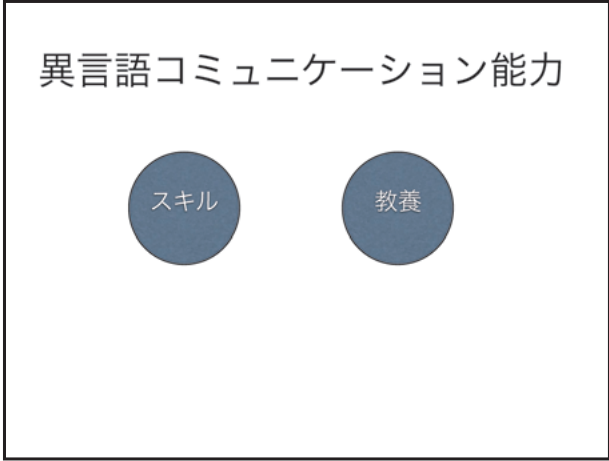
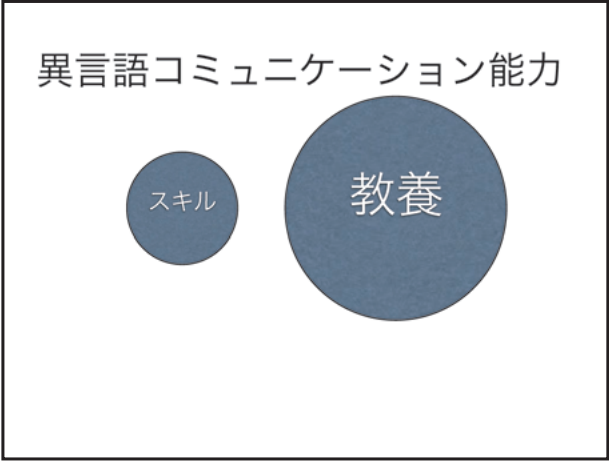
スキル

教養

異言語コミュニケーション能力

スキル

教養



11. 閉会挨拶

高等教育研究開発推進機構副機構長・教育学研究科教授 鈴木 晶子

本日は、午前中、松本総長の基調講演に始まりまして、三つの教育の現状に関する報告、そして午後には、高大接続、そしてグローバル化社会における教育のあり方についてという二つのシンポジウムを開かせていただきました。非常に盛りだくさんなプログラムの中で、十分にまだ消化できない部分もありますが、非常にたくさんの宿題をちょうだいしたのではないかと考えております。こういう形で外部の方をお招きして、外から京都大学を見ていただいている方々のお言葉をちょうだいするというのは初めての企画でしたが、このような形で議論を開いていくと同時に、もう一回、外部の目を鏡にしながら、私どもがこれからの京大の教育ということで、実際に何ができるかというところで、私どもの第一歩という、前に進むという形で今日の話を実のあるものにしていけたらと思っております。



今日のシンポジウム、あるいは報告において共通していることは、恐らく互いの壁を低くしていくことではないかと私は思いました。高校と大学の教育の壁を低くして、いかに連携するか。あるいはグローバル化の時代に言語や国という壁をどう乗り越えつつ、ユニットにならずにハーモニーをつかっていくか。あるいは産官学のどの世界にも通用するような学士の資質とか、そういったことについて考えていく機会になったのではないかと私は皆様のお話をうかがっておりました。これはまさに技術立国ならぬ人材養成立国、あるいは教育立国という観点で、京都大学の特性をいかに活かしプラスに変えていくかという宿題をいただいたと思っております。

長時間にわたりましたけれども、先生方、ご来賓の皆様方、いろいろな形で皆様とここでお話しすることができまして、本当に感謝いたしております。また、このすてきな会場をご提供くださいました小森副理事にはいろいろとご配慮いただきまして、本当にありがとうございます。

第15回ということになりましたこの全学教育シンポジウムでございますが、特に学務部、教育担当の職員の方々のさまざまなご配慮と準備、そして企画にも及ぶ部分でもサポートしていただきました。このサポートなしには実現できなかったのではないかと考えております。本当にありがとうございます。

それでは、これもちまして、第15回京都大学全学教育シンポジウムを終わりたいと思います。本当にありがとうございます。

(拍手)

司会 来賓の方々を初め、ご参加くださいました皆様に御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

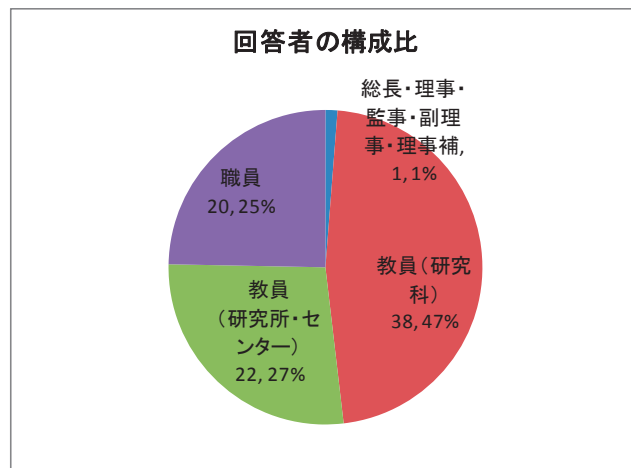
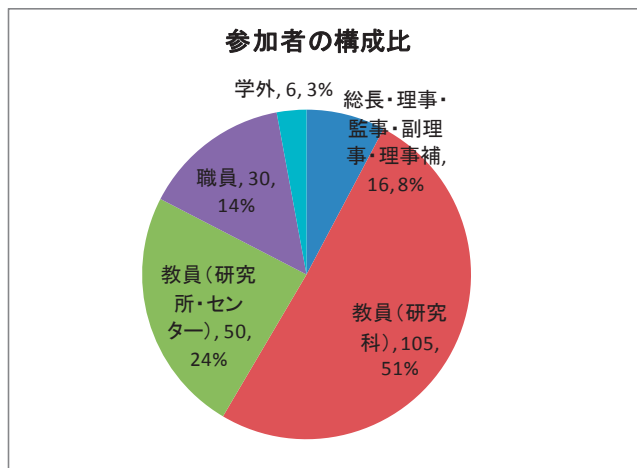
これもちまして、第15回京都大学全学教育シンポジウムを終わらせていただきます。

12. アンケートの結果について

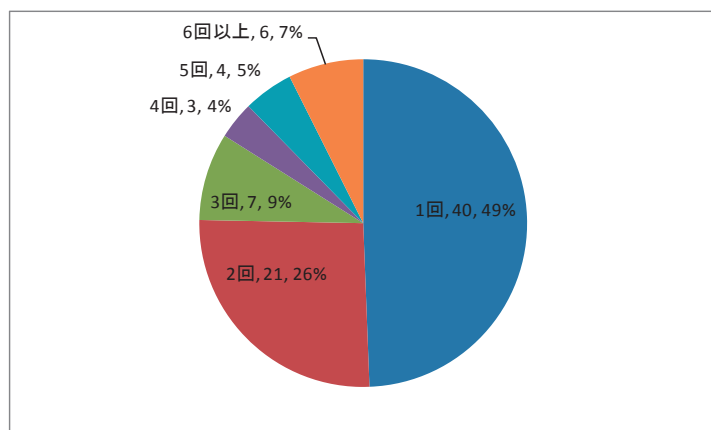
今後の改善に資するため、参加者全員にアンケート（内容は142ページ参照）を実施した。

○参加者数 219名（スタッフ12名を含む）

○アンケート回答数 81名（スタッフ・学外者を除くアンケート対象者201名、回収率40.2%）

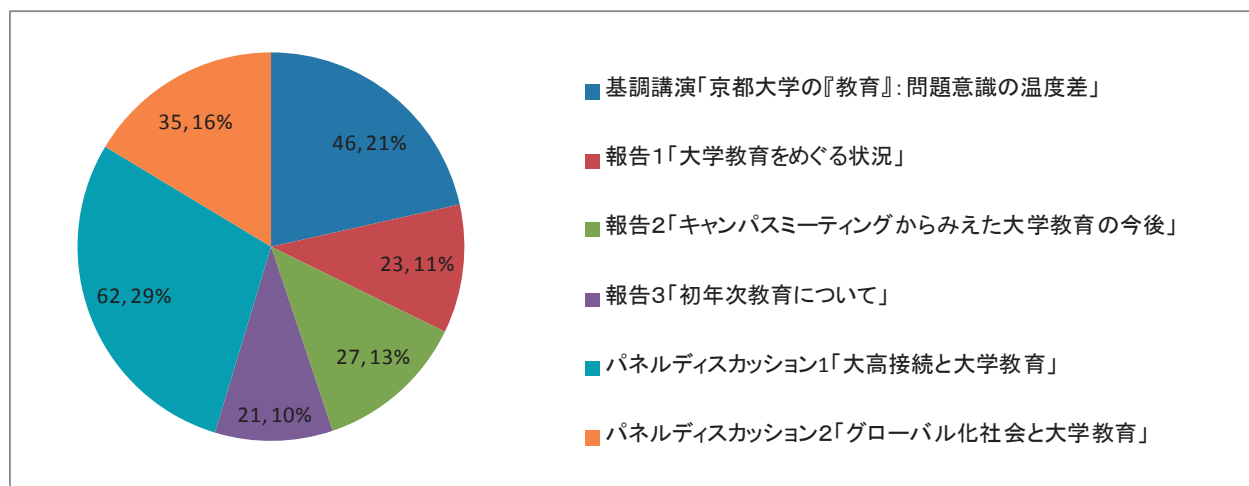


1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。



2. 今回のシンポジウムについて

① 良かったプログラムに をつけてください。（複数回答可）



② プログラムの内容について、感想をご記入ください。

■総長・理事・監事・副理事・理事補

① プログラム (複数回答可)						② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調講演	報告1	報告2	報告3	パネル1	パネル2	
						パネルディスカッション1で外部の方の意見を聞いたことは大変有意義であった。高校の先生方ならびに予備校の方からみる京都大学と、大学の中にいる我々との認識の違いが大きいことがわかったのではないかと。特に関東での京都大学の認知度をいかに高めるかが大きな問題と考えられる。

■教員（研究科）

<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	国内外の教育問題に関する経緯、現在の状況を知る良い機会だった。総長のお教え、大学の方針を知ることが出来た。研究型大学を目指し、自学自習を可能とするカリキュラムと意欲を高める為の改善の必要性は理解できた。ただ社会が(特に企業が)求める京都大学卒業生像が不明確だった。一般の大学ではない、京都大学に求めるもの。ないのかもしれないが。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	あまり高等教育研究開発推進機構の果たされている役割が見えなかったが非常に参考となる部分もあり、もっと多くの教員が参加するべきかと思います。
<input type="radio"/>				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大学内外からの見方について、広く認識出来たことが良かった。
		<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	現在、京都大学あるいは日本が抱えている問題をタイムリーにとらえている。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	京都大学の教育について、課題の洗い出しをするという点では、有意義なシンポジウムだと思う。特に高校や予備校、他大学の学長の評価は本質を突いているものが多いので、課題の解決の為に取り組む方法を真剣に考えるべき。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	パネルディスカッション1, 2で講演された学外からの講演者4名の方の講演が非常に新鮮であり有意義であった。
		<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	問題となっているカリキュラムなどに関する諸外国や他大学の取り組み等を紹介して頂けると、授業担当者としては役立ちます。鈴木先生のお話は参考になりました。
				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	パネルディスカッションは大変面白かったです。
				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大学の教育に求められている外部の方の声を聞く機会を得られたのは良かった。ただパネリスト間およびフロアとのディスカッションの時間がもっと取られるとさらに良かったと思う。
		<input type="radio"/>				パネルディスカッションに期待したが(特に1)白熱したディスカッションにならず面白くなかった。
				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	名前を聞いたことがあるだけだった色々な教育プログラムの内容について、知ることが出来てよかった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全体的には良いテーマで面白かった。自分の授業等に役立てたいと思います。
				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	パネルディスカッションのパネリストの話題提供が良かった。特に塚原信行氏の「メタ言語観」という説明が大変面白かった。自分自身も海外でよく体験することがあるので。またトルコ語に関して、島津製作所の平田氏の人事担当者としての統計を基にした基調報告も分かり易かった。年配者に関しても日本人は決断が遅くて失敗することが多いと思う。過去の歴史に照らしても、私自身が歴史研究者であることから外国で実感すること多し。

① プログラム (複数回答可)						② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調講演	報告1	報告2	報告3	パネル1	パネル2	
				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	高校・予備校の方の声等、日頃聞かない話を耳にする企画はありがたい。
				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	午前中に関して、発表者間で内容の事前調整を行い、ポイントを絞るのが望ましいです。多数の教員の間のコンセンサスが大切ですが、改善のための実行する機会を準備・提供することが必要ですね。
<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	スピーカーが多様なバックグラウンドをお持ちなので、1つの問題を多面的に考えることが出来たという点で非常に有意義でした。
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	日本の学生の現状とそれをとりまく世界的な状況等について、外部からのパネリストからの意見は大変刺激になった。
<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	高校の先生や予備校の方から現在の高校における教育の現状、大学の見え方、入試に対するご意見が伺えて、非常に参考になった。特に入試制度については、今後検討の必要があろう。
				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	予備校の方、高校の教科書作成に関わった方から、各々の立場での話が聞けてよかった。
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	欧米や他大学の教育のあり方について、新たに知ることが多く、勉強になった一方で、京都大学の特色を打ち出した教育について見解を執行部や講演者は呈示出来ていなかった。 研究の領域の細分化が進む一方で、異分野融合の重要性も増している。「教養」(広い意味での知識人の必須となる知識)の内容も、時代の要請と共に変化する。従来の「教養」の内容と今後10年の「教養」で変えるべき点、変えない点を議論する必要があると感じた。
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>	パネルディスカッション1はもっとパネリスト間、聴衆とのやり取りの時間があつた方が良かったと思います。
				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	高校や予備校の話が聞けてよかった。入試制度の改革(50年変える必要のない制度の構築)が必要だろうと思う。
<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	大高接続の理念的崇高さと、実際の難しさを理解できた。
<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	石原さんの話が面白かったです。
<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	学外の方々の情報が想像と異なっており、非常に役立つ。パネリスト同士の対談やフロアとの対談の時間がもっとあつたと良かった。
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	様々な立場の方からの話を聞いて、日頃思っていることの確認が出来、また新たな視点を持つことが出来たので、今回参加して良かったと思います。さらに「学生に対して」という前に自分自身をもっと磨かないといけないと思いました。
<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	・パネルディスカッション(1, 2)はパネリストが多すぎてディスカッションをする時間がほとんどなかった。パネリストを減らし、問題点をしぼり、フロアと議論すべきであった。 ・外部からの視点を取り入れたのはよかつたと思う。高校、予備校、企業等。とりわけ入試について予備校からの問題の指摘は重く受け止めるべし。
				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	高校、予備校からのお話は、知っているつもりになりがちで、知らない事実が多く、全員が共有するにもよいテーマであった。
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	様々な角度から問題を考えるきっかけが得られたのは、よかつたです。

① プログラム (複数回答可)						② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調講演	報告1	報告2	報告3	パネル1	パネル2	
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>					シンポジウムと言いながら、京都大学の教育や入試制度の問題点ばかりを聞かされて、希望を持てなかったのは残念だった。普段から耳にしている問題点だったので、打開策についてヒントのようなものがあって欲しかった。学部や研究科によって事情が異なることについて配慮がないと思った。京都大学が内外で非常に厳しい状況であることを改めて認識できた。

■教員（研究所・センター等）

				<input type="radio"/>	「大高接続と大学教育」は京都大学の大学入試状況が分かる良いプログラムであったと思います。特に東京大学と入試偏差値に差がついてきていることは気になっておりましたが、その原因を明確に説明していただけたのは参考になった。	
				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大学の入口・出口の両面から教育を議論するという切り口が良かった。外部の方の意見を多く聞くことが出来たのも有意義だった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	非常に構成・内容ともに工夫されており、興味深く拝聴させていただきました。
<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			問題意識はよく理解できた。入試や新入生受け入れを行う部局ではないので、こうしたテーマを直接的に自分の業務に反映出来ないことが少々もどかしい。
<input type="radio"/>				<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	外部の方々の参加が新鮮であった。
			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		鈴木先生、高見先生の発表は的を射ていると感じました。日本の教育システム(特に研究型大学の理系で考えると)での一番の問題は、1回生～3回生のモチベーションの低下であり、レベルの高い高校生を大学で育ててきていない主要因だと思います。 高見先生のご提案なのですが、京都大学生のモチベーションの低下は入学1ヶ月後のゴールデンウィークであること、また学生のモチベーションの低下の最も大きな要因が、大学で学ぶ講義やノート・レポートの書き方であることをふまえると、1回生の授業と重なる時期では遅いと思います。一つの案としては、4月第一週に行う事。もう一つの案としては、仮に京大が東大と同様に秋入学を導入するのであれば、4～9月に行うのが良いかと思います。そうすれば授業でのノートやレポートもスムーズに書け、授業選択の段階から意味を感じながら行動できることと思います。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>			パネルディスカッションの進め方はもう少し工夫した方がより効果的であろう。 パネリストによるテーマの立て方にももう少し関連性があつた方が良い。
<input type="radio"/>				<input type="radio"/>		パネルディスカッション1で高校生の入試の現状と京大の関連性について聞くことが出来たので、京大1回生について考えることが増えました。
						入試研究、教務データの分析が必要だと思う。アンケート調査も加えて、京大の現状を的確に把握する努力が肝要と思う。京大の教育面のよさのアピールが足りないかもしれない。
				<input type="radio"/>		現場からの報告(山口氏、石原氏、岩本氏等)を聞くのは貴重な機会であり、実があつた。 総長、理事、機構長等の報告は、総花的で上滑りし、実がなかった。午前のプログラムはほぼ不要だと思う。

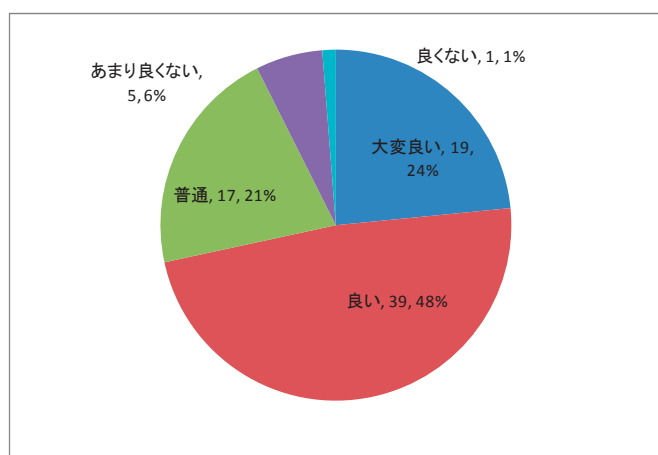
① プログラム (複数回答可)						② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調講演	報告1	報告2	報告3	パネル1	パネル2	
○						<ul style="list-style-type: none"> ・時間がなさすぎると思う。パネルディスカッションはもう少しパネリストを減らし、コンパクトにしてください。 ・なぜ「大高接続」という言葉をわざわざ使うのだろうか。「高大接続」でよいのではないか。 ・外部からパネリストを招いた点は大変良かった。
○	○	○	○	○	○	多面的に京都大学の位置が分かるようなプログラムになっていて、とても有益でした。
		○		○		パネルディスカッション1が一番刺激的だった。入試の面で改善すべき点を駿台・石原氏の指摘で、かなりはっきり示されたように感じる。また岩本先生のお話を聞き、高大連携について「ものの考え方」(意識というより)の面でもっとスムーズに行けないか、政策レベルでの取り組みが必要では、と痛感する。
○		○	○			<ul style="list-style-type: none"> ・東大に全て負けないように努力してほしい。 ・見やすいパワーポイントにしてほしい。小さい字は読めない。表のまとめ方が悪すぎる。例えばグラフのマークの説明がない。見る者のことを考えてくれていない。 ・実施時期は当センターにはまずい。 ・足、場所は OK。
○	○			○	○	討論の時間が少ない。
			○			いずれも興味深い報告であったが、全体的にテーマが広がり過ぎて、消化不良。議論が深まらなかったように感じる。特にパネルディスカッションは報告が多く、かつ内容も絞りきられてないように思われる。テーマをより絞って、パネリスト同士、もしくは学内の担当者との議論が多く取れば、聴衆の理解も深まったと思う。
○	○			○		高等学校における視点、企業から見た現状等、京都大学のみならず、日本の大学ならびに大学生が置かれている立場について理解を深めることが出来た。グローバルなリーダーの必要性なども自ら反省することが出来るプログラムであった。
○				○		<p>内容とはずれるかもしれないが、感想。「教育を受ける」という言葉はあっても「教育する」という言葉は本来ありえない。後者の言葉は教育者と呼ばれる人達の思い上がりであり、「求めない人」に何かを与えることは不可能である。この意味で「やる気のない人にどうやって教育するか」「やる気のない人に対する良い教育の仕方とは何か」といった議論はナンセンスである。</p> <p>そもそも、シンポジウム全体を通して伝わってくる「大学にとって学生はお客様である」という思想に違和感を覚える。ある意味では”顧客”としての側面も存在するが、本来は学生も京都大学を構成するメンバーのはずである。お客様気分の学生クレーマーに、優秀な教員が対応しなければならぬ現状は間違っていると思う。民間企業や大学生・高校生、高校等からの注文をそのまま受け入れるのではなく”学問を行う場”としての大学の重要性を、京大にはもっと主張して欲しい。</p>
○				○	○	様々な視点から教育への危機を感じられ有意義でした。

■職員

① プログラム (複数回答可)						② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調講演	報告1	報告2	報告3	パネル1	パネル2	
		○		○	○	<ul style="list-style-type: none"> ・パネルディスカッションについて、パネリストからの報告の時間が長くて、質疑応答などディスカッションの時間が短かったのが残念。 ・入試の専門家による分析には説得力があり、参考になった。
			○	○		<p>パネリストの報告に時間がかかり過ぎて、意見交換の時間が少なくなったのが残念。 プログラムの内容は良かった。</p>
	○	○	○	○		<p>パネルディスカッションは1つに絞られた方が良いのでは？時間切れがもったいないように思います。</p>
			○	○		<p>近年の子供の気質の変化を踏まえると、3年次に専門を選ぶという方向(東大・北大型)も検討に値するのではないかと感じた。</p>
○	○			○		<p>大学ランキングについては、現在、資格型へシフトしている大学が多く、個々の学生に親切に対応しているため、教育力が高まる傾向にある。単科大学では取り組みやすく、総合大学では馴染みにくいように感じる。各紙による大学評価はよく熟知しているが、それに応じて京都大学が影響されることなく、日本屈指の研究大学である京都大学が社会貢献するためにどうあるべきかについて、常に考える集団でありたい。</p> <p>やはり教員と職員が対等に意見交換する場が必要と感じました。</p> <p>あとパワーポイント資料をいただきたいです。スクリーン表示及び手元資料が小さく見えにくかった。</p>
				○		<p>「グローバル化社会と大学教育」について</p> <p>○ 大学の国際化は必要だと思うが、現状のように、興味のある教職員のみが取り組んでも、全体を巻き込んだ大きな国際化への動きには発展しないと思います。</p>
						<p>内部の講演・発表も大事ですが、外部の方の講演が大変興味深く、聞きやすかった。</p>
○	○			○		<p>ユーザー側(天王寺高校、駿台予備校)から見た京都大学の評価が聞けて、今後の京都大学の発展に向けて大変役に立った。</p>
○		○		○	○	<p>高校の声、予備校の声を聞いたことがよかった。もっと意見のぶつかり合いを見たかった。</p>
		○		○	○	<p>現在の状況が理解できた。今後どうすればよいのかについては、まだ消化できていない。 淡路先生のスライドを確認したい。</p>
○				○	○	<p>基調講演は大学の方向を説明する意味で有意義であった。</p> <p>○ パネルディスカッションでは大学の課題が明らかになったと思う。グローバル化にどう対応していくかが極めて重要である。</p>
○			○	○	○	<p>テーマが興味深く役に立った。パネリスト同士の議論の時間が少なく、すぐに会場とのやり取りに移ったのは、論点が深掘されなかった感じがする。パネリスト同士の議論の時間が欲しかった。</p>

3. シンポジウムの開催形式について

- ① 今年度は、分科会を設けず、基調講演・報告・パネルディスカッションという形式で行いました。この開催形式について、どう思われますか。



- ② ①にご回答いただいた理由をご記入ください。

【大変良い】

- ・ 全員が同一のテーマについて考える機会がある点で望ましい。[教員(研究科)]
- ・ 参加者の全員が共通の問題点を認識し、議論を深めることに意義がある。[教員(研究科)]
- ・ 全体的、包括的に把握することができる。[教員(研究科)]
- ・ 全体で知識や問題点を共有できる。[教員(研究科)]
- ・ いろんな話が聴ける。[教員(研究科)]
- ・ それぞれの専門家のお話を共有することができるため。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 全ての議論を把握できるのがよい。分科会では、分科内の詳細な議論は伝わらないであろう。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 問題点を全体で掘り下げて共有できる。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 全体を俯瞰できないと、この種の問題は責任の押し付け合いになるので、分科会よりは全員で共通認識をもたせるのが重要だと思います。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 高校、予備校から現役の先生方に参加頂いたのが新規な試みで良かったと思います。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 全体を見渡しての状況・対策が理解できる。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 異なる分野のパネリストの方々がディスカッションすることで、効果的な情報共有や新しい発見が可能になるのではないかと思います。[職員]
- ・ 学内、学外からの意見が全員に十分に聞けて共通の認識が持てたのが良かった。[職員]

【良い】

- ・ 参加者全員が同じ意見・議論を共有できる。分科会を開催すると全体が見えにくい。[総長・理事・監事・副理事・理事補]
- ・ パネリストは色々な視点から問題提起をされ参考となった。但しパネリストの一部が、時間制約の為に十分に報告できなかったのは残念。[教員(研究科)]
- ・ 今回は外部からのパネリストが来学されたので幅広く現状を捉えることができたように思われる。分科会

の時は、内部の教員間の話し合いのような感じにならないでしょうか？[教員(研究科)]

- ・当初はただ話を聞くだけの会議はあまり意味がないのではと思ったが、内容が濃く、FD としても非常に有益であった。[教員(研究科)]
- ・参考になることが多かった。[教員(研究科)]
- ・多様な意見が一堂に聞けたから。[教員(研究科)]
- ・参加者全員で議論を share できる。[教員(研究科)]
- ・テーマを絞って全体の内容を把握できるから。[教員(研究科)]
- ・教員経験が浅いため、今回の形式の方が幅広く情報を入れることができた。[教員(研究科)]
- ・他の研究科の視点からの話が聞けたので。[教員(研究科)]
- ・多様な話が聞けた。[教員(研究科)]
- ・一方的なレクチャーより、ディスカッションがある方がよいから。[教員(研究科)]
- ・全体の教育問題を把握することができた。[教員(研究科)]
- ・去年の分科会方式との比較で。相対的なものです。[教員(研究科)]
- ・議論を共有することができた。[教員(研究科)]
- ・内容として共有するのによい話だと思ったから。[教員(研究科)]
- ・学外の方の話題提供がたいへん勉強になった。[教員(研究科)]
- ・横断的な話を聞くことが出来てよかった。ただしパネルディスカッションは時間切れの感があった。[教員(研究所・センター等)]
- ・多様な話しを聞くことができた。[教員(研究所・センター等)]
- ・少人数で意見交換するよりは、研究形式の方が個人的にはありがたい。[教員(研究所・センター等)]
- ・大学教育についての重点的課題について各部局で共有できるので(分科会形式だと「○○は関係あるが××は無関係」といった意識が参加者に生じかねないので)。[教員(研究所・センター等)]
- ・分科会はイミがない。[教員(研究所・センター等)]
- ・参加者全員で討論主題を共有できる。[教員(研究所・センター等)]
- ・問題意識を出席者全体で共有できるから。[教員(研究所・センター等)]
- ・現状と課題についての情報が共有できる。[職員]
- ・全参加者が共有する事は重要。[職員]
- ・パネルディスカッションについてですが、ディスカッション自体の時間が短く思いましたが、全体に分科会よりも良かったと思います。[職員]
- ・少人数での分科会、グループ討議をやってほしい。[職員]
- ・興味あるテーマが重なり、出席できなくなるおそれがないため。[職員]

【普通】

- ・パネルディスカッションのパネリストは興味深い話をしたが、パネルディスカッションの時間が足りなかった。[教員(研究科)]
- ・前のも別によかったから。[教員(研究科)]
- ・パネルディスカッション、時間配分が微妙。十分にテーマが絞り込まれていない。[教員(研究科)]
- ・大学はやはり良き人材を得ることが、第一段階であろうから。[教員(研究科)]
- ・一長一短有り。[教員(研究科)]
- ・「パネルディスカッション」ということだったが、どこに「ディスカッションがあったのか」と思った。[教員(研

究科)]

- ・分科会形式の方が、より深い議論ができるのではないかとと思われる。[教員(研究所・センター等)]
- ・聞きっぱなしで疲れる。1日4コマ授業に出る学生の気持ちが少し理解できた気がする。[教員(研究所・センター等)]
- ・今回の形式もよいけれど、分科会があった方が、事務職員が参加しやすいのではないかと。[職員]
- ・今回が初めての参加であるため。[職員]
- ・パネルディスカッションの形式をもっと大事に意見交換に多くの時間を割いて頂きたい。[職員]
- ・他にも学生を参加させる等の工夫があるのではないかと。[職員]

【あまり良くない】

- ・聞いているだけなので楽でよいと思ったが、全体として散漫で退屈だった。[教員(研究科)]
- ・話題が多く、ディスカッションの時間が短い。[教員(研究所・センター等)]
- ・質疑・ディスカッションが形骸化、表層化し、一同に会する意味が薄い。総長の言葉を借りれば、まさに peanuts butter on the toast な会だった。[教員(研究所・センター等)]
- ・全体会は人数が多すぎて、意見交換にならない。[職員]
- ・報告内容は非常に良かったが、高まった高揚感の中、それぞれのテーマで意見交換することは、本学のようなマンモス大学の教職員のネットワークを広げるよい機会となるように思うから(少々つかれました)。[職員]

【良くない】

- ・ディスカッションできていない(時間が足りない)。[職員]

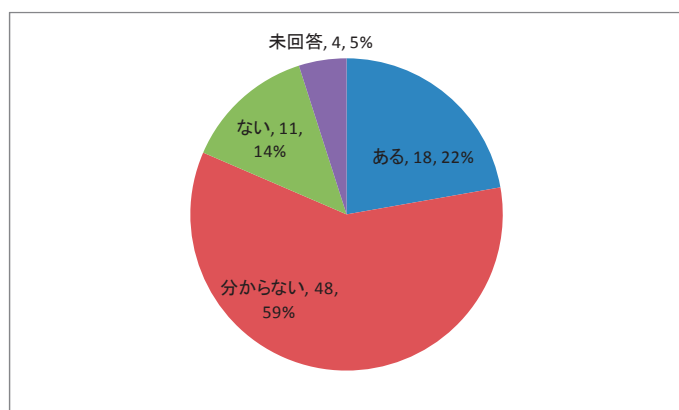
③ 今後、シンポジウムを開催するにあたっては、どのような形式で開催するのが望ましいと思いますか。

- ・今回のような形でよいが、パネリスト以外の参加者の意見をくみあげる時間をもっと取るよう工夫すべき。[総長・理事・監事・副理事・理事補]
- ・1日で2つのパネルディスカッションは内容的に多すぎるのでは。1テーマをじっくり議論するのがよい。[教員(研究科)]
- ・今回と同様の形式。[教員(研究科)]
- ・今回のような開催形式。[教員(研究科)]
- ・端末(ノートPC)等を使い、意見をリアルタイムに双方向にやりとりするようなミーティング[教員(研究科)]
- ・パネルディスカッションは良かった。国際、外資系企業の採用担当や海外の大学関係者を交えたものを希望。[教員(研究科)]
- ・パネリストの数を絞り込んで、もう少し討論の時間を持つべき。[教員(研究科)]
- ・企業からの大学の見方についてはもっと勉強したいところです。[教員(研究科)]
- ・実践的な情報を得られると良いと思います。[教員(研究科)]
- ・午前の単発基調報告は少なくした方がよい。退屈である。[教員(研究科)]
- ・今回と同様でよい。[教員(研究科)]
- ・全体を通してこれだけ大勢の教職員を拘束する意味があるのかどうか疑わしい。中止を求める。[教員(研究科)]
- ・今回と同様の形式でよいと思います。[教員(研究科)]

- ・ 今回の形式がよいが、パネルディスカッションの討議の時間をもっと取った方がよい。[教員(研究科)]
- ・ いろいろ試みてよいのでは？[教員(研究科)]
- ・ 参加教員には必ず半数以上を准教授(若手教員)にすべきだと思う。[教員(研究科)]
- ・ テーマに応じた形式をとるとよいのでは。[教員(研究科)]
- ・ どっちでもよい。[教員(研究科)]
- ・ 焦点をしばり、継続的(複数年にわたり)に議論する。[教員(研究科)]
- ・ このような「京都大学の問題」を知らせるための講演会にするのなら、より多くの教員に参加させるべきではないか。[教員(研究科)]
- ・ 今回と同様の形式。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 現状で OK。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 従来の分科会型のシンポジウムに、今回のような形式のシンポジウムを適宜(数年に1回くらい)混ぜて開催されてはいかがでしょう。[教員(研究所・センター等)]
- ・ パネルディスカッションの時間を拡充し、パネリスト間の議論、パネルディスカッション全体の主題を深めることが望ましい。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 今回のような形式も良いと思う。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 大学の現状がわかるような内容にしてほしい。一部の先生方が大変ご苦労されていても他部局の方は知らないことが多いので。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 3～5年に1回くらいは、以前のような合宿形式にできるだろうか(教員同志の交流やより深い討議・理解のために)。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 秋の文化の日近く。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 今回の形式で良い。[教員(研究所・センター等)]
- ・ パネルディスカッションを1つにして討論時間を十分に確保する。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 昨年度のように一部は分科会形式でディスカッションする方がよい。部局の壁をこえてディスカッションする機会がなかったのは残念だった。[教員(研究所・センター等)]
- ・ いろいろと試してみればよい。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 今回のような全体会形式であれば、一同に会さず、インターネット回線で部局をつなげば十分。分科会形式であれば、ぐっと人数を絞る(1分科会で10～20まで)の方がよい。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 今回と同様でよい。[職員]
- ・ 今回の形式でパネルディスカッション内での時間配分を考慮していただければよいと思います。[職員]
- ・ 問題点を絞って、それについて討議。[職員]
- ・ 多くの出席者が参加できる形式。[職員]
- ・ 適正規模の分科会形式にした方がよい。[職員]
- ・ 学内にて企画検討委員を募集、分科会企画を復活させる。分科会で討論した報告集やアンケート集計結果を Web でフィードバック。[職員]
- ・ 1日の開催なら、パネルディスカッションは1テーマにする。[職員]

4. その他

① 今回の討論内容を所属する部局で話合う機会がありますか。



※「ある」と答えられた方にお尋ねします。それはどのような機会ですか。

- ・ 専攻の執行部会議等[教員(研究科)]
- ・ 月例の教員会議があり、そこには専任教員全員が集まるので、その場で報告、話し合いを行う。[教員(研究科)]
- ・ 専攻教授会[教員(研究科)]
- ・ 教授会や講座会議等[教員(研究科)]
- ・ 学科・専攻会議の際に少し。[教員(研究科)]
- ・ 様々な機会に。[教員(研究科)]
- ・ 昼食時などの機会を通じて。[教員(研究所・センター)]
- ・ 教員会議[教員(研究所・センター)]
- ・ 教授会議[教員(研究所・センター)]
- ・ インフォーマルな場で雑談として。[教員(研究所・センター)]
- ・ 部局での定例会。部課長、専門員、教員らの会議として。[教員(研究所・センター)]
- ・ センター教員会議で報告予定。[月 1 回開催][教員(研究所・センター)]
- ・ 教授会[教員(研究所・センター)]
- ・ 部局会議[教員(研究所・センター)]
- ・ 教員会議で報告し、議論する。[教員(研究所・センター)]
- ・ 教務委員会[職員]
- ・ 今度の業務を検討する際。[職員]
- ・ 部局の教授会での報告やミーティング時の報告。[職員]
- ・ ないが、学生とどう向き合っていくかは、日常の課題である。[職員]
- ・ 定例の打合せでの報告、将来計画を策定する会議。[職員]

② 今後このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げるべき討議テーマについて、ご提案があればお書き下さい。

- ・ 入試制度の在り方(9月入学を含めて)[総長・理事・監事・副理事・理事補]
- ・ インターンシップの現状とあるべき姿[教員(研究科)]
- ・ 英語による授業[教員(研究科)]

- ・ 初年次教育、京都大学のガバナンスの仕組み[教員(研究科)]
- ・ 今回のテーマを2, 3年継続して、ある程度の結論を導けばよいのではないか。[教員(研究科)]
- ・ その時々タイムリーなテーマを取り上げればよい。一般論や普遍論は必要ないと思う。[教員(研究科)]
- ・ 学生の目的意識の明確化をはかる手段について疑問。[教員(研究科)]
- ・ 海外留学生の入学時期、英語化についてはどのようにするか。[教員(研究科)]
- ・ 大学院教育、特に、京大出身者ではない入学者(京大カルチャーを知らない)に対する教育、研究のあり方について。[教員(研究科)]
- ・ 石原さんの具体的なアドバイスでも、なかなか生かす場がない(学部教授会でも)。そのことが問題。[教員(研究科)]
- ・ 東大、阪大の先生を招いて、東大、阪大から見た京大の良い点、良くない点を語ってもらう。[教員(研究科)]
- ・ 大学院教育について[教員(研究科)]
- ・ * 今後、必要となる「教養」の内容について
 - * 客観的に「大学の教育力」を測る方法について(主観に基づくランキングを気にしては、議論できない)
 - * 教員の教育に対する貢献度を評価する手段について[教員(研究科)]
- ・ 大学入試について[教員(研究科)]
- ・ * 京都大学の全学共通教育改革についての議論を集中的に。
 - * 一日で終えることは良い、宇治・桂キャンパスの活用も良い。[教員(研究科)]
- ・ 「入試」「学生のメンタルケア」「外国語(英語)による授業」等の問題を絞ったシンポジウムを開催すべきではないか。また実効力のある提案を行う事ができるようにすべきではないか。[教員(研究科)]
- ・ 大学院入試のあり方について[教員(研究所・センター等)]
- ・ 京都大学として、海外からの留学生受け入れ獲得促進の是非とその活動のあり方について。全学的な組織的対応について。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 国際化に関してはもう少し掘り下げてもよいと思う。[教員(研究所・センター等)]
- ・ * 大学内における教育貢献の評価と報酬について
 - * 島津製作所様よりも海外学生の受け入れを行っている企業(ex.パナソニック様)の人事採用者をお招きするようなテーマ
 - * 秋入学導入の是非について
 - * 外資の企業が日本人学生をどう見ているかについて[教員(研究所・センター等)]
- ・ * 部局の壁を越えて、どのようにして体系的なカリキュラムを編成するか
 - * 京大生の学習と生活の実態は？
 - * 高等教育政策からの要請と「京大らしさ」をどう折り合わせるか。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 教員に対する、教育スキル向上のための取り組みについて、具体的な Tips(これは FD 方面でやれるはず)というより、中・長期的なプログラム、また教員の経験年数による担当領域の割当(例: 大人数の基礎講義等ベテラン教員に担当してもらうなど)といった、組織的な取り組みに関し討論する機会を希望。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 全学または学部でどのような教育がおこなわれているか、年ごとの変化も歴史もふまえて、どなたかまとめ

- るべき。[教員(研究所・センター等)]
- ・ 各分野ごとでの教育に関する国際連携[教員(研究所・センター等)]
- ・ 引き続き1-2次教育[教員(研究所・センター等)]
- ・ 「(各研究科の先生から)京大に入学する新入生、京大生に何を求めるか」、「教養教育の定義について、および、京大生に必要な基礎教養について」[職員]
- ・ 入試については掘り下げる必要を感じる。[職員]
- ・ * 教養教育の責任体制
 - * 教養教育と専門教育の連携
 - * スリムで効率の良い教養教育
 - * 無駄な業務、無駄な経費
 - * 教育が大事か、研究が大事か[職員]
- ・ 職員が参加できるような内容:学生指導、メンタルヘルスに関するテーマ[職員]
- ・ 高校生が大学生になり、大半の大学生は企業に就職するので、高校教員や企業から意見を聞くことは大切だと思います。[職員]
- ・ 「教育」「教務」における教職協働[職員]
- ・ ICU や東大など、グローバルな教育をリードするような大学から講師を呼べばどうか。[職員]
- ・ ディプロマ・ポリシー[職員]
- ・ もう少し部局での取り組みを聞いてみたかった。[職員]

③ シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

- ・ シンポジウムで取り上げられた意見を 1 つでも直ちに実施することが大切である。[総長・理事・監事・副理事・理事補]
- ・ 参加して良かった。各部局で同じレベルの会合がほしい。[教員(研究科)]
- ・ パネルディスカッション形式のシンポジウムの場合、総合討論の時間はしっかりと取ることが望ましいと思います。パワーポイントによる説明が長い先生もおられました、全体的に非常に役に立ちました。[教員(研究科)]
- ・ シンポジウムに参加すると、京大がどういう問題を抱え、どういう方向に進もうとしているのか理解できるが、普段意識することはほとんどない。[教員(研究科)]
- ・ 参加できなかった教員にも情報の共有をはかる点で、シンポジウムの内容をストリーミング配信(パスワード付き)するようにすべきでは。[教員(研究科)]
- ・ 学生が参加してもよいのでは？[教員(研究科)]
- ・ 時計台の方でやっていただきたいです。時間が押し気味なのはよくないです。[教員(研究科)]
- ・ パネルディスカッションをするのならもっとしっかりと準備をしてほしい。視点の違う報告を並べるだけではおもしろくない。報告者の発表時間をもっときちんとコントロールすべき。[教員(研究科)]
- ・ ここで話し合われた内容が、どのような形で大学の教育改善に反映されるのか、その仕組みがよくわからない。ここの教員に考えさせることだけが目的ではないと思うので。[教員(研究科)]
- ・ 付議や報告の成果を教育現場に応用できなければ、シンポジウムを開催する意味はない。[教員(研究科)]
- ・ 学部教育には直接関わってはいませんが、京大の学部教育の独自性や現在抱えている問題点につい

て、非常に勉強になったとともに、将来的に自分も何らかの形で学部教育に携わりたいと思うようになりました。[教員(研究科)]

- 今日の内容のパワーポイントをHPに提供してほしい(学内用で可)。[教員(研究科)]
- 特に外部からのパネリストの報告は刺激があった。[教員(研究科)]
- 教育に関わるシンポジウムは、授業を担当しない助教、ポスドクの人にとっても参加は有意義と思われる。全学で京都大学の教育を議論する場になってほしい。[教員(研究科)]
- 京大の問題点の多い事を痛感。英語教育なんかしないと国際化の一步踏み出せない。総長が多く発言されたのは良かったと思います。[教員(研究科)]
- 社会・経済界の希望を聞くことも必要だろうが、大学が自ら、京大はこういう学生を作っているから、その学生を受け入れる社会を作れと要求することも必要であろう。[教員(研究科)]
- 企業の方以外で、パワーポイントのコピーを用意出来る方はぜひお願いしたい。話を聞いただけで残るモノがないと、忘れてしまいます。[教員(研究科)]
- 面白かったですが、少し長くて疲れました。[教員(研究科)]
- パネルディスカッション2は相互の話題が噛み合っておらず、残念に思った。国際コースの全学的な運営について焦点を絞った方が良かった。[教員(研究科)]
- 1日座って話を聞くことはほとんどないですが、苦痛なく充実した時間を過ごすことが出来ました。会場の設備(イス・テーブル)もよかったです。所属している建物以外に出かけることがほとんどないので桂キャンパスに来られてよかったです。[教員(研究科)]
- 台風が接近中でしたが、桂キャンパスはいい場所だと思います。[教員(研究科)]
- 危機感を煽るだけでなく、希望を抱かせるような配慮が必要ではないか。大学生の子を持つ親として、子供には、もっとゆっくり大学生活を楽しませたい。[教員(研究科)]
- 興味深い内容でした。運営、開催ご苦労様です。[教員(研究所・センター等)]
- どうもありがとうございました。[教員(研究所・センター等)]
- 企画・運営ご苦労様でございます。[教員(研究所・センター等)]
- 私の周囲の教員が皆モバイルPCを開けて作業を行っておりました。教員の教育に対する姿勢の低さに絶望しております。教員が奉仕する気がなく利己(自らの業績になること)の追求をする姿勢は見苦しく、教員間の意義の差をなくすように。[教員(研究所・センター等)]
- 共通教育の見出しについて、どうしたいのか、何をしたいのか、もっと具体的な議論を期待していたが、明確な意思が見えなかった。[教員(研究所・センター等)]
- 当初は熱のある議論が交わされていたと聞いているが、今回参加してみて、全く形骸化し、実効性の薄い会であると感じた。15回という区切りでもあり、1度やめてしまった方が良いと思う。[教員(研究所・センター等)]
- お疲れ様でした。[教員(研究所・センター等)]
- 「議論を実行に移す」ためには、現在の学名で野取り組みの中での「ベスト(グッド)プラクティス」を提示・共有することが必要なのである(工学部国際コースの事例紹介があったが)。今回の内容は今日の現状を(特に学外からの視点で)理解する上では大変有益であったが、「議論から実行へ」の視点では少々疑問が残る(「点」:個々の教員のとりくみをいかに「線」「メン」へ発展していくか)。あと、学部、大学院だけでなく研究所等を全学共通教育に的確に関与させるための戦略が今一つ見え

てこないのも懸念として感じる。[教員(研究所・センター等)]

- 各代表はこの会のエッセンスをそれぞれの所属に還元がどれくらいできているのだろうか。教育とは人間としての教養を宇宙の歴史から生命誌をたどることでグローバルに Think でき、しかし Act local に実施できるのは、分らないだろうか？[教員(研究所・センター等)]
- 勉強になったが、議論を通じて問題意識を共有するには至らなかったのではないか。今回のやり方であれば、何らかのフォローアップが必要。[教員(研究所・センター等)]
- タイムスケジュールの見積もりが甘い。本シンポジウムのテーマに関するものだけでなく、その他の分野のパネルディスカッション形式のイベントでもディスカッションの時間が短くなってしまふ。各パネリストが時間を守らないのが悪いのだが、それを見越したタイムテーブルを作ってほしい。ディスカッションの時間が十分に取れて、議論が盛り上がればもっと面白くなると思う。[職員]
- スタッフの皆様、おつかれさまでした。[職員]
- 1つにして、質疑の時間をたっぷりとして討論を深めてほしい。[職員]
- 教育も研究も経営もすべてに相互関係を持ちながら京大を形成している。全学「教育」シンポジウムという名目では、中途半端になるので、そろそろ、全学シンポジウムに変更しては。[職員]
- 企画・運営ご苦労様でした。職員の参加が少なくてさみしい思いをしましたので、次回は呼びかけをして参加します。京都大学の経営体(執行部)と事業体(部局)が教員も職員も交えて、自学の教育について、共有することは非常に有益に感じます。もう少し強制力をもっても最初はいいかもしれない。[職員]
- 企業の方のお話を聞いていると、学生の中でも卒業・修了後就職し、大学から出て行く中間層の底上げが必要とされているのでは、と感じた。京都大学は関東圏の大学と異なり、学生が社会人と接触する機会も少なく、将来の参考になるモデルが少ない中で勉強していくことを余儀なくされている。もし次回パネルディスカッションをするのであれば出口支援をテーマに企業人事担当者や管理職の方、また、就職した卒業生から話を聞き、大学に残らない中間層の教育についての在り方も検討してみしてほしい。卒業生をパネルディスカッションに招く場合は、最近の就職情勢を身をもって経験している世代からもパネリストを選んでみてはどうでしょうか。[職員]
- 学生一人一人のやる気、主体性を見出すための手段、体験、経験。事務職員も同様。[職員]
- 他のキャンパス、本部(吉田)等においても、ネットワークで見ることが出来るようにすればどうか。[職員]

平成 23（2011）年度京都大学全学教育シンポジウムに関するアンケート

今後のシンポジウムの在り方を検討するために、例年アンケート調査を行っております。忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせ願いたく、ご協力方よろしくお願いいたします。

なお、ご提出は、会場出口の回収箱にお入れいただくか、後日、学務部共通教育推進課（内線：6513、FAX：6691）あてにご送付願います。（勝手ながら、集計作業の都合上、9月9日（金）までをお願いいたします。）

※ 該当する職名に をつけてください。

- 総長・理事・監事・副理事・理事補
- 教員（研究科所属）
- 教員（研究所・センター等所属）
- 職員

1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。（これまでに今回を含め、15回開催されています。）

_____ 回目

2. 今回のシンポジウムについて

① 良かったプログラムに をつけてください。（複数回答可）

- 基調講演「京都大学の『教育』：問題意識の温度差」について
- 報告1「大学教育をめぐる状況」
- 報告2「キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後」
- 報告3「初年次教育について」
- パネルディスカッション1「大高接続と大学教育」
- パネルディスカッション2「グローバル化社会と大学教育」

② プログラムの内容について、感想をご記入ください。

3. シンポジウムの開催形式について

① 今年度は、分科会を設けず、基調講演・報告・パネルディスカッションという形式で行いました。この開催形式について、どう思われますか。

- 大変良い 良い 普通 あまり良くない 良くない

裏面に続く

② ①にご回答いただいた理由をご記入ください。

③ 今後、シンポジウムを開催するにあたっては、どのような形式で開催するのが望ましいと思いますか。

④ 開催時期について、ご意見をお聞かせください。

適切である

適切でない → 具体的な開催希望時期をご記入ください。 _____

4. その他

① 今回の討論内容を所属する部局で話合う機会がありますか。

ある わからない ない

※「ある」と答えられた方にお尋ねします。それはどのような機会ですか。

② 今後このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げるべき討議テーマについて、ご提案があればお書き下さい。

③ シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

ご協力ありがとうございました。

13. 参加者名簿

所属等	職名等	氏名
総長	総長	松本 紘
理事 (教育担当)	理事	淡路 敏之
理事 (学生担当)	理事	赤松 明彦
理事 (企画担当)	理事	江崎 信芳
理事 (渉外担当)	理事	大西 有三
理事 (研究担当)	理事	吉川 潔
監事	監事	平井 紀夫
環境安全保健機構長	副理事	大罵 幸一郎
国際交流推進機構長	副理事	森 純一
情報環境機構長	副理事	美濃 導彦
図書館機構長	副理事	林 信夫
副理事 [桂キャンパス担当]	副理事	小森 悟
理事補 (教育担当)	理事補	高見 茂
理事補 (教育担当)	理事補	森脇 淳
理事補 (企画担当)	理事補	竹島 浩
理事補 (総務・人事担当)	理事補	稲葉 カヨ
文学研究科	教授 (研究科長)	佐藤 昭裕
文学研究科	教授	井谷 鋼造
文学研究科	教授	吉田 豊
文学研究科	准教授	出口 康夫
文学研究科	准教授	宮崎 泉
文学研究科	准教授	森 慎一郎
文学研究科	准教授	伊勢田 哲治
文学研究科	事務長	中山 圭史
文学研究科	専門員	藤森 隆志
教育学研究科	教授 (研究科長)	辻本 雅史
教育学研究科	教授	鈴木 晶子
教育学研究科	教授	子安 増生
法学研究科	教授 (研究科長)	村中 孝史
法学研究科	教授	木南 敦
法学研究科	教授	服部 高宏
法学研究科	教授	山本 敬三
法学研究科	事務長	二塚 伸和
経済学研究科	教授	岩本 武和
経済学研究科	教授	文 世一
経済学研究科	准教授	佐々木 啓明
理学研究科	教授	有賀 哲也
理学研究科	教授	加藤 信一
理学研究科	教授	鶴 剛
理学研究科	教授	山路 敦
理学研究科	准教授	梅田 亨
理学研究科	准教授	藤 定義
理学研究科	准教授	松田 和博
理学研究科	准教授	上田 佳宏
理学研究科	准教授	久家 慶子
理学研究科	准教授	木村 佳文
理学研究科	准教授	林 重彦
理学研究科	准教授	佐藤 ゆたか
理学研究科	助教	山下 高廣
理学研究科	主任	國見 和敬
医学研究科	教授	千葉 勉
医学研究科	教授	渡邊 大
医学研究科	教授	山田 亮
医学研究科	教授	斎藤 通紀
医学研究科	教授	椎名 毅
医学研究科	准教授	北山 仁志
医学研究科	准教授	久場 博司
医学研究科	准教授	石崎 敏理
医学研究科	准教授	寒水 孝司

所属等	職名等	氏名
医学研究科	准教授	石津 浩一
医学研究科	助教	久保田 正和
医学研究科	助教	小西 奈美
医学研究科	助教	松林 潤
薬学研究科	准教授	小野 正博
薬学研究科	准教授	柿澤 昌
工学研究科	教授	杉浦 邦征
工学研究科	教授	高野 裕久
工学研究科	教授	神吉 紀世子
工学研究科	教授	松野 文俊
工学研究科	教授	功刀 資彰
工学研究科	教授	酒井 明
工学研究科	教授	長谷部 伸治
工学研究科	准教授	立川 康人
工学研究科	准教授	水戸 義忠
工学研究科	准教授	大西 良広
工学研究科	准教授	池田 徹
工学研究科	准教授	大和田 拓
工学研究科	准教授	古谷 栄光
工学研究科	准教授	佐藤 徹
工学研究科	准教授	池ノ内 順一
工学研究科	講師	中尾 佳亮
工学研究科	助教	市川 和秀
工学研究科	助教	小林 洋治
工学研究科	助教	田中 一生
工学研究科	助教	井上 元
工学研究科	一般職員	増井 一晃
農学研究科	教授	安達 修二
農学研究科	教授	小川 順
農学研究科	講師	寺石 政義
農学研究科	教授	木村 恒久
農学研究科	教授	清水 浩
農学研究科	教授	野田 公夫
農学研究科	教授	藤原 建紀
農学研究科	教授	宮川 恒
農学研究科	教授	村上 章
農学研究科	准教授	谷 史人
農学研究科	准教授	沈 金虎
農学研究科	助教	松田 洋和
農学研究科	助教	村田 功二
農学研究科	事務部長	和田 薫
農学研究科	課長	原田 健二
農学研究科	専門員	岩井 信孝
人間・環境学研究科	教授 (研究科長)	富田 恭彦
人間・環境学研究科	教授	多賀 茂
人間・環境学研究科	教授	高橋 由典
人間・環境学研究科	教授	水野 尚之
人間・環境学研究科	教授	大川 勇
人間・環境学研究科	教授	酒井 敏
人間・環境学研究科	准教授	月浦 崇
人間・環境学研究科	准教授	小倉 紀蔵
人間・環境学研究科	准教授	佐野 亘
人間・環境学研究科	事務長補佐	藤原 義久
人間・環境学研究科	一般職員	植出 亮平
エネルギー科学研究科	教授 (研究科長)	宅田 裕彦
エネルギー科学研究科	教授	塩路 昌宏
アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	山越 言
アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	長岡 慎介
情報学研究科	教授	田中克己

所属等	職名等	氏名
情報学研究科	教授	高木直史
情報学研究科	准教授	Liang Xuefeng
情報学研究科	准教授	辻本 諭
情報学研究科	准教授	中尾 恵
情報学研究科	特任助教	辻 高明
情報学研究科	講師	久保 雅義
生命科学研究所	教授	荒木 崇
生命科学研究所	准教授	吉村 成弘
地球環境学堂	准教授	須崎 純一
地球環境学堂	助教	北野 慎一
公共政策連携研究部	教授	土井 真一
経営管理研究部	教授	若林 靖永
経営管理研究部	教授	澤井 克紀
高等教育研究開発推進センター	教授	吉田 純
高等教育研究開発推進センター	教授	赤松 紀彦
高等教育研究開発推進センター	教授	山本 行男
高等教育研究開発推進センター	教授	松下 佳代
高等教育研究開発推進センター	教授	大塚 雄作
高等教育研究開発推進センター	准教授	溝上 慎一
高等教育研究開発推進センター	特定准教授	酒井 博之
高等教育研究開発推進センター	特定助教	田川 千尋
高等教育研究開発推進機構	教授	加藤 立久
高等教育研究開発推進機構	教授	舟橋 春彦
高等教育研究開発推進機構	教授	小山田 耕二
高等教育研究開発推進機構	准教授	山木 壱彦
高等教育研究開発推進機構	准教授	田中 真介
高等教育研究開発推進機構	准教授	塚原 信行
高等教育研究開発推進機構	特定准教授	スティーブン・トレンソン
化学研究所	教授(所長)	時任 宣博
化学研究所	教授	渡辺 宏
化学研究所	教授	二木 史朗
人文科学研究所	准教授	岡田 暁生
人文科学研究所	事務長	岡田 智恵美
再生医科学研究所	教授	安達 泰治
エネルギー理工学研究所	講師	中田 栄司
生存圏研究所	准教授	師岡 敏朗
防災研究所	准教授	片尾 浩
防災研究所	准教授	米山 望
基礎物理学研究所	准教授	高山 史宏
ウイルス研究所	教授	朝長 啓造
経済研究所	教授	小佐野 広
数理解析研究所	教授	玉川 安騎男
原子炉実験所	教授	藤井 紀子
原子炉実験所	准教授	木梨 友子
霊長類研究所	准教授	西村 剛
東南アジア研究所	教授	小泉 順子
東南アジア研究所	専門職員	北山 広喜
iPS細胞研究所	教授	川口 義弥
学術情報メディアセンター	教授	岡部 寿男
放射線生物研究センター	准教授	井倉 毅
生態学研究センター	准教授	谷内 茂雄
地域研究統合情報センター	助教	星川 圭介
野生動物研究センター	准教授	田中 正之
総合博物館	教授	岩崎 奈緒子
低温物質科学研究センター	教授	寺嶋 孝仁
フィールド科学教育研究センター	准教授	久保田 信
こころの未来研究センター	教授	河合 俊雄
環境安全保健機構	助教	安田 幸司

所属等	職名等	氏名
附属図書館	准教授	古賀 崇
附属図書館	事務部長	栃谷 泰文
附属図書館	課長	相原 雪乃
産官学連携本部	准教授	金多 隆
産官学連携本部	准教授	麻生川 静男
カウンセリングセンター	教授(センター長)	青木 健次
学術融合教育研究推進センター	准教授	宮野 公樹
総長室	課長	山本 淳司
総長室	担当部長	石崎 宏明
総長室	担当課長	鈴木 晴治
情報部	部長	上條 春毅
情報部	課長	平野 彰雄
情報部	専門員	中久保 洋子
情報部	専門員	南 幸一
情報部	技術職員	池田 健二
研究国際部	部長	佐藤 兆昭
学務部	部長	小杉 信行
学務部	担当部長	中崎 明
学務部	課長	水野 晴央
学務部	課長	馬場 整
学務部	課長補佐	清水 克哉
学務部	専門員	呑海 和彦
学務部	掛長	植村 五枝子

■学外

天王寺高等学校	教頭	山口 智子
天王寺高等学校	主席	大木 徹
天王寺高等学校	教諭(進路指導主事)	武井 節子
駿台予備学校	情報センター長	石原 賢一
毎日コミュニケーションズ	就職情報事業本部長	浜田 憲尚
島津製作所	人事部長	平田 権一郎



第 15 回京都大学全学教育シンポジウム
京都大学における教育の現状と今後を考える
報告書

平成 24 年 3 月発行

編集・発行 京都大学学務部共通教育推進課

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6513
